
対極心識

織宮征

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

対極心識

【Nコード】

N9843X

【作者名】

織宮征

【あらすじ】

第一の現実世界である【正の極界】。そして第二の現実世界である【負の極界】。互いに交錯し、起源を同じとされたが故に乖離した二つの世界。始まりは 2007年12月。正を象った存在と負を象った存在は対極の根源を持ち得、故に道を外した。

第一の現実世界【正の極界】では千堂鏡夜の物語、第二の現実世界【負の極界】では桐生穿理の物語を紡いでいきます。拙作は縦書き

までの文章を意識して書いているので、縦書きPDFで読むことを推奨します。

夜空を見上げていた。

灰色の満月は光り輝いている。立ち込める黒雲の隙間から覗かせるその月を見た千堂鏡夜は、率直に幻想的だという感想を胸に抱いた。

しかし、地上はそれ以上の眩しい光で溢れ返っていて、無心の内に抱いた感想はガラガラと音を立てて崩壊していった。人工的に設置された様々な光。忙しなく明滅するそれらを、鏡夜は興味なさげに観察する。……やはり、天然モノと人工モノでは抱く幻想も異なるんだなど、実感と痛感が入り混じった感情を覚える。

鏡夜は、町の繁華街を独りで歩いていた。視線はどこへ巡らせても、人、人、人。幾多の人々で繁盛している。午後九時を回った現在、繁華街は様々な人間が集う場所として機能していた。

たとえば、風俗店の客引きをしている若い男性。

たとえば、屋台で酒に溺れている中年のサラリーマン。

たとえば、街灯の前で嘔吐している見知らぬ誰か。

それらをただの傍観者として観察していた鏡夜は、脳裏である連想をした。

この人間達は、自分とは隔絶された世界に存在する者達だと。

思考する事柄も、行動原理も、その在り方さえも。この繁華街に入り浸っている人々の中で、鏡夜の存在理由と近似、また適合する者は一人として存在しないだろう。

単調な足取りで歩いている鏡夜は、自分がこの繁華街から不在しているように思えてならなかった。まるで自分が幽霊にでもなってしまったかのような、そんな自己疑念が彼の心を侵害していく。

しかし鏡夜は、外的に侵害してくるその不快感を理性で抑え留め

る。……精神的疲労は免れないが、自分が自分である為には、こうして、理性を正常に保たせるしか手段は無かった。

言ってしまうえば、それが千堂鏡夜という人間であった。生きていく実感を持ち得ない人間。正常な人間とは異なる在り方を用いている人種だった。

（……だけど、それは事実だ）

自身に言い聞かせるように心中で呟く。その、ある意味最上級に値する自虐的思考を巡らせているにも関わらず、彼の表情に変化は生じなかった。

無関心、無愛想、無感情の三拍子が揃った、『無で作られた人間』。彼が通っている学園では、そのようなあだ名が密かにつけられていた。

そして、生きていく実感を持ち得ない彼に在るのは、ただ現在を生きるという使命だけだった。

逆に言うならば、今を生きなければ鏡夜は生きていない。生きるべきではないのだ。

幼少期に告げられた言葉は、今も記憶の断片として心に残っている。不意に、その言葉を思い出してしまった鏡夜は、微かに口を歪ませた。……このような自虐的思考を駆け巡らせている時点で、彼は『負けている』という事も理解しているというのに。

と。不意にどこからか視線を感じた鏡夜は周囲を見やった。

左右に首を回した結果、一人の小さな少女が驚いたように目を見開いて自分を見据えていた。

（……誰だ？）

見たこともない少女にじっと見据えられ、さすがの鏡夜も多少の不快を覚える。彼は交錯する視線を自分から外し、その少女の存在を忘却することに努めながら、その場を後にした。

道崎市の東区には、広大な敷地を誇る河川敷公園が存在する。この町と隣町を繋ぐ鉄橋も架けられており、河川の向こう側に行くに

は、この鉄橋を渡るしか手段はなかった。

しかし今、用があるのはこの河川敷公園だけだった。芝生の傾斜を緩慢な足取りで下りながら、鏡夜は無意識にため息を漏らした。

というのも、彼がこの河川敷公園に訪れるのは今日が初めてだからだった。何年間もこの町に住んでいるというのに、自分の無関心さに呆れてしまったが故のため息だった。

鏡夜は周辺を見回す。夜中である事が幸いしたのか、辺りには誰もいなかった。

ゲートボール場やテニスコート、児童が遊ぶ為に設けられた遊具を見る限り、休日には多くの人々で賑わうと容易に想像できた。

（ だが ）

そう。それは日が昇っている時だけの喩えだ。

闇夜の最中。風景面を見ると、そこには何の違和感も存在しない。ただ黒という色彩が周囲を覆い、典型的な『不気味』という言葉表現しているだけだった。

（反応は……確か、この辺りだったか）

しかし、そんな時。違和感が皆無だった風景面に、物質的な違和感が収束を初め、非日常への扉が開かれた。

鏡夜の内界に宿っている感知能力が、その顕現を捕捉した。

「きたか」

故に、呟いた言葉はただ確信だった。

それは、突然だった。

鏡夜の背後、十メートルほど離れた場所で、その気配が感じられた。

この河川敷公園の周辺に漂っていた魔気。一般人には視認できない黒色の粒子が収束を始める。その粒子は、螺旋を描きながら存在感を増幅していくことが判る。

最初に現れたのは脚だ。さらに両腕、胴体、頭部と 次々に体の箇所を顕わにしていく。それは、まるで異界からの『門』を通り【現実世界】に現れるかのような光景だった。

リアル過ぎる。故に、比喩ではなかった。体は黒く、存在は影のように昏い。

闇の根源である彼らはそれに相当する像でなければならぬ。

故に、現れた存在は妖的だった。

体格は成人男性と例えれば良いだろうか。しかし、体を覆うその色だけは、決して人間の持つものとはいえなかった。

その存在は、脳天から足の先まで黒色で彩られていた。この夜空などとは比較すべきではない、闇を体現化させた存在。

唯一異なっている部分は、両目の色だけだ。

連想させるのは人間の体液。禍々しく、歪な色彩で構成させられている眼。

黒と赤。その、統一性がゼロな色彩で構成された存在は、鏡夜を視界に捉えた。

『鬼人』と呼ばれる者だった。闇の密度が上昇し、人間の負の感情が一点に収束した時、【現実世界】に姿を現す存在。

負の感情には、大きく類別して四種類ある。

『疑心』、『不義』、『後悔』、『絶望』。

このような、人間を苦悩させようと苛む感情が一固体の生命体となり、彼らは顕現するのだ。

鬼人は、負の感情の集合無意識体である。故に、創り出した者達を襲うという法則が鬼人の排除を目的とした組織 【星礼会】^{せいれいかい}において成立していた。

星礼会は、鬼人の体を構成している物質を、『自身の邪悪な感情に敗北した』と言葉で表し、【負邪】^{ふじょう}と名づけた。

創り出したのは人間であり、創られたが故に襲う存在。

この相対関係は、決して変わることは無いだろう。

しかし、鬼人が一般世界に顕現した時。その行動を阻害し、抹殺

する者がいるのもまた事実。

鏡夜は振り向いて、鬼人と対峙する。

それが、星礼会に所属する【魔術師】の手によって人工的に作られた、人間を超越した存在 【封殺者】ふうたつしやである。

彼らはこの世に生を授かった時、魔術儀式によって、その内界に在る魔力を強制的に認識させられる。

そして、儀式に成功した乳児は【施設】しせつという封殺者の育成を目的とする機関に監禁され、物心が付き始めた頃より様々な殺人技術を身体に叩き込まれる。

そして、気づいた頃には既に遅い。

何の逡巡も覚えずに、鬼人を殺すという嗜好が身に付いてしまうのだ。

……鏡夜は、あの時の言葉を思い返す。

鬼人を殺すためだけに生きて、そして死んで逝け

それは、当時十歳だった少年にとって、呪いに相当する言葉だった。

しかし。

「それしか、できない」

まるで機械が喋っているような語調で、鏡夜は呟いた。

そう。自分に有るのは、ただそれだけだった。

当たり前の日常を想像する事も、未来を夢見る事も、幸せになる事も、赦されはしない。

それが、今まで何干という数の鬼人を殺してきた彼の罪であり、存在理由でもあった。

「だから、殺す」

鏡夜は、鬼人に敵意を定める。

鬼人と鏡夜の視線が交錯した。

鬼人は、何も答えない。

ただ、禍々しい赤い眼が鏡夜を凝視していた。

赤い眼は、鏡夜に何も教えない。

赤い眼は、鏡夜に何も語らない。

この存在には、何もない。

ならば、殺しても良いのだろうか。

鏡夜が疾走を開始する。人間の身体能力を超越した優雅な走りだった。

鬼人との距離はおよそ十メートル。だというのに、鏡夜は一瞬でその距離を詰めた。

右の手刀に収束するのは体内に蓄積されてある魔力。鏡夜の意志により物質的变化を成した魔力が、鬼人の胸部を穿った。

鬼人はびくん、と一瞬だけ体を痙攣させた。突き刺した箇所から溢れ出したのは、鬼人を構成している物質 負邪だ。

しかし、その攻撃だけでは、鬼人は消滅しなかった。

突如、鬼人の体に変化が生じる。右腕の部分が、西洋の槍を連想させる形状へと変態したのだ。

鬼人は負の感情の思念体だ。思念のみで体の形状変態が可能であるのは、負邪という物質が、人間世界で定められた物理法則から完全に逸したものであるからだだった。

漆黒の槍が鏡夜の胸元に狙いを定め、放たれた。

しかし鏡夜の表情に変化は窺えない。

彼は槍を軽く一瞥し、瞬時に次の行動を起こす。貫通した胸部から腕を振り切り、胸部の右部分を切断した。そして振るった魔力は、漆黒の槍を一撃の下に破壊した。

しかし、鏡夜の動作は止まる事を知らない。

槍の破壊を確認した鏡夜は、そのまま体を反転させる。遠心力を利用して、より勢いを持った一撃で首を切断。さらには、左腕、両

足と、次々に体の切断を実行した。

それはまるで、舞っているかのような美しい動作だった。

……気が付けば。

鬼人は原型を留めておらず、無様な肉片へと成り下がっていた。切断された箇所から溢れ出す漆黒の思念は、夜の空へと消えていく。

鏡夜は毅然とした顔で、鬼人が消滅する様を見届けていた。

それはあたかも、圧倒的な実力を誇る上位者に、下位者が敗れたかのよう。

……そして、鬼人の肉片が完全に消失する寸前

「夢くらい見ろよ」

鏡夜の感情を表すかのような小さな余韻が、静寂な闇夜に木霊した。

だが、それと同時に。鏡夜の内界で、言い様のない正逆の思考が闘ぎ合い始める。

こんな事を続けて、何の意味があるんだろうか。

それは、鏡夜の存在理由を無にしてしまう禁忌の考えだった。

でも、俺にできる事はこれだけだ。

それは、自分の行為が正当なものだと認識できる考えだった。

でも、封殺者という鎖が、今の俺を繋ぎ止めているのなら、

その鎖を断ち切れれば、俺はどこへでも行けるかもしれない。

「そんな事は不可能だ。俺は、どこにも行けはしない」

彼の矛盾した思考は相変わらず続いていた。

ピピピピッ、という機械音で、鏡夜は微睡みの世界から現実世界へと引き戻された。

ベッドから身を起こし、除々に意識を覚醒めさせていく。デジタル式の目覚まし時計のスイッチを押し、鳴り響くタイマーの音を止めた。

……呆、とした表情で辺りを見回す。

そこは自分の住んでいるマンションの一室だった。施設の研究員が封殺者となった鏡夜の為に提供した部屋であり、もうかれこれ七年も一人で住んでいる。

最初の内は戸惑う事ばかりだったが、一年も経てば自然と『自分の家』という認識を持つようになっていた。食費や生活用品を購入する為の資金、そして家賃も施設の人間 さすがに一般人の偽名を使用している が払っているのだが。

部屋を見渡す限り、およそ男子高校生の部屋とはかけ離れていると言っても過言ではないだろう。生活用品も必要最低限の物しかない。テレビやテーブルなどはあるが、趣味で集めている物も少なくあるとすれば、二、三冊の分厚い古書が部屋の隅に積まれているだけだ。これは星礼会本部に訪れた際、図書館から拝借した魔道書である。とは言っても、嚴重に保管されていた物ではなく、一般人の目に触れても問題のない世間的にも有名な本である。

と、そのように自分の部屋を他人の部屋のように観察していた鏡夜は、もう一度時計を見る。

現在、午前八時五分だった。学園の閉門時間は八時三十分。このままのんきに過ごしていたら、遅刻は免れないだろう。

(朝食は、食べてる時間はないか)

鏡夜はそう判断し、壁に掛けている学生服に着替え始める。朝食とは言っても、いつもトースト一枚で済ましている。それならば、

食べても食べなくてもほとんど同じだろう。

靴を持って、玄関口で靴を履き、もう一度部屋を一瞥する。

「行ってきます」

誰に言うでもなくそう呟き、鏡夜は廊下に出た。

朝の通学路を、鏡夜は独り歩く。

外気はそれなりに冷え込んでいた。昨晚ほどの寒さではないが、吐く息が白く滲んで見えるのは冬も本番の証だろう。

もう十二月の中旬だ。そろそろ、雪が降ってきてもおかしくはない。

元々、鏡夜は冷え性という体質もあってか、この季節はあまり好きになれなかった。

単調な足取りで歩みを進める最中。考える事も無いので、学校名を思い出してみる。

(確か、黒堂学園、こくどうがくえん だったような……)

うる覚えであるのは、学校名など鏡夜にとってどうでも良い事柄の一部であるからだ。入学当初はすぐに思い出せていたのだが、今となつては、頭の片隅に保管している程度の知識だった。

その理由の一つに、学校に興味がないというのが適切な言葉だった。事実、鏡夜は学校に何の関心も抱いていない。それ以前に、自分には何の利益も獲得できない無価値な場所という認識でしかなかった。

その学校に通っている理由はただ一つ。封殺者は、一般世界に紛れ込んで存在しなければならなかった。

彼らは、世間では一般人と同一の存在として扱われている。封殺者として完成され、一般世界で生きられる見込みがあると判断された場合、十歳以下の歳で学校に通うという事もある。

実例として、鏡夜は十歳で完成された封殺者と判断され、その歳で小学校に通い始めた。一般世界で生き、日常と非日常での思考の使い分けをできるよう鍛錬を積み、自制心を覚えるのだ。

無論、鬼人を殺すという嗜好を忘れずに。

そして鏡夜には　これは他の封殺者にもいえる事だが　両親が存在しない。生まれた時に魔術儀式を行う場に連れて行かれる事から、両親は非日常側の人間だと推察はできる。しかし、施設の研究员は封殺者候補の子供に両親の存在も、その真意も真実も教えることはない。彼らとしても、子供達に不要な情報を与え、余計な感情を抱かせてしまう事だけは避けたかったのだらう。

だが、人間社会で生きていく過程の中で、いずれはその単語を知るようになるのもまた必然である。

鏡夜がその単語を認識したのは、十歳の頃　封殺者になって、小学校に入った直後だった。

そこで初めて授業参観という行事を目にした鏡夜は、いつもと違う教室の風景に混乱しそうになった。

そして、隣の席に座っていた、大して親しくもない同級生にこう尋ねられたのだ。

千堂くんの親ってどの人なの、と。

突然の理解できない問いに、鏡夜は数秒間、沈思した。

しかし、鏡夜はその言葉の意味を理解してしまったのだ。

故に、返答するべき言葉が見つからず、その生徒の問いを無視して授業に集中することで気を紛らわせた。

(だけど)

そう、鏡夜はただ思う。

自分には親という存在がいなくてラッキーだった。

鬼人を殺すヤツが子供だなんて、きつと親が悲しむと思ったから。

……ポツポツと。そんな雨音が鼓膜を刺激する。

一人で色々と考え込んでいたからだらう。空を仰ぐと、いつの間にか暗雲が立ち込めていた。

なら、雨が降り出してもおかしくはないだらうと納得する。

十二月に降る雨の冷たさは、春や夏のそれと比較すべきではない。冷たい雨滴は、自然の摂理に逆らわずに鏡夜の体を、心までも凍えさせていった。

おそらく、今日は一日中降り続けるだろうと、鏡夜はそう思った。

学園に到着して、鏡夜は自分のクラスである二年A組の教室に入った。

それと同時に集中する多くの視線。それは、鏡夜にとって他人に等しいクラスメート達によるものだった。

しかし、それも一瞬だった。彼らは鏡夜から興味を失ったかのようになり、H R前の駄弁りを再開させた。

鏡夜は、自分の席である窓際最後列の席に腰を下ろし、ハンカチで制服に付着した雨滴を拭き取った。

(後は、H Rが始まるまで待つだけだ)

鏡夜の周りにクラスメートが寄り付かないのは、偶然ではない。確かに、入学した一年の頃は鏡夜に話し掛ける生徒はいた。しかし、どれだけ接して来られても、鏡夜は意図的に無視を決め込んでいたのだ。

そんな鏡夜の態度と性格は瞬く間に学年中へと浸透した。そして一ヶ月も経つと、彼に接する生徒はいなくなっていた。

しかし、鏡夜は自身から孤立を望んだからこそ、意識的にそのような態度を装っていたに過ぎない。

自分は、彼らと関わるべき人間ではないと自覚していたからだ。

俺は、日常に生きる人間じゃない。

俺は、彼らのようにはなれない。

それが、封殺者としての千堂鏡夜の考えであり、自分の感情を律する方法でもあった。

……それでも時折、無意識に教室の風景を傍観してしまう。

自分の席と、それらを隔てる空間はまるで別世界である。

そして、鏡夜には決して立ち入る事のできない理想^{ユク}の世界。

故に、教室で笑顔を浮かべて駄弁っている生徒も、来年の受験に向けて勉強に励んでいる生徒も、鏡夜とは異なる人種だった。

(俺は……)

あんな風には、なれない。

彼らが好きな事も、彼らが過ごす日常も、彼らが目指すものも。

それは、鏡夜には無縁の事柄だ。

それを知ってしまったから。彼らとは違うと認識してしまったが故の結論。

(なら、独りの方が断然マシじゃないか)

……彼らから意識を逸らした鏡夜は、窓の外を眺めた。

雨は一向に止む気配はなかった。

時間というものは、呆れるほどに早く進むらしい。

気が付けば休みが終わり、気が付けば昼休みが終わり、気が付けば放課後になっていた。

それは、まるで一瞬の時だったかのような錯覚に陥らせる。

今日、鏡夜がいつも通りに過ごした学園生活も、無意味かつ無価値な時間で終わりを遂げた。

そして現在。鏡夜は、教室から生徒が散り散りに去っていく光景を呆とした眼差しで観察していた。これから、どんな事柄に時間を費やすのだろう、などと思いつながら。

携帯電話をカチカチといじっている女子。友人と待ち合わせでもしているのだろうか……。

テニスラケットを肩に担いでいる男子。これから部活に向かうのだろうか……。

各様、様々な理由があり、教室を後にしていく。

しかし、そんな当たり前の日常は……程なくして、完全に視界から消え去った。

無音となった教室にいるのは、千堂鏡夜という孤立を続けてきた生徒。

孤独。

「それが、当たり前だろう……？」

誰もいなくなった為か、鏡夜は、微かに震えた唇で呟いた。

しかし、自分に言い聞かせた言葉は、本音かどうかも怪しい。

無音、無声、無感。

そんな虚無感が、鏡夜の心を侵すのはいつもの事だ。

しかし最近になって、暴力的に襲ってくるそれらを理性で抑えられなくなってきた。

それ故か、覚える恐怖は本物だった。

この先、自分はこの暴力的な恐怖に抗い続けながら生きなければならぬと思うと、死にたい気分が陥ってしまう。

それでも、鏡夜は自殺を行う勇氣など用いていなかった。

鏡夜に有るのは、鬼人を殺す為に生きるという存在理由だけなのだから。

(……でも)

そう考えるのならば、自分は中途半端な封殺者なのではないだろうか？

教室で独りになっただけ。たったそれだけの些細な事で、こんな虚無感に苛まれてしまうほど弱いものだから。

鏡夜は何年も前から自覚していたのだ。自分は、鬼人を殺す事が虚しくて仕方が無いという存在の否定に。

そして、自分が矛盾した思考を用いているという事実さえも。

鬼人を殺す事が存在理由なのに、そうしなければならぬ意味を自問する。

自分は日常に生きる事ができる訳がないのに、無意識にそれを期待している。

孤独に生きるのが当然だと自覚しているのに、それさえも偽りの感情に思えてしまう。

普通に生きたいという願いさえ、叶わないのに……。

「何なんだ、俺は……」

掌で顔面を覆って、ため息を漏らした。どうして、こんなくだけない事を考えなければならぬのか。

(殺せばいいだけだ)

そう。殺す事が、鏡夜の存在理由なのだ。

それだけが、自分の取柄なのだ。

そう、信じて生きてきたのだ。

なのに。

なぜ、頬に涙が伝うのだろうか？

ポロポロと溢れ出す。

感情の一部である水滴が、木製の机を変色させていく。

嗚咽は漏らさなかった。自分が無表情なのは、自分自身がよく解っている。

(ああ、俺は、こんな感情も持っていたのか)

そんなものは、いらぬのに。

どうして、こんなにも中途半端なのだろう……。

「泣いてるの？」

……不意に。悲哀を感じさせる細い声が、鏡夜の耳に届いた。

鏡夜は振り向かず、ただ無言で泣いていた。

「……なんで、泣いてるの？」

その言葉に、鏡夜はただ考えた。

(……なんで、だろう。知っている筈なのに。知らない筈がない、のに……)

思考の結果、鏡夜はかすれた声でこう呟いた。

「解らない」

そう。解る筈がないのだ。矛盾した思考を持っていて、それで自分の事を理解しているのなら、こうして『泣く』という行為に至る

訳がない。

と、鏡夜の返答に反応したのか、声の主は足早に席へと駆け寄ってきた。

鏡夜は横目で、その人物を観察した。

小さい少女。それが第一印象だった。百四十センチにも満たない低身長に、その小柄な体格に似合う幼さが残る顔立ち。色素の薄い、長く伸ばした髪。

しかし何より、その哀しげに見つめる表情が、鏡夜の心を一層狂わせていった。

「何か用か？」

「用ならあるよ」

少女は、鏡夜の素っ気無い言葉に笑顔で返した。

その微笑は、純粹で無垢で、邪気を感じさせない。だからこそ一瞬、鏡夜はその微笑みが自分に対してのものだという錯覚に陥りそうになった。

「千堂くんとお話してみたかった」

そんな温かい言葉が、何故か嬉しく思ってしまった。

しかし、その反面。

(駄目だ……。関わってはいけない)

詭弁だ。俺がこの少女と会話をして得られるものなど何も無いんだ。

そう自分に諭しても、鏡夜は返答してしまった。

「……なんで、俺なんだ？」

何かに期待をしている自分が在る事に自己嫌悪してしまう。

それは、少女の嘘偽りのない笑顔を見てしまったからだろうか。だから、そんな言葉を口にしてしまったのだろうか。

「私が、千堂くんの事を知りたいから」

「何のために？」

「……友達に、なってほしいから」

その一瞬。少女の逡巡した顔を見て、鏡夜の疑心は確定に至った。

「友達作りなら、他を当たってくれ」

「ううん。私は、千堂くんがいいの。……千堂くんは、私と似てるから」

「は……？」

……この少女が自分と似てる？ そんな筈がない。

この少女は一般人だ。鏡夜のように、正常な思考を持っていない『異常者』とは違う。

「……俺とあんたの、どこが似ている？」

「他人と関わろうとしないところ。……でも、私の場合、ケースが違うかな」

そう言って、少女は弱々しくはにかんだ。

「私の場合、誰かを信じて傷つくのが怖いだけなんだけど、千堂くんの場合は絶対の否定でしょ？ そうなるのを自分が許せない。そうなった自分を許したくない」

少女が紡ぐ言葉に、鏡夜は何も返せなかった。

それは、核心を突かれたように思えたからだ。この少女の言う言葉は全体的確だと思ってしまうからこそ、鏡夜は押し黙ってしまった。

この少女は、鏡夜の心の奥底を覗いているようだった。

「学園に入学した頃から、千堂くんは私と似てるなって思ってた。だから、ずっと気になってた。……でも、話しかけるキツ力が中々なくて」

「じゃあ、何で話しかけた？」

「泣いてたから」

と。少女は迷い無く、間髪入れずにそう返した。

瞳が訴えかけるのは純粹な答えだった。それだけが理由、それだけしかないと言わんばかりに。

「千堂くんでも涙を流すんだなって、知ってしまったから。孤独が辛いんだなって、知ってしまったから。だから、話しかけたの」
「……」

少女の、言葉。

信じて傷つくのが怖いから。……鏡夜は、過去に似たような体験をした事があった。

忘却したいあの頃の記憶が蘇りそうになり、咄嗟にその思考を断絶させる。

そして鏡夜と同じく、この少女はそれを経験してしまった。

根本の部分では異なるのだろうが、孤独という点でいうなら、鏡夜とこの少女は近似していた。

「今日は、少しでも話せてよかった」

少女は踵を返す。

「私、遠近湊とちかみなとっていうの。明日からは、ちゃんと話しかけるから」
最後に柔らかな微笑みを浮かべた少女　遠近湊は、静かな歩調で教室を後にした。

再び独りになった教室で、鏡夜は何を考えれば良いのか判らず、ただ、思考を停止させていた。

学園の昇降口に出ると、大粒の雨滴が灰色の空から降り注いでいた。

「……雨」

ポツリと呟く。

遠近湊は、基本的に雨が嫌いだった。

雨を目にすると、否応無しにあの日の事を思い出してしまうからだ。

それは忘却したい記憶だというのに、六年の月日が経った現在でも、雨を目にすると容易に蘇ってしまう。

故に、湊は頭を振って即座に思考を切り替えた。

遠近湊が千堂鏡夜を意識し始めたのは、一年前の春だ。

黒堂学園に入学して、友達を作ろうと決心したあの頃。

しかし湊は、それを実行する事ができなかった。
誰かに関心を抱こうとすると、背中が疼き、拒否反応を訴える。

また傷つきたいのか、と。

湊は、自分の負っている傷が未だ癒えていなかったことを再認識した。

……だから、諦めかけていたのだ。

そして、入学して半月が経過した、ある日の放課後。

クラスメート達が教室から散り散りに帰り去る様を呆と眺めていると、最後には独りになった。

いや、独りではなかった。

窓際に目を向けると、湊と同じく、呆とした様子で外の景色を眺めている男子がそこに在った。

何を考えているのか分からなかったが、湊は一つの確信を覚えた。
彼は、自分と同じだと。

それが錯覚でも、ただの思い違いだとしても、湊にとってはそれでも良かった。

……同じ存在が、同じ空間にいる。

それが、それだけの事が、凄く心地よかった。

それから、湊は鏡夜を意識するようになった。

鏡夜は寡黙だった。そして、その孤立性は酷く虚しく思えた。

そんな鏡夜の在り方に、湊は興味を抱き始めたのだ。

鏡夜はクラスで孤立していた。……いや、それは彼の望みでもあったのだと湊は思う。

他人が嫌いなわけではない。おそらく、全くの関心がないのだ。

関わりを持ってしまったら自分自身が傷つく。故に孤立を選んだのだと、その頃の湊はそう決め付けていた。

鏡夜はただ、窓際最後列の席に座って窓の外の景色を眺めているか、読書をしているかの二択しかなかった。

そして、今日もいつものように鏡夜の様子を窺いに言った。

おそらく、いつもと同じく窓の外を眺めているか、本を読んでいるかのどちらかだと思っていた。

その姿を見るために、湊は放課後の教室を覗いただけだった。しかし、今日は違っていた。

鏡夜は、泣いていた。

そこにどのような理由であったとしても、彼にも『泣く』という感情があった事が何より嬉しかった。だから、湊は衝動的な行動を起こして鏡夜に話しかけたのだ。

孤立を続けてきた鏡夜の心境に、涙するほどの変化が起こった理由が知りたくて仕方がなかったから。

（千堂くんがこの想いを聞いたら、きっと怒る……怒るのかな？）

もし怒られても、それでも嬉しい。

それは、鏡夜と関わりを持ってたという証だから。

拒絶で隔てた鏡夜の空間に入る事ができたという証なのだ。

（今の私の気持ちは、ただそれだけ）

もっと、彼と話したい。

もっと、彼を知りたい。

抑制が効かないが、とても素直な気持ちだった。

これで雨が止んだらもつと高揚していたのかもしれない。

……彼と一緒に傘に入れたらな、なんて事を思いながら湊は学園を後にした。

彼は町に戻ってきた。

以前、住んでいた頃と全く変わっていない街並みを眺める。

同類が、この街にいる。

故に、彼は歩みを進めた。

翌朝になつての出来事だつた。

鏡夜は起床すると同時に、酷い頭痛に苛まれていた。

頭痛を体験するのは初めてに近いが、これは痛いなんてものじゃない。頭の中で何かが響く感覚は、幻聴というモノなのだろうか……。

そして、不意に。

あの人の声が聞こえた気がした。

「痛ッ……!!」

……幻聴だとしても、何かがおかしい。

脳裏を駆け巡るのは、七年前の記憶。

完全に忘却したいと努めてきた、忌まわしい過去。

「くそ……」

家に頭痛薬はないから、鏡夜はしばらく辛抱することにした。

カーテンを開けて、窓の外の様子を窺う。

昨晚、深夜まで雨が降り続いていたせいか、未だに空は灰色で染まっていた。

……それと同じく、鏡夜の心は曇つたままだつた。

それは、一人の少女の存在が鏡夜の心に刻み込まれたからだ。

「とおちか、みなと」

呟く。

『明日からは、ちゃんと話しかけるから』

そんな事を言われても、自分は普通に話せるのだろうか。

何年間も他人と接していなかったのに、そんな提案を出されても、

鏡夜は困惑するしかなかった。

その思考は、無知な子供に似ていた。

子供は、生まれた頃は何も知らない。それは、動物であるが故の至極当然の事だ。

しかし、そこから成長するという過程において 他人と接して、喋って、思っで、感じていくことで無知から解放されていく。

そうして、社会で生きる力を身に付けていく。

(……だけど)

そう。鏡夜は無知な子供のままなのだ。

誰とも接しない。それは、そのような状況と環境で育ったから、自ずとそのような人格へと成立してしまっただろう。

施設で過ごしてきた日々でさえも、一日の半分は牢の中に居たから誰とも接することができなかった。

そのせいで、鏡夜は他人の在り方を知らない。……いや、知る事が不可能になったのだ。

だから昨日も、あのような愛想のない言い方でしか言葉を表現できなかった。

そんな自分が、彼女と普通に接するなど可能なのだろうか……。

ふと、鏡夜は掛け時計に視線を配った。

午前七時五十分。

そろそろ家を出よう。彼女の対処は、学園に着くまでに考えれば良いだけだ。

しかし、自宅のマンションを出ると、鏡夜はすぐに困惑する破目となった。

「あれ？ 千堂くんって、このマンションに住んだの？」

……路上に出た瞬間、湊と出くわしてしまったのだ。

「そっか。私の家と結構近いんだね。私も、この通学路を使って学園に通ってるんだ」

湊は心底嬉しそうに、柔らかな笑みを浮かべた。

一方、鏡夜はどう返答すれば良いのか見当がつかず、結果、逃げように一人で歩き始めた。

そんな鏡夜の行動に不満を持ったのか、湊は足早に歩み寄って、不機嫌そうに頬を膨らませた。

「返事くらい返そうよっ」

「……そう言われても、どうすればいいか分からない」

鏡夜の本心からの呟きに、湊は不思議そうに小首を傾げた。

「どうすればって、どういう意味？」

「女子と喋るのは、ほとんど遠近が初めてだから……対処の方法が思いつかない」

鏡夜の言葉に、彼女は少なからず動揺したようだ。

「千堂くんって、高校に入る前からこんな風だったの？」

「……そうだ」

だから鏡夜にとって、対処に困るとはこういう事だった。

異性との会話など、七年間もしていなかったのだから。

気軽に話しかけられる経験がほとんど無いから、自分も同様な返答ができない。

こんな風になるなんて、思ってもいなかったから。

「でも、千堂くんって結構モテるんだけどなあ」

どこか遠い目をしながら、湊は言った。

「……俺が、モテる？」

「うん。身長は高いし、顔も格好良いつて、クラスの女の子達が言ってるよ。噂話でも、千堂くんってクールで格好いいよねって感じで学年中に流れてるし」

そのような噂話を、鏡夜は一度も耳にした事がなかった。いや、そんな話は興味の対象ではないから、耳にした時があっても即座に忘れてしまうのだろう。

鏡夜は、必要な情報と不要な情報があるとしたら、必然的に前者を取る人間なのだから。

「俺は、そういう事に興味はない」

鏡夜がそう言うと、湊は「そうなんだ……」と、気分を落としたように顔を俯かせて黙り込んだ。

でも、今の言葉は鏡夜の本音だった。恋愛なんて興味以前の問題だ。女性に好意を抱くなど、鏡夜は決してやってはいけない事だから。

誰かを好きになると、自分自身が傷つくから。封殺者であることを隠し通す自信がないから。嘘偽りの無い気持ちを伝える自信がないから。

「千堂くんは、自分に自信がないんだね」
湊は、ポツリと呟いた。

「……そうなのかもな」
鏡夜も、ポツリと返答した。

「でも反面、そうでいたいと思ってる」
「……………」

「やっぱり、私と似てるね」
そう言って、湊は笑みを浮かべた。

似ている。ならば遠近も、自分と同じ考えを持っているのだろうか。

実行したい事柄があっても、それを行動に移すことができない。心のどこかで抑制が掛かってしまっただけ。

そうして結局は、自分を偽ったまま人生を終えてしまうのだ。
「遠近は……………」

知らず内に、鏡夜は立ち止まっていた。
「……………俺と、似ていると思っただけで話しかけたのか？」

似ているという理由で接してこられても、その本質を知らないのだから、鏡夜もどう接すれば良いのか判断がつかない。

湊が何を考えて、何を思って、自分に話しかけてきたのか。
その本質を、鏡夜は聞きたかった。

少し前を歩く湊は、振り返って笑顔を見せる。
「それだけじゃないよ。……………一年間。ずっと意識していた人が悲し

んでいたから、少しでも癒してあげたかった」

恥ずかしげに笑う湊を、鏡夜は少なからず信用してしまった。

俺は。

「……余計なお世話だ」

そう吐き捨てた鏡夜は再び歩き始める。

湊は満足そうに笑って、隣に並んだ。

遠近を、意識し始めている。

しかし、その気持ちに嘘偽りがあつた事を、鏡夜はまだ知らなかった。

学園に到着した鏡夜と湊は、二人一緒に教室に入った。

一瞬、クラスメート達からの視線を浴びる。しかし、こんな事もはや日常茶飯事である。

鏡夜は横目で湊を窺うが、彼女もとりわけ気にしている様子はなく、自然な様子で自分の席に座った。

鏡夜もいつも通り、窓際最後列の席に座り、窓の外に顔を向ける。……しかし。顔が勝手に湊の方へと向いてしまった。

湊の席は、廊下側から二列目の中間だった。

今まで気づきもなかった存在が、同じ空間にいる。

何か、不思議な気分だった。

それは、鏡夜が彼女を知ってしまったからだ。『遠近湊』という存在が、自分と同じだと思ひ込み始めたからだだった。

と、彼女は鏡夜の視線に気づき、笑顔で呑気に手を振っていた。

当たり前のような日常が、ここにあった。

それは、今まで経験できなかった未知。

それは、経験する事が認可できなかった夢。

(……でも、それでいいのか?)

自分は、そちら側の人間と関わっても良いのだろうか?

……決して辿り着く事のない自問に、鏡夜は頭を苦慮し続けた。

「千堂くんっ。一緒にお昼ご飯食べよう！」

昼休みになり、湊が鏡夜の席に駆け寄ってきた時の第一声があった。

自分は元々、昼休みは何も食べずに読書で時間を潰す方なのだが、鏡夜は口にすると、湊はずいつと顔を近づけて低い声で問いかけた。

「千堂くん。お昼休みは何の為にあるか分かってる？」

「自分のやりたい事に時間を潰すた」

「違うよっ！」

鏡夜の言葉を素早く遮り、湊は拳を強く握り熱弁する。

「お昼休みっ！ それは購買にいる生徒達との戦争！ 敗者は潔くあんパンを食し、勝者は焼きそばパンを頬張れるっ！ さあ行くよ！ 焼きそばパンが売り切れる前に！」

鏡夜の意味を無視して、強引に腕をひっぱり出す湊。

……読んでいた最中の小説の続きが気になって仕方がなかったと、鏡夜は机に置いた本を見つめ続けた。

「うわあ、今日も多いね！」

鏡夜は二年生になって初めて職員棟の購買に立ち入ったが、その光景に少し動揺した。

生徒の数が半端なものではなく、カウンターの前では、生徒達の群集が鬨ぎ合っていたからだ。

「あの人だかりの後ろに並べばいいのか？」

「違うよっ。あそこに突入するの！」

「でも、結構……というか、生徒が多すぎるぞ。それに、遠近は体が小さいから危なくないか？」

「それは……そうなんだけど」

顔を俯かせて、湊はこれまでの経緯を説明し始めた。

曰く、湊は毎日、あの人だかりの中へと突入しているというのだが、高確率　というか100%　で人ごみの中から弾き出され、

あんパンを貰う破目になっていたらしい。さらに、今日は鏡夜を教室から連れ出すのに二分の時間を費やしたため、この人混みの中に突入するのが遅れてしまったということだった。

「……じゃあ、俺が行く」

「え、いいの？」

「出遅れた責任は俺にあるみたいだからな。焼きそばパンでいいのか？」

「あ、うん」

本人に確認を取ると、鏡夜は人混みの後方に佇み、軽く状況を分析した。

（なるほど。確かに、これじゃあ遠近が突入するのは困難だ）
しかし、侵入が不可能というわけではない。人混みで溢れているのは確かだが、その『隙間』という空間は確かに存在している。

しかし、その空間が刹那で閉じられるのも確かだ。ならば『隙間』ができた瞬間に、次の『隙間』へと移れば良い。

後方から人混みに近づきつつ、鏡夜は神経を集中させた。

「ほら、焼きそばパン」

人混みの中から帰ってきた鏡夜は、湊にパンを渡した。

しかし彼女は、呆けたようにだらしなく口を開けた。

「ど、どうやって……？」

「普通に、人と人の隙間を通っただけだ」

「……もしかして、千堂くんって凄いひと？」

「早く教室に戻るぞ」

鏡夜は踵を返して、さっさと歩き始める。湊も、「あ、うん」と鏡夜の言葉に反応して、足早に追ってきた。

鏡夜はこれ以上、ここには居たくはなかった。

……背後から多くの視線が集中しているような気がして、居た堪れなくなっただからだ。

教室に戻り、鏡夜は自分の席で小説の続きを読む事にした。

と、今まさに読み始めようとしたその時、湊が自分の椅子を持って近寄ってきた。

おもむろな動作で机の隣に椅子を配置して、座り込む。

「……何してるんだ？」

「お話しようかと思って」

そう言っつて、満面の笑みを浮かべる湊。

「俺は小説を読んで、遠近は昼食を食べる。それでいいだろ」

「むう。小説を読みながらでもお話はできるよ」

「小説は自分ひとりで黙って読むものだろ。食事だつてそうだ」

鏡夜の言葉に、湊は不安そうな表情に変えた。

「……千堂くん、いつも一人でご飯を食べてるの？」

「そうだが」

「家族の人とは一緒に食べないの？」

「いない」

「……そうなんだ」

そう言っつて、湊は数秒間黙り込んだ。しかし、鏡夜が無意識に溢した『家族がいない』という事に関しては何も触れてこなかった。

湊はすぐさま笑顔に変えて、鏡夜に色々な話を聞かせた。

身長が一向に伸びない事。遊園地のアトラクションにほとんど乗れない事。その小さな口で美味しそうに焼きそばパンを頬張りながら、彼女はずっと笑っていた。

翌朝。

休日の土曜日、午前十時に近づきつつある時間。

鏡夜は駅前の広場のベンチに腰掛けて、湊を待っていた。

というのも、彼女から「明日、遊びにいかない？」と誘われたからだった。

本当は約束をすっぱかして自宅で読書でもしようとしていたのだが……気が付けば、マンションを後にしてこの広場にやって来たのだ。

(何をやってるんだ、俺は……)

内心で自分の行動に呆れながら、ため息を漏らす。

本来の鏡夜ならば、そんな約束は破って当然の人間だった。いや、それ以前にそちら側の人間と関わるべきではないと判断し、約束を記憶から抹消するのが当たり前だった筈なのだ。

……ベンチに座ったまま、鏡夜は駅前の様子を呆と観察する。

休日だからだろうか、人の数が異様に多い。学生もいるし、子供連れの親子もいる。

その人混みの中に、ふと、湊の姿を見つけた。

彼女も鏡夜を見つけると、ぱあっと顔をほころばせ、足早に駆け寄ってくる。

「お待たせっ。待ったかな？」

呼吸を整えながら笑顔で尋ねる湊に「今来たところだ」、と鏡夜は返した。

彼女は、その容姿に似合った純白のワンピースを着服していた。心なしか、良い匂いが鼻をくすぐる。おそらく香水だろう。

「そっか。それにしても……千堂くんって、いつも同じような私服を着てるの？」

小首を傾げて訊く湊。その言い方は少しおかしく、鏡夜も首を傾

けた。

鏡夜は、白いワイシャツの上に黒色のジャケット羽織って、紺色のジーパンを穿いていた。

しかし、鏡夜が湊に私服姿を見せるのは今日が初めてだ。いつもという聞き方が示す意味。それは彼女が、過去に鏡夜の私服姿を見たことがあるということだ。

「……俺の私服姿をどこで見たんだ？」

訝しげに鏡夜がそう口にする、湊は怒ったように頬を膨らませた……のだが、容姿が幼い所為か威圧感も迫力も全くなかった。

「千堂くん。三日前の事、覚えてる？」

「……？」

……三日目に、何か心に思い残るような事があっただろうか、と鏡夜は黙考する。確か、その日は学園を終えて夜に鬼人の抹殺に向かい、殺した後に帰路に着いただけだった。

と。不意に、抜け落ちていた記憶の断片が脳裏に蘇った。

そこで、鏡夜は三日前と同じ服装である事に気づく。

「あれ、遠近だったのか」

「そうだよ。というか千堂くん、夜の繁華街で何をしてたの？」

「……何でもいいだろ」

言葉を濁して、目を背ける。

鬼人の抹殺に向かっていた、などと口が裂けても言えなかった。

仮に言っただとしても、馬鹿にされるか頭がおかしいと蔑まれるに違いない。

話の方向を変え、鏡夜は訊ねた。

「それで、どこに行くんだ？」

「……うーん」

と、湊は腕を組んで考え出す。……行き先も決めずに遊びに誘ったのか、と鏡夜は深いため息を漏らした。

それから、湊は五分ほどその場でぐるぐると回り続けた。そして考えた末、喫茶店に入るという結論に至った。

鏡夜もとりわけ意見がある訳ではないので、先導する彼女の後を追った。

駅前のありふれた喫茶店に入店して、向かい合って席に着いた。湊は紅茶、鏡夜はホットコーヒーを注文して、しばし無言状態が続いた。

しかし、この雰囲気居た堪れなくなったのか、湊が口を開いた。「せ、千堂くんって、休日は何をしてるの？」

会話の内容としては、一般人としてはごく普通のものなのだろう。……プライベートの事を訊かれるのは初めてであるが故、鏡夜はしばし考え込んだ。

「読書と……瞑想とかだ」

「瞑想って、目を閉じて静かに考え事をする事だっけ？」

「ああ」

「何を考えてるの？」

(……どうも、遠近は俺に関しての事柄が知りたくてしょうがないような言動をするな)

鏡夜は数秒間、どう答えたものかと黙考する。そして、話せる範囲内での事実を口にすることにした。

「……俺が生きている意味とか、だ」

無意識に、鏡夜は本音を語っていた。他人にこんな事を喋るのは初めてだからかもしれない。

眩きに等しい小さな声に、湊はどう応えたら良いのかと戸惑っていた。

「……滑稽だろ。こんな歳でこんな事を考えてるなんてな」

自嘲気味に薄く笑う鏡夜。しかし湊は「……ううん」と笑顔で首を横に振った。

「生きる意味を考えるのは、どんな歳でも関係ないよ。誰だって、そんな自問をする時は必ずあると思う。……私も、たまに考える時があるから」

「……そうか」

「でね、私は人が信じられなくなって……それなら、死んじゃった方がマシだって考えちゃうの。でも、どれだけ憂鬱になっても、どれだけの傷を負っても、『夢』を見続ける為には生き続けるしかないって答えに辿り着くんだ」

「夢……」

それは、鏡夜が鬼人を殺した際にいつも告げている言葉だった。そして、あの頃　あの人に教わったひとつの単語でもあった。

「……夢なんて幻想だ」

鏡夜はそう反論した。しかし、湊は返答しない。

ただ、淡い笑みを浮かべているだけだった。

その笑みにどんな意図があるかは、所詮、鏡夜のような人の在り方を知らない人間に分かるわけがなかった。

注文した紅茶とコーヒーを飲み干した二人は、喫茶店を後にした。

それから、二人は色々な場所を回った。

デパートに入り服飾店を巡って、映画館に入って恋愛映画を見て、とにかく、様々な場所を巡り歩いた。

気がつけば、既に日は沈んでいた。……遊びというものがこれ程疲れるものなのか、と鏡夜は実感すると同時に痛感した。

それでも、湊は疲労している様子はなかった。笑顔を保ったまま、色々な話を振って鏡夜がそれに素っ気無く返答する。そのやりとりが続いていた。

そんな、時だった。

ピシィンッ

……体に宿る魔力が、反発機能としてそれを感知した。

そして、鏡夜は瞬時に思考を切り替えた。

腕時計を見る。

既に、時刻は八時を過ぎていた。

「遠近、用事を思い出した。悪いが、今日はここまでだ」

「そうなの？ ……分かった。じゃあ、また月曜日に会おうね！」

「ああ」

言つて、鏡夜は踵を返す。

この時点で、鏡夜は『遠近湊』という存在を完全に思考から外していた。

敵を殺すための封殺者として、自分は生きなければならぬと再認識したからだ。

鏡夜が湊と出会ってから、一週間が経過した。

その間、鏡夜は湊と時間を共にすることが多くなっていた。

鏡夜はただ思った。自分の体験した日常は、未知を通り越して怖いほどだと。

それは、鏡夜自身がずっと望んでいた理想^{ユメ}であったというのに。

しかし、鏡夜は一度も笑えなかった。

その分、湊は笑っていた。鏡夜が笑えないということを知っていたのかどうかは定かではないが、おそらく、鏡夜の分を補っていたのだろう。

遠近湊は笑える。

千堂鏡夜は笑えない。

「……くそっ」

夜の街で、彼は苦々しく吐き出した。

目前に在るのは、消滅寸前の鬼人の残骸だ。

いつも通りに殺しただけだった。

なのに この気持ちは何なのだろう、と鏡夜は苦悩する。

一週間前に鬼人を殺した時も、このような言い様のない不快な気分^{気分}に陥った。

まるで、やってはいけない事を仕出かしてしまったかのような、そんな背徳感。

(……だけど、これは俺の存在理由だ)

罪悪感を覚えるはずがない。覚えてはいけないと、鏡夜は自身に言い聞かせる。

何故なら。それが出来なくなってしまうたら、自分は存在している意味が無いのだから。

冬休みも間近のある日。

放課後、教室からクラスメイト達が除々に消え去っていく様を鏡夜は観察していた。

それは、教室に残っている湊も同一だった。寂しそうな表情で、彼らが去っていく光景を見つめている。

やがて。無音となった教室には、鏡夜と湊だけが残った。

「……帰らないのか？」

「うん。千堂くんが帰るなら、私も帰るよ」

「俺は、まだ帰らない」

「そっか。なら、私もまだ残るよ」

それは、ただ言葉を受け取り、返すだけの行為だった。

この一週間で、この行為をどれだけ繰り返しただろう、と鏡夜は考えた。

(……俺の人生では、そんな経験はほとんどなかった)

湊と一緒に登校して、湊と一緒に時間を共有して、今、こうして二人きりになった。

そして、鏡夜の心には、こんな時間がずっと続けば良いと思っ
ている感情が在った。

(こんな気持ちを抱くことになるなんて思ってた……)

しかし、その感情を否定している自分があるのも、また事実で。

やはり、自分は中途半端なのだと思います。

湊は、いつもと変わらない様子で机の上に座り、窓の外を眺めていた。

「……雪、降ってるね」

「……そうだな」

大粒の白い結晶が、灰色の空から舞い降りている。

暦は十二月の下旬だ。雪が降っていても、おかしな事は何も無い。

雪が降っているから、ただ、それを呆と見つめているだけ。
何の意味もなく、何の変哲もない。ただ、舞い降りてくる雪を、
無心で見つめているだけ。

それなのに、こんなにも心地よい。

故に鏡夜は、この瞬間を大事にしようと思った。

いつかは消え行く刻だときと思うと、こつした無意味な行為でさえ大切にしたかった。

「千堂くん」

不意に、湊は鏡夜に話しかけた。

鏡夜は首を彼女の方へと向けて「なんだ？」と返す。

彼女は机から下りて、

「この一週間。私と話してみても、どう思った？」

と。いつも通りの微笑を浮かべて、いつも通りの幼い声で　そ

う、鏡夜に問うた。

「楽しかった？」

彼女は、言葉を重ねる。

「嬉しかった？」

彼女は笑みを崩さずに。

「哀しかった？」

純粹な気持ちで　そう、鏡夜に問うた。

故に、鏡夜はその気持ちを裏切ってはいけないと思ったからこそ、
こつ返した。

「全部だ」

そう。想いを明確に表すのならば、そう応えるのが一番だった。

「遠近と一緒に登校して、楽しかった。遠近と時間を共有して、嬉しかった」

「だけど、それでも。」

「それを許してはいけないと思う自分がいることが??哀しかった」
それが、嘘偽りのない本心。

嬉しいからこそ、哀しい気持ちになってしまう。
楽しいからこそ、虚しい気持ちになってしまう。

どれほど素晴らしい『日常』を体験しても、千堂鏡夜はそれを許
容できなかった。

それは、鏡夜が封殺者という鎖から抜け出せないだけかもしれな
いけれど。

でも、それはただの言い訳に過ぎない。

(やっぱり、俺はこの少女を否定していたんだ)

結局、千堂鏡夜は『日常』へ行く事は不可能なのだ。

??だから。

「ありがとう」

そう告げた鏡夜は、湊の隣をかわした。

彼女の顔は見なかった。見てしまうと、きつと立ち止まってしま
うから。

だから、見たくはなかったのだ。

扉が閉まると、湊は教室で独りになった。

(また、独りぼっちになっちゃった……)

思い出すと。

去り際の鏡夜の顔は、酷く哀しそうに思えた。

勿論、今の湊がそうであるように。

窓を見ると、自分の顔を薄く映し出していた。

ああ、今にも泣き出しそうな顔をしている。

「結局……」

湊は思う。この一週間は、自分だけの自己満足だったのではない
か、と。

湊が嬉しくても、鏡夜が嬉しい訳ではない。

湊が楽しくても、鏡夜が楽しい訳ではない。

『ありがとう』

……あの言葉は、おそらく決別での意味だろう。

これ以降、自分に全くの関心を見せないという意味での、絶対的な否定。

もっと、千堂くんと話したかった。

もっと、千堂くんを知りたかった。

たった一週間の付き合いでも、遠近湊の心は満たされたというのに。

それが、たったの一週間で終わりを告げてしまった。

……湊の頬に、何かが伝った。

それはおそらく、涙。

彼のことを想っていたからこそ、こうして溢れ出した。

……涙は、一向に止まる気配はない。

それほどまでに、湊は千堂鏡夜に好意を抱いていたのだ。

涙が止まって、湊は学園を後にした。

外は雪景色。

灰色の空から舞い降りてくる白い結晶は幻想的だった。

しかし今は、湊の体を凍えさせるだけの自然現象だ。

雪は、スキだった。

雪だるまを作るのがスキだった。

雪合戦をするのがスキだった。

いつか、鏡夜と雪だるまを作りたいと思っていた。

しかし、それは叶わぬ願いに終わった。

独りで帰り道を辿る。

路面は雪で覆われていて、どこか足取りが重い。

それでも、独りで歩く。

鏡夜は、もう隣にいないのだから。

孤独だった。

涙は乾いているから、誰にも気づかれずに済む。

「……気づかせない」

そう、湊は決意した。

父親にも、母親にも、絶対に気づかせはしない。

これは、遠近湊一人で解決しなければならぬ問題なのだから。

(……でも)

何日掛かるだろう、と湊は顔を落とす。

明日になれば、また気軽に鏡夜に話し掛けている遠近湊が想像で
きる。

そんな事は、考えてはいけないというのに。

しかし何故か、鏡夜も話を聞いてくれそうな気がする。

それは、なんてくだらない幻想ユメなのだろう。

夢、幻。

鏡夜が話を聞いてくれたならば、それは夢。

鏡夜が返事をしてくれたならば、それは幻。

現実にはありえない想像風景。……妄想の世界。

だというのに、それを期待している自分が今、ここに在る。

「……駄目だな、私」

独り言のように、呟く。

「何が駄目なんだ？」

……それは、独り言ではなくなった。

顔を俯かせて歩いてきたからだろうか、前方に人が佇んでいる事
に気づかなかつた。

湊は、ゆっくりと顔を上げる。

黒い傘を差しているからか、顔は判らない。

しかし、判った。判って、しまった。

その、声だけで。

「あ……あぁ……」

湊は呻き声を漏らした。

その男だと、確信してしまったから。

……背中の傷が、亀裂を起こしたように痛み出す。

その男は、黒い傘を畳んで、歪んだ顔で湊を見据えた。

「会う事はないと思っていたんだけどな……」

その瞳に映るのは、六年前と同じ殺意の黒色。

「でも、会っちゃまったんだよなあ」

そう呟いて、ゆっくりとした歩調で湊に歩み寄る。

湊は逃げられなかった。いや、逃げ出すことさえ叶わなかった。

何故なら。この時点で男は湊の『傷』を抉ってしまったのだから。

行間一

生きたい。

生きたい。死にたくない。

それだけの逃避概念を糧に、少年は、ただ必死に日々を過ごしていた。

それは、少年の願いだったのか。それとも、生きたいという望みだったのか。

そのような事は、まだ幼かった少年の知能では判別がつかなかった。

しかし少年には、それだけしか考えることができなかった。

気づいた頃には、身体中に幾多の傷跡を負っていた。

白い肌に不適合な、赤黒く穿たれた傷。

少年は痛覚を覚えなかった。おそらく、研究員が施した薬剤の効果が表れているのだろう。

しかし、少年にとって身体的な傷はどうでも良かった。問題は、精神面にあったのだから。

理性は完全に破壊され、発狂したことが何度もあった。心を犯すのは暴虐。残ったモノといえば、生き残る為に自ずと身についた知識だけだった。

朝六時に起床して、施設の研究員に薬剤の摂取を促される。後に何の飾りもないナイフを渡され、広大な面積を誇る地下闘技場へと連れて行かれるのだ。

向かいの扉から現れたのは、少年と同一年くらいの子供。

後は何も言わない。

研究員の貌が告げる。

殺れ、と。

だから、殺し合っつ。

そうしなければ、少年は生きられないと、既に悟っていたが故。だから、ただ必死だった。

他者を蹴落とし、他者を犠牲にして、他者よりも強くなった。

そうして何人殺してきただろうか、少年は血で帯びた闘技場の上に佇み、呆と考えた。

しかし、少年は何も感じない。

何も思わない。??否。思いたくなかったのだ。

全ての感情を排除して、一日でも長く存在していたかった。

そして、毎日殺人を続けていると、いつの間にか施設内の牢には誰一人いなくなっていた。

何故か。

少年が全員を殺したからだ。

……少年は思った。

終わったのかな、と。

開放されるのかな、と。

生きられるのかな、と。

しかし、そのような思い上がった考えは、あっけなく破壊された。そう。

それは、本当にあっけなかったのだ。

「君は強い。』』を認識する素質もある。故に、さらに強くなっつてもらっつ」

にこやかに笑う施設の所長は、当然のようにそう告げた。

「三日後から、君に観察者を設けさせる。君の上司となる人だ」

そして三日が経ち、その人は少年の前に現れた。

「キョウヤ・センドウですね。初めまして」

現れたのは女性だった。顔つきからして十代後半だろう、と少年は勝手に憶測する。

端正な顔立ち、流麗な赤色の長髪。

そして、何より少年が魅了されたのは、その微笑だった。その笑みからは邪気が全く感じられず、一瞬、自分に向けられているのだろうか、という疑問すら抱いてしまった。

「貴方の観察者となるべくして参りました。レイ・ストライトです」
にこりと美しく微笑む彼女は、出会い頭に、少年にある言葉を教えた。

それが、レイ・ストライトとの出会い。そして、少年の運命を定めた一日だった。

午後十時。日が沈み、空が闇色に染まった頃。

千堂鏡夜は、緩慢な足取りで繁華街を徘徊していた。

理由は言うまでもなかった。

ただ、一人になりたくて。

ただ、孤独に戻りたくて。

そして一刻も早く、彼女という存在を忘失したかったのだ。

湊と一緒にいると、自分の思考は、普段のそれと全くの別物へと変化してしまう。

自分でも、何を考えればよいのか判らなくなるのだ。

それは、確実に『遠近湊』という存在が影響を齎しているのだから。

故に、鏡夜は逃避へと走った。

これまでに培ってきた自身の思考パターンが、彼女という存在が脳内に残っている内は元に戻らないと判断したから。

彼女といると心が安らぐのは事実だ。しかしそれ以上に、言い様のない不安が襲ってくるのだ。

……それでも、そちら側に行く事を望んでいたというのに。

それを拒んでしまった鏡夜は、やはりそちら側に行く事を否定していたのだ。

「矛盾している……」

学園で孤立して、他者に関心を持たなかった千堂鏡夜。

それが一週間でも変わったのなら、それで良いではないか。

ホントウに？

強風が吹き、雪粒が荒れ狂う。

凍てついた白い結晶が、黒色のコートに附着していく。

まるで、自分の犯した罪を償えと告げているかのよう。
それでも、鏡夜は街を歩き続けた。
集まり始めた負邪を殺す為だけに。

繁華街から二十分ほど歩き、オフィス街に到着した。

ビルとビルの間路地裏を通り、それを見上げる。

鎮座する廃ビルの第一印象は『陰』だ。四方からさらに高い高層ビルに囲まれている。窓ガラスは無作為に割られていて、外壁に装飾されたペンキは剥がれ落ち、さらにはスプレーで落書きまでされていた。灯りは一つも灯っていない。

他のビルとは隔離されているようにも思えるこの廃ビルに、今現在、負邪が収束しつつあった。

ビルの内部に足を踏み込む。

敷地内を一步進むごとに、床に附着している塵埃が舞った。

……他のビルとは、何かが異なっていると鏡夜は感じた。

まるで、外界から別世界に入り込んだかのような違和感が、鏡夜の第六感を刺激する。

灯りが皆無ゆえに、内部はほの暗い。頼りになるのは、割れた窓ガラスから差し込む月光だけだった。

三階に上がると、偶然か必然か、既に顕現していた。

「 捜す手間が省けたな」

月明かりが、鮮明なまでに鬼人の姿を映し出している。

(……俺は、こいつらを殺す為だけに生きている)

そう考えると、彼女と過ごした一週間が実に無価値だと思えた。

(……そうだ。やっぱり俺は、あちら側に行くのは不可能だ)

?? 鬼人を見据え、鏡夜は思う。

今まで、何百回と殺してきた存在。

幾度となく冥界へと葬送してきた存在。

それは性懲りもなく、また自分に殺気を向けていた。

「 ……もういい。死ね」

自分の口から出た言葉に、内心で多少の動揺してしまう。
しかし、それが感情。

いらぬモノ。千堂鏡夜という封殺者には有ってはならないモノ。
……苛立ちは治まらない。それは、彼女と関わってしまったから
だろうか。

(でも、そんな事はどうでもいい)
今は、ただ敵を葬るだけだ。

鏡夜が接近する。

その際、鬼人の体の所々から黒い粒子??負邪が溢れ出ているこ
とに気づく。

(……どうということだ)

この鬼人は、今まさに顕現を行ったばかりだ。不完全に顕現した
のだろうか……。

しかし、先例を思い起こす限り、そのような例は今まで一度もな
かった。

だが、それはそれでラッキーだ。

弱体化しているのなら、いとも簡単に殺すことが可能だから。

……鬼人は、鏡夜の行動に何の反応も見せない。

否。この時点で、すでにそれは不可能だった。

鏡夜は一瞬で間合いを詰める。

後はいつも通り、体を十二分に解体すれば良い。

右手を手刀に変え、体内の魔力を収束させる。

そして胸部を狙い、刺突を繰り返した

「……………えっ？」

おかしい、と鏡夜は疑問に思った。

自分は確かに胸部を狙い、そして放つただけだ。

なのに……………どうして、寸前で止めているのだろうか？

「ちいッ！」

瞬時に二メートル後退する。

そしてもう一度、今度は行動そのものを完全に失わせるために、首の切断を試みた。

……荒い息が、静寂とした空間に響き渡る。

何かなんだか、ワカラナイ。

躊躇うはずがない。

そんな感情は、いらぬ。

気が付くと、鬼人は今まで殺してきた中で最上の肉片へと変わり果てていた。

「はあ……はあっ………はあ」

呼吸を整えるには、精神的疲労の回復が要求される。

故に、まずは心理的疑問の解決が優先だった。

(何故だ……?)

鬼人を殺すことに躊躇ってしまった？ 否、そんなはずがない。

あつてはならないと鏡夜は自分に言い聞かせる。

逡巡など、封殺者には禁忌の感情だ。

ならば、自分は何のために存在している？

ならば、千堂鏡夜の生きてきた年月は無価値だということか？

そんな筈はない。そんな事実は、あつてはならない。

(……どうなっている)

心中で呟いた疑問は、二つの事柄を指していた。

一つは、鬼人の殺すことに対しての躊躇いだ。

そして、鏡夜は目の前にある光景が理解できなかつた。

彼は、いつものように手刀に魔力を収束し、解き放つただけだ。

そして今。鬼人は原型を留めておらず、周辺には肉片が散乱していた。

肉片は……全部で九つ。

首、左腕、右腕、右胴体、左胴体、右脚、左脚、左右手首。

完璧な解体。肉体根本の破壊。

おかしな事は何も無い。だというのに

「なぜ、消えない？」

鬼人は、鏡夜の攻撃によって原型こそ失ってはいるが、左胴体だけが消滅することはなかった。

それ自体、不可解な事実だった。

人間の負の感情が収束した物質である負邪は、魔力とは対極に位置している。陰陽で例えるならば、負邪は『陰』、魔力は『陽』に値する。

互いに相反する物質ではあるが、一方の負邪には致命的な弱点があった。

その法則が『せいしつろんり精質論理』だ。

負邪は、『不義』、『絶望』、『後悔』、『疑心』??この四大概念から成り立っている。

それは、自身の感情に敗北した弱体精神の思念であることから、『精神的弱質の無意識体』と定義されている。

対して、魔力という物質は己の欲望、意志力と言っても良い。自身の望む力で敵を討つ。その為だけに術者が練成する破邪の物質だ。そして、その魔力の根源とされている物質は『マナ大気魔力粒子』と呼称されている。万物を創造した力と称えられ、ひいては、万物に支障を生じさせないために存在するモノ。そして、魔力を体外、体内で行使させる際に扱う陽性的な意志力を『ハードメンタル精神硬質』と呼ぶ。

魔力は陽性意志力。

負邪は陰性弱質体。

弱質体が意志力に勝つことは決してありえない。故に、負邪を消滅させる役目は魔力にあるのだ。

そして、それは鏡夜の所属する組織??星礼会や、施設でも絶対法則として成立していた。

そこで、鏡夜はある事に気づいた。

この左胴体の『中』に残留してあるのは、負邪だけではないという事に。

鏡夜は、左胴体を片手で持ち上げた。

そして、右手を切断面から胴体の中へと突き刺す。

(……これの筈だ)

ぐちゃぐちゃっ、と気味の悪い音を立てながらも、鏡夜は冷静に残骸の『中』を探る。

ガリツと、爪が何か硬い感触を捉えた。

球状の形と判断した鏡夜は、それを人差し指と親指で摘み、一気に引き抜く。

黒い血が壁や床に飛び散る。それは、粒子となって虚空に溶けた。鏡夜は『中』にあったモノを観察する。

直系三センチほどの円球を象った黒塊は、薄暗い光を放っている。そして、黒塊を引き抜いた直後、最後の残骸は完全に消滅した。

「それ、オレがそいつの中に入れてんだよ」

と。不意に、狂気を感じさせる声が、鏡夜の鼓膜を刺激した。

鏡夜は振り返る。

「それ」は唇の端を吊り上げながら、鏡夜を面白げに見据えていた。「誰だ」

率直な質問。こんな廃ビルに人がいること自体不思議だが、それ以上に、その体に宿している魔力量は鏡夜に勝るとも劣らない。

鏡夜の端的な問いに、『それ』は一つ鼻で笑った。

「気づいていない訳がねえだろ？ 同類なのに」

カツン、カツンと、静とした空間に『それ』の足音だけが響き渡る。

「やっと会えた。……オレは、ずっとお前を探していたんだよ。オレの事を唯一理解してくれる仲間をさ。この瞬間を待ちわびていたんだッ……！」

感情が昂ぶっているのか、『それ』は左手で顔を覆い、くくくと笑いを噛み砕いた。

「封殺者か」

鏡夜は確信を持って呟いた。

言動を理解すれば、自ずとその答えに行き着いた。キーワードは『同類』、『仲間』、そして体内に宿っている魔力反応といったところか。

百八十センチほどの高身長。肩に掛かる茶色の長髪に、白色のロングコートを羽織った男性。顔付きからして、年齢は二十代前半だろう。

「ああ、自己紹介がまだだったな」

昂る感情を出来うる限り制して、『それ』は話し始める。

「裁我^{サイガ}だ。真名は捨てた。そんなモノはオレにとって無価値だからな」

「そんな事はどうでもいい。この鬼人に何をした？」

裁我と向き合った鏡夜は、少なからず敵意を宿した目で睨む。

「……いいな。いいぜ、その目。その存在感……！ やっぱり、オレの目は節穴じゃあなかつたみたいだ！」

鏡夜の問いに答えず、裁我はその喜悦に興奮していた。

奇声を連想させる渴いた笑い声が十秒ほど続いた。鏡夜は耳障りだと思いつつも、裁我から目を離さなかった。

裁我は、悦びに満足したのか表情を戻す。

「ああ、質問に答えてやるよ。さっきも言った通り、お前が手に持っている『コア』は、オレが鬼人の体内に埋め込んだ物だ。千堂鏡夜。すでにお前も気づいている筈だ。それが魔力を与えた石だったことにな」

裁我の言う通り、鏡夜はとうに気づいていた。魔力を融合させて精製された魔石。そして、この魔石に宿っている魔力の基が、目前にいる彼のモノだという事さえも。

「精質論理は知ってるだろ？ 負邪を消滅させる役目は魔力にある。

故に、殺しても肉片が残留するのは矛盾する。　じゃあ、魔力そのものを埋め込めばどうなると思う？」

「性質変化って訳か」

一瞬でその答えに辿り着いた鏡夜に、裁我は賞賛の拍手を送った。「そういうことだ。負邪が魔力に勝ることは決してありえない。なら、魔力で負邪を塗り潰しちまえばいいだけの話だ」

『精質論理』の応用。裁我が行ったのは、魔力による『消滅』ではなく、魔石を使用した『性質変化』だった。

負邪という『精神的弱質の無意識体』は、魔力という『精神硬質』に勝ることはない。故に、『魔力>負邪』という不等式は自然と成り立ってくる。

そして裁我は、鬼人の体内に自身の魔力を侵食させ、魔力で作られた存在へと変質させたのだ。

つまり、魔力そのものである鬼人に魔力を使用して殺害を行っても、体内に同化しているコアがある限り、『魔力となった残骸』が残る』という理論だ。

鏡夜は一瞬だけ考えた。

彼はその知識と、それを実行できうる技術をどこで身に付けたのか、と。

しかし、鏡夜は即座に思考を切り替える。

そんな事は二の次だ。

重要視すべきは、それを実行した裁我の『在り方』にあるのだから。

「体内魔力粒子をそんな事のために利用したのか。封殺者であるが為の存在理由を否定したのならば、星礼会の魔術師に殺されても文句は言えないぞ」

体内魔力粒子とは、魔術儀式により、人為的に認識させられた魔力を指す。封殺者として戦う為の機能を施した物質だ。

そして、それを行使するのは鬼人を殺す時だけだ。星礼会により任務を担った場合は除くが、それ以外の事項は対象にならない。

星礼会の魔術師達は、その為だけに封殺者に体内魔力粒子を与える。故に、使い道を誤った者は魔術師に始末されるとというのが自然な流れとなっていた。

しかし鏡夜の危惧にも、裁我は全く動じなかった。

「心配してくれて嬉しいな。なら、そうならないように元凶を潰さねえか？」

「なんだと？」

突然、理解に及ばない事を口にする裁我に、鏡夜は眉を顰めた。

……再び、裁我は距離を詰め始める。

「千堂鏡夜。お前のデータは完全に把握している。お前が日本最強の封殺者であり、同時に矛盾した思考の持ち主だって事もな」

鏡夜は応えない。

「さつき、鬼人を殺すのを躊躇ったのはそういうことだろ？ 何故、自分が鬼人を殺さなければならぬのか。何故、こんな理不尽な運命を持って生きなければならぬのか。何故、星礼会の連中に従わなければならぬのか」

鏡夜は応えない。

「つまりだ。結論から述べると、大元の原因を破壊すればいい。お前が俺の戦力に加われれば、現存している魔術師達を殺すことは不可能じゃないとオレは踏んでいる」

そこで、鏡夜はやっと口を開いた。

「何を言っている？ 所詮は封殺者だぞ、俺は。日本最強だとか誰が流しているのか知らないが、絶対的な上位者である魔術師に敵う訳が」

「魔術師を殺したことがあるんだろ？」

……裁我の小さな呟きに、鏡夜は押し黙った。

その期待通りの反応に、裁我はニヤリと唇の端を吊り上げる。

「言ったはずだ。千堂鏡夜のデータは完全に把握しているってな。」

施設時代の観察者をわずか十歳だったにも関わらず殺したんだろ？
星礼会の上位幹部殺しの情報を知った時は、さすがのオレも驚いた。だが逆に言うならば、わずか十歳の子供でも、魔術師を殺せるだけの戦闘力を用いていた事と同一だ。だから――

と。裁我の言葉はそこで途切れた。

一瞬で眼前に迫っていた鏡夜の魔刀を防ぐことに思考を費やしたからだ。

側面から虚空を切り裂いて襲い掛かってくる一撃には、すでに裁我を殺せるだけの体内魔力粒子が収束されていた。

鏡夜の狙いは首。頸動脈を切り裂き、数秒で彼の生命活動を停止させる。それだけだ。

「いきなりだな」

しかし、その魔刀を防ぐだけの体内魔力粒子を、裁我は軽い口調で話しながらも蓄積していた。

だからこそ、たった一本の腕で防ぎきることができた。

鏡夜の前で『彼女』の話を持ち出すと、瞬時に敵意を抱き、標的に定めるといふ事さえも知っていた。

だからこそ、裁我はわざとその話を持ち出した。

「あの女が忘れられないんだろ？ そりゃそうだ。お前に唯一、夢を与えた女だもんな。忘れられる訳がない」

淡々と紡ぐ言葉に、鏡夜はただ憎しみを覚えた。

彼女を忘れていなかったからこそ、自身さえも呪った。

「それだけの感情が、まだお前にも残っている。オレも同じだ。こんな理不尽な生き方を殺す為に、星礼会を破滅させる。その為にも、戦力を増やさなきゃならねえ」

軋みを上げる腕を、裁我は強引に弾き返した。

そして……耳元で、そつと囁く。

「今すぐに答えを貰うつもりはねえ。だが、お前の本能は直感して

いる筈だ。自由になるためには、星礼会を潰すしかないって事にな
……！」
鼓膜を刺激する悪魔のような囁きは、瞬く間に鏡夜を焦心状態へ
と陥らせた。

裁我は満足したような笑みを浮かべると、踵を返し、鏡夜の前か
ら立ち去った。

時が止まったかのように、鏡夜の顔に変化はなかった。

「……答え……」

独り残された鏡夜は、裁我の言葉を繰り返す。

自由になる？ そんなことは不可能だ。彼女を殺した時点で、自
分にそうなる資格はなくなった。

だというのに。

「馬鹿野郎……！」

一瞬、思い至ったその結論は、千堂鏡夜の在り方を破滅しかねな
い『答え』だった。

鏡夜との接触を終えた裁我は、街中を歩いていた。

ふと、夜空を眺める。

先刻までの強風は、今となっては少しずつ治まりつつあった。

「……雪、か」

今夜は満月な分、白い結晶を神々しく輝かせているように思えた。

「……ちっ」

思わず舌を打つ。

これはただの自然現象だ。そこには、すでに科学的な解明が成さ
れている。

はるか上空で水蒸気が極小の粒に変化し、地上に落下するだけ。
その理論を認識したから、驚くことはなくなった。

……初めて『外』に出た頃は、あれだけ呆然と、愕然としていた

のに。

気持ちが高揚して、あれだけ無邪気に遊んだというのに。

今は、ただ鬱陶しく、見るだけで憎悪を覚えさせた。

彼をそのような心境にさせる原因は？

「ニクイ」

裁我は、そんな言葉を発した。

そんな一言で片付けられてしまう。

そんなものじゃないだろう？

もっと、実行するべきやりかたがあっただろう？

(……くそ)

誰かが、脳内に問いかけてくる感覚を覚える。

それは、おそらく『裁我』という人間の内に宿る本能が告げているのだろう。

つまりは、

あんなやり方では生温かったのだ。

後腐れなく、あいつを殺るべきだったのだ。

……今頃になって、彼は後悔してしまう。

こんなどうでも良い事に思考を巡らせてしまう。

では、なぜ後悔するのか。

結論は、簡単に出た。

「……迷っちまったのか？」

しかし、自然と漏れた言葉は疑問系だった。

では、なぜ疑問系なのか？

そこを考えよう。

裁我が彼女に抱いていた感情は、嫉妬、不快、憎悪。……これくらいか。

しかし、それだけの負の感情を持ち合わせていたというのに、何故できなかったのか？

……。

今度は、全く解らなかった。

「もう止めだ。時間の無駄だ」

結局、彼は頭を振って、その思考を断絶させた。

さて、別の事柄を考えよう。

(これから、どう行動すべきか……)

白い結晶が舞い降りる中、彼は静かな足取りで歩みを進めた。

翌朝の七時半。ベッドから起き上がった鏡夜は、睡眠不足でどこか体がダルく感じた。

(……馬鹿げてる)

睡眠不足、というより一睡もできなかったのは、裁我という封殺者の事を延々と考えていたからだだった。

(そうだ。あいつの考えは理解に達しない)

そう自身に言い聞かせる。そうだ。星礼会を破滅させたところで、裁我はともかく……自分は自由になどなれないのだ。

何故、彼が自分から絶望の道を辿ろうとしているのか、現時点での鏡夜には解らなかった。

どんな理由があつて、どんな想いを抱いて、そのような理想を夢見てしまったのか。

所詮は、価値のない事だというのに。

「考えるだけ無駄だな……」

結局、鏡夜は裁我という男を忘却する事にした。

考えを決めると、次の行動に移行するのは容易だ。すでに時刻は七時半を回っている。少し早いが、学園に向かう準備を整えることにした。

いつも通りに制服に着替え、いつも通りに、鞆に教科書を詰め込み

み
「……いつも通り？」

と。鏡夜は震える唇で呟いた。

(……今、完全に思考が狂った)

鏡夜は、『いつも通り』の類に『彼女』の存在が混ざっていた事を認識した。

(違う……!)

だからこそ、自分自身に憤慨してしまう。このような思考は、今

の自分に不適合であると。

終わったのだ。

そう。鏡夜は終わらせたのだ。

そちら側には行けないと、再認識してしまったから。

『彼女』のようにはなれないと、確信してしまったから。

だから、「ありがとう」と告げたのだ。

(駄目だ……)

……昨日の一件もあり、過度な精神的疲労が続いたからだろう。

鏡夜の顔から、除々に気力が失われていった。

「今日は、休もう……」

鞆を部屋の隅に放り投げ、荒々しくベッドに横たわった。

鏡夜は、ゆっくりと目を閉じる。

(……何を迷っている、千堂鏡夜)

瞑想を行ってみても、答えなど出てこなかった。

いや、それ以前に、鏡夜はこうした行為を今まで幾度となく繰り返ししてきた。しかし、納得のいく答えを見出したことなど一度もなかったのだ。

こうやって無駄な時間を費やして、何かが変わるなどありえないと知っているのに。

でも、今日くらいは良いだろう。

眠りたい。

せめて夢の中だけでも、俺は。

ピンポーン。

微睡みに墜ちる寸前。鏡夜の耳に、そんな機械音が届いた。

「……ッ！」

そして、一気に眠気が退く。

反射的にベッドから身を起こして、正面にある玄関を見据えた。

当然だが、扉の向こう側が透けて見えるはずがない。

しかし、扉の向こう側には『あの存在』がいると体内魔力粒子が直感を示していた。

魔力分子が互いに反発し合っている。故に、眠気が退いたのだ。

それは、従う者と支配する者の決定的な上下関係。それは、絶無者と絶対者の決定的な在り方の違い。

ベッドから立ち上がった鏡夜は、玄関まで歩いた。震える膝をどうにか御しながら……ゆっくりと扉を開ける。

まず確認できたのは、二メートルを超える巨軀。

全身は黒という服装で構成されている。長く、地面に届くほどの外套すら黒色。

感情が有るとは思えない、何も無い顔。

しかし、その存在感はホンモノだ。

鏡夜を静かに見据えている魔術師が、そこにいた。

それは、地獄を連想させた。

空気が死に、音が死に、体に宿る魔力が怯えている感覚に襲われた。

すでに、ここ周辺は異界へと変化を遂げてしまったといっても過言ではないだろう。

一般人が付近を通りかかったら、間違いなく気絶する。

それ程までの地獄を創造した男を眼前に、鏡夜はできうる限り平静を装った。

……この感覚は、あの時と酷似していた。

「久しいな、千堂鏡夜」

低く重い声の中には、どのような感情が混ざっているのか。

鏡夜は、変化しない男の顔から目を逸らさなかった。

「何の用だ。天美戒」

少なからず敵意を持って、鏡夜は男　天美戒を静かに睨み付け

た。

「立ち話もなんだな。部屋には入れるか？」

「重要事項か？」

「その通りだ」

やはり変化のない口調で返す天美。

「……わかった」

端的に了承して、鏡夜は道を開ける。

天美は玄関で黒色の靴を脱ぎ、ワンルールの部屋に上がり込んだ。
「座らせてもらうぞ」

天美は、居間の畳に正座をする。

鏡夜も、天美の向かいに胡坐で腰を下ろした。

「用件は？」

探るような目を向けながら、鏡夜は尋ねた。

他人である封殺者の元に魔術師が自宅訪問を行うなど、およそありえない光景だった。

故に、鏡夜は問う。

「あんたは俺の観察者じゃない。星礼会の魔術師が俺と接触する理由が解らないが」

「確かに、お前の意見は的を射ている。しかし、場合が場合なのでな。私はお前の観察者ではないが、下の者がお前と接触した。故に、他人事ではなくなった。知っての通り、観察者とは下の者ロウアー。直属の部下である封殺者の行動、鬼人の抹殺数を記録し、星礼会の上層部に報告書を提出する義務を担っている」

お前は例外だがな、と付け加えて天美は言葉を紡ぐ。

「そして今回の件は、私の下の者が引き起こした事件である事から、私がお前への伝達者メッセンジャーとなった。千堂鏡夜。すでに裁我とは接触したな」

「……何故、その事を知っている？」

「それは、私が彼の元観察者ゆえに、だ」

紡ぐ言葉には、威圧的な重みを感じられた。天美の発する一言一

言が、鏡夜の脳へと必然的に刻み込まれていく。

「星礼会は、この町に二人の封殺者を派遣する予定だ。明日にはこちらに到着するだろうな。その少数精鋭部隊の隊長に、お前が抜擢された。」

率直に告げる。星礼会の上層部が議論し、導き出した結論はこの通りだ。『コードナンバー01、千堂鏡夜に命じる。裁我を始末しろ』

「……それは、決定事項なのか？」

「その通りだ。奴が接触し、尚且つ、我々に反逆を行う為に仲間に加えようとしている人物は、紛れもない千堂鏡夜という封殺者？ お前だ。そして、接触の機会は今からも幾度となく訪れるだろう。ならば、その機会を有効活用するのが最善の策だ。コアを埋め込まれた鬼人の始末は他の二人に任せることになる」

「……ひとつ訊きたい事がある。コアを創り出したという事は、裁我の魔術技巧は博士号並みという事実直結する。あいつは、あの超絶技巧をどこで修得した？」

あのような魔石を創り出したこと自体驚くべき事実だが、鬼人の体に埋め込むという例を鏡夜は聞いたことがなかった。

鏡夜の問いに、やはり天美は無表情で返答する。

「彼は封殺者でもあり、同時に魔術の探求者でもある、というべきか。二年前まで、彼は関西の施設において様々な研究を行っていた。その研究成果が現在に至るといふことだな。今お前が述べた通り、彼は星礼会上層部から、『魔術論理学』の博士号を授与されている」

「……そうか」

呟いて、鏡夜は黙り込んだ。
おそらく、裁我はこの時のためだけに研究を進めてきたのだろう。星礼会を滅ぼし、自分が自由になる為だけに、二年の年月を費やした。

(……所詮、価値はないのに)

どれだけ抗おうとも、自分達は従う事しかできないのに……。

「何を躊躇っている？」

天美の言葉には、迷いなど微塵もなかった。

「殺す事がお前の存在理由だ。それは鬼人のみが対象ではない。過去の任務においても　そして七年前も、お前は殺してきたはずだ」

天美の言葉には、逡巡など全く籠っていないかった。

それは、鏡夜がそれだけしかできないと知っているからだ。

鏡夜の在り方に、迷いは必要ないと彼は知っているからだ。

(……そうか)

そして、鏡夜は改めて実感した。これが、魔術師という存在なのだ。

古傷は決して癒えない。心に負った、彼女を殺した時の感覚。

天美は、顔色一つ変えずに、ただ冷然と自分を見据えている。

天美は、邪魔な存在を殺すためだけに自分を利用しようとしている。

今頃になって、鏡夜は気づいた。

自分に、逃避など叶わないのだと。

「コードナンバー01、千堂鏡夜。裁我の始末を承諾した」

結局、鏡夜はそう口にしてしまった。

「その言葉、確かに受け取った」

天美は深く頷き、不意にこんな言葉を口にした。

「頭痛は治まったか？」

「……なに？」

意味が解らず、鏡夜は眉を顰める。

「……よい。邪魔したな」

言って、天美は立ち上がり鏡夜に背を向けた。

除々に遠ざかっていく足音は　しかし、玄関口で止まった。

「あの娘の見舞いに行つてやれ。……遠近湊だったか。K大付属総合病院に入院している。ではな」

そう言い残して、今度こそ天美は扉の向こう側へと消えた。
そして、この時点で鏡夜は気づいていなかった。
その言葉が、魔術師の慈悲だったということに。

少女は、閉じていた双眸をゆっくりと開いた。

ぼやけて見えた視界が、除々に鮮明な風景を描き出していく。

「……ん……う」

咄嗟に目を細めた。

カーテンの隙間から射し込む日光は眩しく、少女に朝が来たという事を報せてくれた。

少女は仰向けの状態で、首だけを動かした。

白い天井。白い壁。辺りを見回しても、誰もいない。

そこで、少女は自分が病室にいるという事を認識した。

「……いたっ」

少しでも体を動かそうとすると、腹部辺りが痛んだ。

でも、と少女は思う。

何故、自分は病室にいるのだろうか？

少女の記憶では、その辺りがどこか曖昧だった。

しかし、おそらくこの痛みが原因なのだろう。パジャマを捲ると、腹部には包帯が巻かれてあった。

身を起こそうとしても、腹部に亀裂が走ったような激痛を覚える。

少女は、満足に起き上がれない状態だった。

何故入院しているのかは、後で医者に尋ねれば良いだろう。

……それと、もう一つ。

自分は、何かを忘れていないか、という疑問を抱いた。

そして『それ』は、忘れてはいけなかったような気がしてならな

い。

ズキンッ、とまた腹部が痛み、少女は顔を歪ませた。

駄目だ。今は考えるのはやめよう。

もう少しだけ、眠ろう。

次に目を覚ました時には、きっと思い出しているだろうから。

行間二

少年の観察者となったレイが施設に訪れ、一週間が経過した。

その間に行われた事は、少年とレイによる戦闘訓練のみだった。

元封殺者であったレイの実力は、少年が今まで相手にしてきた封殺者候補と比較すべきではない。いや、その考察自体、愚考だと少年は思った。

いつ、攻撃を受けたのか解らない。

いつ、気絶させられたのかさえも理解できない。

少年の全力を込めた魔刀による攻撃も片手であしらってしまっただ、レイ・ストライトの強さは異常だった。

いや、異常という表現にも語弊がある。レイは、その強さが『完成』されていたのだ。

これまでに何千という数の鬼人を殺してきたレイは、少年とは『格』というモノがかけ離れていたというだけの話だった。

「キョウヤ、少し休憩を入れましょう」

五時間にも及ぶ戦闘訓練に、二十分間の休憩を挟もうと提案を出したのはレイだった。

闘技場の隅に腰掛けた二人は、喉に飲料水を通す。

「……レイさん」

「なんですか、キョウヤ？」

微笑みながら、小首を傾げるレイ。その仕草はとても愛らしく思えて、同時に、心臓の鼓動が一段と早くなってしまおうという鏡夜にとって厄介な仕草だった。

少年は顔を俯かせて、抑揚の無い声で尋ねた。

「レイさんは、昔、封殺者だったんでしょ？ 鬼人を殺していた時、哀しいって気持ちにならなかった？」

いつか、自分もレイと同じ場所に立つ者として、『先輩』というべき人間の意見を聞いておきたかった。

レイは、何を想って殺しているのか。

レイは、何を悟って普通でいられるのか。

少年の問いに、レイは少し愁いを帯びたような笑みを浮かべた。

「そうですね。哀しいという感情は確かに有りました。それは封殺者になった人間ならば、必然的に経験する感情ですからね。鬼人を殺す為だけに生きて、死んで逝く。私はその運命を自覚したのも、貴方くらいの年頃でした。ですが」

そこで言葉を切ったレイは、普段通りの優しい微笑を浮かべた。

「私は、それを受け入れるつもりはありません。抗いなど無価値だと言っ輩もいますが、それでも私は、夢を見続けていたい」

「……夢？」

「ええ。私が抱いている夢。貴方が抱いている夢。その種類は人それぞれですが、人間は誰だって、夢を見続けていたい生き物なんです。願望、自身の在り方を決定する『正への方向性』。キョウヤ、貴方の夢はなんですか？」

問う視線すら優しい彼女に、少年は顔を俯かせることしかできなかった。

(……僕の、夢)

それは、考えてはいけない事だと少年は思った。

鬼人を殺す為だけに生きて行くのに、そんな奇麗事は無価値だと思えてならなかったから。

なのに、何でその言葉を意識しようとしている自分がいるんだろう？

黙り続ける少年に、レイは小さなため息を漏らす。

「今はまだ、その時ではないのかもしれないかもしれませんが、私は祈り続けましょう。貴方が、本当の感情に気づくその時まで」

レイは、両手を胸に当てて、本当に祈るように口にした。

天使を連想させる柔らかな微笑みは、確かに少年を想つての仕草だった。

この時、少年はレイと共に笑うことができなかった。

(僕も、いつか笑える日が来るんだろうか)

しかし、レイの笑顔を見つめていると、そんな日が来るのかもしれないと少年は思えた。

魔術師は去って行った。

再び一人になった鏡夜は、荒々しくベッドに寝転ぶ。……畏怖というモノは感じなかったが、疲労だけは免れなかった。体は汗まみれになり、両手の震えは止まらず、唇まで小刻みに震えてきた。

その要因は。

『あの娘の見舞いに行つてやれ』

その言葉を聞いた瞬間、強烈な不安が押し寄せてきた。何か、言いたくない危険が迫っていると鏡夜は直感したのだ。

「……遠近が、入院している」

その理由が何であれ、彼女が傷を負ったというのは確かな事実だと思つた。

では何故、魔術師がそのような事柄を鏡夜に伝えたのか？

自分の観察者でもない天美戒が、日常世界の他人事に干渉する意味は皆無だ。

故に、先の言動の意味が鏡夜には全く解らなかつた。

では、なぜ？

(……あいつが、鬼人か裁我に襲われた……)

心中で、鏡夜はその可能性を呟いた。

確率は低いが、天美が日常世界に生きる人間の話を持ち出したのは、非日常の事柄と関連しているからかもしれない。

(もしその通りなら、遠近から何らかの情報を得られるかもしれない)

結論を出すと、行動に移すのは早かつた。

ベッドから起き上がり、天美戒が言っていたK大付属総合病院に向かう支度を始める。

裁我を始末する任務を受け持ったのだ。彼に関する情報は少しで

も多い方が

「今、俺は何を考えた？」

しかし、自分の考えていた事の意味が、瞬く間に恐怖を覚えさせる。

(……まただ)

また、思考が狂った。

利用するのか？

彼女を遠ざけて。

必要となれば、彼女に近づく。

期待させて、絶望させて。

「まるで偽善者だ……」

再びベッドに横たわる。

ピンポーン

二回目の呼び鈴が鳴った。

しかし、鏡夜は聞こえていないかのように目を虚ろとさせていた。

(……俺に何の用がある？ 何を求めている？ 何を期待している？)

こんな、何もかもが中途半端な人間に。

(……早く帰ってきてくれ)

鏡夜の否定を無視するかのように、呼び鈴は二回、三回、四回と鳴り続ける。

鏡夜は出る気がなかった。今は、人と会いたくないから。人と会って、こんな無様な自分を見せたくないから。

……しかし、それは唐突だった。

ガチャッ

「……は？」

思いもしなかった来客の行動に、鏡夜は思わず呆けた声を漏らした。

あろうことか、来客は許可なしに家に上がり込んできたのだ。

鏡夜は、咄嗟にベッドから身を起こす。

「ふああ。……良いんスカ？ 勝手に上がり込んで」

最初に聞こえてたのは、大きな欠伸をしている女性の声。

「いいのいいの！ 居るのは確実なんだから！」

次に、いつか聞いたことのある中性的な少年の声。

静かな足音に対して、ドスドスと無遠慮な足音。

かくして、その二人は鏡夜の前に姿を現した。

「久しぶりだね、キョウヤ！」

「お邪魔するツス」

先導して姿を見せたのは、テンションの高い銀髪に碧眼の小柄な少年。後方には、ポニーテールの髪型に、目を半眼状態にした日本人の少女がいた。

「なぜ、お前が日本にいる？ カイン・エレイス」

「そんな結論も見出せないの？ 全ては星社会の命令により、だよ」

「……天美が言っていた封殺者っていうのはお前のことか」

はあ、と重いため息を吐く鏡夜。

その、明らかに気分を損ねた鏡夜の反応に、少年 カイン・エ

レイスはぶくつと頬を膨らませた。

「二年ぶりの再会なんだから、もう少し喜んでもいいんじゃない？」

「お前と再会して喜ぶヤツは、世界には存在しない。あんたも

気をつける。いつ殺されるかわからないからな」

鏡夜はポニーテールの少女に視線を送り、忠告を促す。

ポニーテールの少女は、鏡夜の危惧に二度目の欠伸で応えた。まるで緊張感というものが感じられない。

「すでに殺り合ったツスよ。空港からこっちに向かう途中というものの、何度も奇襲を仕掛けられたツス。まあ、カインくんが本気じゃなかったから、死ぬことはなかったツスけど」

微妙な敬語を使いながら、気怠るそうに言う。大きな黒い瞳を半眼状態にした少女は、いかにも無気力な雰囲気醸し出していた。腰まで届くポニーテールは流麗で、黒絹で出来ているかのような艶やかさがあつた。

そんなポニーテールの少女は、直方体の形をした革張りの箱を肩に担いでいた。

(あの箱)

瞬時に、鏡夜は理解する。あの箱の中に入っている物は、死を具体化した彼女の武器であると。

「チサメちゃんの戦闘力を測定したかっただけだよ。好奇心好奇心っ！」

対するカイン・エレイスという少年は、百五十センチほどの低身長。銀髪に碧眼という容姿をしている。鏡夜の記憶では、確か喜怒哀楽がはつきりとした少年だった。それは現在でも変わっていないようだ。

……しかし、鏡夜はこの少年の本性を知っていた。故に、対応の仕方は完全に熟知しているといっても過言ではない。

そして、二人が最後に別れた二年前と変わらず、大型のアタッシユケースを手に担いでいた。あのケースの中にはカインの武器が入っているのだ。

「天美は明日に到着すると言っていたが……お前のことだ。早く殺したくて前日に来たんだろ」

「その通り！ さつきカイさんと偶然会ったけど、少し動揺してたよ。でも、『早いに越したことはない』って言ってたから万事オツケーでしょ？」

ニコニコと笑いながら、指でVサインを作るカイン。

「まあ、私もそれには賛同ツスね。面倒な事には変わらないツスけど……」

後ろ向きな同意を示すポニーテールの少女。その微妙な温度差は、カインとミスマッチしているように思える。

「……とりあえず、二人とも荷物を置いて座つてくれ。紅茶でも用意する」

鏡夜は三メートルとない距離を歩き、キッチンでマグカップを用意し始める。

「サンキュ！ 砂糖多めでね！」

「ありがとッス。あ、私は日本茶でお願いするッス」

三人がテーブルにつくと、最初にカインが話を切り出した。

「さて、まずは互いの自己紹介といこうか。ボクはカイン・エレイス。十五歳。イギリスの施設で育った封殺者で、殺す事が大好きな美少年だよ！」

「……」

「……」

微妙な沈黙が入り、ポニーテールの少女は横目で鏡夜を見やる。

「……こういうヤツなんだ。放っておけ」

「む、何かボクを馬鹿にしているような言い方だね、それ。じゃあ付加要素として言い直すよ。好きな言葉は『殺害』、『殺戮』、『皆殺し』、『殺し合い』……まだまだあるけど、一応、高順位ではこれくらいかな？」

「……」

「もういい、無視してやれ」

「了解ッス」

二人の言葉に、カインはぶくー、と再び頬を膨らませる。しかし、先の言動のせいか、二人は謝る気になれなかった。

「じゃあ、私の番ッスね。工藤千雨くじゆッス。歳は十七。私も一応封殺者ッスけど、施設には入ってないッス」

「なに？」

鏡夜は千雨という少女を訝しげに見据えた。そんな前例は聞いた

ことがなかったからだ。

封殺者に成る為には、施設での殺人訓練が絶対視される。それは、何の躊躇いもなく鬼人を殺すという嗜好を身に付けさせるためだ。

それでは矛盾が生まれてしまう。施設の出身者以外が封殺者に成ったという前例を鏡夜は耳にした事がない。つまり、それが意味するのは

「あなた、魔術家系の人間か？」

「はいッス。工藤家は、日本退魔御三家の筆頭とされているッス。古くからの血統が受け継がれて、生まれた時から純粹な魔力を扱える体だったので、魔術儀式も受けていないッスね」

なるほど、と鏡夜は心中で納得する。

スポンサーが日本を代表する魔術家系　そして、魔力の使用が可能なら、施設での訓練は無駄という訳だ。

「じゃあ、あなたは大気魔力粒子の使い手なのか？」

マナには、封殺者が行使する体内魔力粒子とは異なる点がある。一つある。

それは使用に限りがないということだった。封殺者の用いる体内魔力粒子は、長時間の使用によって　使用頻度にもよるが　体力、精神力の低下と共に底が尽きてしまう。

しかし、大気魔力粒子は自身の外界から収束するものであるが故、使用上限というものがないのだ。

そして、それを行使できる存在は、魔術家系に生まれた人間つまり、『魔術師』の部類に属するということになる。

しかし鏡夜の問いに、千雨は頭をガシガシと掻きながら否定した。

「あー、いえ。私、基本的に大気魔力粒子は扱わないんすよ。工藤家の当主から使用を禁じられています。私の基本戦闘論理は、あの革張りのケースの中に入っているモノによる近接戦闘ッスから」と、千雨は先刻部屋の隅に置いた直方体のケースを指差した。

「それと、封殺者に成ったのも当主の命令ッスね。『お前の生活環

境を変える。星礼会に所属して、世の中の為に働け』だそうツス。

……まあ、四六時中、家で寝ていたのが原因だと思っくんすけどね」

「……そんな理由で、あんたを封殺者にしたのか？」

「はいツス。それと、星礼会っていう団体とか、『コードナンバー』とか、よく解らないツス。私が封殺者に成ったのは今年の十月です。知識に乏しくてすみません」

ペコリと礼儀正しく頭を下げる千雨に、今まで二人の会話を傍観していたカインが口を開いた。

「簡単に説明するとね、星礼会っていうのは『世界管理者』だよ」

思想、存在概念、最終目的、その全ては、世界安定の為にある。本拠地はイギリスのロンドンにあり、半径一キロ四方に渡って半円球型の人払いの結界を張り巡らせてある。

「目的と言ったら、鬼人の排除に当たるね。その存在は、世界安定を維持する為の必要な要素　まあ、有り体にいえば邪魔な存在だと彼らは定義してるんだ。

鬼人を殺す事が星礼会の下部要員であるボク達封殺者の役目で、安定を保つ為の手駒ってわけ。そして、世界管理者と名乗るだけあって、世界各国の政府連中とも交流が深い。政府の上層部に位置する人間は、星礼会は勿論のこと、封殺者の存在も認知しているだろうね。さらに言えば、封殺者を育成する機関である施設への資金援助も世界政府が担っている。星礼会という一組織だけじゃあ、世界中に在る研究設備を整えるのは不可能だからね」

カインはそこで一息つき、紅茶を喉に通した。

千雨は「うーん」と、難しい顔をして低く唸った。

「極論で言うと、私達は星礼会の必要要素と判断して良いツスか？」
千雨は鏡夜に視線を向けて訊ねる。しかし彼は目を逸らし、黙り込むだけだった。

「チサメちゃん。鏡夜が黙り込むのは、彼らの考えには興味がないっていう意思表示だよ」

皮肉げに唇の端を吊り上げながらカインは言った。鏡夜もその言

葉に反論できないあたり、事実当たっているのかもしれない。

「それと、確かにチサメちゃんの言葉が真実だけどね、ボク達はそのから理解するという行為に至るまで相当な時間を有したよ。

ねえ、キヨウヤ？」

「知るか。俺に聞くな」

反応はにべもない。カインはその様子をニコニコと面白げに見据えながら、「じゃあ、最後はキヨウヤだね。とびっきりなヤツをお願い！」と、大袈裟に両手を開いて自己紹介を促した。

「……千堂鏡夜。十七歳。日本の施設で育った」

鏡夜の端的な自己紹介に、カインは不満があるのか「えー、それだけ？」と、唇を尖らす。

しかし、鏡夜にとってはそれだけの言葉で全てが事足りていた。他に言う事もないし、他人に個人情報をお教えになかったからだ。

「ま、いつか。じゃあチサメちゃんに『コードナンバー』の説明をするね。空港では言いそびれたから」

「カインくんが奇襲を繰り返したからツスけどね」

無表情で悪態をつく千雨に、カインは「まあ、それは置いて」と腕でジェスチャーをした。

「簡単に言つとね、コードナンバーっていうのは階級クラスのこと。あ、でも地位とは無関係だよ」

『コードナンバー』。有り体にいえば、それは封殺者の戦闘力を指す。

封殺者と成った時、最初に該当する階級は50である。その段階から、鬼人の抹殺数、戦闘能力を『上の者』エルター。つまり観察者が記録し、星礼会に報告書を提出する。その報告書によって、星礼会上層部がその封殺者の実力を吟味し、戦闘レベルを割り出すのだ。

「50から始まって、鬼人の抹殺や任務を果たすことによって40、30と実力が上がっていくんだ。最終到達地点は『零階級』ゼロクラスだね。

そして、零階級の領域に踏み込んだ封殺者は、その戦闘理論に似合った称号が授与されるんだ。

……でもそうなると、チサメちゃんの階級ってどの位置になるんだろうね。魔術家系に生まれた人間だったら、魔術師の部類に属するのが普通だけど、封殺者でもある。うーん……」

腕を組んで考え込むカインは、彼女の階級に関して納得がいつていないようだ。

「50で良いんじゃないツスカ？ だって私、封殺者に成ってからまだ一度も鬼人を殺してないんスから。というか、面倒だっただけなんスけど」

半眼をさらに細くして、千雨はしれっとそんな事を言った。

（……こいつは、封殺者に成るべきじゃなかったんじゃないだろうか）

鏡夜は心の底からそう思った。鏡夜からすれば、鬼人を殺さない封殺者など、封殺者ではないという倫理観に基づいた考えだった。

「で、二人の階級はどれ位なんスか？」

鏡夜とカインに視線を巡らせ、千雨は尋ねた。

「ボクは零階級のナンバー06だよ。称号は、一応『射貫く銀』っていうのを授与されてる。……まあ、そんなモノを貰ったところで何かが変わるわけじゃないけどね」

「鏡夜くんは？」

「……ナンバー01。称号は『刹那』だ」

そして、鏡夜もカインと同一の考えだった。称号などと与えられても、どうなるものではない。ただ、強くなったという認識しかできないのだから。

「じゃあ、一番強い封殺者は鏡夜くんって事ツスカ？」

「……ナンバー01とはいえ、それは日本を限定しての話だ。それに、その例えは封殺者の部類での話だろ。魔術師を類に加えると、俺なんか下位者もいいところだ」

鏡夜の言い分は、事実その通りであった。

零階級の封殺者といえども、それは魔術師の領域には程遠い。

事実、星礼会の定めた基準では、『魔術師>封殺者』という不等

式が成り立っているのだから。

「さて。自己紹介も済んだし、そろそろ現状の把握に努めようか。キョウヤ、何があったの？」

「……お前達、星礼会から任務内容の書類を渡されていないのか？」「はいッス。とりあえず『日本の千堂鏡夜と合流しろ』と、こんなところッスね」

「こんなのボクでも初めてだよ。書類なしで現地に赴くなんてね。ま、上層部の思惑なんて理解できる訳がないから、別にいいけど」「それに関しては同意できるな。とりあえず、順序に沿って説明するぞ」

そうして、鏡夜は昨日の出来事　そして天美戒から掴んだ情報を二人に話し始めた。

「ふうん。興味深いね。コア、裁我、そして星礼会を潰す、か」カインはテーブルに肘を立てて、両手の五指を組んだまま思案している。千雨も、腕を組んで「うーん……」と唸っていた。

「で？　キョウヤはどう思うの？」

「あいつの考えは理解に達しない。星礼会を潰すのは不可能だ」「そうじゃなくて。ボクが言いたいのは、その裁我つてヤツが星礼会に反逆する理由だよ。そいつの基本詳細は知らないけど、原因がなきゃ、そんな馬鹿げた行動は普通起こさないと思うけどね」

「そうッスね。魔術論理学の博士号なんて、そう貰えるものじゃないッスよ。だけど、コアを創り出すために、二年前まで関西の施設で研究を行っていたという可能性も捨てがたいッスね。なら、原因は二年前を遡るといふ可能性も生まれってくる訳で……頭が痛くなるッスね」

「じゃあ」と、カインは人差し指を立てて、

「話は変わるけど、コアで性質変化された鬼人の戦闘力つてどの程度なの？　キョウヤ、戦ったんでしょ？」

「戦ったのは確かだが、あれは戦闘といえない。あの鬼人は、行動

という行動を見せなかったからな」

「昨晚あの廃ビルで邂逅した鬼人は、鏡夜の行動に一切の反応を見せなかった。まるで、自分から殺されるのを望んでいるかのようだった。」

「おそらのだが、あの鬼人は不完全に性質変化された俺は考えている。あの鬼人には、戦う直前まで少なからず負邪が残っていた。完全に性質変化を終えたのなら、一パーセントでも負邪が身体に残留しているのは辻褄が合わない」

「そうだね。魔術においても、性質変化っていうのは遅くとも五分の時間を有するって論理をボクも施設で習ったよ。なら、その鬼人は実験体ってところかな」

カインの推測に、鏡夜と千雨は同意するように頷いた。

「まあ、彼の目的はひとまず置いておこう。問題はコアだね。キョウヤ、持ってるんでしょ？」

「ああ」

鏡夜はズボンのポケットに手を潜りこませ、それを取り出す。

直径三センチほどの黒塊は、未だ薄暗い光を放っている。それはつまり、裁我の魔力が残留しているという事を示していた。

「へえ。よくこんな魔石を創り出したものだね」

カインと千雨は、テーブルに置いたコアをじっくりと見据え、魔力性質を分析していた。

「視ての通り、魔力が融合されてある。あいつは精質論理を応用して、鬼人を魔力で性質変化させたということだ」

「素材は判らないツスけど、結構硬そうツスね、これ」

指でコアを摘み、ジツと見据える千雨。

「……………」

そんな最中、カインは目を細めて、無言のままコアを見つめていた。

「カイン、どうした？」

突然黙り込んだカインに、鏡夜は訝しげに眉を顰めた。

しかし、カインはすぐにいつも通りの笑みを浮かべる。

「何でもないよ。じゃあ、そろそろ行こうか」

突然、立ち上がって「うーんっ！」と大きく背伸びをするカイン。その、完全に何らかの思惑が宿っている碧眼が、鏡夜を定められる。

「…………どこにだ？」

怪訝に問う鏡夜に、カインの笑みは皮肉げに吊り上がった。

「病院」

それだけで。

その言葉だけで、鏡夜は否応なしに彼女の事を思い出した。

「病院だよ。有力情報を握っているかもしれない、ミナト・トオチカの入院している病院。知らない筈がないよね、キョウヤ？」

「…………どこで聞いた？」

「質問を質問で返さないでほしいな。じゃあ、まずは君の質問から答えるでしょう。」

ミナト・トオチカ、十七歳。黒堂学園二年A組所属。裁我に襲われた確率、大。現在、K大付属総合病院に入院中。これくらいの情報は、さつきカイさんと会った時に教えてもらった。そして、君が唯一、心を許した相手でもある。　違うかい？」

「……………」

「びつくりしたよ。日本最強の封殺者が、一般人の少女に心を許すなんてね。でも、最終的には彼女を遠ざけた。その判断は正解だよ。ボク達は一般人の相手なんかしている暇はない。そうでしょ？」

「……………黙れ」

「鬼人を殺す為だけに生まれ、生きて、そして死んで逝く。そんな運命を背負っているボク達が、正常な人間と関われる訳が　と、何のマネだい？」

ほぼ無意識の内に、鏡夜はカインの首の動脈に手刀を突きつけていた。

「ああ、その通りだ。お前の言っている事は、寸分違わず当たっている」

言葉ではそう言い返すが、反面、鏡夜の手刀は、今にもカインの動脈を切り裂こうとしていた。

カインに殺意を抱いた事は今まで幾度となくあったが、今回は、今だけは

ホントウに、殺してやりたいと思ったのだ。

「はい。そこまでツス」

突然割って入った千雨は、鏡夜の腕を掴み強引に首元から遠ざけた。

「チーム同士での喧嘩はさすがに私も見ていられないツスね。……カインくんも度が過ぎるツスよ」

カインに首を向けて、千雨は咎める様な視線を送った。
「はいはい、分かったよ。まあ、今回はボクが悪かった。でもね、キョウヤ。これだけは覚えておいて」

そこで、カインは険しい表情に変わり、鏡夜に忠告する。

「ボク達は、そんな行為に走ることは許されない」

「……ああ」

顔を背けて静かに返答する鏡夜。その言葉にカインは満足したのか、いつも通りの笑みを浮かべた。

「じゃあ行こうか！ 善は急げって言うからね！」

鏡夜の家を出た三人は、その場所に向かって歩みを進めていた。

鏡夜は学園に「風邪を引いた」と連絡を入れた。その電話の最中、カインは耐えられずクスクスと笑いを溢していたが、別段気にする必要はなかった。

「日本はいつ来ても良い国だね。イギリスなんかよりも、こっちの方が断然落ち着くよ」

街の中枢にある繁華街を歩いている最中、カインはテンションが上がったようにスキップなんかをしていた。

生粋のイギリス人であるカインは、過去に一度、任務で日本に訪れたことがあった。その際、鏡夜はカインをパートナーとして仕事を行っただのだ。

以来、カインは日本の文化 とはいっても、日本のゲームや漫画だけだが にえらく関心を抱いたらしい。流行のゲーム機や日本で有名な漫画などを尋ねられた鏡夜だが、そのような事に興味が無い彼が教えられる訳もなかった。果ては任務の終了後に漫画喫茶に連れていかれる破目にもなった。

「鏡夜くん、鏡夜くん」

と、ぼんやりとした表情でその頃を思い出していた鏡夜だが、服の袖をちよいちよいと引っ張られて横目で千雨を一瞥する。

「……名前で呼ぶなよ」

「名前くらい良いじゃないツスか。減るものでもあるまいし」

並んで歩いている千雨は、前に出て、下から鏡夜の顔を覗き込んだ。

「私の事はちーちゃんが良いツスよ。それで平等ツスよね？」

「そう呼ぶ事に意味はない」

「意味ならあるツスよ？ 仲間ならコミュニケーションを大事にしないといけないツス」

仲間、か。そんなモノはいらないが、今回限りの付き合いだと考えれば別に気にする必要は無いのかもしれない。

「分かった。 千雨」

「おお、初めて鏡夜くんから名前で呼ばれたツス！」

名前で呼ばれた事がよほど嬉しかったらしく、千雨は初めて微笑んだ。しかし、今の鏡夜からすれば、その純粹無垢な微笑は苦痛でしかなかった。

「鏡夜、疲れたよー。まだ着かないのー？」

先頭に行くカインがそんな愚痴を漏らす。鏡夜は手にしている地図を広げて「あと三十分くらいだ」と返答した。

K大付属総合病院は、堂崎市の西区 山地付近の場所に位置している。周囲は豊かな緑で囲まれており、その土地面積も広大である。病院に着くまでは多少の坂道を登らなければならないが、この病院に訪れる人々の大半は町の中核から特別バスに乗車する。なので、鏡夜達のようにわざわざ坂道を登ってくる必要はない。

鏡夜は特別バスの存在を知らなかった。違う町から来た千雨は勿論のこと、イギリスから訪れたカインも知る筈がない。故に、こうして遠回りに傾斜の高い坂道を登っていた訳だった。

坂道を登りきり、鏡夜はその病院を見上げた。

(ここに、遠近が入院している)

「何してるの、キョウヤ？」

正門の前で立ち止まる鏡夜に、訝しげに声を掛けるカイン。その言葉でハッと我に返った鏡夜は、先導するカイン達の後を追った。

正午に近づきつつある時間帯のためか、ロビーにはそれなりに人がいた。

鏡夜はフロントにいる受付の女性に、遠近湊の面会に訪れたと事情を説明する。

一枚の用紙に、面会時の必要事項をペンで記入した後、三人は「第三棟の402号室になります」と案内を通された。

「ここか」

402号室の扉の前で立ち止まった三人。ふと、鏡夜は扉の横にある名札を見た。

『遠近湊』の名札しか貼られていないという事は、個室なのだろう。鏡夜は、ノックを二回する。

「どうぞ」と、控えめな声が返ってきた。

扉を開ける。

そこには、一週間前に別れた遠近湊がいた。

ベッドからゆっくりと身を起こした湊は、無表情とも取れる顔でこう言った。

「……あの、どちら様でしょうか？」

と。鏡夜の記憶に残っているあの笑顔が、ガラガラと音を立てて崩れ落ちた。

「……病室を間違えていませんか？」

除々に戸惑いの表情へと変化する『遠近湊』。

「(どういうこと？ キョウヤの事、知らないみたいだけど?)」

耳打ちしてくるカインの疑問には答えず、鏡夜は部屋の端に置かれてあるパイプ椅子を手で引き寄せ、腰を下ろした。

「俺は千堂鏡夜っていうんだが……あなた、知ってるか？」

緊張させないよう、できる限り静かな口調で問い掛ける鏡夜。しかし、湊は首を横に振って「……知らない」と返答する。

「そうか。あんた、何で入院しているんだ？」

問い掛けると、湊は顔を少し俯かせて、眉を寄せた。

震える唇で、今にも泣き出しそうな表情で、湊は口を開いた。

「……最初は分からなかった。気が付いた時には、このベッドにい

たの。でも、何でこんな事になったのか分からない」

「……そうか」

遠近にはもう、俺に関する記憶は無いのか。

それを悔やんでいる自分がいた。そして反面、その事実を喜んで
いる自分もいた。

何故か、泣いてしまいそうになる。

「……二、三。質問に答えてもらってもいいか？」

「うん」

「あんた、病を持っているのか？」

その問いに、湊は無表情で否定した。

「ううん。私は住宅街で倒れていたらしいの。お腹には、刃物み
たいな物で切られた痕がある。それで、私が倒れている所に偶然通り
かかった人が、警察と病院に通報してくれたみたい」

「病院に運ばれたのは、何時頃だ？」

その問いに、湊は無表情で返答した。

「お医者さんの話だと、昨日の夕方頃」

「じゃあ、最後の質問だ。腹部以外に、痛む所はあるか？」

その言葉に、湊は微笑んで返答した。

「ありがとう。心配してくれて。でも、お腹以外に痛む所は無いよ」

二人だけの教室で雪を眺めた時の笑顔が、ここにあった。

「そうか。それなら良かった」

だから、鏡夜も笑顔で返した。

それは、湊の目にはどう映っただろうか。

それはきつと、笑顔とはいえない、ぎこちない笑顔だったのだろ
う。

パイプ椅子から立ち上がった鏡夜は、湊に背を向けた。

「ありがとう。安静にして、早く退院しろよ」

片手を上げて、鏡夜は病室を後にした。

「最後の別れは済んだのかい？」
病室を出ると、カインが皮肉な笑みと言葉を以って鏡夜を出迎えた。

「……カインさんの皮肉も、ここまで来るとむしろ清々しいツスね。少しは鏡夜さんの気持ちも考えた方がいいと思うんすけど」

「気持ち？ ボク達がそんなモノを持つてどうするの？ 感情なんてボク達には不要なモノだよ。そうでしょ、キョウヤ？」

「ああ、感情はいらぬ。全ては終わった。標的も定めた。だから」

千堂鏡夜は、殺す為に生き続けるだけだ。

『ありがとう』

そう言い残して、彼は病室を後にした。

何かが、脳裏に過ぎった。

同じ言葉を、湊は以前、聞いた気がしてならなかった。

でも、それはいつだっただろうか？

彼と話していると、密かに、湊は『嬉しい』という感情を抱いていた。

でも、それはなぜ？

どうして、そのような感情を抱いたのだろうか、と湊はベッドの中で考えた。

彼は、言っていた。

『千堂鏡夜っていうんだけど、あんた知っているか？』

あの言い方が示す意味　おそらく彼は、自分の事を知っていた

のだ、と憶測する。

本当は「知らない」ではなくて、「思い出せない」と言う方が的確な言葉だったのかもしれない。

そう口にしていたら、もしかすると、彼は自分との関係を教えてくれていたのかもしれない。

それが、どんな些細な事柄でも、思い出せたなら、この不安で埋め尽くされた心は、すっきりしていたのかもしれない。

かもしれないばかりだ。

それは、想像するしかできないけれど。

でも、また来てくれないかな、と湊は思った。

三人が自宅のマンションに着いた頃には、既に午後六時半を回っており、橙の色彩が空を覆っていた。

この空が完全な闇夜に変貌するまで、残り四時間といったところか。鏡夜はマンションの廊下を歩きながら、空を見上げていた。

カインと千雨の強引な要望で、二人の下宿先は鏡夜の家となった。……確かに、三人が寝られるだけのスペースはある。しかし、女性である千雨まで「意義なし」とはつきり言うとは、さすがの鏡夜も思っていないかった。

「ただいまー！」

「ただいまッス」

……この二人。何だかんだで考えている事が似ているのではないかと、鏡夜は小さなため息を漏らした。

「カイン。先に言っておくが、部屋を荒らすなよ」

「む、そんな事する訳ないでしょ。英国紳士だよ、ボク」

「英国紳士は、人の家の冷蔵庫を勝手に開けて牛乳をラッパ飲みしないと思うがな」

「ぶっはー！ え、なに？」

「……もういい。とりあえず椅子に掛けてくれ。今後の事について話し合っぞ」

鏡夜の促しに、二人は頷いた。

「さて、まずはコアについてだね。今現在把握している事は、『鬼人の体内に埋め込まれている』。『コアがある限り、肉体は消滅しない』。これくらいかな」

前回と同様に、今回もカインが場を仕切ることとなった。

鏡夜もそれに反対する理由はなかった。カインは話の流れ、結論に至るまでの順序の組み立て方が常人より優れていると知っているからだ。

「じゃあ、正逆の論理で考えるとこうなる。肉体よりも先に、体内にあるコアを破壊してしまえばいいんだ。そうすれば、鬼人を司る魔力が消滅して存在は失われる。と、これがボクの推測なんだけど、試してみる価値はあるね。キョウヤ、コア出して」

「ああ」

鏡夜はテーブルにコアを置いた。薄暗い光を放つ魔石には、未だ裁我の魔力が宿っている。

「結構硬そうだけど、キョウヤ。壊せる程度の魔力量でやってみて」
首肯した鏡夜は、体内に蓄積してあるイナを右手に収束させる。

次に、『練成』を行う。脳裏で思い描く心象は、コアを破壊できるといふ強大な陽性意志力。コアを破壊するという鏡夜の意志は、右手に宿るイナを格段に活性化させていく。

「やるぞ」

「いいよ。ちゃんと視てるから」

カインに確認を取った鏡夜は、指でコアを摘み上げ、コインを弾くようにピンツ、と宙に浮かせる。

刹那の瞬間、鏡夜は魔刀を横一文字に振り切った。

パキンッ！ とコアは中空で綺麗に両断され、テーブルに転げ落ちた。

その一部始終をしつかりと視ていたカインは、ニコリと笑う。

「うん。視た結果、やっぱり砕けると同時に魔力は消失するようだね。で、今キョウヤが収束したイナの量だと、ボクでも破壊は可能だ。チサメちゃんはどう？」

「うーん、どうツスカね。何ともいえないツスけど、たぶん大丈夫ツスよ」

曖昧に肯定する千雨だが、二人は破壊できる自信があるように窺えた。

「まあ、試してから初めて判ることもあるからね。次は、コアが身体の中の箇所に埋め込まれているかだ。キョウヤ、このコア、体のどの辺りにあったの？」

「左心室　人間でいう心臓の部分だ。お前の言った取り、これを引き抜いたら肉体は消滅したぞ。おそらく、同化した物質が体内から乖離したからだろうな。」

それと話は変わるが、『遠近湊』の病室で一つ判った事がある。彼女を襲ったのは、間違いなく裁我だ

断言する鏡夜に、千雨は「その根拠は？」と訊ねた。

「傷を負った箇所を視たが、イナが腹部に残留していた。あれは、俺が初めて裁我と出遭ったときに感知した魔力性質同一だった。…率直な疑問でいうなら、何故、一般人である『遠近湊』を襲ったのかだ」

「じゃあ、関連性は今の時点では一つツスね」

「……どういう意味だ？」

「湊さんが記憶を失っている事について、鏡夜くんはどう思っているんすか？」

千雨の言葉に、鏡夜は押し黙った。

そんな事は、もう自分には関係ない。彼女には何の関心も抱いていない。遠近湊の話を持ち出したのは、裁我に関する情報がほしだけなんだ、と鏡夜は自分に言い聞かせる。

そんな鏡夜の思惑を知らずに、千雨は淡々とした口調で話を紡い

だ。

「今回の場合、裁我さんに襲われたショックによる一時的な記憶混乱という例が挙げられるツスね。腹部に傷跡。これは真正面から襲われたという事に繋がるツス。普通、一般人なら恐怖心に心を囚われ、背を向けて逃げ出し、背中辺りに傷を負うのが妥当な線ツス。なら、湊さんは逃げ出せなかったのか、傷を負う以前に何らかのショックを受けてしまった。さらに裁我さんには、一般人である湊さんを襲う動機があった。こんなところツスカね」

「……千雨は、遠近湊と裁我に接点があるって言いたいのか？」

「まあ、これは私個人の憶測ツスけど。カインくんはどう考えているんすか？」

千雨は、カインに視線を送るが、

「……………」

今朝と同様に、またしてもカインは黙り込んでいた。顎に手を当てて、静かに黙考を続けている。

「……ねえ、キョウヤ。その裁我ってヤツ」

ピシインツ

しかし、カインが言いかけた言葉は、突如現れた『魔力反応』によつて、自然と漏れなくなつた。

「えらくタイミングがいいね」

不敵に笑うカイン・エレイスは、その体に禍々しい殺気を宿している。

「久々の殺しツスカ。何か緊張してきたツスよ」

面倒そうに呟く工藤千雨も、同じく。

そして、千堂鏡夜は。

「場所は河川敷公園。数は二つ。それじゃあ、俺達が俺達でいられる為にも」

敵を、殺しに行くか

三人は、マンションの屋上にいた。

鏡夜の住んでいるマンションの屋上は随時一般開放されている。マンションの住人は滅多に使用しないのだが、鏡夜はここで夜空を見るのを個人的に好んでいた。

鏡夜は、振り返ってカインと千雨の様子を確認する。

「ボクは準備オツケーだよ」

ニコリと笑うカインは、右手に大型のアタツシユケースを握っている。

「私も大丈夫ツスね」

抑揚なく言う千雨の左手には、刀身が三十センチ程の短刀が握られている。先程、部屋でケースから取り出した物だ。柄は木造、鏢は無く、両刃の直刀だった。

二人の戦闘準備を確認した鏡夜は、再び前に向く。

「目的地まで先導する。着いてきてくれ」

言つて、鏡夜は高く跳躍した。四秒後には彼の姿は見えなくなる。

「凄いツスね、鏡夜くん。一度であれだけ高い跳躍を行うなんて」

「白々しいね、チサメちゃん」

「何がツスか？」

「ま、いいけど。じゃあ、ボク達も行くよ。見失っちゃうからね」

言つて、カインも高く跳躍した。

「……ま、判つてるツスよね」

そんな言葉を呟き、千雨は二人を追った。

民家の屋根、ビルの屋上を着地地点にして、三人は跳躍を繰り返す。

封殺者は、殺人技術の徹底のみならず、『施設』の研究者が作り出した特殊な薬物を投与される事により、身体能力の向上が施され

ている。

封殺者の人種に値する者は、身体能力だけならば魔術師を凌駕しているのだ。

「キョウヤ〜！ アタツシユケース持つてるボクの身にもなつてよ
」

跳躍の途中、カインがそんな愚痴を漏らしていたが、鏡夜は無視して跳躍の速度をさらに上げた。

今は、そんな事に気を配っている暇はない。何故なら、『あれ』の魔力反応が増加しているからだ。

二十回ほど跳躍を繰り返し、河川敷公園に辿り着く。

先日、この場所で鬼人を殺した事を鏡夜は記憶していた。

……しかし。今、対峙している鬼人は似て非なる存在だ。

二体、いた。

へえ、と感嘆の息と漏らすカイン。

「裁我つてヤツ、今回は成功したみたいだね」

殺気どころの話ではない。そこにいるのは、強大は魔力反応を持つ性質変化された鬼人だった。

そして、『普通』の鬼人と異なる点が一点存在するのもまた事実。それは鬼人の眼の色にある。『普通』の鬼人は、毒々しい紅色だ。だが、その色も、今となつては透き通った蒼色だった。

「蒼つて事は、裁我さんの魔力性質を表しているんスカね？」

独り言のように、千雨は小首を傾げる。

「負邪は感じられない。有るのは、魔力だけだ」

鏡夜は、その事実を一瞬で見抜いた。

蒼い瞳が、三人を捉える。

「じゃあ、そろそろ始めるか」

鏡夜は小さく呟く。

(俺の存在理由を、証明する為に)

しかし、大きな意味を込めて。

「殺害開始だ」

距離は二十メートルほどだろうか。その間合いを徐々に詰める鏡夜の疾走は、以前と変わらず流麗だった。

「じゃあ、ボクも」

カインはアタッシュケースを宙に放り投げた。自然とロックが外れ、その武器が姿を現す。

「日本で使用するのは久しぶりだな」

漆黒の柄を中空で掴み、そこから繋がれている恐ろしく長い白銀の鎖がガシャアン、と地に着いた。

その先端には、鋭利に尖った十五センチの刃。殺す為だけに鍛えた、カイン・エレイス専用の殺人武器だ。

柄を握り締め、カインは体内^{イナ}魔粒子を流し込む。

「よろしく頼むよ、チエイン」

「じゃあ、私も」

言って、千雨は両の半眼を見開いた。

黒瞳が見据えるのはただ一点、鬼人の姿のみだ。

これが、戦闘時に気を引き締める工藤千雨の自己暗示だった。

「では、私は先に参ります」

千雨の口調は、普段のそれとは完全な別物へと変化していた。静かな、それでいて殺気を含めて言葉を発する彼女は、鬼人を目指して疾走を開始した。

「……変わるものだね、人間って」

いきなり口調が変わった千雨に呆然するカイン。しかし、そんな言葉を口走ったカインも数秒後には援護の準備に回った。

二体の鬼人は、鏡夜が十メートルほどに距離を詰めた時に分散し

た。

散った鬼人の片方は高く跳躍し、鏡夜の後方から疾走している千両目掛けて落下した。

除々に間合いを詰める鏡夜だが、一方の鬼人は動じなかった。鏡夜の先手を窺っているつもりなのだろうか……。

（だが、何かある）

鏡夜は、鬼人の一挙一動も見逃すつもりはなかった。殺しにおいて、相手の微細な動きの意味を理解できなかった瞬間、必然的に死は訪れると知っているが故。

鏡夜は間合いを一メートルに詰めた時、一瞬で身を沈める。腰の運動エネルギーを最大限に生かし、右手に体内魔力粒子を流し込んだ。

ダァンツ、という音を立てて、右脚の踏み込みを炸裂させた。

鏡夜にしてみれば、静から動への移り変わりは0・五秒もあれば充分だった。

十分なタメを保ち解き放った刺突の狙いは、コアの埋め込まれている確率が高い左胸部だ。まずは、その一点を破壊する。

しかし、鬼人はその瞬間的な攻撃をいとも簡単に捌いた。体を左に開く動きは、武術の動作にも近似している。

そして鏡夜には、刺突の動作による慣性が生まれ、一瞬の隙が生じた。

その一瞬の間に、鬼人は右腕を変態させる。

猫の爪が多大に伸びた時は、このようになるのだろうか。それは、五本の刀を片手で持っている事と同一だった。

鏡夜の無防備な背中に、鬼人は五本の『爪』を斜め上から振り下ろす。

しかし鏡夜は、腰を限界までを捻り、後ろ回し蹴りで対応した。

鬼人の『爪』と、鏡夜の後ろ回し蹴りが、無音の音と同時に拮抗した。鏡夜の脚が切り裂かれないのは、隙が生まれた瞬間、右手に収束した体内魔力粒子を一瞬で蹴り足へと移動させたからだ。

しかし、地に足が着いていない鏡夜と地に足がついている鬼人。踏み止まれる点で言えば、圧倒的に鬼人が有利だ。

咄嗟の後ろ回し蹴りによる防御を取った鏡夜は、自身から軋む脚を弾き、五メートルほど後退した。

「……今までとは、違うつて訳か」

実感は、まさにその通りだった。この存在は、鬼人であつて鬼人ではない。ならば、今まで行ってきた基本的な殺害手順はほぼ切り捨てるのが無難だろう。

鏡夜は、思考を別の殺害方法に切り替える。

神速の踏み込みで、再び鬼人との距離を縮め始めた。

「鏡夜くんは……大丈夫そうですね」

鏡夜の様子を横目で窺いながら、千雨は鬼人の『爪』を短刀で防ぐことに徹していた。

この鬼人の動きは、今まで殺してきたものとは違う。千雨も、その事実にはとうに気づいていた。

戦闘力の増加は確かに成功したようだ。その証拠に、未だに鏡夜は鬼人を殺せていない。

そして、それは彼女にも言える事だ。

久方ぶりの戦闘とはいえ、身体が鈍っているようには思えない。

(……確かに、『強い』の部類には入りますね)

しかし、千雨にとつてはそれだけの認識でしかなかった。強いという基準などはどうでも良い。彼女は、後手に回っている時点で事実上、この鬼人よりも『弱い』という事に繋がると考えていた。

だが、それは彼女が戦闘力を制限しているだけなのだが。

「……さて。そろそろ、貴方を殺しましょうか」

その言葉と、鬼人の右腕が断ち切られたのは、ほぼ同時だった。

「意志力、八五%」

呟いた千雨は、いつの間にか鬼人の五メートル後方に佇んでいた。鬼人は一瞬動きを止めた。何をされたのか理解できていないように、断ち切られた右腕を見つめる。

「工藤一族、第一級家宝　朱風^{あけかせ}」

そんな言葉を発する千雨は、ゆっくりと振り返った。

「魔力で性質変化されたとはいえ、この朱風の前では全てが無意味です」

今度は左腕を『爪』に変態した鬼人は姿を消す。

一瞬で千雨の眼前に移動した鬼人の『爪』による攻撃は、しかし朱風によって容易く防がれた。

「一瞬の移動とはいえ、魔力の痕跡は残留するものです。それを辿れば、防ぐことなど造作もない」

軋みを上げる『爪』と朱風。しかし、千雨はまたしても一瞬で切り落とす。

ヒュオンと、疾風の如き速度で再び鬼人の後方へ移動する。

「朱風を扱う際、必要なモノは『陽性意志力』のみです。自身の殺すという意志が相手に勝っているのなら、朱風はその意志に心えてくれます」

スパアンと、最後に鬼人の両脚が一度に切断される。

「朱風に『意志』を伝達させる。貴方が『精神的弱質』から『精神^{ハード}硬質』に性質変化したとはいえ、私が四年間、この短刀に伝達させてきた『殺人意志という精神^{ハードメンタル}硬質』に勝ることは決してありえません」

両腕、両脚を断ち切られ、首と胴体だけになって地面に倒れた鬼人に歩み寄る千雨。

「コアは、そこですか」

左胸部から感じる魔力反応。

千雨は朱風を逆手に握り、その箇所には振り下ろす。

パキインツ、と何かが砕け散る音がした。

それは紛れもなく、コアの他にない。

「鬼人ごときが、『魔術師』に敵うなどとは思わないことですね」
冷然と告げる千雨の言葉は、夜の空へと消え行く鬼人には届いて
いなかった。

「……なにやってるんだよ、キョウヤ……！」

カインは多少なりとも苛立ちを覚えながら舌を鳴らした。

今、鬼人と闘っている鏡夜は確かに有利な状況にある。体内魔力^イ粒子を収束した魔力によって繰り出す猛撃に、鬼人は十分も後手に
回っていた。

しかし、カインはその戦闘自体、納得がいかなかった。

鏡夜ならば、戦闘力が増加した鬼人だとしても十分もあれば殺害
に成功している筈なのだ。カイン自身、あの鬼人が『強者』の部類
に属しているという事は理解している。

しかし、どれだけ強かろうが、鏡夜が戦闘において十分も長引か
せる訳がないとカインは知っているのだ。

鏡夜は、未だ自身の本質を解放してはいない。だが、それにして
も、これは異常事態だった。

それは、鏡夜の戦闘理論にあった。

彼が戦闘において狙う箇所は、人間であれ、鬼人であれ必ず、人
体機能停止箇所なのだ。体内魔力^{イナ}粒子を身体のある箇所^{イナ}に収束
し、一度でも一つの箇所を断ち切った瞬間、敵の死は必然的に訪れ
る。

それが千堂鏡夜の基本術であり、極限まで鍛え上げた自己戦闘理
論だった。

しかし今の鏡夜は、手数を増やし さらに体内魔力^{イナ}粒子の収束量
すらも曖昧である 猛撃を放っているだけだった。

それは、戦闘において決して悪い行為ではない。敵の戦闘理論を
探るのは殺し合いにおいて基本中の基本だ。

しかし、カインはそれでも納得いかなかった。

鏡夜が鬼人を殺す事に十分も時間を費やすなどありえない。それ

が頭から離れない。

そして、それが意味するのはただ一つだった。

(もしかして……)

カインが辿り着いた答えは、当たらずとも遠からずの位置にあった。

鏡夜は、敵を殺す事に戸惑いを感じている。

その証拠に、鏡夜は鬼人を殺せていない。

こんなの、本当の彼ではない。

彼が 迷う訳がない。

「……話は後々聞くとして、参戦しようか」

軽いため息を漏らして、カインは、チェインに体内魔力粒子を増幅させた。

「キョウヤツ！ 理論B！」

端的に叫ぶ。だが、カインはそれだけの意思表示で伝わると確信していた。

そして、カインは自身の意志力をチェインに伝達していく。

(八〇、九五……：1〇〇%調和完了。魔力性質、誤差〇%)

地についていたチェインが、蛇のように無気味な動きを表し始める。先端の鋭利な刃が宙に浮いた。

この瞬間、カインとチェインは『繋がった者』となった。

『繋がった者』。それは、星礼会が封殺者の為に造型した『魔導器』が術者の魔力性質と1〇〇%調和した状態を指す。

「さて。後は、キョウヤの行動次第かな」

カインの叫ぶ声が届いた。それはおそらく、自分の行動に不可解な点があった事を見抜いての言葉だろう。

事実、鏡夜はその事を自覚していた。

(あの時と同じだ……！)

ギリッ、と奥歯を噛む。

そう。今の鏡夜は、あの廃ビルで鬼人を殺そうとした時と同じく、

身体が思うように動いてくれない状態に陥っていた。

殺そうと思えば、すぐに殺せるのだ。

だが、その意志とは正反対に身体が否定している。

『敵を殺す』という自己の意志が、『敵を殺すな』という本能に抑圧されている感覚だった。

まるで、自分の身体を何かに支配されている様で恐怖心まで芽生えてくる。

(……理論B)

カインは、自分の行動の矛盾に気づいている。そして、それを判断してこそその理論Bだった。

確かにその戦闘理論ならば、おそらく、この鬼人を一撃で殺せる。文字通り、瞬間的な殺害へと昇華できるだろう。

しかし、自身が危険を伴う確率が高いのも事実だ。

(……だが、やるしかない)

鏡夜は、魔刀による猛撃を一端中止して、五メートル後退した。そこからは簡単だ。一瞬で攻守が逆転し、今度は鏡夜が後手に回るようになった。

鬼人が変態させた両腕の『爪』。その連撃を紙一重で避けながら、鏡夜は戦術を悟られないよう、その場所への誘導を開始した。

横目でカインを一瞥する。

それは端的なアイコンタクトだった。カインも、すでに準備は完了しているのだろう。彼の武器　チエインから、強大な量の体内魔力粒子を感じ取った。

その位置に誘い込んだ鏡夜は、鬼人の連撃を避けながら、背後からの『死』に全神経を集中させた。

そのタイミングは一瞬だ。

しかし逆に言えば、その一瞬を見極められなければ鏡夜は死ぬ。

そして、その瞬間は訪れた。

背後から襲い掛かる『死』を感じ取った瞬間、鏡夜は、瞬時に真上へと跳躍した。

ドシュッ！

そのわずか一泊後、神速で迫るチェインの先端の刃が、鬼人の胴体を勢い良く貫通した。

位置関係による奇襲。鏡夜の背後十メートルにいたカインを、鬼人は鏡夜の姿により視認できなかった。

その結果が、これだ。

あらかじめ、貫く箇所を特定しての奇襲は、完全にコアを破壊させた。

しかし、この連携攻撃は鏡夜とカインにしか行えないだろう。跳躍の瞬間が0・五秒でも遅ければ、鏡夜の身体が貫かれてしまうのだから。

そして先の攻撃　チェインの刺殺速度は、鏡夜への遠慮など微塵もなかった。

それは、カインが「鏡夜なら避けられる」と確信していたからだ。それ以上に、「鏡夜なら避けて当たり前」と判断していたからかもしれない。

後方でチェインを操っていたカインは、刺突だけでは物足りないように、顔を歪ませる。

「動」

呟きは、即座に実行へと移させた。

鬼人の胴体を貫いたチェインに体内魔力粒子イナという意志力を伝達させ、方向転換を行う。

鬼人の身体に二重、三重と巻きついていく銀の鎖。そして先端の刃が、胸部に突き刺さった。

『繋がった者』の魔導器は、物理法則すら超越する。カインは精神硬質　『自己の意志力』を魔導器に伝達させ、チェインを『意志を持った性質体』に変化させていた。

「圧迫」

……獰猛にして凶悪。カインは、胴体を貫くだけでは物足りなかった。

彼は今、一つの苛立ちによって殺す事しか考えていないのだから。締め付ける白銀の鎖が、除々に鬼人の身体へと食い込んでいく。最終的に。

「散れ」

鬼人の身体は、四つに切断された。

(消滅したか……)

コアを破壊し、鬼人の肉体を司る魔力が失われた。

その存在の肉片が夜の闇に解けていく様を、鏡夜はじっと見つめていた。

「おつかれさま」

と。すでにチェインをアタッシュケースにしまったカインが、緩慢な足取りで鏡夜に近寄ってきた。

「どうということ?」

咎める様な口調で、カインは言う。

それは言うまでもなく、先刻の戦闘についてだろう。

だが、鏡夜は顔を俯かせるだけで何も言えなかった。それもそうだ。自分でも解らない事を口に出せる筈がない。

「俺は」

「迷ったの?」

鏡夜の言葉を、カインは心を読んだかの様に遮った。

「迷う訳が無いよね? 今まで、こんな事は一度もなかったもん。君が殺す事を躊躇う筈がない。それは、ボクが誰よりも知っている」胸に手を当てて瞳を閉じるカインは、まるで自分に言い聞かせているようだった。

カインは、鏡夜をずっと見続けてきた。そして鏡夜には、そんな無駄な要素はいらぬ。

彼は、自分と同じく殺す事しかできないのだ。そう、今まで自分

に言い聞かせてきたのだ。

「事が起こるには必ず原因がある。それは、君の在り方を破滅させる不要なモノだよ。自分の事なんだから、ボクに言われなくても解るでしょ？」

(……………)

カインの言う事は当たっている。鏡夜も、自ずとその答えに行き着いた。

「だけど、そんなことが本当にありえるのだろうか……？」

「おつかれッス」

と、朱風を握ったままの千雨が二人と合流した。

「鬼人は殺ったッスよ。そちらは？」

「こつちも終わったよ。自己暗示は封印したのかい？」

「はいッス。あれで結構疲れるものなんスよ。持続時間も、長くて二十分つて所ッスかね」

「はあ、と重いたため息をつく彼女は、戦闘が終わっていかにも気怠そうな様子だった。

「ま、いいか。鏡夜とはまた後で話をしよう。鬼人と戦って、一つ判った事があるんだ」

「なんだ？」

「変だとは思ってたんだ。コアの魔力性質を感じ取った時も、何故、非日常とは無関係であるミナト・トオチ力を襲ったのかもね。

「真実を理解した結果、一つの結論に至ったよ。裁我の正体は??」

「オイオイ、何でデメエが日本にいるんだよ」

突然、そんな声がカインの言葉を遮った。

三人は、声の聞こえた方へと顔を向ける。

斜面の上には、月光を背に浴びた人型のシルエットがある。

そのシルエットに、鏡夜は見覚えがあった。

裁我と名乗った青年は、再び千堂鏡夜の前に姿を現した。

裁我の表情は、険しいものから歪んだものへと変化していった。

あたかも、見たくもない人物を見てしまったかのように。

「オレの半身を殺したか。あの二体には結構な体内魔力粒子をつぎ込んだ筈だったんだがな。やっぱり鬼人を戦力にするのは不適合な判断だったか。」

それに、刺客が放たれるとは思っていたが、よりもよってテメエかよ。カイン」

緩慢とした足取りで斜面を下る裁我の黒眼が、カインを捉えた。

対して、カインも嘲る様な笑みを刻みながら、目を細めて裁我を見ていた。

あたかも、面白いものを見つけてしまったかのように。

「そうだね。星礼会は、君を不要な存在だと判断したみたいだよ。ボク達は、君を始末する手駒ってわけ。コアから感知した魔力性質が誰かさんと似てるな、なんて思ってたけど、やっぱり君だったんだね」

「あの人を知ってるんすか？ カインくん」

千雨の問いに、カインは皮肉を含めた言葉で返答する。

「うん、知ってるよ。簡単に説明すると、元1階級のナンバー10。本名は、カケル・トオチカ。ミナト・トオチカの義兄だよ。これだけ言えば解るよね、キョウヤ？」

カインは、横目で鏡夜の様子を窺った。

「鏡夜は応えない。しかし、その視線は完全に裁我という人物を捉えていた。」

鏡夜が何も応えないとは　つまり、その説明に納得したのか、あるいは、その言葉の意味を理解したが故に応える必要がないと判断した、という二択に限られてくる。

しかし、除々に鏡夜の体内で活性化する体内魔力粒子だけが応えていた。

完全に、後者だと。

「……テメエ。そんな腐れた名前でオレを呼ぶなよ」

湧き上がってくる感情を抑えるように、裁我は手で顔を覆った。

「過去は抹消した。記憶の断片が脳に残留していることすら許されねえ。……そのつもりだった。なのに、テメエはオレを傷つけた。精神が、異常をきたしそうだ」

震える声で発する裁我に、カインは深いため息をついた。

「元々狂ってたでしょ、君は。我を裁くと書いて『裁我』か。良いネーミングセンスだよ、カケル。そんなに自分を裁いて欲しいなら星礼会に出頭しなよ。身体は勿論、君の過去まで、全てを終わらせてくれるから」

カインは、くくく、と嘲笑する。

そして、裁我の過去を彼自身に根こそぎ思い出させようと、こんな事まで話し始めた。

「二年前は世話になったね。君が封殺者じゃなくなった事で、ボクは零階級に成ることができたから、礼を言うべきなのかな？ まったく。1階級止まりの封殺者が星礼会を潰すだなんて、現実主義者の君が言える台詞じゃ」

「もついい。黙れ」

鏡夜は小さく呟き、カインの皮肉を遮った。

その呟きに宿っている意志は尋常なものではなかった。加えて、彼の身体に宿っている体内魔力粒子さえ、既に尋常な量ではない。「お前等がどういう関係なんて知ったことじゃない。あいつの相手は俺がする」

鏡夜の言葉に、カインは薄く笑った。

「へえ。できるの？ さつきは迷ったくせに」

皮肉に鏡夜は応えない。既に彼の言葉など耳には届いていなかった。

彼女を傷つけたのは、この男だ。

それが、それだけの真実が、今の鏡夜を突き動かしていた。迷いなど関係ない。

今の鏡夜に在るのは、衝動的な殺人意志だけなのだから。

裁我は、鏡夜の視線を正面から受け止めると同時に、悲痛の表情を刻む。

「ああ、そうか。お前まで、オレを敵扱いするのか。お前だけは、オレを理解してくれると思っていたのに……！ 何で、仲間になる筈のお前がオレに殺意を向けるんだよ！ お前も星礼会の連中を怨んでいるんだろ？ だったら、オレ達は同類じゃねえか！ 何で争わなきゃいけないんだよッ！」

裁我が咆える。それでも、鏡夜の殺気は継続されていた。

信じられない。理解ができない。裁我は単純にそう思い、小刻みに唇を震わせる。

鏡夜が、敵になる。

そう思うと、除々に呼吸が荒くなってくる。過呼吸にも似たそれは、苦しみからきているのか、それとも絶望からか。

「……それが、お前の、『答え』か、鏡夜……！」

奥歯を噛み砕きそうな程に軋ませ、裁我は唸る。

鏡夜は答えない。ただ、その殺気を裁我に向けていた。

だからこそ、それを認識したからこそ。裁我の荒い呼吸は治まった。

そして、裁我はこう口にした。

「千堂鏡夜を敵と認識した。 殺してやるよッ！」

二人の封殺者は、互いに疾走を始めた。

鏡夜の疾走は、もはや異常にまで達していた。

空気抵抗さえ無に等しい。そう思わせるほどに華麗な走りだった。対して、裁我の疾走は正逆の印象を思わせた。

蛇を連想させる邪悪な疾走。獲物を狩る動きは、獣に近い。

二十メートルの距離を、二人はわずか一秒足らずで一メートルほどに詰めた。

先に動いたのは鏡夜だ。

右手に体内魔力粒子を収束させ、懐に入った瞬間、静から動へと移行させる。一種の刃と化した魔刀が、裁我の胸部に襲い掛かる。

「はッ！」

迫り来る刺突に対し、裁我は鼻で笑って、右腕で簡単に弾き返した。裁我の腕が骨折しなかったということは、体内魔力粒子の量は同一か、それ以上だという事を示していた。

鏡夜は右腕を弾かれた反動でベクトルを狂わせられる。身体が左に反れ、裁我に背中を見せる状態となった。

その大きな隙を狙い、裁我は右手の魔刀で背中を斬りつけようとする。しかし鏡夜は、ベクトルを狂わされようが関係なかった。反れた身体から強引に体を反転。より勢いをつけた左の手刀で首の頸動脈を狙った。

「確率、正の解」

裁我は、そんな言葉を呟いた。迫り来る魔刀を、背を少し仰け反らしただけで、紙一重に避ける。同時に、鏡夜は次の攻撃まで一秒の時間を有することとなった。

その一秒で、裁我は十メートルの距離をとった。

鏡夜も追撃という選択は取らず、一端、攻撃を中止する。

(……読まれている)

それは確信に近かった。最初の魔刀を弾いた時、イナの量が全く同じだったこと。裏をついた魔刀すら難なく避けたこと。

おそらく裁我は、その攻撃さえも読んでいたのだろう。

後退した裁我は、くく、と噛み砕いた笑いを溢す。

「『個別戦闘論理』っていつてな。相手の戦闘データを完全に『理解』し、行動、動作の一つ一つを基に、対応策を瞬時に判断するって論理だ。言っただろ？ 千堂鏡夜のデータは全て把握しているってな。お前は零階級、オレは元1階級。戦闘力はお前の方が圧倒的

に上だ。だがな、殺し合いにおいて相手の先の先、百手先まで読めれば、そんなことは無関係だ。確率論で言えば、お前が『本質』を解放しない限り、オレが不利になることは決してありえない。だからさあ。出せよ。探り合いはいらねえだろ？ ああ魔術師を殺した時みたいに、オレにも見せてくれよ」

裁我の挑発によつて、鏡夜の脳裏に彼女の笑顔が浮かんだ。

故に、彼女を思い出させた原因を必ず殺すため、鏡夜はそれを開放した。

「SPEED UP」

その言葉と同時に、鏡夜は裁我の眼前へと一瞬で姿を現した。

そして瞬間的な刺突。移動から動作まで一秒も掛かっていない。

「論理変換。タイプ2」

裁我も同じく、薄い笑みを刻みながら呟いた。

鏡夜の一瞬での移動と刺突を、裁我は真後ろへと低い跳躍を行うことで避けた。

しかし鏡夜は、後退している最中の裁我に、一瞬で追いついた。

鏡夜は中空にいるが、裁我と同じく跳躍を行った訳ではない。今の彼にとつて、追撃など一瞬で可能になった。

地に着くほどの低い跳躍をする裁我と、その真上に覆いかぶさる様にいる鏡夜。

両者が同時に放った刺突の狙いは、どちらも首の頸動脈だ。

刺突の速度は全く同一だった。しかし、二人はそれを難無く避ける。

首の横を通り過ぎた両の腕。しかし鏡夜は、その動作から首の切断を試みた。

「甘めえッ！」

切断が実行される寸前、裁我は未だ地に着いていない両脚で、鏡夜の丹田目掛けて両蹴りを行う。

人体急所の一つである丹田は、体内魔力粒子イナの流れが循環している箇所だ。故に、そこにダメージを与えると、一時的に使用を制限することが可能になる。

「GUARD UP」

鏡夜の呟いたその言葉は、即座に実現された。身体に蓄積されてある体内魔力粒子イナが意思を持って丹田の一箇所イナに収束し、練成され、丹田の硬度を限界まで上昇させた。

裁我の蹴りは、鏡夜にとっては微々たるものだった。しかし、攻撃による効果はなくとも、その反動だけはどうしようもない。結果、鏡夜は三メートルほど、宙に浮かされる。

その時には、既に裁我は着地していた。中空で自由の利かない鏡夜を視界に捉え、追撃を試みる。

体内魔力粒子イナを両脚に収束しての、脚力上昇。故に、鏡夜の眼前に現れたのは一瞬だった。

斜め下から振り上げる手刀を、鏡夜は右腕で防ぐ。最大限に束ねた両の体内魔力粒子イナが拮抗し、同時のタイミングで二人は腕を弾き距離を取る。

「SPEED UP！」

「タイプ3ツ！」

だが、それもすぐに攻撃へと転じる。両者に油断など微塵もない。それは、互いを殺すべき対象と判断したが故に。

「カインくん。鏡夜くんの動き、どうということツスカ？」

小首を傾げる千雨は、鏡夜の行動に納得がいていないようだった。

「鏡夜くんの一瞬での移動。あれ、脚に魔力を収束していなかったツスよね？ 追撃をかける際も、魔力が移動中に残留することがなかったツス。鏡夜くん、何をしたんスカ？」

横目で窺う千雨に、カインは「あれが、キョウヤの本質だよ」と、戦闘から目を離さずに言った。

「あれね、キヨウヤが元観察者の人に教えてもらったんだって。簡単に言うと『詠唱』の部類に属するんだけど、キヨウヤの詠唱は別格なんだ。普通、詠唱は長文であればあるほど、実際に自己暗示の効果を増幅していくでしょ？ 逆に、短文は長文以上の効果は獲得できない。古今東西、あらゆる詠唱の類において、それが絶対の法則となってる。だけど、キヨウヤの詠唱は、詠唱の基本を全て『無視』してるんだ。」

あの詠唱は、種類は違えど、絶対に一言で詠じ終える。そして、その『言葉の意味』を実現させるんだ。キヨウヤも、その言葉の意味を理解する過程において三年はかかったらしいよ。」

言語理解という行為は、その言葉の意味を認識することから始まる。その言葉の意味の方向性を違わずに、脳に『正』しく記録させなければならぬ。

『正』しく記録させた言語は、『正』しく再生させ、『正』しく実行に移さなければならぬ。

しかしながら、純粹かつ、言葉の本質を理解するという行為は、生半可な思考回路では身に付けることは不可能である。そのため、詠唱を扱う類の術者は、知識、知性が常人よりも優れているとされていた。

「詠唱を唱える時間は、わずか一秒。全てが一瞬で言い終えることから、星礼会はキヨウヤに『刹那』の称号を与えたんだ。でも」と、カインは次の言葉を紡がなかった。

詠唱を実行した鏡夜に、裁我は互角の殺し合いをしているからだ。カインの知っている裁我は、その驚異的な頭脳を駆使して戦う。彼が『個別戦闘論理』を使用するのはその為だ。だが、カインが気にかけているのは、その部分ではなかった。

裁我は、確かに頭脳戦を利用する。それは理解している。しかし、先が読めようとも、頭で理解しようとも、詠唱を駆使して戦う鏡夜の身体能力に追いつける筈が無いのだ。なぜなら、詠唱を発動した鏡夜は『魔術師』の域にまで達しているからだ。

それが、たかが1階級の封殺者に互角の闘いをされてしまうこと自体、あってはならないのだから。だとすると、鏡夜は

「カインくん、気づいているツスカ？」

千雨も、カインの覚えた矛盾に気づいていた。

カインは、強く握った拳を震えさせている。……ブチツと、爪が皮膚に食い込む音が聞こえた。

「うん。こうなった以上は仕方ないね。そろそろいくよ」

内に激しい怒りを宿しながらも、カインは冷静に状況を判断した。「了解ツス」

「オイオイ、オレを殺すんじゃないのか？ 迷ってんじゃないやねえよッ！」

鏡夜の驚異的な移動速度、瞬間的な攻撃を完全に見切りながら、裁我は笑みを刻みながら回避を続行していた。

確かに、後手に回っているのは裁我だった。しかし、彼には強い余裕が窺えた。

(くそッ！)

おかしい。こんなことはありえない。鏡夜はそう単純にそう思った。

本質を解放したというのに、裁我を殺せない。殺害の瞬間は幾度となくあったというのに殺せない。

身体が否定しているのだ。『敵を切り裂くな』、『敵の体を穿つな』、そして『敵を殺すな』と。

訳が解らない。どうして殺してはいけないのか？ どうして自分の邪魔をするのか？

その一瞬の自問が、身体の動作を停止させる。

しかし裁我にとって、その一瞬が鏡夜を殺す決定的な隙だった。

「迷うなっつてんだろぅがッ！」

鏡夜の刺突を余裕で避けた裁我はそのまま懐に潜り込む。胸部を狙い、鏡夜にも劣らない魔刀での刺突を実行する。だが??

「ッ!?」

手刀が胸部を貫く寸前、コンマ一秒の刹那に白銀の鎖が牙を向いた。

二人の間を割ったのはカインの魔導器、チエインだった。

裁我は攻撃を中断し、咄嗟に後退する。

「カイン、テメエ……!!」

裁我は奥歯を軋ませながら、殺害の機会を妨害したカインを睨み付ける。

「キョウヤも悪いと思うけど、死んでもらったら困るからね。参戦するよ」

「ハッ! テメエのデータは完全に熟知しているって過去に何度言っただと思っただ? テメエは一度でもオレに勝てた試しがねえだろうがッ!」

「まあ、そうだね。じゃあ、彼女のデータも熟知しているのかい?」

「なんッ!?」

と、裁我は口を開こうとした時、気配もなく背後に回り込んでいた千雨の存在に気づいた。

彼女の握っている短刀が、裁我の右腕を目掛けて虚空を疾る。

(チイツ!)

咄嗟の判断。右腕に体内魔力粒子^{イナ}を収束させ、一瞬で魔刀へと練成させる。

「意志力、九〇%」

しかし、いくら魔力を束ねたとしても、彼女の持つ短刀の前では無力。

裁我の一瞬による魔力を収束した意志力。彼女が短刀に宿し続けてきた殺人意志。一瞬での意志力では、収束できる魔力の量などががしれていた。

ズパァンッ、という音と同時に、裁我の右腕が宙に舞う。

「ッ!」

激痛に、裁我は無音の叫びを上げる。それに構わず、千雨は背後から胴体を突き刺そうとするが？

（ 論理変換、イナを両脚に完全収束 ！ ）
死の刃が迫り来る瞬間、裁我は瞬時に離脱思考を行動へと移す。

刹那、彼は姿を消した。

河川敷公園から離脱した裁我は、跳躍を繰り返す。

（ 魔術師か……！ ）

それは、直感と同時に確信だった。腕を断ち切られた時に感じたあの殺気。あれは封殺者のものではない。

何度も体験してきた死の塊。敵対したら最後、必ず死が訪れるという絶対的な上位者。

それが、鏡夜の仲間に加わっていたなど完全な誤算だった。

「……マズいな」

魔術師が派遣人員に加わっているとなると、優位な状況に立つことは絶望的だ。ならば、一から対策を練り直さなければならない。

「腕は……使い物にならねえか」

切り落とされた肘から下を見やり、そう判断する裁我。

彼は襲い来る激痛を無視して、嬉々とした表情を浮かべた。

（ だが、まだまだ ）

そう。鏡夜が殺せなくなったという事実を知った裁我は、先刻のカイン・エレイスの言葉で、『ある可能性』が思い浮かんだのだ。

確率としては限りなく低い、データを収集すれば、もしかしたら

「さて、と。それに賭けてみるか」

裁我は限りなく低いその可能性を、脳裏で組み立て始めた。

鏡夜は、ただ立ち尽くしていた。

詠唱を実行したことで、身体的、精神的な疲労は限界まで迫っていた。

しかし今の鏡夜は、そんな理由で立ち尽くしてるわけではなかった。

……自分の不甲斐なさのせいで、裁我を離脱させてしまった。それを恥じるのが最優先事項だ。

殺すつもりだったのだ。カインの言葉を聞いた時点で、鏡夜は彼を殺すと、明確な決意をした筈だった。

なのに　なんて、無様で滑稽なのだろう。

訳の解らない身体の拒否反応は、除々に千堂鏡夜の持つ存在理由を侵害していく。

「何、で」

迷ったんだ、と言い切る前に、カインに鳩尾を殴られた。

「こんな事をしてる場合じゃないけど、これくらいやらないと気が済まないからね」

鏡夜は咳き込んだ。小柄な少年とはいえ、カインは封殺者なのだ。拳一発で一般人を殺せるのだから、これでも手加減している方なのだろう。

顔を俯かせたまま、鏡夜はカインに視線を向けた。険悪とも取れる表情をした彼は、その瞳に憎悪のような色を宿していた。

しかし、それもすぐに落胆の色へと変えた。

「……仕留められたよね？　キョウヤなら」

それは、疑問をぶつける言動ではない。鏡夜ならそれを実行できると確信していたが故の素朴な質問。

「君が中途半端な封殺者だって事は、ボクでも理解してた。でも、それは精神面だけだと思ってたんだ。まさか、殺し合いにお

いても中途半端になっていたなんて、失望したよ」

ふう、とカインは重いため息を漏らす。

カインの言葉は、全体的確だった。

精神面が極められていない鏡夜は、自分が中途半端だと自覚していた。

(それでも……)

そう。それでも、鏡夜は殺してきたのだ。何百という数の鬼人を。過去の任務でも躊躇せずに殺してきたのだ。

……鏡夜に異変が起こったのは、昨日の廃ビルでの一件からだ。彼自身、あんな体験は初めてだった。

（殺す事に、疑問を抱いてしまったのか……？　じゃあ、何で疑問を抱いた？）

思考を巡らせても、答えが出てこない。
解らない。ワカラナイ。

俺八、壊レテシマッタノダロウカ

「カイン」

鏡夜は、顔も向けずカインに声を掛けた。

カインは「なに？」と聞き返す。

「……俺は、変わってしまったのか……？」

そんな事は、自分自身が一番良く解っている筈なのに。

それを問いかけた鏡夜は、自分に確固たる自信がなかったのだ。

変わってしまったという事実を、鏡夜は受け入れられなかった。

当たり前だ。受け入れてしまったら、おそらく自分は絶望してしまう。

だから、カインには否定してほしかった。

変わってないよ、といつも通りの笑顔で言うてほしかった。

「キョウヤは変わったよ」

……はつきりと、その言葉は鏡夜の耳に届いた。

カインは迷いもせず、そう言い切った。

それは、決定的な一言だった。鏡夜が鏡夜でいられなくなる為の、呪いのような言葉だった。

「……ボク、先にマンションに戻ってるから」

そう言い残したカインは、鏡夜に背を向けて高く跳躍した。

まるで、千堂鏡夜という封殺者から興味を失ってしまったかのよ

うに。

除々に遠ざかっていくカインの後姿を、鏡夜はただ黙って見つめることしかできなかった。

「……あー、鏡夜くん」

振り返ると、千雨は髪を掻きながら、鏡夜を見ていた。

「……結果的に逃がした形で終わったツスけど、裁我さんの戦闘力は半減したと言っても過言じゃないツス」

千雨は、ただ同情を感じさせる眼差しで、鏡夜を見ていた。

「何が鏡夜くんの行動を抑制させているかなんて、私には解らないツス。出会ってから一日で人を理解するなんて不可能ツスからね。でも」

ゆつくりと、千雨の双眸が開かれていく。

それとほぼ同時に、彼女は鏡夜の首元に手刀を突きつけていた。

「この瞬間ですね、貴方が躊躇いを覚えたのは。ですが、迷いが皆無な私には、そのようなモノは感じられません。」

貴方の矛盾思考には、何かしらの原因が存在する筈です。まずは、それを探し求めることから始めましょう。『原因』を見出した時、貴方はおのずと自分の『答え』に辿り着くことができると私は信じています」

千雨は、いつもの怠けた口調ではなく、『魔術師』として、毅然とした存在感を以ってそう告げた。

突きつけた手刀が、ゆつくりと下ろされる。

再び半眼に戻った彼女は、

「まあ、鏡夜くん次第ツスけどね」

と、鏡夜に微笑みかけた。

「……その笑顔に、鏡夜は少し癒された気がして、
……努力する」

ぶっきらぼうに、顔を背けて返した。

行間三

少年とレイが邂逅を果たし、三年が経った。

そして、それは突然の出来事だった。

レイが少年の観察者を辞め、本国であるイギリスに帰国することになったのだ。

星礼会本部から地位の昇格を与えられ、最高幹部に抜擢されたという事だった。

しかし、そんな事情で少年は納得できなかった。

牢の中で体育座りをしていた少年は、ただ思った。

(僕は、レイさんを抛り所にしていたんだ……)

三年の年月が経って、やっと少年はその事を自覚した。

(レイさんの笑顔がなくなっちゃ、僕は生きていくことすらできないんだ……)

レイ・ストライトが帰国する前日。独りっきりになってしまった牢の中で、少年は初めて自分以外の人の為に泣いていた。

そして、翌日。

「お別れですね、キョウヤ」

施設の内部から外界へと続きただ一つの階段を前にして、レイは

「お別れ」と告げた。

(お別れ)

別れてしまう。

離れていく。

僕から遠くへ。

すごく遠い国に。

もう会えない。

二度と、会えない。

「行かないで……」

ボロボロと涙を流しながら、少年はレイの華奢な腕を掴んだ。

嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ 絶対二、嫌ダ。

「僕にはレイさんが必要なんだ。僕が一人前の封殺者になるまで、ずっと僕を見ていてほしいんだ……！」

聞き分けのない子供の我侷だと解っていないながらも、少年はレイの腕を離さなかった。

しかし、そうまでして、少年はレイと共に在りたかったのだ。

……ふう、と軽い息を吐いたレイは、「では、こうしましょう」と、しゃがみ込んで少年に一つの提案を出した。

「最後の戦闘訓練です。貴方が私に勝てたのなら、私は貴方の観察者を継続しましょう。それで良いですか？」

小首を傾けながら笑顔で問うレイ。少年は力いっぱい頷いていた。

そして、闘技場で最後の訓練を開始から十分が経った。

「……………え？」

ありえない事が、あつてはならない事が起きた。

「『俺』が、レイさんに勝った……？」

いや、正確に言うならば、これは勝利ではない。

何故なら、少年はレイ・ストライトを殺害してしまったのだから。

少年は、この三年の間にレイから伝授された詠唱を実行して、ただがむしゃらに戦っていただけだった。

レイの胸部から大量の体液が溢れ出している。

レイの優しかった笑みが、完全に破壊されている。

少年の右手は、レイの体液で赤色へと色変わりしている。

(『俺』は、レイさんを殺した)

その事実が、瞬時に理解してしまい、恐怖を覚えた。それは、どうしようもない事実で、

理解してはいけない、どうしようもない真実だった。

「素晴らしい」

周囲で傍観していた施設の研究者達は、少年に拍手を送っていた。「わずか十歳で、星社会の最高幹部に昇格した魔術師を殺せるとは封殺者にするにはもったいない逸材だ。私達が星社会本部に、君を魔術師に認定するよう掛け合おう」

施設の所長は、この出来事を前向きな気持ちで考えていた。

レイさんが死んだのに、俺を誉めている。

レイさんが死んだのに、それを過去の事柄にしようとしている。

レイさんが死んだのに。

こいつらは、嬉しそうに笑っていた。

「うるさい」

少年の殺意を込めた一言で、研究者達は拍手を止め、口を噤んだ。「レイさんは本気を出していなかった。レイさんは俺に手加減してくれていたんだ。そうだ。あの時、レイさんはわざと俺の攻撃を受けたんだ。そうでなければ、俺がレイさんに勝てる訳がない。レイさんを殺せる訳がない。……レイさんに何を言った？ 俺に殺されなくても頼んだのか？」

少年の詰問に、所長は一瞬だけ顔を顰めて、けれどまた薄ら笑いを浮かべた。

「そんな訳がないだろう。彼女を殺せたのは、君のじつりよ」

「黙れ」

少年は、一瞬でその汚い笑みを破壊した。顔面に手刀が貫通し、脳髓の感触が腕に絡みつく。

『ひっ……!!』

研究者達の表情が瞬時に強張る。

目の前にいる死を体現させた存在の理性は、既にこの時、『あるモノ』によって支配されていた。

殺す。殺す、殺す、殺す、殺す。 全テ殺す。

少年は、研究者全員を『敵』と定めた。故に

「お前ら全員、殺害してやる」

気がつく。

少年の周りには、人間の死体が無様に転がっていた。

首、腕、脚、胴体。人体の様々な箇所が床に散乱していて、元々白色だった闘技場の地面は、赤みを帯びた体液でその色彩を変えていった。

そんな死体の中に独り佇む少年は、先刻から一つの違和感を覚えていた。

それは、少年の内界に何かしらの変化を及ぼしたような気がして

「認識したか」

途端、そんな重く低い声が、少年の鼓膜に響いた。

声というよりも、一種の音に近いそれは、圧倒的な存在感を曝け出している。

それは、少年がレイ・ストライトと初めて戦った時と同じ感覚だった。

少年は、声のした方へと首を回す。

その男は、いつの間にか視界に入る位置に佇んでいた。

「誰だ」

少年の口調は、普段のそれと比較できない程に冷たく、感情が宿っていないかった。

……その、『千堂鏡夜』という少年が別の人間へと乖離してしまつたような感覚も、けれどすぐに、『千堂鏡夜』として受け入れた。
「天美戒。お前の元観察者と同じ存在だ」

顔とはいえないほどに何も感じられないその貌で、男は自身の名を告げた。

「魔術師が、俺に何のようだ」

「レイ・ストライトの殺害に成功したのは、お前が『心界』しんかいを認識したからに過ぎない。そうでなければ、お前が彼女の殺害に成功する可能性は0%に等しかったのだからな」

少年の問いに答えず、魔術師は無感情の口調で淡々と語っていく。
「存在理由を自覚した先に在る領域　心界を、お前は認識した。研究所のデータを拝見したが、お前の心界は『殺害』のようだな」

魔術師は、その貌に無骨な笑みを刻んだ。

「だが、彼女が施した術は消滅していないな。あの術は、施した本人でないと解除は不可能だ。そして機会も訪れてはいない。故に、お前はその機会に遭遇するまでは殺しを継続できるということだ」

「……俺の存在理由は、殺すことなのか？」

「その通りだ。先刻、お前はそれを自覚した筈だ。心界を認識した者は、心界に従って生きる事しかできはしない」

心界を認識した者は、それに従うことしかできない。魔術師は、確かにそう口にした。

「星礼会最高幹部である私の権限において、今日、この瞬間から『千堂鏡夜』という人間を封殺者に認定する。本部には、私が話を付けておこう。」

鬼人を殺す為だけに生きて、そして死んで逝け。それがお前の存在理由であり、逃れられない運命だ」

そう言つて、魔術師は去つていった。

独り残された少年は、赤で変色した地面の上に佇み続けた。

「殺すことが、俺の存在理由……」

ああ、本当はとっくに気づいていたんだ。俺には、殺すこと

しかできないという決定的な事実には

事実は、受け入れるしかない。

真実は、覆ることのない運命。

「なら」

今この瞬間から、少年はそうであるように生きる事を誓った。

その日は、雨が降っていた。

豪雨に等しい激しさで降り続く雨音が、少女の耳に響く。

叩きつけられる雨滴が、容赦なく傷に染み込んで激痛に苛まれた。少女は、自宅の前で倒れていた。

横たわった状態から顔を上向けると、包丁を手にした少年がいた。少年は、酷く悲しそうな表情で少女を見下ろしていた。

その顔も、除々に憎しみを含んだ、歪んだモノへと変わっていく。少女が倒れているのは、少年が持っている包丁で、背中を深く切られたからだだった。

それは、誰よりも信頼していて、誰もよりも大好きだった 義兄の手によるものだった。

「お前が悪いんだ……ッ！」
唸るように吐き出す少年は、今にも泣き出しそうな顔で少女を睨みつける。

「お前がッ！ お前がいつも幸せそうにしているから！ お前がいつも笑っているからッ！ オレの苦しみも悲しみも理解してないくせに、優しく接してくるから、こんな事になるんだ！」

少年の悲痛の叫びは、少女にはよく理解できなかつた。

目前に佇む少年は、本当に自分の義兄なのだろうか。少女の心に、そんな疑心まで芽生え始める。

「……やっぱり、オレに家族なんてモノは不要だったんだ。施設を追い出された頃からずっと考えていた。オレは、お前みたいになれないってことにつ……！ どれだけ努力しても、どれだけ普通でいようとしてもッ！ オレがそちら側に行くなんて不可能だったんだ！」

（上手く、聞き取れ……ない……）

除々に、少女の意識は朦朧としていった。耳に取れた言葉は『普

通』、『そちら側』、くらいだった。

義兄さんは、怒ってる。凄く、怒ってる。

それは、おそらく自分のせいなんだろう、と少女は確信した。知らない内に、自分は義兄を傷つけた。その証拠に、自分は背中を切られた。

「……オレは、お前みたいに、なれ、ない……ッ」

少女は目を虚ろとしていた。その目に、最後に映ったのは、酷く呼吸を乱している義兄の姿だった。

カランツ、と包丁がアスファルトに落ちた音がした。

お前みたいに、なれない。

それが、決別の言葉だった。

「だから。そうさせた、元凶を潰、す……！ 何年掛かったと、しても、必ず星礼会を……破滅させるッ！」

もう、少女の耳には何も聞こえていなかった。

そして、少年は少女の前から立ち去った。

……少女は、虚ろな瞳から涙を流した。

それは、立ち去った義兄と二度と会えないような気がして、不安だったから。

しかし、その気持ちとは裏腹に、もう会えない方が良いと思う自分もいた。

こういうのを、矛盾っていうのかな。

そんな事を思いながら、少女は意識を失った。

「っ！」

遠近湊は、咄嗟にベッドから身を起こした。

「はあ、はあっ……はあ」

荒い呼吸を落ち着かせる。十二月だというのに、体中は汗だくになり、パジャマはぐっしょりと濡れていた。

部屋の灯りは消えている。消灯時間が過ぎたためか、何の音も聞こえず、静とされていた。

「……今の、夢」

そうだ。あの夢は一体なんだったのだろうか？ まるで、自身が経験したかのような夢だった。

それに、あの少年は誰だったのだろうか？ まるで、他人とは思えないような言動をしていた。

湊は、あの少年が身近にいた人のような気がしてならなかった。

……夢を、夢で片付けられなかった。

そこで、湊はある事に気づく。

「……傷」

腕をパジャマの中に潜り込ませ、背中中の皮膚を触る。

湊は、明らかに普通の皮膚とは異なる感触の部分を発見した。

……何かを、思い出しそうな気がしてきた。

『雨の日』。

『自宅の前』、『傷跡』。

『矛盾』、『記憶』、『兄妹』。

『孤独』 『千堂鏡夜』。

「あ」

あっけなく。それは呆れるほどあっけなく、湊の記憶に蘇った。

(そうだ。私は、翔義兄さんと再会した時、不思議な力でお腹を深く切られたんだ)

そして湊は、医者と話していた、『心因性による健忘症』の意味を再度理解した。

心因性による健忘症。過度な心的外傷を負った時や、トラウマとなった出来事を思い出ししてしまった事が原因となり生じる記憶障害である。

そして、それを理解したが故に、湊の頬から涙が溢れ出した。

「……千堂、くん」

想うと、そうなってしまうのは自然なことだった。

湊は、鏡夜の問いに「知らない」などと言ってしまった。

決別したと思っていた鏡夜が病室に訪れてくれたのに、湊は『忘れてしまっていた』。

「ああ……」

後悔するには、事は既に遅かった。

自分の一言で、全てが終わった。

これでは、彼を拒絶した事と一緒にだ。

「……ひう……ひいん」

子供のように、湊はみつともなく泣いた。

だけど、今は泣きたかった。

泣いてどうなるものでもないけれど、今は泣きたかったのだ。

何故なら、湊が抱いていた夢は、湊自身で壊してしまったのだから。

鏡夜は朝方の六時半に目を覚ました。

しかし、昨日と同じく眠気が充分に残っていた。というのも寝具が変わったからだろう。押し入れから引っ張り出した薄地の毛布を居間に敷いた事が災いしたのか、床の冷たさが伝わってきて、昨日は就寝するのに二時間も掛かってしまった。

鏡夜の隣では、カインが毛布に包まって、小さな寝息を立てて気持ち良さそうに寝ていた。カインの寝顔は純粹無垢な子供を連想させた。この少年は鏡夜とは逆に、布団に潜り込んでから十分で夢の世界に入ってしまった。

「うーん、いけー、チェイン〜。あいつらを殺しちゃえ〜」

鏡夜は即座に思った事を撤回する。この少年が無垢であるなどありえない。

一方、千雨は薄い布で居間を二つに分けた向こう側にあるベッドで寝ている。就寝する直前に、「一緒に寝ないツスか？」と鏡夜は誘われたが、断固として拒否を示した。

鏡夜は二人を起こさないよう、静かに立ち上がり、台所の電球を

点した。

ポットで湯を沸かし、インスタントコーヒーを三人分用意する。

……就寝するのに二時間も掛かった本当の理由は、延々と考え事をしていたからだ。

(本当に、俺はどうしてしまったんだ……)

それだけを考えていたかった。

何故なら、殺す事ができなくなってしまった千堂鏡夜は、千堂鏡夜ではないからだ。

何が原因なのか、鏡夜は分からない。しかし逆に考えるならば、

『原因が在ったから、殺せなくなってしまった』のだ。

それがどんな原因であっても、千堂鏡夜の存在を邪魔する要因でしかない。

「遠近、湊……」

ポツリと、鏡夜の口からそんな名前が漏れた。

しかし、たった一週間、一緒に過ごしたただけだ。それだけで、こんな風になってしまうものなのだろうか？

十七年間生きてきた鏡夜の在り方が、たった一週間で、こうも劇的に変化するなどありえるのだろうか？

(だとしたら、それほど)

彼女を、特別な存在だと思ってしまったのだろうか。

そちら側に行けるかもしれないと、思い込んでしまったのだろうか。

だから、殺す事に躊躇いを覚えてしまった。

殺してしまつたら、そちら側に行けなくなってしまうから。

……しかし、この考えが正解だとしても、そこには矛盾が生じてしまう。

鏡夜は、昔聞いた、天美戒の言葉を思い出す。

『心界を認識した者は、心界に従って生きる事しかできはしない』

七年前。『殺害』という心界を認識した鏡夜は、同じく心界に従って生きてきた。鬼人を殺し、星礼会と敵対する連中を全て殺して殺して、殺し続けてきた。

苦悩した時期があったのも確かだ。心界に従って生きるという運命が無意味に思えて、そうである事をやめようと考えた事も幾度となくあった。

だが、心界を認識した人間に、そんな愚考が通用する筈がなかった。

「鏡夜くん？」

と、不意に布で仕切られた向こう側から、千雨の声が届いた。

布の奥からぴよこんと顔を出した千雨は、起きたばかりでも半眼無表情だった。

「悪い。起こしたか」

「どうしたんスか、こんな朝早くから？」

「……ああ、少し早く目が覚めたんだ」

言っと、千雨は鏡夜の淹れたコーヒーに視線を移した。

「飲むか？」

「はい、頂くツス」

「思った通りツスね。やっぱり、鏡夜くんは心界を認識していたんスか」

千雨と何気ない会話をしている内に、鏡夜は内緒にしていたその事実を口にしていた。

おそらく千雨は、鏡夜が心界を認識している事に気づいていたのだろう。その上手い話術に乗せられて、いつの間にか話したくもない過去まで喋っていた。

「……どこで気づいたんだ？」

「そんなの、鏡夜くんの言動と行動の矛盾を組み合わせれば簡単ツスよ。私の考察から導き出した結論で言っと、鏡夜くんの心界は『殺すこと』に関連しているツスね」

鏡夜は素直に、その洞察力と観察眼に感服するしかなかった。

「千雨は、心界についてどれだけ知っているんだ？」

「え？ ……鏡夜くん、心界を認識しているのに、心界の事を知らないんスか？」

「俺は、その人間の存在理由としか聞いていない」

本当の事を言った鏡夜。しかし何故か、千雨は吹き出した。

「……今の言葉で、何かおかしいところがあったか？」

「い、いえ。そんな例を見るのは鏡夜くんが初めてだったツスから苦笑する千雨は手を振って、コーヒークップに口をつける。

そして、いつもの気怠げな表情から、少し険しい顔つきへと変えた。

「心界ってというのは、人間の思考原理、行動原理、言動原理。この三つの概念の大元を司る、人間の心に在って無いものツスね。ここで言う『在って無い』というのは、認識している人間にはその概念を理解できて、認識していない人間にはその概念を理解することが不可能っていう正逆論理ツス。現代においては、先に鏡夜くんが言った存在理由で流通しているツスね」

思考原理、行動原理、言動原理。これら全ては、その人間の『在り方』に深く関わっている。例えば、何かしら思考を巡らせるにしても、言葉を放つにしても、行動を行うにしても。それは、その人間が培ってきた人生経験の知識を生かして行うものである。故に、その人生経験の内容が、その人間の在り方に直結するのだ。「鏡夜くんの心界は『殺すこと』。これで例えるとすれば……そうツスね、先程言っていた施設の候補者を全員殺した事によって、除々に『自分は殺す事しかできない』と思い込んでいったと、私は考えるツス」

千雨の推測に、鏡夜は黙り込む。……あの頃、生きる為に候補者を殺し尽くしていた自分は確かに在ったのだ。

「さらに、心界の認識後は自身の一人称、及び口調が変化するツス。『あたし』が『私』になったり、『僕』から『俺』になったりと。

これは、人間の成長における思考原理が完全に正しい方向へと決定されたからツスね」

「そうか……」

その言葉を聞いて、鏡夜は七年前を思い出した。確かに、レイ・ストライトとの最後の戦闘訓練を行う前までは、一人称が『僕』だった。子供さながらであった口調も、心界の認識後は冷たく、暗いものへと変化した事も覚えている。

「ついでに認識後のメリットとして、『精神』、『肉体』、『脳』に異常なまでの活性化が見られるツス。封殺者に例えると、魔術師の領域に踏み込む事も可能ツスね。そして、心界を認識した人間は、心界に従って生きることしかできなくなるというデメリットも背負う破目になるツス。心界を認識した人間が心界を否定すると、自身の存在理由に支障がきたして、在り方が曖昧になってしまうからツス。

……人間っていうのは、誰しもが自分自身の在り方を用いている生き物なんスよ。認識してしまった人間がそれをうやむやにすると自分は何の為に生きているのか判らなくなる。自分が自分でないような錯覚に陥ってしまう。だから、認識した以上、私達は受け入れるしかないんスよ」

「私、達……？」

「はいツス。ぶっちゃけると、私も『考察』という心界を認識してるんスよ。幼い頃から、物事の真理に執着し過ぎたせいかな、何事に関しても真実を知りたくなる性質になったんスよね」

あはは、と力なく笑う千雨。鏡夜はこの時、彼女は認識したことを後悔しているように思えた。

そうして二人で話を続けていると、淹れたコーヒーは既に冷めてしまっていた。

午前八時。三人はテーブルの椅子に掛けて朝食を食べていた。沈黙とも取れる静寂の中に食器の音だけが響く。

「キョウヤ。のんびりしてるけど、学校には間に合うの?」

「しばらく休む。今はそんな場合じゃない」

トーストにかじりつきながら返答する鏡夜。対して、カインはコーヒーカップをテーブルに置いて、一つ鼻で笑う。

「そんな場合じゃないだつて? そういう状況にした張本人が言える台詞だと思ってるの?」

「まあ、確かにカインくんの意見は的確ツスけど、鏡夜くんは一緒に行動した方が良いんじゃないツスか? これからの事についても話し合う必要があるツスから」

行儀良く日本茶を喉に通しながら、千雨は鏡夜をフォローする。

しかし、カインは昨晩から機嫌が直っていない様子だ。

ギシギシと斜めに椅子を傾けながら、カインは「……うーん」と目を閉じて唸る。

「それはそうだけどね。でも、今日くらいは学校に行った方が良くんじゃないの? ボクとしては、キョウヤに少し休憩をあげたい。

あと、考えを改めてほしいな。自分自身の在り方ってヤツをさ」

椅子に背を預けて、カインは小さくため息をついた。

鏡夜は、カインの言っている言葉の意味を理解していた。だからこそ、反論するべき言葉が見つからない。

「つまるどころ、カインはこう言っているのだ。」

『早く答えを出せ』、と。

「そうでなければ、この少年はこんな言動はしない。」

カイン・エレイスという封殺者は、迷いがある人間が大嫌いなものだから。

「……分かった。今日は学校に行く」

そして、カインの思惑を理解した鏡夜は、何も言う気になれなかった。

これ以上、二人に迷惑を掛けるのは嫌だから。

少し、頭を冷やそう。

午前八時十分。鏡夜は制服に着替えて、家を後にした。

カインは、自分の考えに疑問も逡巡も持っていなかった。

今回の件は全面的に鏡夜が悪いと、心の底から思っていた。

(……でも、何でキョウウヤは殺せなくなってしまったんだろう?)

事が起こるには、必ず原因というものが存在するのだ。

そしてカインの推察では、一人の少女が関係していると思っていた。

「チサメちゃん」

カインはテーブルに頬杖を掻きながら、抑揚の無い声で千雨に話し掛けた。

「なんスか?」

向かいの椅子に座っている千雨は、行儀良く背筋を伸ばして、自分で淹れた日本茶を啜っていた。

「キョウウヤの矛盾行動について、チサメちゃんはどう思ってる?」

カインの問いに、千雨は一度顔を顰めて、腕を組んで考え始めた。……そうツスね。それは、私も気にかけている事だったんスよ。

私の推察では、鏡夜くんが殺せなくなったのは湊さんが関係していると思うんスよね」

「やっぱり、チサメちゃんもそう思う?」

「だけど、もしそれが真実だとするなら、ここでまた矛盾が生まれるツス。」

鏡夜くんが湊さんと一緒に過ごしたのは、たったの一週間ツス。

その一週間で、鏡夜くんが十七年間培ってきた思考パターンが、あれほどまでに変化するなんて論理的にありえないツス。その理由として、鏡夜くんは十七歳まで、拒絶と孤立を続けてきたからツス。

それが、たった一人の女の子に話し掛けられただけで迷いを持ってしまふのは、自己の確立された在り方を自分から破壊するのと同じツスから。

そして、この段階で私が考えているのは、外的な要因が鏡夜さんの思考原理にバグを発生させたという事ツス」

「 外的な、要因？」

「 はいツス」と千雨は首肯する。

「 外的な要因を、ここで一端魔術に置き換えるとするなら、施した人間に新たな記憶を植え付ける『記憶操作術』が例に挙げられるツスね。これなら、『千堂鏡夜』という一固体の人間が培ってきた、『殺してきた』というエピソード記憶に、新しく『殺したくない』という記銘をさせて脳に保持させることが可能ツス」

「 ……エピソード記憶って、体験、経験した出来事を一つの情報として脳に記銘 記録させることだっけ？」

「 はいツス。記憶操作術はその名の通り、外部から記憶情報を操作する事を指すツス。でも、この術は『禁忌魔術』として扱われているんスね。何故なら、この術を行使するには、操作する対象の記憶情報を完全に認識していなければならぬからツス。ただ一度の情報操作を怠れば、その人間の記憶機能のプロセスが異常をきたして最悪の場合、記憶障害に陥ることもあるツスから」

「 けど、この推論はたぶん違っているツス」と、千雨は髪をガシガシと掻き廻り、自身の考えを否定する。

「 本当に記憶操作術を外部から植え付けられたなら、過去の記憶である『回想的記憶』が書き換えられてしまうツス。そうしたら私とはかく、カインさんの事を覚えている訳がないツスから。」

「 ついでに言うと、禁忌魔術は『存在の破壊』を示す行為ツス。人間の道徳から大幅に逸脱した術なので、その危険性を序列で定めてもいるツス。記憶操作術は第四位に位置するツスね」

そして、それを解除 つまり、外的要因の規制を取り除くには、上位の第三位、第二位、第一位の禁忌魔術を実行して、植え付けら

れた概念をさらに上位の概念で抑圧し、消滅させるしか手段はない、というらしい。

「でも」と、千雨は続けた。

「私は、何らかの外的要因が関わっていると確信しているんすよ」

「その根拠は？」

素朴な疑問を訊ねるカインに、千雨は珍しく焦ったように視線を泳がせた。

「い、いや、訂正するッス。確信は違うッスね。私の勘みたいなものッスよ」

「……まあ、いいけど」

明らかに挙動が不審だったが、カインは深く追求するのは止めた。内心で、紳士的だなボク、などと優越感に浸りながら。

「それにしても、暇だね」

一つ背伸びをして、カインは部屋の風景を眺める。

「まったく。キョウヤもゲーム機くらい買えばいいのに」

殺風景とも取れる鏡夜の部屋を見回し、ため息を漏らす。日本の高校生だというのに、趣味に関する物が全然ない。あるとすれば、居間の隅に積んである魔道書くらいだった。

「どこかに出かける？ ボクも久しぶりにゲームセンターにでも行きたいし」

そうだな。UFOキャッチャーでぬいぐるみでもゲットしたい気分になってきた。日本に訪れるのは久しぶりなんだし、少しくらい娯楽を満喫しても良いかな。

「別にいいッスけど、家はどうするんすか？」

「え？」

「いや、だからこの家ッスよ。鍵は鏡夜くんが持つてるし、私達が出かけている間に泥棒でも入ったら大変なことになりそうッスけど」

「……………キョウヤの、馬鹿」

それなりの怒りを含んで、カインは呟いた。

結局、鏡夜は学校に行かなかった。

カインは休憩をくれると気遣ったが、何も得るものがない学校に行っても答えが見出せる訳がない。ただ、心苦しい環境の中で、さらに悩み続けると思ったからだ。

鏡夜は浮浪者のように、街中を徘徊していた。

そして偶然、その人物と出くわした。

「……あんだ、こんな所で何をしてるんだ」

「その言葉、そのまま返そう。裁我の抹殺任務はどうした、千堂鏡夜」

天美戒は、表情一つ変えずに、鏡夜を見据えた。

「一度戦闘になったが、逃がした……」

「そうか」

やはり、感情の籠っていない口調で返す。

「……次は、必ず仕留める」

たまらず出た言葉は、明らかに偽りだった。殺せなくなってしまった自分に、裁我を仕留めることなどできない。

沈黙が訪れた。

しかしその沈黙は、まるで想定外の言葉によって破られる。

「お前が殺せなくなってしまった原因は『遠近湊』、そして『レイ・ストライト』が関係している」

一瞬。

ほんの一瞬だが、鏡夜の意識は凍結しそうになった。

心臓が、どくん、どくと早鐘を打ち始める。

「……どういうことだ？」

「何の因果か。七年もの間起動しなかった術が、このような偶然を巻き起こすとは。いや、これはもはや必然なのだろうな」

目を閉じて、初めて感情を含んだ笑みを刻む天美戒。その様は、出会ってから初めて人間らしく思えた。

「もったいぶるな。一から説明しろ」

魔術師に喧嘩を売っているようなものだが、気にしている暇はなかった。

おそらく、天美は『真実』を知っている。俺の矛盾行動にしても、俺が殺せなくなってしまった原因にしても。

ただ黙る天美に、鏡夜は苛立ちを覚え始める。

このまま、天美が黙秘を貫くならば、鏡夜は戦ってでも全てを吐かせようと考えた。だが、星礼会の最高幹部に勝つなど不可能だと、理性が行動を抑えた。

俺は、天美が応えるまで待つ。

俺が殺せるようになるために。

俺の体から矛盾を取り払うために。

そして、再び存在理由を証明するために。

「耐えたか」

実に愉快げに、天美戒は呟いた。

「よかろう。お前に全てを教えてやる。だが、その結果は自身で受け入れる」

そうして天美戒は、鏡夜に『真実』を語った。

それを知った鏡夜は、信用してやまなかったレイに初めて憎悪を抱いて。

それを知った鏡夜は、彼女に会わなければならないという衝動に駆られた。

天美の隣をかわして、鏡夜はその場所を目指し、走り出した。

「これも運命か」

重いため息と共に、天美戒は呟いた。

走って、走って。

走って、走って、走り続けた。

そうして鏡夜は、昨日訪れたK大付属総合病院の正門に佇んでいた。

「遠近」

『感情はいらぬ。全ては終わった』

……結局、あの言葉さえも偽りだった。

偽り続けてきた鏡夜は、憎んでやまなかった存在のおかげで、やっと『答え』にたどり着いた。

後悔も絶望も、もういらぬ。

そう思ったからこそ、鏡夜は門を潜ったのだ。

ここは静かだ。

一面が白で彩られた六畳の個室には、遠近湊しかいなかった。

静寂に包まれた白い空間に存在するのは、伽藍となった遠近湊だけ。

湊の見舞いに訪れるのは、決まって父親と母親だけだった。

それが、酷く悲しい。

それが、酷く空しい。

こんな時、鏡夜が傍にいてくれたら、などと夢想してしまう。

しかしきつと、その機会は二度と訪れないだろう。

夢を失った湊は、空っぽだった。

事実、遠近湊には、もう『何も無い』。

叶えたい願いも、夢を夢見ること、もうできない。

なら、自分は存在している意味があるのだろうか。

「……もう、嫌だ」

自虐的になつても、何も変わらないという事は解っている。

しかし湊は、そんな自分自身が嫌いになった。

……治療を受けていたおかげか、腹部の傷はそれほど痛まなくなっていた。

故に、ベッドから降りて窓を開けた。

雲ひとつない青々とした空を眺め？？視線を下げる。

この部屋は四階に位置している。頭から落下すると、痛まずに死ぬるのだろうか。

いや、痛んでもいい。最終的に死に至るのならば、どれほどの激痛を苛んでもいい。

湊は窓から身を乗り出し　最後に、遺言としてこう言い残すことにした。

「　ありがとう。たったの一週間でも、私の心は凄く満たされたよ」

そうして、湊は窓から飛び降りた。

しかし、不意に、誰かが腕を掴んだ。

「え………？」

湊は上を見上げた。

そこには、思ってもみなかった人物が、腕を掴んだ状態で自分を睨みつけていた。

「馬鹿野郎ッ！」

吐き出す言葉に、遠慮はなかった。

千堂鏡夜は、確かにそこにいた。

そして憎悪とも取れる瞳が、湊を捉えている。

「俺を狂わせた張本人が、俺に無断で死のうとするな！　死ぬなら、俺に罪を償ってからにしろっ！」

鏡夜は、湊の前で初めて感情を顕わにしていた。

片腕一本で湊を病室の中に戻し、乱暴にベッドの上に寝かせた。

「何で、千堂くんが………？」

もう来ないと思っていたのに。

決別したと思っていたのに。

「何で」

「何故、死のうとした？」

湊の疑問に答えず、逆に、鏡夜は問い返した。

「……私は」

震える唇で、湊は本音を吐露する。

「……私は、もう、自分が嫌いになった。記憶を失って、千堂くんの事を知らないとか言って……そんな事を平然と口にした自分が嫌になった」

「」

「もう、傷つくのは耐えられなくなった。これ以上、傷つきたくない。自分から原因を作ってるのに、それを受け入れる勇気もない。だから、死のうとしたの」

「記憶は戻ったのか？」

湊は小さく頷いた。

「なら、俺の話聞いてくれ。遠近の義兄にも関係している話だ」

「え？」

なんで、千堂くんが翔義兄さんの事を知っているのだろうか？

湊は、鏡夜に義兄の存在を話した覚えはない。話したくないという理由もあったが、彼には無関係だと考えていたからだ。

そして、忘却したい過去だからこそ、湊は話さなかったのだ。

鏡夜はベッドに腰を下ろして、湊の方へと顔を向けた。

「俺は、今まで殺人をしてきた」

……突然の告白に、湊は頭がクラツとした。

しかし、鏡夜は気にせず話を続ける。

「この世界には、日常と非日常の境界がある。遠近が『日常』に生きる人間なら、俺は『非日常』に生きる人間だ」

「日常と、非日常……？」

「ああ。俺は、鬼人という存在してはならない敵を殺してきた。何

百回も殺して、殺し尽くしてきた。それが、俺の存在している理由だった。存在理由を認識した俺は、殺すことしかできなくなったんだ。……だが同時に、俺は矛盾した思考を持っていた。

鬼人を殺しても、そうする意味を自問する。非日常に生きる人間なのに、孤独が辛い。そんな自虐的な思考に陥っていたところを、お前に見られた。そして、それから一週間、お前と一緒に学園生活を過ごした。ここからが、話の本題だ」

そうして、鏡夜が紡いでいった話に、湊はただ驚愕することしかできなかった。

面会時間が終わり、鏡夜は病室の外に出た。

廊下の壁際に配置されてある長椅子には、五十代くらいの温和な顔立ちをした男性が座っていた。

「……千堂鏡夜くん、だね？」

「そうですか」

「そうか、君が……湊が世話になったね。礼を言わせてもらうよ」
言って、男性は深く頭を下げた。

おそらく湊の父親だろう、と鏡夜は思った。

しかし、それなら都合が良い。

鏡夜は、遠近家にいた『彼』という存在の詳細を聞き始めた。

「……その話を、どこで聞いたんだい？」

驚愕する湊の父親に、鏡夜はどう話すべきか、少し考えた。

が、父親の方が、「……湊かい？」と、先に口にした。

「……ええ。あの、この事は、湊さんには」
嘘をつくのがここまで心苦しいものなのか、と鏡夜は改めて痛感する。

しかし彼は、温和な笑みを浮かべて、「いや、いいよ」と手を振った。

「……しかし、あの子が翔の話をするとは。よほど君の事を信頼し

ているんだろっね。

翔はね。優しい子だったんだ。ウチが引き取った頃は、何かに脅えている感じがあったが、それでも、除々に家族と打ち解けていった。……湊ともよく遊んでいたよ。ちょうどこの季節には、湊と二人で雪合戦をしていたなあ」

昔を懐かしむような顔で、彼は語り続ける。

だが、その顔も段々と曇っていった。

「……でも、あの病気が再発してから、翔は変わってしまった。何がいけなかったのか、私でも分からない。……それが分からないってことは、結局、私は翔のことを分かっていたことと同じなんだがね」

彼は力なく笑った。

鏡夜は、裁我が幸せに育っていたことに、少し嫉妬していた。

それでも、湊の父親は、他人である鏡夜に話を聞かせた。

まるで、あの子の痛みを分かってくれといわんばかりに、『遠近翔』の話を続けた。

鏡夜は、その話を黙って聞くことしか出来なかった。

正午になった途端、カインが「ボクが昼ご飯を作るよ！」と言いついでから一分が経過した。

「……………冷蔵庫にあるのが栄養ドリンクと牛乳と食パンだけって、どういこと……………!？」

ポツリと呟いた言葉には、明確な殺意が宿っていた。体を小刻みに震わせ、終にはバァンツ！と勢いよく冷蔵庫のドアを閉める。

「カインくん。気持ちは充分に分かるツスけど、物に当たるのは良くないツスよ。……………というより、鏡夜くんの食生活には問題がありそうツスね」

千雨は頭を抱えた。成長期の男性がこれでは、栄養不足になりかねないと危惧したからだ。

「しょうがないツスね。昼食は諦めて、これからの事に関して対策でも練るのはどうツスか？」

「そうだね。キョウヤ抜きでも、勝手に進めちゃおう！」

いきなりハイテンションになるカイン。その、喜怒哀楽がはつきりとした様に、千雨は思わず苦笑してしまった。

「じゃあ、私から質問があるツス」

「うん、なに？」

「観察者自らが、下の者の始末を行わないのは何故ツスか？」

千雨の問いに、カインは一つ笑って、

「ああ、彼らの仕事は、文字通り『観察』するだけだからね。下の者のデータを星礼会に提出する。それだけだよ。まあ、観察者の大半は魔術師で、下の者なんて簡単に殺せるんだけど、それは彼らの行動に入らない。それが星礼会の定めたルールなんだ。勿論、それを破った観察者は??？」

こうなる、とカインは手で首を横切らせた。

()という事は、下の者が道を誤った時、抹殺の任務が回ってくるの

は封殺者か、観察者の類に属しない魔術師って事ツスか)

納得がいった千雨は、次の質問に入った。

「じゃあ、裁我さんとの関係は？」

「きたね」

そこでカインは、険しい顔つきに変わった。

「まあ、いつかは訊かれると思っていたからね。ボクの知っている限りの事は話すよ。」

カケルとは、二年前に星礼会の本部で初めて出会ったんだ。その頃、ボクは1階級のナンバー10で、カケルも同じく、ナンバー10だった。カケルがミナト・トオチカの義兄だって事は、ボクは独自に調べ上げたんだ。彼は、施設から一般の孤児施設に預けられてそこでトオチカの夫妻に引き取られたらしくてね。彼にその詳細を深く追求すると、キレて本気で殺しにきたけど。

でね、ボクが零階級の領域に踏み込んだのは、カケルが星礼会から逃走したからなんだよ。当時、ボクとカケルは、どちらが先に零階級に到達できるか競い合ってた。……まあ今になって思えば、その競い合い自体くだらないものだったんだけどね。カケルからすれば、『星礼会に従っている』っていう偽りに過ぎなかったんだから。当手を思い出したのか、どこかカインの表情は暗い。

そして、その暗い表情を変えずに、最後にこう言った。

「……それにね。カケルは脆いんだよ」
「脆い？」

その言葉だけでは、千雨の用いている『考察』でも理解できなかった。

しかし、カインはやはり笑って、

「ま、二年も経てば、彼も変わってるんじゃない？」
と、強引に話を締め括った。

(うーん。気になるといえば気になるけど、これ以上詮索するべきじゃないツスね)

人間は、誰にでも話したくない事や秘密は持ち合わせている。千

雨がカインに心界の事を隠しているように、カインにもその権利はあるのだ。

「コーヒーでも飲むツスか？ 私、淹れるツスよ」

「サンキュ！ 砂糖多めでね！」

と。千雨が台所に移動したその時、ガチャツと玄関の扉が開いた。二人が顔を向けると、そこには鏡夜がいた。

（『答え』を見出したツスか、鏡夜くん）

千雨の心界である『考察』が、一瞬でその事実を理解させる。

そこに迷いは感じられない。いつもと同じ無表情だが、その黒瞳には確固たる意志が宿っていた。

「答えは見出せたのかい？」

「ああ」

「そっか。結論に至ったのなら、もう、ボクも言うことはないね」

「ありがとう。心配をかけた」

その言葉に、カインはきよとんと目を瞬かせた。

「……風邪でもあるの、キョウヤ？ 君から『ありがとう』なんて言葉、初めて聞いたけど」

「風邪は引いてないが」

「……ま、いいけど。それよりキョウヤ」

と、カインは鏡夜に詰め寄って、顔を近づけた。

「なんだ？」

「冷蔵庫の中。あれ、どういうこと？」

「なにが？」

「栄養ドリンクと牛乳と食パンだけしかなかったから、昼食が作れなかったんだよっ！」

「勝手に人の家の冷蔵庫をあさるな。それより、二人に話す事がある」

「なんスか？」

「さっき偶然、天美と会ったんだが、裁我の本拠地を特定したらしい。」

裁我は、先日俺が鬼人の始末に立ち入ったオフィス街の、今は使われていない廃ビルに身を隠しているらしい。今日の夜には潜入して潰しに行くぞ。そして、裁我が星礼会に反逆する理由も全て話す。鏡夜の存在感は、昨日のそれとは比べ物にならないほど、凄まじく、堂々たるものだった。

しかしこの時、カインと千雨がその『答え』の意味に気づいていれば。

あんなことには、ならなかったのかもしれない。

午後五時を過ぎた夕刻。

薄暗い廃ビルの地下で、一日にも及ぶ情報整理を行った結果、裁我はその真実に辿り着いた。

「……やっぱり、か」

千堂鏡夜の矛盾した思考と行動。遠近湊との関わり。施設のデータ。そして、鏡夜の元観察者　レイ・ストライト。

これだけの要素が揃えば、答えが出るのも当然といえば当然だった。

「って事は、鏡夜はどうあってもオレを殺せないって訳だな」

裁我は、自身の右腕を見る。

肘から下はもう何もない。しかし右腕が無くとも、鏡夜にもカインにも勝てるかと確信していた。

元より、裁我はカインとの戦闘で負けたことは一度も無い。『個別戦闘論理』は、データが完全ならば、動作、行動を一瞬で把握し、百手先まで相手の戦闘思考を読むことが可能なのだ。

「……だが」

そう。危険因子は、あの女だ。

おそらく、あの女の魔術師は、鏡夜やカインよりも数段実力が上だろう。それに加え、あの女のデータはゼロに等しい。

封殺者が魔術師に敵うなど絶対にはありえない。それが、星礼会の定めた法則であり、絶対的な両者の関係である。

「まあ、その為に用意したんだけどな」

ニヤリと笑い、背後にある大型のカプセルの中に入っている『それ』を見た。

「二年間かけて造ったんだから、少しは役に立ってもらうぜ？」

カプセルをトントンと叩き、『それ』の起動準備に取り掛かる。

裁我は白いロングコートを羽織り、すでになくなった右腕を隠した。

行く場所など、とうに決まっている。

「鏡夜を正常に戻すには、アイツを消せばいい」

そして、今度こそ後腐れなく殺るのだと決意をした。

彼は歩き出す。

過去と決別する為にも、そして、自分が自分である為にも。

裁我は、廃ビルを後にした。

ある日。

『あの持病』が再発し、以後、少年は病院で寝込みっきりの状態が続いた。

やっと幸せになれたのに。昔の事を、思い出してしまったからだろうか。

しかし、少年が苦難に苛まれているというのに、少女は元気に学校へ通っていた。

自分が辛く苦しんでいるのに、少女はずっと笑っていた。

なんで、アイツばかり幸せなんだろう。

なんで、アイツばかり恵まれているんだろう。

少女が少年の病室を訪れたとき、学校での出来事をたくさん話していた。

幸せそうに、色々な事を少年に聞かせた。

ホントウに、幸せそうな笑顔で。

それは、自分には手に入らない笑顔だと、少年はやっと気がついた。

三人がテーブルに着き、少しの沈黙。最初に切り出したのは、カインだった。

「さて。議論の内容は決まっていることだし話してもらおうよ、キョウヤ」

今回の議論は、カインが仕切りに回ることはない。話の内容を語るのはあくまで鏡夜だ。故に、カインと先雨は、聞き手に回ることになる。

「まずは、裁我自身のことだ」

鏡夜は、それが一番重要視すべき事柄だと考えて話し始める。

「裁我は感情を持っている。だが、それ自体が不可解な事なんだ」
封殺者とは、感情を殺さなければならぬ人種である。

幼い頃からの地獄のような殺人訓練により、身体、精神を完全に破壊され、ただ『殺す』ことだけを糧に、生きていく。

「裁我の感情変化は、見た限り異常をきたしていた。それは封殺者としてあってはならない事だ。そして、それは俺にも当てはまる」
はつきりと、鏡夜は自己の在り方を否定した。

しかし、そこに迷いはない。まるで、それを完全に受け入れたかのように。

「でも、ボクにもまだ感情は残っているよ。気に食わないけどね」
カイン自身、それは自分にも当てはまると解っていた。

カイン・エレイスは、喜怒哀楽がはつきりとした封殺者だ。それは、感情が豊かだという証拠なのだ。

捨て去りたいモノだと解っていても、それを捨てることができない。否、捨てる方法が見出せないのだ。

「施設の連中から感情を捨てるつてずっと教えられてきたけど、それが、どんな事柄において捨てるのかは教えてくれなかったからね。未だに感情が残っていても不思議じゃないの？」

喜怒哀楽という感情の中から、どの部類を捨てれば良いのか、鏡夜も、カインも、施設の研究者から一切教わっていなかった。

つまり、教わった意味を理解できていないから、捨てることが不可能なのだ。

「……殺すことだけを考えていれば、おのずと感情は無くなるのも思っただのかな。それとも」

「俺達が、例外なのかもしれないってことになる」

鏡夜の言葉に、カインと千雨は同時に視線を向ける。

結論を言えば、感情を失った封殺者は完成作で、カインと鏡夜、そして裁我は、失敗作という仮定がここで生まれた。

「そして、裁我が星礼会に復讐しようとしているのは、それに直結する。感情が有ったから、星礼会に憎悪を覚えた。過去に刻まれた傷が蘇ってしまい　　そうさせた張本人である星礼会を潰すことにしたんだ」

「それはあくまで推論でしょ。それが本当かどうかは解らないよ」
確かに、鏡夜の話はあくまで推論、彼自身の考えでしかない。

しかし、鏡夜はそうであると確信していた。

自分が昔そうであったから。感情を持ち合わせていたが故に、何度も裁我と同じ答えに辿り着いたのだから。

だから、裁我はこう言ったのだ。

『オレの事を、唯一理解してくれる仲間をさ。この瞬間を、ずっと待ちわびていたんだ……！』

『お前だけは、オレを理解してくれると思っていたのに……！』

『お前も、星礼会を憎んでいるんだろ？　だったら、オレ達は同類じゃねえか！』

あの言葉は、全て鏡夜に向けられたものだった。

つまり、彼は解っていたのだろう。

鏡夜が、星礼会を憎んでいるという事を。

鏡夜が、未だ感情を持っているという事を。

そして、鏡夜が自分と同じ心境にあったという事を。

（だが、それでも　　）

そう。それは現在の鏡夜に当てはまらない。

鏡夜は、もう決めたから。

答えを見出したのだから。

だからもう、鏡夜と裁我は違うのだ。

「話は変わるツスけど」

と、千雨は手を上げて初めて口を開く。

「私は、感情を排除できる魔術なら知ってるツスよ」

その言葉に、鏡夜とカインは同時に顔を向けた。

「『想像心界』っていう術なんすけどね。最初に、二人とも心界については知っているツスか？」

千雨は鏡夜を一瞥する。認識している事をバラすなというアイコンタクトだろう。

「知っているが、俺はまだ認識していない」

「ボクも同じく、だね」

「まあ、それでも話に支障は出ないから大丈夫ツスよ。簡単に言うと、想像心界というのは、心界を認識した人間のみが扱える術ツス。禁忌魔術での総順位では、第一位に値しているツスね」

想像心界。心界が『存在理由』ならば、想像心界は『存在証明行為』に部類される。

自身の存在理由を完全に認めたとのみ、これを起動することが可能になり、発動後の一分間、己の内界に宿る存在理由。心界が、存在を証明させる為だけに身体を無意識的に活動させてくれる。

しかし、この術を起動できるのは一度きりであり、心界の証明行為は一分間が上限とされている。そして、その時間の上限を超えるると心界が消滅してしまうと千雨は語った。

「……って事は、施設の研究者達は、その想像心界っていう術の存在を知った上で、ボク達に感情を捨てるって教えてきたつもりなのかな？」

カインの推測に、鏡夜は「いや」と首を横に振った。

「それが真実なら、研究者達は直接的にそう言えばいい。わざわざ遠まわしな言い方をする必要はないと思うが」

仮に、想像心界という術を研究者達が認知していて、それを踏まえた上で『感情を捨てる』と教えてきたとしても、その話の本質を語らない以上、鏡夜やカインがそれを理解できる訳がない。

「まあ、これは私の憶測ツスけどね。今は、真に受けられない方が懸命かもしれないツス」

千雨は、チラッと掛け時計を見る。現在、午後六時半だった。

「奇襲時間まで、残り二時間を切ったツスよ。そろそろ準備を始め
た方が良いんじゃないツスカね」

「そうだね。キョウヤ、ボクのアタツシユケース取ってくれない？
チエインの調整をしたいから」

「ああ」

言つて、鏡夜は部屋の隅に置いてある大型のアタツシユケースに
手をやるうとするが??

『ツ!?!?』

瞬間、三人の表情が凍りついた。

理解できない訳がなかった。彼らは、それ程までに感知能力は低
くないのだから。

「行くぞ」

「うん」

「はいッス」

だが、それも一瞬だ。行動すべき事柄を判断したからこそ、動揺す
ることはなくなった。

危機感も、焦燥感も そんなものを用いてしまわない為に存在す
るのが封殺者なのだから。

『彼』は、K大付属総合病院のロビーに足を踏み入れた。

道崎市に存在する数ある病院の中で、『彼』が最初にこの場所を
訪れたのは、無意識的にこの病院が頭に思い浮かんだからだ。

何年前か前、『彼』もある症状が悪化し、ここに入院していた時期
があった。

心中、嬉々とした様子で『彼』は歩き続ける。

ロビーには、それなりに人がいた。

これから医師に診断を受ける人間。

車椅子を漕いでいる患者。

だが、そんなことは今の『彼』にとつてどうでも良い事だ。歩みを進め、入り口の真正面にある受付に行く。

「悪い。ここに遠近湊つていう患者はいるか？」

『彼』は受付の女性に、出来うる限り『普通』を装って話しかけた。

……苛立ちは感じるが、今は耐えるしかない。

受付の女性は、朝に同じく面会に訪れた男性がいた為か、すぐに病室の番号を思い出した。女性は、礼儀正しく、『彼』の質問に答える。

「はい。第三棟の402号室に入院されております。ですが、面会時間はすでに終わっております。」

しかし受付の女性は、最後まで言葉を言い切れなかった。

否。

すでに彼女は、言葉を放つことは不可能だった。

何故なら、彼女は笑顔を保ったまま首をなくしてしまったのだから。

ごとんつ、という鈍く重たい音は、床から発した。

一拍遅れて、首の切断面から噴水を思わせるように、大量の血液が噴き出す。

その光景に気づいた者達は、おそらく、思考を停止させられたことだろう。

しかし、即座に現実へと引き戻される。

人間の首がなくなったという、ただ一つのリアルへと。

マンションの屋上に着いた三人は、状況を確認する。

「方角からして、裁我はK大付属総合病院に向かった。目的は、おそらく湊だ」

その推測に、カインと千雨は同意見だった。

「俺は病院に向かう。詠唱を連続使用すれば、二分程度で着く事が可能だ。」

カインと千雨は、さっき教えた廃ビルに向かえ。あの場所から、強大な魔力反応を感じる。おそらく、性質変換された鬼人だ」

「オツケー」

「了解ッス」

二人が承諾すると、鏡夜は病院の方角に向き、

「SPEED UP」

その意味の通り、鏡夜は一瞬で姿を消した。

「さて、ボク達も行くよ」

「はいッス」

病院とは逆方向にある廃ビルに向かって、二人は高く跳躍した。

景色が高速で流れていく。

空気抵抗を無にした移動は、繁華街の上を通っても、一般人の視覚力では認識できない。

しかしそれでも、鏡夜は移動速度が遅いと感じた。

今、移動している間に、どれだけの人間が殺されているかと思うと気が狂いそうになる。

そして、それ以上に。

(湊)

彼女がくれた言葉。

それを無にしてしまうのは嫌だったから。

彼女がいないと、自分は駄目になってしまうから。

だから。

「絶対に、生かす」

鏡夜の全てを知った湊は、数分間黙り込み、顔を俯かせた状態
いた。

その表情からは、絶望以外感じられなかった。

だけど、鏡夜はこう思う。

彼女と対等になる為には、こうするしかなかった、と。

嫌われるかもしれない。二度と近づくな、なんて言われるかもし
れない。

だけど、彼女には聞いてほしかった。

自分を、知ってほしかった。

自己満足のかもしれない。だけど、それでもいい。

彼女を知ってしまったが故の、必然の行動だと鏡夜は思う。

それ程までに、千堂鏡夜は遠近湊に惹かれていたのだから。

「……千堂くん」

およそ十分間の沈黙を、湊の小さな呟きが破った。

俯いていた顔を上げ、鏡夜と向き直る。

そこに、迷いはない。

在るのは、真実を知りたがっている顔だけだった。

「千堂は、これからも殺していくの？」

「……」

「千堂くんは、本当に殺すことを望んでいるの？」

「……俺は」

核心を突かれ、鏡夜は少し目を逸らす。だが、それが未だ迷って

いるという決定的な証拠だった。

……理不尽に生まれ、理不尽に生きて　そして、理不尽に死んでいく。

そんな生き方を、自分は、本当に望んでいるのだろうか？

今までは、心界を認識したせいだ、という一言で済ませることができた。

　　だけど、これから先は、そうはいかない。

自分は、答えを見出したからこそ、彼女に会いに来たのだから。

ここで迷ってしまったら、それこそ自分は滑稽だ。

殺すことでしか、存在を証明できない。

殺すことでしか、生の実感を得られない。

　　だけどこの少女と出逢って、一週間だけの付き合いでも自分は変わる事ができたから。

それなら、これから先、まだ可能性は残っているのかもしれない。

「俺は……」

本能が告げる。

本当の気持ちを。

嘘偽りのない気持ちを。

　　彼女に伝える、と。

視線を戻す。

そして、口を開いた。

「俺は、殺したくない」

存在を否定するけど。

「俺は、普通になりたい」

自分には、そんな事を言う権利はないけど。

「俺は、お前と一緒にいたい」

そんなくだらない事よりも、彼女と共に在りたかった。

　　瞳から、涙を流した。

これで、後戻りはできない。

これで、全てを失った。

でも、そうまでして、普通になりたかったから。

そうまでして、そちら側に行きたかったから。

鏡夜の出した『答え』に、湊は笑顔で彼の頭を優しく撫でた。

「泣くことはないよ。千堂くんは、異常なんかじゃないんだから」

掌は、温かい。彼女の温もりは、今の鏡夜にとって必要なものだった。

「何度も殺めてきたとしても、千堂くんは泣くことができるんだから。それを間違いだと解っているんだから。それが、何よりの証だよ。それにね、千堂くんの涙が見られて、喜んでいる自分がいるんだ。……今、気づいた。千堂くんは、私と一緒に生きてこたに。」

夢くらい、見てもいいんだよ？ 私達は、夢を見るために生まれてきたんだから」

……一緒。という言葉に、鏡夜は溢れ出す涙で顔を歪める。

これで彼女と対等になれたのだと思うと、さらに涙が溢れてきた。

それほど、彼は嬉しかったのだ。

夢なんて、叶わないと思っていた。

夢なんて、幻想だと思っていた。

だけど。昔、彼女と邂逅した時に教わった、あの言葉を思い出す。

『キョウヤ、夢を見なさい』

自分には無価値だと思っていた言葉。

だけど、その言葉だけは覚えていた。

鬼人を殺した後、いつもその言葉を告げていた。

あの言葉は、自分自身に向かって言っていたことなのだと、今の彼は思う。

鬼人には、『何も無い』から。

だから、それを自分に重ね合わせていたのかもしれない。
それに気づかせてくれたのは、一週間限りの付き合いで終わった
少女だった。

「じゃあ、気分を入れ替えようか！」

突然、湊はテンションを上げて、温かな笑みを浮かべた。

「私達、これから名前呼び合おうよ」

「名前……？」

腕で涙を拭い、鏡夜は聞き返す。

「私は、鏡夜くんって呼ぶから、私のことは湊でいいよ」

「……別にいいが」

「……もしかして、不満があるの？」

頬を膨らませる湊。だけど、そんな彼女も、彼女らしいと鏡夜は
思い、苦笑する。

「わかった。今後はそう呼ばせてもらう」

「うん！」

彼女はこれ以上とない満面の笑顔を見せた。

鏡夜が病院に着いた頃には、事は既に遅かった。

ロビーは人間の死体で埋め尽くされている。鼻腔を突く死の異臭
が充満する中、鏡夜は一言だけ呟いた。

「すまない」

自分があと少し早く着いていれば、こんな大事にはならなかった
のだろうか……。

しかし、今そんな事を考えても仕方がない。この者達への哀れみ
は覚えなかった。

鏡夜が哀れんだ対象は、ここまで墜ちてしまった『遠近翔』だけ
なのだから。

消灯された部屋で布団に包まり、湊は『二人』の事をずっと考えていた。

遠近翔は、自分と同じ『封殺者』だと、千堂鏡夜は言った。

鏡夜は、全てを語った。

封殺者の存在意義。鬼人を殺す為だけに生き、死んで逝くという絶対的な運命。

(義兄さんも、苦しんでたんだ……)

六年前の遠近翔は、現在の千堂鏡夜と少なからず似通った部分があった。

孤独という苦痛を背負って生きていたところも、日常に行くことが不可能だと考えていたところも。

そして、日常に行きたいと想っていた本心さえも。

鏡夜は本心を聞かせてくれた。ならば、遠近翔の本心も聞きたかった。

遠近翔と再会した時、何故、畏怖を覚えてしまったのだろうかと自己嫌悪してしまう。

……湊は、六年前を思い出す。

遠近家に引き取られた時の彼は、少なからず、家族と距離を置いていた。

それは、鏡夜が語った言葉に当てはまる。

『「日常」に生まれた人間と「非日常」に生まれた人間では、考える事も、想っている事も、在り方さえも異なっている』

今なら理解できる。あの雨の日、遠近翔が吐露していた言葉の意味が 理解できる。

日常に行きたいと願っていても、過去に自身の在り方が決定してしまっただ故に、最終的には家族になる事を拒んでしまった。

(でも、まだ遅くない)
鏡夜の話によると、遠近翔はまだこの町に滞在しているらしい。
自分はまだ満足に動けない状態だが、鏡夜は遠近翔の探索を了承
してくれた。

近い内に、また会えるのだろうか……。

でも、会えた時には、ちゃんと向き合って話をしよう、湊は心
に決めていた。

そう思うと、湊の心は弾んだ。

だから、高揚感があるのだ。

「なに笑ってんだよ」

……不意に、そんな感情を抑えた声が聞こえた。

湊はベッドから身を起こす。

「なにが嬉しいんだよ……！」

『彼』は、湊が笑っているだけで、それが罪だと思った。

「なんで、そんなに幸せそうなんだよッ！」

『彼』は、ついには感情を吐き出した。

「翔、義兄さん……」

『彼』は、湊のベッドに歩み寄り、唐突に首を絞めた。

「あっ……かはっ……！」

彼女は目を見開いて、目に涙を浮かべた。

口元から唾液が垂れる。その苦しんでいる表情を見た『彼』は、
どくんと鼓動が早まった感覚を覚えた。

『彼』はさらに握力を籠める。圧迫し、圧迫し、圧迫する。
だが、その前に。

ヒュンッ

首を絞めている側の『彼』の首元に、手刀を突きつけられた。

「……鏡夜、くん……」

彼女の涙で滲んだ瞳に映ったのは、いつも通りの、無表情の顔だ

った。

『彼』は握力を緩め、首から手を放した。

湊は極度に首を圧迫されたことにより、気を失った。

しかし、彼にとつて、そんな事はもうどうでも良かった。

口元が吊り上がる。

心臓が早鐘を打ち始める。

「…………オレの思ってた通りだ…………！」

歓喜の　それでいて、高揚による震えた声で、『彼』は呟く。

「やっぱり、お前はこちら側の人間なんだ。そうだよなあ？」

『彼』の背後には、憎悪を込めた貌をして佇んでいる千堂鏡夜がいた。

「やめる」

鏡夜は静かに言った。静寂な暗い部屋に、その一言は確かに響き渡った。

首筋には一振りの手刀。裁我が少しでも動けば死は確実に訪れるだろう。

しかし、動きはしないものの、裁我には余裕が窺えた。

「随分と甘くなつたな、鏡夜。コイツが影響を及ぼしたからか？」

「……………」

「ああ、お前の考えている通りだ。この女がお前を狂わせたんだよなあ？ コイツと関わった十時間後に、レイ・ストライトが施した『言語抑制術』が起動したんだろ？ 大方、抑制言語は『夢』つて所か」

『言語抑制術』。それは、『記憶操作術』と同じ『禁忌魔術』であり、序列では第二位に値する。

呪文として発した『言葉』を対象の脳に植え付ける。そして、その言葉を信じようとする『キツカケ』が遭遇すると同時に、言語抑制術は起動する。そのキツカケは、植え付けられた本人でも認識できない。さらには、矛盾しながらもその言葉を肯定してしまうという思考混乱に陥ってしまうのだ。

そして、術者が解除しない限り、起動は永遠に続いてしまうのだ。「その術者も、お前が殺しちまったがな」

そう。鏡夜がレイ・ストライトを殺した時点で、言語抑制術の解除は不可能となった。

……鏡夜にとっての『キツカケ』は、二種類存在した。

起動のキツカケとなつた一つは、自虐的思考に陥り、その時に遠近湊が現れたという事だつた。

『日常』に生きる人間と接し、遠近湊と『普通』に会話をしてしま

ったが故に、彼女を『一緒』だと思ってしまった。

自分でも、『日常』に行くことができるのではないかと、矛盾しながらも肯定してしまった。

これが、『キツカケ』の一つ目であり、矛盾思考の始まりだった。そして、二つ目。『キツカケ』の最大要因は、遠近湊と出会った二日後に、ある言葉を聞いてしまったからだだった。

『夢』を見続けるためには生き続けるしかないって答えに辿り着くんだ

その『夢』という単語によって、鏡夜に植えつけられた抑制言語が完全に体へと感染してしまった。

鬼人を殺したら、『日常』に行けなくなるから。

敵を殺したら、『普通』になれなくなるから。

そして、夢を見られなくなってしまふから。

故に、『殺害』という鏡夜の心界に、『言語抑制術』の抑止力が働いてしまった。

……日常に戻り、『普通』になること。それが、レイ・ストライトの『夢』であり、千堂鏡夜が無意識的に憧れていた『夢』でもあった。

しかし、裁我はそんな真実に納得する訳がなかった。

「こんな……。こんな、いつも幸せそうにしているヤツのせいでお前は殺せなくなっちゃった……。！　こんな理不尽な真実があつてたまるかッ！」

手刀が頸動脈に食い込む。しかし、裁我は死ぬなどとは思わなかった。

だからこそ、彼はこう言える。

「お前はオレと共に在るべきなんだ！　……そうさ、星礼会の連中を全員ブツ殺して、オレ達は自由になるんだっ！　……だからさあ、オレの仲間になれよ！　言語抑制術は、オレがデータを調べ上げて、

絶対に解除してやるから……！ お前が星礼会を怨んでいることは解ってたんだよ！ ……はあ、はあ……オレ、は、お前、が、必要、なん、だよッ！」

先日の過呼吸と、今のそれは酷似していた。

裁我は、それ程までに鏡夜が『同類』であると思いたかったのだ。『一緒』だと、『仲間』だと、同じ傷を持つ『同類』だと？？自分達は『似た者同士』だと、思わなくてはいらなかった。

「俺は、お前とは違う」

しかし、鏡夜は一言で、彼を切り捨てた。

鏡夜は、裁我を完全否定した。

そして今回、その言葉は裁我の感情に大きな変化を齎した。

「俺は『普通』になる。そう、湊と約束したんだ。俺はもう、封殺者じゃない。星礼会の人形でもない。俺はもう、湊と一緒になんだ」ピシリと、裁我は脳に亀裂を起こした感覚を覚え、

心が、壊れた。

一緒。その言葉を向けられたのは、自分ではなく憎んでやまない遠近湊だった。

……ギリツと、裁我は砕ける程に歯を軋ませる。

「……そう、かよ。なら」

裁我の左手に、強大な体内魔力粒子が収束し始める。

鏡夜が仲間にならないのなら、手段は一つだ。

「ブツ殺すしかないよなあッ！」

頸動脈に食い込んでいた手刀を強引に払い除けて、鏡夜の胸部を狙い、刺突を繰り返す。

鏡夜は体を左に開き、刺突を捌く。

チラツと、鏡夜は気を失っている湊を一瞥した。

「……ここじゃあ殺しにくいだろ。場所を変えるぞ」

「ああ、乗ってやるよ！ テメエはもう仲間じゃねえ。殺すべき対

象だからなあッ！」

鏡夜から教わった廃ビルを目指し、ビル街で跳躍を繰り返していたカインと千雨は、尋常ではない魔力反応を感知した。

「くるよ」

「了解ッス」

カインはアタッシュケースからチェインを取り出す。千雨も半眼を見開き、闘いにおいての自己暗示をかけた。

進行方向から高速でこちらに向かってくる『それ』は鬼人だった。フォルムは人型。体は漆黒の色で覆われている。眼球は赤色。これだけで言うならば、通常の鬼人と判断できる。

しかし、体格だけが明らかに異なっていた。三メートルはある巨軀。カインにも劣らない蓄積魔力量。

(……コアが複数埋め込まれているのか?)

カインは咄嗟にそう思った。性質変化を施す魔石といっても、その石につき込める魔力の量には限度がある。

この鬼人の魔力反応からして、コアが二つ、三つ埋め込まれていると考えて良いだろう。

鬼人と二人の距離が十五メートルほどに縮まった時、カインは行動を開始した。

「チェインッ！」

ハードメンタル

カインの精神硬質が、チェインと同化を成す。意思を持った銀色の鎖は、不規則な動きで鬼人の体に絡みついた。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

突然の咆哮。体に食い込んでいくチェインを、鬼人は両腕で強引に振り払った。

「なっ!?!」

ありえない自体に、カインは驚愕の声を漏らす。

チエインに流し込んだ体内魔力粒子の量は、この鬼人の魔力量を上回ったとカインは確信していたのだ。たかがコアを二つ三つ埋め込んだだけで、自身の体内魔力粒子を超える筈がないと思っていた。しかし現に、チエインと同化したカインの精神硬質が 強引にははいえ 振り解かれたことから、この鬼人に宿っている魔力量は、チエインに流し込んだ体内魔力粒子の量を上回っているという事実を証明していた。

カインは未だ中空にいた。予想外だった。体内魔力粒子を流し込み強化したチエインを、鬼人ごときが振り解くことは不可能だと彼は慢心していたのだ。

鬼人はカインに迫る。空を翔る鬼人の動きは、もはや物理法則など完全に無視していた。

「チッ！」

カインはチエインに意思を伝達させ、咄嗟に鎖を引き戻す。その時には、鬼人は右腕を巨大な鎌に変態させ、三メートルの距離に迫っていた。

(防！)

カインの前方で、銀色の鎖が蜘蛛の巣を思わせるように幾重にも張り巡らされた。

振り下ろされた大鎌が、一種の『壁』と化したチエインと拮抗する。

ガギギイイイツ、と軋みを上げるチエイン。イナで強化されたにも関わらず、鎌は鎖に微細な罅を与える。

「意志力、一〇〇％ッ！」

後方から奇襲を開始した千雨が叫ぶ。最大の意志を以って、首を断ち切るために朱風を疾らせる。

「ッ！？」

しかし、閃光の如く神速で放った一閃は、左腕であっけなく防がれた。

(100%でも斬れない！？)

カインと同様に、あつてはならない事態に千雨は動揺する。朱風に宿る殺人意志という精神硬質^{ハードメンタル}が、この鬼人の魔力量に劣っているとしてもいふのだろうか？

そして、驚くべきはそれだけではなかった。この鬼人は、左腕に魔力を収束させ、腕の硬度を上昇させていたのだ。

それは昨日この目で見た、千堂鏡夜の詠唱に似通った業だった。つまり、それが意味しているのはただひとつ。

この鬼人に埋め込まれているコアには、鏡夜の戦闘理論を組み込んでいる可能性があるということだった。

(考察開始　！)

この時、千雨は心界の活用を開始した。異常なまでの思考速度をもって、脳内で様々な情報を駆け巡らせる。

(体格は三メートル弱。カイン・エレイスの精神硬質を勝る。チェインへの微細な罅。通常ではありえない巨大形状の鎌。朱風、一〇〇%状態による意志力の攻撃を防ぎきる。

解一。カイン・エレイスと工藤千雨の用いる精神硬質^{ハードメンタル}を上回っている。追加要素。千堂鏡夜の戦闘データをコアに融合。考察終了まで、残り〇・三秒　)

思考を始め、一秒が経過する。考察結果は

(この数は　！)

その事実には、千雨はただ驚愕の表情を表した。

「カインくん！　この鬼人には、コアが十個埋め込まれています！　「ええ！？」

軋み、悲鳴を上げているチェインを解き、千雨と共に近辺のビルの屋上に着地するカイン。

「十個って、じゃあ、その短刀でも斬れない程の魔力量を持つてるってこと！？」

「先ほど一〇〇%の意志力を解放しましたが斬れませんでした。あの鬼人に埋め込まれているコアの数は、陽性意志力で言うなら、私達の精神硬質^{ハードメンタル}をも上回っています　」

千雨が言い切る前に、鬼人は二人の眼前に現れた。移動中に魔力が残留せず、また、二人が移動を認識できなかったのは、鏡夜の詠唱 『SPEED UP』を使用したからだろう。

鬼人は両腕を振り上げ、大鎌を倍の速度で振り下ろす。

「チッ！」

二人は同時に舌を打ち、チェインと朱風で防御を取る。

「
。」

だが、その前に鬼人は口の部分から、何かを唱えた気がした。

『ENERGY UP』。これも鏡夜の得意とする詠唱の一つだった。

鬼人の大鎌に、爆発的なまでの速さで魔力が増幅する。十個のコアに宿っている魔力を、両腕に収束した結果、腕力が格段に上昇した。

鬼人が完全に大鎌を振り抜いたことから、カインと千雨は十メートルほど中空を舞った。

二人はどうにか着地して受身を取ったが、このままでは後手に回る一方だ。

「何か良い案は無いの、チサメちゃん!？」

打開策を訊くカインに、千雨は「……あることは、あります」と頭を抑えながら言った。

「カインくん。申し訳ないのですが、時間稼ぎをお願いしてもよろしいでしょうか?」

「それで勝てるのなら、何でもするよ」

カインは即座に了承した。今は、あの鬼人を殺すのが最優先だと判断しての発言だった。

「ありがとうございます。では、二分間で」

「オツケー。　　いくよ、チェインツ！」

身体に宿る全ての体内魔力粒子をチェインに流し込み、カインは地を蹴った。

病院の屋上で、鏡夜と裁我は向かい合って佇んでいた。

殺意を剥き出しにしている裁我とは反面、鏡夜は冷静に辺りを見回す。屋上には誰一人いなかった。

「ここなら邪魔は入らない。お前が望む通り、存分に殺し合えるぞ」この状況で平静を装う鏡夜に、裁我は鼻で笑った。

「殺し合うだと？ お前は言語抑制術の抑止力でオレを殺せねえだろうが。オレも右手を失ったとはいえ、お前のデータは全て把握している。お前の勝率はゼロだって事が解らねえのかよッ！」

的確な言葉を、がなり声で指摘する裁我。

しかし、鏡夜は答えなかった。

そんな事は、何度も体験した鏡夜が誰よりも知っているのだから。裁我を殺せる訳がないというのも、すでに理解の範疇だ。

「そつだとしても、俺はお前を殺す必要があるんだ」

…… たった数時間前の事を思い出す。

殺したくないと言っただけ。

普通になりたいと言っただけ。

(……最後の最後まで、偽ったな)

己を嘲るように、鏡夜は薄く笑った。しかし、それもすぐに無表情へと戻る。

自分を狂わせ、自分を救ってくれた遠近湊。

その彼女を幾度となく傷つけた『敵』の罪を赦す気などさらさらなかった。

裁我と湊の過去など、もはやどうでも良い。

鏡夜が裁我を殺すのは、封殺者としての責務ではなかった。

ただ、湊には死んでほしくはないという自己満足に過ぎない。

それでも。この時、千堂鏡夜は他人の為ではなく、紛れもない自分の意思で行動を起こそうとしていた。

彼女がいなくなれば、自分は駄目になってしまふのだから。
それ故に。

「これが、俺の最後の殺人だ」
殺せなくとも、殺さなければならぬと悟つたのだ。

鏡夜が詠唱を口にする。その刹那　裁我の眼前に現れた鏡夜は、
首の頸動脈に狙いを定めて、右の魔刀を疾らせた。

「お見通しなんだよッ！」

裁我は身を屈め、いとも簡単に魔刀を回避した。そのまま足を払い、鏡夜の体が宙に浮いた。体が反転して頭から地面に激突する前に、鏡夜は両手を地面に密着させ、逆立ちの状態から右足を振り下ろす。

右足に収束した体内魔力粒子という物質的凶器が、裁我の頭蓋骨を襲う。

(確率、正の解　！)
振り下ろされた右足に対して、裁我は左腕を体の前にかけて防いだ。

両の体内魔力粒子が衝突した。不安定な体勢にあつた鏡夜は、両腕の腕力に力を籠めて、バアンツと後方に退く。

しかし裁我は、その戦術を予測していた。

体内魔力粒子を脚に収束し、脚力を上げる。一瞬で鏡夜の懐に入った裁我は、左の魔刀で顔面の破壊を実行する。

鏡夜は首を仰け反らすことで、それを回避した。

顔の上を通つた手刀を右腕で掴んで、裁我を宙に浮かせる。

後は、無防備な胸部を穿てばいい。鏡夜は左手の魔刀で刺突を繰り出す。

(　　ッ!?)

しかし、この瞬間『言語抑制術』が発動した。裁我の胸部を狙つた魔刀が、脇を通り過ぎて失敗に終わる。

「馬鹿野郎がッ！」

一瞬の迷いを、裁我が見逃す訳がない。右膝で顎を蹴り上げられた鏡夜は、宙を浮いて後方に五メートル吹っ飛んだ。

「く……ッ！」

顎を蹴られたせい、脳がシエイクされた感じだった。目眩まで襲ってきて、視界がぼやけて見える。

と、不意に誰かが馬乗りに乗ってきた。

それは裁我以外の誰がいるであろうか。

今にも殺したがっている裁我は、黒い瞳で鏡夜を見つめていた。

「オレの仲間になる筈だったのに、凄く残念だ」

歪む顔は、憎悪からきているのだろうか。??それとも、本心故の悲哀からか。

「本当に、残念だ。オレは、おま、えが……！ 必要だった、のに……！」

言葉が途中で途切れるのは、呼吸が荒くなってきたからだ。

(クソッ！ こんな時に……！)

鏡夜を殺せるのに。自分に歯向かう敵を殺せるのに。こんなタイミングで、持病の『過呼吸症候群』が襲ってきた。

この持病のせいで、裁我は、星礼会から「使い物にならない」と捨てられ、施設からも追い出された。

理不尽に魔力を認識させられたというのに、封殺者として決定した生き方すら、理不尽に破壊された。

脆い身体、脆い精神、脆い心。

不安なのだ。鏡夜を殺してしまったら、自分はまた独りになってしまう。

同類を殺してしまったら、自分の拠り所がいなくなってしまふ。

こんな事になる筈じゃなかったのに……。どこで計画が狂ってしまったのだろうか？

(こんな筈じゃなかったんだ……！ こんな)
そつだ。こんな事態にした原因は、

「翔義兄さんっ！」

バアンツ、と勢い良く屋上の扉が開いた。

(湊……!?)

腹部を押さえながら、乱れた呼吸をした遠近湊が、二人の前に姿を現した。

「もうやめて、義兄さん！ 鏡夜くんを殺しても、何も変わらないよ！」

私が義兄さんを傷つけたのなら、謝るから、だから、鏡夜くんだけは傷つけないで！ 鏡夜くん、殺したくないって言ってたんだよ！？ 普通になりたいって言ったの！ 義兄さんだって一緒でしょ！ 六年前、泣いていたじゃない！ オレはお前みたいになれないって！ なら、これから『普通』になろうよ！ 三人で一緒に、『普通』になろうよ！」

「……はあ、はあっ……」
裁我は答えない。荒い呼吸を繰り返しながら、ただ湊を見据えていた。

その瞳にあるのは、再び蘇った憎悪と怒りだけだった。
「そうだ。テメエ、が、鏡夜を狂わせた、原因だったな……」
裁我は立ち上がる。

鏡夜は、未だに目眩と一時的な脳の損傷に苛まれていて立ち上がれる状態ではなかった。

だが、声だけは発することが出来る。

「逃げろ……湊ッ！」

出る限りの声量で叫ぶが、湊は動かなかった。今にも倒れそうな足取りで歩み寄る裁我に動じず、ただ、弱弱しい表情で裁我を見つめていた。

距離が一メートルに迫り、裁我は歩みを止めた。

「お前が、鏡夜を、狂わせた」

「うん……」

「お前が、オレを、傷つけた……」

「うん」

「お前は 死ぬ、べきだッ……！」

瞬間。裁我は手刀で湊の胸部を切り裂いた。

鏡夜の目には、その光景がどう映ったのだろうか。

服が破れ、鮮やかな朱色が宙を舞った。花が折れる様に倒れ行く

湊は、最後に、鏡夜へと視線を移した。

鏡夜は、目を見開いたまま愕然としていて。

最後に、湊は何かを呟いていたようで。

鏡夜は、その言葉を聞き取ってしまった。

カインは、ビルの屋上で鬼人の猛撃をひたすら防いでいた。

既にチエインは限界が迫っていた。体内魔力粒子で強化したとはいえ、尋常ではない重さを持った鬼人の連撃が、確実に鎖へとダメージを与えている。

鎖が断ち切れるのも、時間の問題だった。己の一部といっても良いチエインが断ち切られてしまうと、カインの戦闘手段はなくなってしまう。

（あと三十秒ッ……！）

千雨が言った『時間稼ぎ』まで、残りわずかだった。それまでにチエインが断ち切られないことを願い、カインは戦闘に集中する。

（信じてるよ、チサメちゃん??！）

たった一つの希望に、カインは全てを委ねた。

千雨はビルの屋上で、両の瞳を閉じて佇んでいた。

短刀 朱風を両手で握り、ただひたすら念じる。

殺、殺、殺、殺、殺、殺。

たった四年間では、まだ足りない。あの鬼人の魔力量は、それを

も上回っていたのだから。

余分な雑念はいらない。今、必要なのは殺人意志だけだ。

(上回った)

朱風に籠めた殺人意志と、あの鬼人に宿っている精神硬質の質量を『考察』した結果、前者が確実に上を行ったことを確認する。

(……申し訳ありません、当主。使用します)

千雨は、この世界に満ちている大気魔力粒子に呼び掛ける。ただ純粹に、『集まってくれ』と。

万物の霊長である人類が、古より魔を滅するために行使してきた物質。

万物に支障をきたさない為に存在する大気魔力粒子を使用するということは、逆に言えば、万物に何らかの不要要素が存在している際に、大気魔力粒子が意思を持って一時的に力を貸してくれるという事だった。

金色の粒子が、朱風の刀身に集まり始める。銀色だった刀身が、次第にその色彩を変えていった。

朱風の刀身が、黄金色に光輝く。それは、大気魔力粒子の根源とも称されている色だった。

「カインくん！ 離れてください！」
叫ぶ。

「オツケー！」

チェインを網状にして防御を取っていたカインは、咄嗟に鎖をフエンスに絡み付け、移動を行った。

鬼人は瞬時に追撃をかけようとする。しかし、自身よりも数十倍の魔力反応を察知したが故か、その方角に顔を向ける。

鬼人が眼を向けた先には、千雨がその構えをとっていた。

「終わりです」

腰を限界まで捻り、十分なタメを作っていた千雨は、まさしく刹那の動作で刺突を繰り出し、それを解き放つ。

「魔穿・終の理　ッ！」

放たれたのは、殺人意志を物質化させた、黄金色に輝く巨大な槍だ。直線上に存在する全てのモノを虚無へと返す、滅殺の一撃だった。

「……！！」
断末魔の叫びすら聞こえず、鬼人の本体と十個のコアは、存在そのものが消滅した。

「ふう……」

千雨は、その場で大の字に寝転がった。殺人意志に集中し続け、さらには大気魔力粒子を使用したことにより、精神的にも肉体的にも限界が訪れていた。

「おつかれ。チサメちゃん」

上を見上げると、そこにはカインが自分を見下ろしていた。ニコリと笑い、千雨の隣に方膝を立てて座る。

「……凄かったね。さすが『魔術師』だ。ボクなんかとは格が違い過ぎるって実感したよ」

珍しく皮肉を口にせず、カインは自分の本音を吐露した。

「カインくんが時間を稼いでくれたおかげツスよ。私もいい加減、脳負荷に耐えられないツス」

「脳負荷？」

「朱風を扱う際、使用するのは殺人意志のみツスけど、反面、集中力が限界を超えると頭が痛くなるんすよ。先も一〇〇%を超える集中状態を維持したせいか、目の前がぼやけて見えるツス」

それは本当だった。人間が深い集中状態を持続できる時間には必ず限度がある。千雨は時間という概念に体性をういている仙人ではないのだ。持続時間は、保って三分程度だった。

「……ボクも、楽しめたことは事実だけど、もっと修行しないといけない」

途端、カインの言葉が途切れた。

何故なら、先刻の千雨を超える純粋な『殺人意志』が、二人の身体に伝ってきたからだ。

「この殺気……まさか、キョウヤ!？」

ありえないことだった。鏡夜が向かった病院は、このオフィス街から二十キロメートルは離れている。こんな長距離において、魔力でもないただの『殺気』を感知できる筈がないのだ。

だが、逆に言うならば。

「それだけ、鏡夜さんの殺気が異常って事ッスね……」

千雨は身体を起こして、その方角を見る。間違いない。これは紛れもなく、千堂鏡夜の殺人意志に他ならなかった。

「カインくん、急いで向かうッスよ。何かヤバい感じッスから」

「う、うん」

戸惑いを隠しきれないカインも、千雨が高く跳躍した後、それを追った。

遠近湊は、ピクリとも動かなかった。

ただ、斜め一文字に斬られた胸部から大量の血液を流しながら倒れ付している。

千堂鏡夜は、ピクリとも動かなかった。

その小さな少女を見つめながら、ただ言葉を失っていた。

「……はあ、はあ……はあ　くくッ！」

乱れた呼吸が徐々に治まり始め、裁我は満足そうに唇の端を吊り上げた。

「これで、これでよかったんだ……！　オレと鏡夜を狂わせた原因が死ねば、オレ達は元に戻る！　もう過去に囚われることが無くなつたッ！　何が『普通』だ！　そんなモノになれる訳がねえだろうがッ！　なあ、鏡夜！」

歡喜に震えながら背後を振り返ると、既に鏡夜は立ち上がっていた。

顔は俯いている。表情は読み取れない。

「……ああ、お前の言う通りだ。俺は『普通』になんかなれない。お前が今、それを証明した」

湊が死んだのなら、『普通』になっても意味がない。

湊が死んだのなら、『普通』になっても未来はない。

彼女は、最後にこう呟いた。

『義兄さんを、殺さないで』

幾度となく自分を傷つけた相手なのに、何故、そんな綺麗事が言えるのだろうか。

答えは、簡単に出た。

「……やっぱり、馬鹿だな」

鏡夜は呟いた。

『普通』の世界で生きてきた遠近湊にとって、何度傷つけられても、血が繋がってなくとも 遠近翔は『家族』だったから。

日常と非日常なんかどうでも良い。おそらく、彼女はそう想っていたのだろう。

彼女は、きっと三人は解り合えると最後まで思っていたのだろう。

それを信じていた彼女は、殺されてしまったというのに。

「夢を見せてくれた本人が夢を失うなんて?? 馬鹿としか言いようが無い」

……鏡夜は、その日々を回想した。

思えば。夢は、放課後の教室から始まった。

「そうだろ? オレ達は『日常』なんかに行けはしない! 六年前、コイツ自身が気づかせてくれた。礼を言わなくっちゃなァッ!」

『遠近翔』は、歪んだ顔で涙を流しながら、遠近湊の頭部を蹴り上げた。

何で泣いてるのって、自分を心配してくれた。

「湊が笑っていると、俺はどんどん狂っていったんだ」

彼女はいつも笑っていた。その心に、誰よりも孤独を抱え込んでいながらも。

「それでも、湊は笑っていたんだ」

笑顔は絶えなかった。雪の降る日、彼女はこう問うた。

「俺は湊を否定していた。だけど、俺は湊を肯定していた」

楽しかった？ 嬉しかった？ 哀しかった？

「 ああ、今でも思う。全部だ」

楽しくて、嬉しくて、哀しかった。

「だけどな。俺にとって、それは夢を叶える為のカケラだったんだ。だから、俺は――」

それを奪った奴を、どうしても殺したくなつたのだ。

裁我は、目の前に在る光景を疑った。

前方に佇んでいる千堂鏡夜が、千堂鏡夜とは思えなくなつてしまつたのだ。

純粋な殺人意志は、無垢であるが故に封殺者の宿すモノとは思えなかつた。

こんなのは、鏡夜じゃない。

「どう、なつてやがる……！？」

歯がガチガチと軋む。見てはいけないと解つていても、その存在感から目を離せない。

死ぬ。死は直前まで迫っている。

背筋に強烈な悪寒が走つた。『千堂鏡夜』という人間のデータでは、このような存在感を醸し出すことは不可能だった筈だ。

このままでは、自分は破滅する。裁我はそう直感した。

故に、裁我は抑止力である鏡夜を完全に殺す為 疾走した。

工藤千雨はこう言った。

『存在理由を完全に認めた時のみ』、と。

カイン・エレイスはこう諭した。

『答えを出せ』、と。

天美戒は、最後にこう告げた。

『抑止力が解ける時間は、起動開始から一分だ。だが、解放したら最後、お前は「終わる」だろう』、と。

「ああ、夢は終わりを告げた。俺の夢は、この瞬間に消え去った」

裁我が迫る。その疾走に、『個別戦闘論理』を使用しているようには見えなかった。

何もしなかったら、鏡夜は死ぬだろう。でも、鏡夜は何かをする事にした。

それは、子供の頃から教えられてきた行為。

逃れられない絶対の運命。

だけど、最後だけはそうで在りたかったから。

「だから、認めよう」

故に、鏡夜はこう口にした。

「想像心界」

そして、体が異常なまでの活性化を始める。

自分が自分でなくなるような圧倒的な畏怖が鏡夜に襲い掛かる。考える事柄が一つに定まり、しかし鏡夜はそれに全てを委ねた。

結局、自分はこうすることしか脳がない存在だった。

湊と過ごした一週間も、封殺者として確立された年月も失う事になるけれど。

今は、今だけは。

この存在を証明しよう

鏡夜を殺そうとした裁我は、逆に鏡夜によって殺された。

魔力も収束してないただの手刀。だというのに、その手刀は裁我の胸部を勢いよく穿った。

その動作は、ただ流麗で　ただ、美しかった。

鏡夜の右腕が、赤色を帯びていく。

『何も無い』鏡夜は、胸部を突き刺したままの裁我を、フェンスの外に投げ飛ばした。

……何も、感じない。

今の鏡夜は、慈悲というものを覚えることすらできなかった。

悲哀も、憎悪も。

遠近翔の味わってきた苦痛も。

遠近湊の背負ってきた孤独も。

そして、自分の存在している意味さえも。

感情が無くなれば、それを感じる事ができなくなるのも当然だった。

『何も無い』鏡夜は、夜空を仰いだ。

月は、キレイだった。

でも、どんなに神々しい輝きでも、こうなってしまった自分を癒してくれることは決してありえない。

最後に。

夢は、叶わないから夢っていうんだな

意識的か、無意識的かは定かではないが、そう思えた鏡夜は、地面に倒れた。

再度重傷を負った遠近湊は、二週間後に予定されていた退院が取り消しになり、次いで三ヶ月の入院生活を余儀なくされた。

胸部を斜めに斬られた傷跡は、一生の痕になるらしい。

これで、湊が負った傷は三つになった。

あれだけの大怪我を負ったのに、まだ生きている自分も相当しぶといな、などとベッドの上で考える。

その三ヶ月の間、両親の他に二人の見舞い人が病室に来た。

最初に訪れたのは、銀髪に碧眼、湊より少し身長の高い、外国人の少年だった。

「来る予定はなかったんだけどね。帰国する前に、ちょっとだけ言い残したくなっただけだよ」

いかにも不機嫌そうに言う少年は、名前を名乗らなかつた。

「君がキョウウヤにどんな影響を齎したかなんて、ボクは知らない。だけどね、あんな風になった彼を支えられるのは、唯一、キョウウヤが心を許した君だけだとボクは思った。だから、一生をかけて癒してあげて。ボクから言えるのはそれだけだ」

そう言って、少年は病室を後にした。

その二日後。今度はポニーテールに半眼無表情の少女が訪れた。

「……あー、なんていうんすかね。まあ、事は全て終わったんすけど、終わり方が苦々しいというか」

面倒臭そうに頭を掻き毟る少女は、名前を名乗らなかつた。

「一般人である貴女に語れる事は限られているんすけどね。今の状況を簡単に説明すると、鏡夜くんは生きている意味を失ってしまつたんすよ。それと同時に、存在理由というモノが消滅したため、思考、言動、行動が行えなくなってしまうたんす。脳は活動しているけど、この三つが行えない。有り体にいえば、昏睡状態に陥って

しまったツス。鏡夜くんを止められなかった私達にも責任はあるん
スけど……もう、全てが遅いツスね。でも、貴女にだけは希望を捨
ててほしくないツス。これからは、貴女が鏡夜くんの拠り所になっ
てほしいツス。鏡夜くんの夢を、簡単に終わらせないでくださいッ
ス」

深く頭を下げ、少女は病室を後にした。

三カ月後。冬の趣が消え去り、春の趣が見え始めた三月の終わり、
遠近湊は退院した。

とはいっても、まだ負った傷跡は完治していない。「過度な運動
は禁止」と主治医にも告げられ、しばらく通院もしなければならな
い。学園に通うようになるのも、まだまだ先のようにだ。

その間、湊は彼のお見舞いに通っている。花屋で香りの良い花を
購入して、週に三回、その病室を訪れる。

病室の扉を開ける。

鏡夜は、ベッドで目を閉じて静かに眠っていた。

「こんにちは、鏡夜くん」

笑顔で挨拶をするが、返事は返ってこない。

「今日はね、香りの良い花を買ってきたの。後で、花瓶の水を替え
ておくね」

笑顔で話し掛けるが、返事は返ってこない。

「私ね、また学園に通い始めたら、友達を作ろうと思うんだ。皆で
笑いあって、楽しい学園生活を送ろうって決めたの」

千堂鏡夜は、何も無い顔のままだ。

「……今更だけどね、私、鏡夜くんが好きだったの。あの一週間は、
私にとってかけがえのない宝物だったんだよ。」

私、信じてるよ。鏡夜くんが、また学園に来てくれるって。
前みたいに孤立しても、私が話し掛ける。私が鏡夜くんの拠り所にな
る。それが、あの人達から受け取った言葉だから。

だから、私はそれを裏切らない。何年経っても、おばあちゃんに

なつても、私は鏡夜くんの傍にいる。約束する」
出来うる限りの笑顔を見せながら、湊は泣いていた。

鏡夜は、もう三ヶ月も眠り続けたままだ。

生きているのか、死んでいるのか判らないほどに、彼は全てを失った。

何故、遠近翔を殺したのかも、湊には判らない。

そして、どんな事を想って、どんな決断をして、あの様になったのか湊は知らない。

しかし、湊は最後まで彼の傍にいて、彼を想い続けると、そう決めた。

その決意が、現在の遠近湊を突き動かしていた。

辛いことも、悲しいことも、これからたくさんあるだろう。

しかし最後まで、湊はその時が訪れるのを信じ続ける。

こんなところで終わってしまったてはいけないから。

夢の続きは、きっと存在すると信じたが故に　。

XXXX年XX月XX日

気がつくと、俺は其処に在った。

其処は何も無い場所で、何も見えなくて、何も聞こえない場所だった。

五感が麻痺してしまったように何も感じない。

俺は最初に、なぜこの場所に居るのかと考えた。しかし、それより先に。

複雑に交錯する記憶の断片が、写真のように長方形を象ったその記憶の断片が視え始めた。

なんだ、これは……？

どこかで見たような顔が記憶として視界に映る。

暗い世界は気づかぬ内に淡い光が射していて、成程、だから記憶の断片が見えるのだと理解した。

“初めまして、というべきか。正極運動者”

どこからか声が聞こえた。

男性にも聞こえる、しかし女性の声質とも言える中性的な声だった。

“さて、『君の世界』は一度終わったわけだが、体験してみているかだったか”

一つの記憶の写真が目の前に現れる。いや、それは写真ではなく映像だった。

見ると、そこには病院が映し出されていた。見に覚えがある小さな少女が、誰かに話しかけている。

……泣きながら、笑いかけている。

その笑みは酷く沈痛させる弱々しいモノだった。

あの一週間のような偽りの笑みではない。何かから開放されたような、「正」しい笑顔だった。

そこには、遠近湊と千堂鏡夜おれがいた。

“私が【対極心識】から抜け出して君の元へとやってきたのは、生み出した者としての責務であってね。なに、『子供』である君の心境が聞きたかったただけだ”

どこか温かさすら感じさせる柔和な声で、その存在は言う。

“想像心界は【世界】においてそれなりに危険な魔術だ。君が昏睡状態で助かったのは君という存在の起源が在ってこそだな。普通の人間……いや、君の世界においての魔術師ですら存在が凍結してしまう。君は知らぬかもしれないが、想像心界にも実行の種類があつてな。存在証明行為を『「正」しい事柄に導く為に起動する』か、『起動はしたが「誤」った方向に陥れてしまう』かの二種類がある。君の起動は後者に当て嵌まる”

でも、俺はあれが「正」しいと思つたんだ。湊を傷つけた遠近翔がどうしても許せなかつたんだ。

“それは千堂鏡夜きみという自我にとつての「正」しいだろうか？ 良いか。君にとつては「正」しい事柄だとしても、それが【世界】にとつての「正」しい事柄とは限らない。世界と千堂鏡夜きみを天秤に掛けるつもりはないが、君の存在証明行為うたがひで、君の大切な人にも異変は起こっているのだよ。【遠近湊の起源地】、とでも例えるべきか”

お前は、何が言いたいんだ？

“なに、大したことではないよ。ただ、【千堂鏡夜の仮初体】も今現在、中々に困り果てているとだけ言っておこう”

……声が遠のいていく。

“では、そろそろ失礼する。【対極心識】を空けたままにしているね。ああ、一つだけヒントを与えておこう。君が「正」しい行動を行わない限り、【世界】から負邪が消滅することはないぞ。あれもあれで、負極運動者として苦労しているのだよ”

そして、最後に聞こえた言葉は。

“【対極心識の因果】ではもう君とは会えないと想定できる。千堂鏡夜は千堂鏡夜で自分の【世界】を謳歌したまえ。ではな”

そうして、俺の世界は再び断絶した。

地面がある場所が嫌いだった。

幼い頃、転んで膝を擦り剥いた。

初めての痛みが、私の心に亀裂を入れた。

だから、地面のある場所が嫌いになった。

でも、地面がない場所なんてどこにもない。

でも、地面がない場所に行きたかった。

私と同じ気持ちを持っている人を探した。

でも、いなかった。

ああ、それなら。

私が連れてくればいいんだと、そう思った。

暦は三月に突入した。

けれど町には、未だに冬の名残が深い。

日中は気温が上がってきたが、夜の八時を過ぎると低下も激しい。冷めきつた夜気が服の中を潜り抜けて肌を凍えさせる。

夜という時間が好きな私としても、早く暖かくならないだろうか、

などと勝手な期待を抱いてしまう。しかし、そんな期待を抱いても、私個人の考えで自然の摂理に変化が生じるはずもない。なので、この考えは心の底に眠らせておくことにする。

深夜十一時を過ぎた現在、街は静謐な夜を形作っていた。物音ひとつ聴こえない静けさは、同時に私の心を安心させてくれる。

元々シンとした、雑音のない場所を好んでいる私にとって、夜に出歩くのは一種の娯楽といえた。実家も一般家庭とは違って物静かな人達ばかりだった。そのような環境で育ったものだから、自ずとそういう場所を嗜好するようになってしまったのだろう。

かつん、かつんと地面から響く自分の足音が少し気に食わないけど、それは程度として許容できるから文句はない。というか、自分の行動で起こっている現象なのだから、文句の言いようがないのだが。

ともあれ、こうして静かな夜の街を歩いていると、やはり安心感と心地良さを実感できる。

そして、私がこうして理想の時間を過ごせるのは、皮肉なことにこの街で不可解な事件が起こっているからなのだが。

皮肉……というのは、事件という単語だけで、私に過去を思い出させるからである。

二年前。高校卒業を間近に控えた冬の季節に、街では殺人事件が勃発していた。その事件というものが、どうも一般世界での出来事では扱えなかったのだ。

知人の鷹塔たかとう曰く、一般世界から逸脱した事件には、二属性が存在するそうだ。

ひとつ。その事件が、人間の持つ常識と良識を蔑ろにした犯行であつた場合。

ふたつ。その殺人方法が、一般人に行える常識から逸脱していた場合。

前者は人間の持つ尊厳から除外された人間 『存在異端者』と呼称されている存在が行う行為である。

後者は 簡単に言うならば、鷹塔側の人間にしか行えない犯行であるらしい。

二年前の事件は完全に後者といえた。

二年前の殺人事件は、一言で言えば異常な出来事だった。何故なら、被害者の全員が首から上を失くしていたのだから。

しかし、それは刃物などによる切断ではなかった。

引き千切られたのだ。手で後頭部をがっしりと掴み、冗談のような腕力と握力で首から解体させた。

その光景を目の当たりにしたのは、私があいつを殺そうと決意した瞬間だった。

思い出すと、奥歯を軋ませるのは自然な行為といえた。

その後、なぜか私は一週間ほど眠り続けたらしい。

一週間後。私が目覚めたときには、葵は何事も無かったかのように自然に振舞っていた。

そして、目覚めると私は何かしらの変化を遂げたということを目覚めていた。

言うならば、一週間前の私と、目覚めたあとの私は思考することが変わっていたのだ。

そして、私は過去の異常思考から乖離された思考を用いて、二週間を過ごしてきた。

一週間の眠りに堕ちる以前の私 十八年間生きてきたきりゆうせんり桐生穿理の思考は、正常なモノとは断じていえなかった。

言うならば、負の感情で構成された人間であった。

人間の誰しもが用いている邪な感情。絶望、孤独、不義、疑心

その他にも様々な感情が存在するが、二年前の私は、その全てを受用して生きていた。

孤独に恋焦がれ、絶望に身を任せ、疑う心を忘れず、絶望が当たり前だという思考を抱いて生きてきた。

傍から見れば、おかしい人間だと思われていたことだろう。正の感情の欠片も持ち合わせていなかった私は、会話にも必然的に齟齬

が生じて、人と接することも出来なかった。

彼は、そんな事はお構いなしと言わんばかりに接してきた。変人でもある私と平等に、対等な対場で接してきたのだ。

しかし、その頃の私は疑心を忘失していなかった為、彼を疑い続けていた。

こんな私に接する理由はなんなのだろう、と。

だけど、私には人の心が読める訳がなく、人の心を探る勇氣もなかった。

滑稽な自分は、今になっても自分を嘲笑いたくなくなってくる。

でも、それが正しく過去である以上。

私は、変わってしまったということの意味しているのだ。

一時の間、何も考えずに呆と歩いていると、不可解な事件が起こる場所 東区のオフィス街まで来ていた。

件の事件の心臓とも呼べるオフィス街には、三十階を有に越えているであろうビルの群集が鎮座している。午前零時に近づきつつあるこの時間帯。散歩のついでに、私はそれを確認することにした。

鷹塔の話によると、それが起こるのは日付が変更された『瞬間』であるらしい。彼から貰った電子腕時計に目をやると……残り三十五秒だった。

カチ、カチ、カチ。

カチ、カチ、カチ。

カチ、カチ、カチ。

……腕時計の秒針がやけに煩く感じる。

時が止まったかのように、風景は乱れない。

一切の音が絶えたオフィス街は、まるで退廃した死街のようだ。

カチ、カチ、カチ。

カチ、カチ、カチ。

カチ、カチ、カチ……！

ぐちゃっ

聞き慣れない音が、両の鼓膜を刺激した。

振り向き、その場所まで足を運ぶと、そこには人間の死体が在った。

二車線道路の真ん中に存在する、魂の不在した肉塊。

首、腕、脚はこれ以上とない程に拉げており、その箇所をよく見ると、折れた花を連想させた。

周辺に漂い始める濃厚な死の臭い。路上に飛び散った体液は、この時間帯ともあつてか黒く淀んで見えた。

私の眼前に、死が体現されている。

二年前の記憶が脳裏に蘇りそうになり、狼狽しそうになった私は慌てて頭を振った。

そのように幻視させるのは、やはり二年前を引きずっているからか……。

「 だけど、これは違う」

そう。これをあいつだと思つてはいけない。

連想させようが幻視させようが、そう思うこと自体、あつてはならないのだ。

この死体がどんな原理で堕ちてきたかなんて知ったことではない。

感じるのは、私を惑わそうとしている『存在』に対する怒りだけなのだから。

翌日の午前十時。ベッドで微睡みの世界に浸っていた私を呼び起こしたのは、一本の電話だった。

『穿理。少し話したい事があるから事務所に来い。既に葵も到着している。ではな』

電話の主 鷹塔祭は、たかとまつり一方的に話を進め勝手に締め括った。

だけど、そんな彼の行いは今に始まったことではない。自分勝手な鷹塔の性格には既に慣れてしまった。耐性が付いた、とも言うだろう。

ともあれ、呼ばれた以上は出向かなければならない。もし無視でもしたら私の働き口が無くなってしまう。就職も進学もしていない私にとって、金銭面での援助をしてくれているのは紛れもない鷹塔なのだから。

ジーパンと白色のネックシャツに着替え、二年前に買った十字架のシルバーアクセを首に下げて自宅のアパートを後にした。

鷹塔の住んでいる事務所は町の郊外にある。私の家からは丁度二キロくらいの距離だ。電車で向かうことも可能なのだが、私はどうしても電車というモノが好きになれなかった。人混み、揺れる車両の迷惑を顧みずに会話を行う他人。これらの要素の全てを私は嫌っているのだ、自然、昔から電車に乗用しなくなっていた。

葵のヤツは私と対極の思考を用いているから気にしないのだろう。以前、「もう少し人の居る場所に慣れないか？」と言われたが、大きなお世話だった。

という私情があり、現在、私は徒歩で事務所に向かっていた。二キロの距離などどうということはない。嫌悪しているモノに乗るよりは幾分マシである。

この町の郊外と呼ばれる地区は、少なからず片田舎という印象を抱かせる。郊外は田園地帯という語源とも連結している。その言葉通り田んぼや竹林が視界いっぱいに広がっていた。

そんな自然溢れる風景の中に、周囲との調和を成していない事務所は構えてある。

いや……何度見ても、これを事務所と呼ぶには無理がある。他人がこの建造物を初見すると、絶対に「イカれた人が建てた」と言うに違いないだろう。

地上のどの位置から見ても二等辺三角形を象っていて、階層を上る毎に面積が狭くなる構造になっているのだ。建物の外見を端的に表すならば……ソフトクリームのクリームの部分。

……まあ、この建物自体、空間と空間の狭間に形成した『実在しない建造物』つまりは『魔術』とやらで創ったらしい。本人は「バベルの塔を意識して創った」と自慢げに話していた。理解の及ばない原理なんて解ろうとするだけ無駄だ、と悟った私は、いつしか気にはしなくなっていた。

私は正面口の玄関の扉を開けて、内部に入った。

「あ、穿理。おはよう」

二階の一室に入ると、ソファつきみやあおいに月宮葵、窓際のデスクに鷹塔祭がいた。

見ると、葵はいかにも眠たげな表情をしていた。意識が完全に覚醒していないかのような、呆とした表情。……おそらく、また鷹塔に仕事を手伝わされたのだろう。

葵は白いカッターシャツに黒色のジャケット、紺色のジーパンといった身なりをしていた。彼は年賀ら年中、いつもこのセットを着服している。本人曰く、「服装を見せる相手は穿理と鷹塔さんくらいだから、気にしてもしょうがない」という事らしい。……そういう問題ではないと思うのだが。

そんな彼は、二十一歳という年齢にそぐわぬ容姿をしている。身

長こそ平均的なモノだが、白い肌と中性的な顔立ち、何より女性のように大きな瞳が、こいつを一層美男子として構成させていた。茶色の髪は肩に掛かるくらいの長さだ。彼の総髪は染めたという訳ではなく、ただ単に外国人と日本人の両親の間に生まれたから、という簡単な理由で片付いてしまう。……高校生の頃、その髪を黒髪にしると教師から咎められていた光景も、今となっては良い思い出だ。「遅かったじゃないか。鷹塔さんが待ちくたびれてるぞ」

咎めるわけではなく、その口調からは疲労しているように思えた。抑揚のない、疲れきった感じである。

「じゃあ、コーヒーを淹れてくるよ。穿理は日本茶だったか。鷹塔さん、給湯室を借りますね」

「ああ」

デスクに座って新聞に目を通していた鷹塔が、短く返事をした。葵は少しおぼつかない足取りで奥の部屋 給湯室に向かう。

新聞に目を通していた鷹塔は、葵の姿が見えなくなると視線を上げた。

「遅いぞ、穿理。お前が来るまでの時間、葵に次元空間の理論を延々と話していたこつちの身にもなれ」

葵とは対照的に、責めるような言葉を送る鷹塔。

「鷹塔が一方的に喋ってたんでしょ。葵、疲れきってたじゃない」

「そりゃあな。昨晚も仕事の手伝いをしてもらっていたし、帰宅させてから二時間後に呼び出したんだ。疲れもするさ」

まるで悪気のない、飄々とした表情で言う。……鬼か、お前は。

黒色のスーツを身に纏った魔術師は、「それで」と途端険しい目つきに変わった。

「今日のニュースを見たか？」

端的且つ、それだけで理解しろと言わんばかりに、鷹塔は視線を投げてきた。

「見る必要はないわ。昨日確認はしてきたもの。鷹塔の言った通り、午前零時ジャストだった」

「ほう。実物を拝見したというわけか。感想を聞こう」

「……よく解らない現象だったわ。周辺のビルから墮ちたようには思えなかった。二車線道路の真ん中に落下だなんて、飛行機なんかから落ちないとあんな事は起こらないでしょうね」

大体、あの現象が人の手によるモノだって事自体、疑わしい事だ。何も無い上空から人が落下するなんて、日常世界ではありえない以前にあつてはならない。

「だが、実際にお前は見たんだろ。ならば、その現象が現実世界で起こり得る事実だと証明されたわけだ」

「それは、そうだけど……」

「まあ、つもる話は葵特製のコーヒーが出来た頃に話そう。ソファにでも座つてろ」

命令に近い促しに、私はひとつ嘆息して頷いた。

穿理と鷹塔さんが会話をしている最中、俺は給湯室でコーヒーを淹れていた。

鷹塔さんは大のコーヒー好きだ。それは俺にも言える事で、二人でよくコーヒーについての話題をする。

しかし、鷹塔さん本人はコーヒーを淹れるのが不得意である。ならば何故コーヒー好きになったのか、という疑問を抱く。

端的に言えば、彼は俺と会うまでインスタントコーヒーしか飲んだことがなかったらしい。俺は親父の影響で中学の頃から豆から淹れたコーヒーを飲んでいたので、自然と豆から淹れたモノしか飲まなくなっていた。

当初、その事を話した際、鷹塔さんは「なら、葵が淹れてくれ」と興味津々な様子で目を輝かせていた。俺としても、インスタントよりも豆から淹れたコーヒーを味わってほしかったで、彼の要望に応えた。

それ以来、俺が事務所に訪れた時は必然的にコーヒーを淹れるという仕事がいつの間にか定着していた。それ自体に異論はなく、既に日課となってしまうたこの作業を楽しんでいた。

逆に、穿理はあまりコーヒーという飲料を好まないらしい。愛飲しているのは日本茶らしく、苦い飲み物は嫌いだそうだ。

コーヒーには詳しくても、俺は日本茶を淹れたことがなかった。なので、給湯室の小型冷蔵庫に封入してあるペットボトルからコップに注いで穿理に渡している。

そんな日本茶を好む桐生穿理という女の子は、高校時代からの付き合いだ。

高校三年生の頃に同じクラスになり、新学期が始まって最初のホームルームで穿理が小声で自己紹介をした際。第一印象は変わった名前だな、というモノ。まあ、それは俺の苗字にも言える事なのだが。

腰まで届く黒髪は、まるで絹で出来ているかのような流麗さを感じさせた。

鋭利な瞳は、しかしどこか哀しみが宿っているような漆黒色。

身長は百五十センチ後半ほど。服の上からでも華奢な体つきをしているのが判る。

そして、その頃、俺はひとつ不思議に思っていた事があった。

穿理はクラスメートが話しかけても、返答こそするもののどこかおかしな感じだった。

会話が成り立っていない、とでも言おうか。

人間が行うコミュニケーション手段である『会話』が、彼女にはできなかったのだ。

その会話には少なからず齟齬が生じ、穿理自身も困惑した様子であったことを覚えている。彼女は会話を嫌っている訳ではなく、ましてや他人を嫌っている訳でもなかった。

拒絶も、孤立も、否定も。彼女自身は望んでいないように思えたのだ。

そんな彼女を見るに耐えられなくなった俺は、いつしか、積極的に穿理に話しかけていた。

会話を齟齬が生まれても、そんな事はどうでも良かった。

ただ単に。女の子が苦しんでいる姿を見たくなかっただけなのだ。

「葵。そろそろ出来るか？」

給湯室の外から、鷹塔さんの声が届いた。

いつの間にか出来上がっていたコーヒート、コップに入れた日本茶を持って、俺は給湯室を後にした。

「さて、葵特製のコーヒーが味わえたところで、本題に入るか」
コーヒーを飲み干した鷹塔さんは、満足げな表情を浮かべ、話し始める。

先ほどまで座っていたソファは穿理が占有してしまったので、仕方なしに壁に腰掛けることにした。

「本題つて、この町で起きている不可解な事件のことですか？」

鷹塔さんが話題にするのは、決まってそつという話だと思つての言葉だ。

鷹塔さんはああ、と軽く首肯した。

不可解な事件。それは、二月の下旬から始まった、オフィス街で人間が空から落ちてくるというなんとも無気味な現象だ。いや、この説明自体では、飛び降り自殺なども類に入ってしまうので、訂正する。

ぶつちやけて言うと、何もない空から二車線道路の真ん中に落下してくるらしいのだ。俺も鷹塔さんと一緒に現場付近に行つたけど、現場の上には何もなかった。その頃は夜だったから、在つたの黒雲と少数の星々くらいだった。

被害者の三人は、この町に住んでいる人達である。既に身元も割れていて、彼ら三人に関係性も接点も皆無ということらしい。

そんな事件が二週間で三人も相次いだものだから、この頃のオフィス街に立ち入る者は限りなく減少しているらしい。

「葵。今回、何もない中空から人が落下してくる現象をどのように解釈する？」

と、鷹塔さんは突然の質問を投げかけてきた。その問いが今回の事件に関するモノだと理解した俺は、真面目に思考を回らせてみたりする。

何もない中空という事は、足場が無い場所からの落下だろう。飛

行機なんかから落ちらのならある程度納得がいくけれど、いや、飛行機という足場があったから、落下が可能になったんだ。ならば、この微妙な回答は矛盾していることになる。

何も無い中空。それは元々、足場というモノが存在しないということだ。その、人間という物体を支えてくれる地面が皆無な場所が、きっとそれに当てはまるのだろう。

なら、それを逆に考えると。

「……当てずっぽうですが、落下を行った場所は元々無くて、それで落ちてきたって事ですか？」

本当に思った事を口にしたのだが、鷹塔さんは「まあ、一般人の回答としては、良い線だ」と遠回りに褒めてくれた。

「中空、虚空、絶無の足場。こんな場所に存在してられるモノとするなら、それは人間ではなく飛行機や雲だな。人間は重力により、どうしても足場がないと存在してられない。足場がない場所に居たとしても、辿る道は必然的に死だ。逆に言うならば、死を辿りたいのなら足場のない場所に行けば良い。葵、今回の事件の被害者はな、この解と共通しているんだ」

「はあ。……って事は、被害者は最初から自殺をしたかったんですか？」

それにしたって、自殺を行う人間が、何故二車線道路の真ん中に落ちるのか。それがよく解らなかった。

「でも、二車線道路の真ん中に落ちる理由はないと思うわ。そんな事をするより、ビルの屋上から落ちた方が現実的じゃない」

と、突然会話に割り込んできた穿理は、どこか怒っているような様子だった。

「そうだな。現実的であり、かつ現実でありえる『普通の事件』として扱うとするならば穿理の意見が正しい。だが、今回の事件はもはや現実味が皆無だろう？ それの意味するのは非現実の扉が開かれたって事だ。」

先ほど俺が述べた部分 死を辿るなら足場のない場所に行けば

良いというのは、一般人が自殺を行う際に考える事じゃない。一般人が自殺を行うならば、穿理の言った通りビルの屋上からでも飛び降りればいいだけの話だ。二車線道路の真ん中に落下など、一般人に行える領域から逸脱している」

一般人に行える行動ではない。そう言った鷹塔さんは、おもむろな動作で煙草を口に啜えた。

「えっと、じゃあ自殺を行った人達は、鷹塔さんのような非日常側の人間だったんですか？」

「馬鹿野郎。非日常に生きる人間が、自身の死を大っぴらにする理由がないだろ。癡、非日常に生きる人間の死というのはな、同じく非日常に生きる人間にしか明かさないものなんだ。日常世界で明確な死を表す。それは、日常世界に生きる観測者の記憶に刻み込まれるという事だ。非日常側の人間の代表としては魔術師が挙げられるが、もし日常世界での死を記録されると、俺達という存在が世界に認知されてしまう事と同一だ。現代において、俺のような魔術師が日常世界で死んだという事実が公表された例があったか？」

「……まあ、聞いた事はありませんね」

頬をポリポリと掻きながら返答する。確かに、魔術師という人達が現代で知れ渡ってしまったら、それは大事件だと思う。

そんな類に属する鷹塔さんは、「脱線した話を戻すが」と、百円ライターで煙草に火を点した。

「一般人が行える領域から逸している。だというのに現実世界での死を明らかにさせている。しかしこの場合、どちらか一方が正しい在り方でないとならないんだ」

「在り方なんて関係ないでしょ。死んでしまった以上、その在り方は消滅してしまってるんだから」

鷹塔さんの主張を非難するように、怒気を籠めたように言葉を発する穿理。……というか、穿理はさっきから何に対して怒っているのだろうか？

「そりゃあな。死してしまった者には、用いていた在り方は既に不

在しているも同然だ。だが、俺が言っているのは被害者に対する在り方ではなく、現象に対する在り方だ。

一般人が実行出来る領域から逸している。これが正しいのなら、被害者は自然と非日常に属する存在だ。

対して現実世界の死を明らかにしている。こちらが正しいとするなら、非日常には属さない人間の行動だと判断できる。

完全に矛盾しているだろう？ どちらかが正しいというのに、どちらも正しいとはいえない。しかし、現実はこのような現象が起きてしまった以上、どちらかが正しく在らなければならぬ。考えるときリがない矛盾の極限現象さ、今回の事件は」

濃厚な紫煙を吐き出しながら、鷹塔さんは椅子にもたれ掛かる。それを言うなら、この二年間で起こった二つの事件も矛盾した出来事だったと思うのだが。

だけど、人間心理や物事に対する様々な論理に詳しい鷹塔さんを以ってしても、今回の事件は難解であるらしい。……そんな彼が解けない矛盾を俺達に聞かせたところで、解けるわけがないと思う。「話は終わり？ なら、三階のベッドを借りるわ。まだ寝たりないから」

不意に立ち上がった穿理は、確かに眠そつな様子だった。昨日、夜遅くまで起きていたのだろうか。

三階は八畳ほどのベッドルームになっている。以前、一度だけそのベッドで眠ったことがあったが、言い様のない不快感に陥った。「別に構わんが、周辺にあるモノには触るなよ。起動させてしまつたら大事だからな」

そう。たぶん俺が不快感に襲われたのは、周辺に置かれてある無気味な小道具のせいだ。憶測ではあるが、あれは魔術に係している品物なのだろう。前にあの小道具に関して訊いてみたのだが、「知らない方が身の為だぞ」と返された以上、今でも知る勇気が持てないでいた。

穿理は静かな足取りで部屋をあとにした。ボタン、という扉の閉

まる音が鳴ると、鷹塔さんは「葵、コーヒーのおかわりを頼む」と空になったカップを投げ渡した。……危ないですって。

給湯室でコーヒーを淹れ直して部屋に戻ったら、思わず咳き込んでしまった。

俺が給湯室に居た間に、鷹塔さんは煙草を何本か吸っていたらしい。部屋は濃密な紫煙で充満している。

「……鷹塔さん、吸いすぎはよくないですよ」

「うん？ ああ、悪いな。俺は一日一箱吸わないと我慢できないんだ。人を魅了し、惑わす効力があるモノは世界にいくらでも存在するが、煙草はその最も足るモノだな」

「要するに、鷹塔さんはニコチン中毒者ってわけですね」

「適当な相槌を打つ。それが真実に近い言葉だったつもりだけど、

「いいや、それは違うな」と鷹塔さんは否定した。

「中毒者と呼称される者は、その不特定の『何か』がないと生きていけない状態である者を指す。その『何か』に魅了、魅惑され、自己の存在を共有するんだ。真実、俺は煙草を愛煙しているが、魅了も魅惑もされていない。本当に我慢できない人間というのは、一日に三箱でも吸いきるさ。まあ、好んで吸っているのは事実だがな」

と、長い説明をする鷹塔さん。……俺からすれば、ただの言い訳にしか聞こえないのだが。

「と、コーヒーが出来たみたいだな。早くくれ」

新しい煙草を取り出しながら、そう催促する鷹塔さん。

俺はデスクに淹れたてのコーヒーを置いて、空いているソファ―に腰を下ろした。

「そういえば、穿理、何か怒ってませんでした？」

ふと、思い出した事をそのまま口にする。鷹塔さんはカップを手にとって、音を立てながらコーヒーを飲んだ。

「……鈍感なお前には解らなかつただろうが、おそらく、事件を起

こしている犯人に対しての怒りだろうな」

「え……？ 何ですか？ 今回の事件は、穿理とは何ら関係性が無いと思いますけど」

「だからお前は鈍感なんだ。……まあ、事件の本質を話していない以上、理解できる訳がないな。葵、穿理が嫌いなモノを二つ挙げてみる。嫌いな食べ物とかじゃないぞ。あいつが心の底から嫌悪している『感情的なモノ』だ」

……穿理が心の底から嫌っている感情的なモノ。彼女は好き嫌いがはっきりしている性格だから、思い浮かべるのは容易だった。

「 下位からいうと逃避、迷い……だと思えます」

それは今の彼女に適しているモノだ。

鷹塔さんは満足したように笑った。

「解っているじゃないか。なら、その二つの内で今回の事件に当てはまるはなんだ？」

畳みかけに問ってくる鷹塔さん。俺は先ほどまでの会話を思い出しながら、数秒間思考を駆け巡らせた。

「えっと……逃避、だと思えます」

「その根拠は？」

「さつき鷹塔さんが言っていた、死を辿るなら足場のない場所に行けば良いって言葉が、逃避の行動に思えたからです。死を辿るって事は、自ら自己の生涯を終わらせるって意味と連結していますし

俺から言わせれば、自ら死ぬという行為に走るのは逃避だと思います」

はっきりと、俺は自身の倫理観を述べた。

それは。二年前の穿理がそれに合致していたからだ。彼女は自分の価値観を誤った方向性へと定めてしまい、結果的にあんな事態へと陥ってしまった。

だから、あの時の穿理の行動は間違っていた。それは断言できる。「顔を上げる。思いつめるのは体に毒だぞ」

と、無意識に下げていた顔を上向ける。鷹塔さんは真剣な表情で

俺を見据えていた。

「穿理の事は一端置いておこう。あいつの前では口にしなかったが、今回の事件は、お前に話した次元空間の理論、そして逃避という観念的言語が深く関わっているんだ」

「……そうなんですか？」

何故、穿理の前では話さなかったんだろう、という疑問は残るが、俺は努めて話を促した。

「穿理が来る前にも言ったが、次元空間の理論とは、魔術の世界でも未だ立証されていない理論だ。一般的に空間利用は可能でも、次元の利用は、現代に現存する魔術師では不可能と言われている。まあ、一世代前は可能という説もあったんだが、これは話に無関係だな。

前者である空間の利用は、『結界』が例として挙げられるな。人間を無意識的に遠ざける人払いの結界、その場所への侵入を不可能にさせる結界、座標と座標を連結させ、居た場所から特定した場所へと位置関係を交わらせる結界。これらは全て、『空間』という概念を活用して行う。

対して、『次元』という概念は利用そのものが難しい。扱える面積、扱える距離が限られている『空間』とは異なり、次元は『時間』に干渉しなければならぬからだ。時間に干渉するというのは、現実世界の律を崩す事と同一だ。どちらか一方の律が狂えば、もう一方の律が狂うのも自然な流れとなってくる」

……全てを把握したわけじゃないけど、空間よりも次元を操る方が難しい、という解釈で良いのだろうか。

「それが、さっき言っていた逃避と何の関係があるんですか？」

これまでの話にその単語が入っていなかったため、俺はそう訊ねた。

「それは後に答える。話の優先順位を間違えるのは嫌だからな」
そう言って、鷹塔さんはコーヒカップを持ち上げた。

「葵。今回の事件はな、被害者が落下してくる時間が全てにおいて

午前零時ジャストなんだ」

「……？　そうなんですか？」

「ああ」と肯いて、鷹塔さんはコーヒークップに口をつけた。

「深夜零時。それは日付が変更される刻であり、世界が変わる刻でもある。今のオフィス街は、完全に後者に当てはまっているんだ。さつき言っただろ、次元　『時間』を操る者は、現実世界の調律を崩すと。昨夜、お前とオフィス街に立ち寄った時に調べたが、あそこは、深夜零時になると次元に亀裂が生じる仕掛けが施されていた。亀裂の場所は三箇所。その場所から地上を俯瞰すると解るだろうさ。その下が、被害者が落下した場所であるとな」

魔術師である鷹塔さんを以って言う事だから、それは間違いのない事実なのだろう。

鷹塔さんは続けた。

「さて、じゃあ最後である『逃避』という謎だが、これは単純明快な解だ。犯人はな、逃げたんだよ」

「逃げた……？」

意味が解らず、思わず問い返してしまった俺に「そうだ」と、煙草を取り出す鷹塔さん。

そうして、黒色のスーツを身に纏った魔術師は事件の本質を語ったのだ。

三人目の駒が動き出す。

オフィス街は静まり返っていた。

無音、無声、無感。何もかもが死んでしまったかのような夜の街を、桐生穿理は緩慢な足取りで歩いていった。

空は暗雲が立ち込めている。今夜は月さえも見えない。

世界は闇に覆われ、息づく暇さえ与えない。

穿理はその場所まで歩くと立ち止まった。昨晚、三人目の犠牲者が落ちてきた場所だ。

死体は既に警察によって処理されているのだろう、今では血痕さえも残っていないかった。

次いで、穿理は上空を仰いだ。何もない中空。そこには確かに何もなく、存在というモノが不在している。

電子腕時計を確認した十分前から、穿理は脳内で時間を数えていった。残り二十三秒まで達したその時、彼女は『連動』を開始する。

桐生穿理という人間の内界に宿る『負の感情』を、身体の隅々まで行き渡らせる。ただひたすら念じるのだ。

繋がれ、と。

そして、二十年という年月の中で培ってきた負の感情が、桐生穿理を異なる人間へと乖離させた。

瞳の色が毒々しい赤色に成り、前準備は整った。

残り五秒。

力子。

カチ。

カチ、カチ、カチ……ッ！

瞬間、穿理は真上へと高く跳躍した。見惚れるような優雅さを保って、その『次元』へと接近する。

その前に人が落ちてきた。四人目と予想されるであろう生きている被害者。穿理は五指に巻きつけている鷹塔が造形した特別製のワイヤーを巧みに操り、生きている被害者の体を縦に両断させた。

あっさりと人を殺したにも関わらず、穿理の表情に変化は窺えない。

穿理はさらに上空を目指す。

高さ十メートルほどまで到達した時、その少女の腕を掴み、次元の穴から引きずり出した。

「捕まえた」

微笑いながら、穿理は言う。

狂気に似た笑みは、普段の穿理からは想像もつかない。

だが、今の桐生穿理は桐生穿理ではない。

人格が負の感情によって再形成された今、穿理はただ別の人格へと変革を遂げていた。

「あ」

次元の穴から引きずり出された、黒いワンピースを身に纏った少女は、桐生穿理という存在に戦慄と畏怖の感情を覚える。

『負の感情』を体現した少女と、

『逃避の感情』を行動に移した少女。

互いに誤った答えを見つけ、その道を歩んだ『存在異端者』。

しかし、穿理に引きずり出された少女は、その答えに無自覚だ。

故に、まだ自分が正しいと認識できる。

「くっ……っ！」

共に地面へと落下していく少女達。しかし黒い少女はどうあっても地面に落ちるわけにはいかない。

もう、痛いのは御免だ。

もう、心に傷を負うのは嫌だ。

それだけの『逃避概念』が、黒い少女を行動へと移行させた。

黒い少女は、落下地点に次元の穴を開ける。これで穴に潜り込めたら、また次元という地面がない場所へと帰られる。

だが、その穴に潜り込む前に。

何の前触れもなく、穿理は次元の穴を消失させた。

「ッ？」

驚愕を顕わにする少女。

穿理は変わらず無表情で、黒い少女の腕を掴んだままで 口を開いた。

「あなたの負の感情の根源は『逃避』ね。それなら、『連動』している私には根源の消滅は可能だわ」

……血のように赫い瞳が、黒い少女を捉える。

「負の感情に支配された人間は、遅からず死を迎える事になる。…あなたがあいつと関わっているかどうかは判らないけど、あなたを楽にしてあげられるのは私のようなわ」

穿理の五指に絡み付いていたワイヤーが、黒い少女の体を束縛し、自由を奪った。

それは、まるで十字架に張り付けられた罪人のよう。

「だから、あなたを苦しめた理を穿ってあげる」
穿理は実行に移す。

指先を動かすだけで事は済んだ。

そうして、黒い少女は両足と両手を切断された。

黒い少女を殺害した穿理は、もう用はなくなったとばかりにその場から立ち去った。

……私の体を解体した女の子は去っていった。

地面に倒れ付している私の心に、様々な苦痛や悲痛が交じり合っ
て、鬨ぎ合っつて、やがては消えていく。

数年ぶりに地面という場所を体感した私は、驚くことに痛みを感じ
ていなかった。

それはきつと。精神面での痛みよりも、身体的な痛みの方が
勝っているからだろう。

両手両足を切断された私は、もう地面に立つことが出来ない。

ああ。あれほど地面を嫌っていたのに、今では地面が何より
も恋しい。

幼い頃、初めて地面で転んだ私は、何で地面なんかが存在してい
るのだろう、と思っていた。

それは、私個人の勝手な奇立ちに過ぎなかった。

皆は、地面を歩くのが、地面に立のが当たり前だと言っていた。

それを理解しきれなかった私を唯一理解して救ってくれたあの人
が、この場に現れてくれないだろうか、という幻想を抱いてしまっ
ただけど、そんなのはただの妄想だ。

……背中に感じるアスファルトの感触。

未だ私が生きていると認識させてくれる地面。

「私は、間違っていたのかな……」

荒い呼吸のまま、一人呟く。

「ああ、間違っているぞ」

……どこからか、男性の声が聞こえてきた。

「たちばなれいか立華零香。……真名の通りの在り方をしていれば助かっていたものを。不運を呼び起こしたのは存在に對極する行動か。運がなかったな」

「あなた、誰……？」

「名乗る必要性は皆無だ。君は死という体験をする事で、俺という存在すら忘却してしまうからな」

……確かに。両手両足を断ち切られた私は、酸素欠乏によって遠からず死ぬだろう。もうすぐ死んでしまうヤツ。それも見知らぬ他人に名前を教えても、何かが変わるわけがない。

「穿理に斬られた切断面を見るに、長くは保たないだろう。しかし、十四歳そこらの成熟していない子供がよく十三分間も生きていられる。それも、負の感情の根源が『逃避』であるからか。……なるほど。君は逃げ続けるという行動概念の恩恵を受けているという訳か」
男性はただ冷静だ。もうすぐ目の前にいる人間が死んでしまうというのに、この人は情すらもくれない。

「四人の一般人を連れていった理由を聞きたい。口が開けるなら話してくれ」

「私は、自分と同じ感情を持つ人をずっと探してたの。地上を嫌う人、地面に佇む事を嫌悪する人。地面で転んで心に傷を負った人。……でも、そんな人はいなかった」

そう。そんな正常ではない思考を持った人は、いなかった。

「でも、逃避つていう感情を持った人はたくさんいた。何かから逃げたい。この現実から逃避したい。それが……私の持つ感情と同じだったの」

だから。逃避という感情を抱いている人は、地面を嫌う人だと錯覚してしまった。

「でも、その錯覚を事実だと受用しちゃった。あの人達は逃避した

かつたらしいから、私が連れていっただけ」

「君の家は、人間の『感情』を無意識下で読み取れる家系だったな。『立華』の血は君にも受け継がれていたというわけか。だが疑問は存在する。『立華』は感情を読み取る能力があっても、今回の事件のような、次元に穴を開ける能力などは用いていなかった筈だ。答えてもらおう。その人ならざる能力を、君はどうやって身に付けた？」

そんな質問をされても、答えられるわけがない。

幼い頃に私の感情を受け入れてくれたあの人は、どこに行ってしまったのかも判らないから。

「そろそろタイムリミットらしいな。」

逝く前にひとつだけ助言しておこう。逃避に走った人間は、その感情を他人と共有することは許されない。逃避を行うと決めた人間は、自分一人でこれからの生涯を生きていく責任があるからだ。誰の力も借りず、誰にも頼らず、孤独を背負って存在し続ける義務がある。君の感情の方向はとうに誤ってしまったが、久方ぶりに地上という場所を経験できただけでも、穿理に感謝することだな」

そう言って、男性の足音が遠ざかっていった。

私は、仰向けになつたまま空を見つめた。

星々が煌く夜に、私という存在が失われようとしている。

でも、今は。除々に失われていく体温よりも、地面の冷たい感触の方が懐かしく思えて、小さく微笑えたのだ。

それは、地上で生きる者だけに与えられる権利だった。

三月五日。午後二時を過ぎた昼間に、俺は、穿理を連れて散歩に出かけていた。

近頃は大学が春休みに突入したという事もあり退屈な日々を過ごしている。今日は気温も高く穏やかな天候だった。突発的にこのような行動を起こしたのも、春の趣に魅了されてしまったからだろう。俺の隣を歩く桐生穿理という女の子は、いつも通り眠たげな表情をしている。昨晩は夜遅くに外出をしたらしく、自宅に帰ったのは深夜一時頃らしい。

「それにしても、昨日は夜遅くにどこに行ってたんだ？ 近頃は物騒な事件が続いてるんだから、夜の外出は控えた方がいいぞ」

「……うるさいわね。私も二十歳なんだから、夜に出かけたって良いでしょ」

拗ねたように目を背ける穿理。

「それに、あの不可解な事件はもう続かないわ」

「え、何でそんな事が分かるんだ？」

素朴な疑問を問うと、「……勘よ」と一言返してきた。

「勘か。まあ、穿理の勘は結構な確率で的中するからな。それを信じるよ」

納得して肯く。

それからというものの、何故か穿理は無言状態になってしまった。

無愛想な表情を維持したまま、俺と顔を合わせずに前を向いて歩く。そんな彼女の在り方は今に始まった事ではない。こういう時の穿理は、クールを気取っていても心の中で何かしらの事柄を考え続けている。そして、こちらも一時、無言になると

「ねえ、葵。何かから逃避をしなくなった事ってある？」

と、彼女から話しかけてくるのだ。一人で考えても結論に達していない時の彼女は必ず人に意見を尋ねる。それが彼女の良い所であ

り、意地っ張りな所でもある。

穿理の質問は、まるで自分自身に問いかけているように思えた。

俺は数秒間思索して、自分の考えを述べた。

「……そうだな。逃避なんて感情は人間なら誰もが用いているモノだし、誰もが一度は抱いた事がある経験だ。不特定の『何か』から逃げ出したい。こんな現実と向き合いたくない。そう思う事は誰だつてあるだろうしな。でも、逃避という行為に走って物事が良い方向に転がるなんて事はないと思うぞ。どんなに苦しくても、どんなに辛い境遇に陥っても、俺達は前を向いていかなくちやならないんだ。地に足を着いて、まっすぐにな」

本心からの言葉だったつもりなのだが、自分で言っただけ恥ずかしい気分になる。俺つて、こんなに格好つけだつたっけな？

「地に足を着いて、ね」

呟く穿理は、薄く、静かに笑っていた。それは彼女が滅多に見せない、今の感情を表現した笑顔だった。

同じ歩幅で歩く俺達は、やはり無言で散歩を続けた。

こつも会話がないと居た堪れない気分に陥るものだけど、全然そんな事はなかった。

寧ろ、穿理が同じ歩幅で歩いてくれているのが稀有な事態なのだ。いつもは一緒に歩いていても、すぐに先を行ってしまう彼女が歩幅を合わせてくれている。

……穿理の中でどんな心境変化が起こつたのかは知らないけど、今日は充実した散歩が出来そうだな、なんて思えた。

解ノ三

三月四日の深夜四時半。事務所に居た鷹塔祭は、電話機を使ってある人物に電話を掛けていた。

「俺だ。死体の解析は済んだか？ …… ああ、やつぱりか。でなければ、次元に穴を開けるなど実行できるわけがない。死体は総聖会に引き渡すなよ。あちらに送れば実験の素材とされるに違いないからな。お前の所で火葬してくれ。ではな」

ガチャンツ、と受話器を戻した鷹塔は、ギリッと奥歯を鳴らした。

「まさか、な。あいつが関係していたとは」

ポツリと呟く鷹塔。その口調には、明確な怒りと、相反する哀しみが宿っていた。

事務所の窓から射し込む月光が、デスクに置かれている書類を鮮明にさせる。

白紙に近い書類には、一文だけこう綴られていた。

『三人目の犠牲者、立華零香』と。

動物が好きだった。

愛しくて、愛しくて、たまらなく愛くるしくて。

彼らと遊ぶのが、僕の娯楽だった。

でも、僕は人間で、彼らは動物だった。

だから、僕の言葉が彼らに伝わるわけがないし、

彼らの言葉を僕が理解できる筈もなかった。

解り合えないなんてとうに識っていた。

でも、彼らの意思を知りたかった。

そんな時、困っていた僕を助けてくれる人が現れた。

巷で有名になっていいる事件とやらを初めて耳にしたのは、葵あおいが今日の授業を終え、大学の正門前で落ち合った時だった。

「どういう意味、それ？」

彼が口にした言葉が些か物騒だったからか、私は思わず聞き返してしまった。

二人揃って帰り道を辿る。葵はなぜか肩を落としながら疲れきった様子だ。私の問いに応じるのも三十秒ほど過ぎた後だった。

「俺も教授から聞いただけなんだけど、今言った通り異常な事件でことだよ。事件の概要は昨夜のニュースとかで報道してるはずだけど　まあ、穿理^{せんり}がテレビなんて見るわけがないか」

うん、と首を縦に振りながら、勝手に納得する葵。馬鹿にするな私だってテレビくらい見る。昨日は……偶々見なかっただけだ。

「なんか、西区の住宅街で殺人事件があったんだよ。被害者は昨夜だけで二人。周囲で悲鳴や叫び声は一切聞こえなかったらしい。で、異常ってというのは、その殺害方法のこと」

曰く、二人の被害者の腹部には直径三十センチほどの大穴が空いていたらしい。それは刃物で穿たれたような小さな痕ではなく、まるで大鳥類の鋭利な喙^{くちばし}で貫通されたような痕跡だったらしい。

「確かに、異常な事件ね」

私は納得して頷いた。

「でも、周囲に悲鳴が聞こえなかったっていうのは不可解ね。殺人に遭う前の人間って、大抵の人は叫び声を上げると思うけど」

私個人の意見に、彼も「ああ」と同意するように首肯する。

「一般的に考えればそうだろうな。まあ、教授が異常な事件って銘打ったのもその辺りを考慮してのことだと思う。普通、殺害前の人間は精神混乱で悲鳴は上げるものだろ？　なのに、周囲に住んでいた人達は悲鳴なんて聞こえなかったって証言してるらしいからな」

「加えて直径三十センチほどの大穴ね。確かに、異常な事件って言うに相応しいわね」

葵の言葉に返答こそするが、私はそれほど興味を持たずにいた。

誰がどんな目に遭おうと、所詮部外者である私には関係のないことだ。その被害者が死んで悲しむのは親族や友人だけだと思うし、名前も知らない他人に情を抱くのもおかしい。

対照的に、隣を歩く葵は険しい顔をしながら低く唸っていた。

「葵。無関係の私達が考えても仕方のないことですよ。こういうのは警察に任せるのが一番よ」

「まあ、そうなんだけどな。気掛かりなこともあるから、俺にとっ

ては無関係とは言えないんだよ」

「気掛かりって?」

気になって問いかけると、葵は「まだ確証があるわけじゃないから言えないよ」と肩を竦めた。

……何か隠し事をされているみたいで、私は少なからず気分を悪くした。

二人で帰路を辿っている途中、葵は用事があるから先に帰ってくれと言い残して、私達は中心街で別れた。どこに寄るのか興味があつたのだが、追求するほどのことでもない気がしたので、敢えて尋ねはしなかった。

時刻はまだ午後四時半だ。夕暮れ時の空は橙色に染まっており、それを直視した私は、悲痛めいた感傷を蘇らせていた。

夕焼け空を眺めると、否応無しに一年前の出来事を思い出してしまう。いや、夕焼けの空自体は想起の起因となっていない。私がある出来事を思い出す根源的な原因は、午後四時から深夜十一時という時間帯を経験することに依る。

その時間を生きるだけで、忘却したいはずの過去が脳裏に蘇る。それは私の意思を完全に放棄して　まるで、それが当然のように意識を齎してしまうのだ。

私は、この午後四時から午後十一時までの時間を生きるのが嫌いだった。その、たった七時間が我慢できないのだ。

それは一種の逃避。人間として生きている限り、その時間帯は絶対に経験するものだ。それを否定するのはもはや人間の考えることではない気がする。

ではなにか? 私は人間じゃないのだろうか。

答えは否だ。私は人間としてこの世界で生きている。人間として十九年間を生きてきた。私はれっきとした人間なのだ。

なんて矛盾だ。人間として生きているのに、夕方から深夜の時間帯が我慢できないなんて。

それもこれも、一年前にあんな出来事があったからだ。あの出来事さえなければ、私は普通にこの七時間を意識せず生きることが可能だったのだ。

葵も少しは気に掛けると思えてくる。発端はお前だ、と言う勇氣は未だに持っていないけど、いつかは怒りをぶつけてやりたい。そうすることで、きっと少しは気が楽になると思えるから。

月宮葵は町の郊外に訪れていた。見渡す限り田園風景が広がり、思わず大きく息を吸って清浄な空気を肺に取り込む。

「とはいえ、こんな所に事務所があるのか？」

葵はジューパンのポケットに仕舞っていた折り畳んだ用紙を取り出し、場所を確認した。そこには事務所までの詳しい道取りが緻密に描かれている。

しかし、目的地の付近まで訪れても、そこには何もなかった。ただ田んぼだけが風景として認識される。電話で言っていた事務所など、どこを見渡しても存在しない。

「初めまして」

と、多少の混乱に陥っていた葵は、背後から声をかけられた。

「……？」

怪訝に思い振り向くと、そこにはいつの間にか、黒いスーツを身に纏った男性が立っていた。

身長は葵より二、三センチほど大きく百七十八センチはあるだろう。体格は成人男性と同等のもの。肩まで届く長い黒髪が不意に吹き抜けた風によって静かに靡いた。

口元には笑み。表情も飄々としたもので、どこか不敵な面立ちに思える。

「月宮葵くんだな。俺が鷹搭祭だ」
たかとうまつり

「あなたが、ですか？」

思っていたよりも若い。それが第一印象だった。歳は二十代後半ほどだろうか。電話で話した時は大人びた口調だったので、それなりに歳を取っているかと葵は推測していたのだ。

「ああ。しかし……月宮のご子息も大きくなったものだな。写真でしか拝見したことはなかったが、立派な大人になっている」

その言葉で、葵はこの人物が鷹塔祭であると正しく認識した。

「初めまして、月宮葵つきみやまおひです。この度はご相談をお受け下さり、本当にありがとうございます」

葵は深く頭を下げながら謝辞を述べた。

「いや、いいぞ。君のお父上からの伝手つてならば断るわけにもいかなからな。とりあえず事務所に入るか。いつまでも外にいても現状は変わらない」

そうして、鷹塔は親指で何もない虚空を指さした。

葵は首を傾げる。

「あの、その事務所ってどこにあるんですか？」

「ここだよ」

葵の問いに間髪入れずに返答した鷹塔は、不意に口元を小さく動かした。

「gate open」

どうにか聞き取れた言葉がそれだった。

瞬間、何かがカタチを成していく。それはまるで、光学迷彩で隠されていたモノが顕わになっていく様であった。

完全に姿形を現したそれは、なんとも形容しがたいカタチをした建造物であった。造り事態はコンクリートで出来ているようだが、外見を眺めると啞然とするしなかった。

「……ソフトクリームみたいです。これが事務所なんですか？」

「バベルの塔を意識して構築したつもりなんだが、君も中々に失礼だな。まあいい。とりあえず中に入るぞ」

ため息混じりの促しに、葵はだらしなく口を開けたまま頷いた。

事務所の内部は、外から見た外見と照らし合わせると案外に普通な造型をしていた。鷹塔曰く、外界のどの場所から眺めても二等辺三角形に見えるように造型したらしい。

内部脇にある金属製の階段を上り、二階の事務室に入る。

十畳ほどの部屋には窓際に木造型のデスク、部屋の中心に来客用に二人が座れるくらいのソファアが配置されてある。部屋の右隅には、『給湯室』と書かれている扉がある。

部屋の内部は少々埃臭い感じがするが、相談を持ちかけ、さらには招かれた者としてどうこう言えはしない。

「ソファアに掛けてくれ」

鷹塔の端的な促しに葵はこくりと頷き、ソファアに座った。それなりに高級な生地を使っているのか、腰が埋まってしまっほどの柔らかさだった。

鷹塔も窓際のデスクにあるチェアに座った。

「さて、話を始めよう。　　と言いたい所だが、先に尋ねたいことがある。葵くん、先の現象を君はどのように解釈した？」

「先の現象、と言いますと？」

「俺がこの事務所を現実世界に現した仕掛けだよ。光学迷彩が切れたように姿を成していったらどう？　あの現象を、君は率直にどう思った？」

そう訊かれるが、葵は即座に返答ができなかった。あのような現象をこの目で見るのは初めてであるし、何よりあの現象は普通じゃない。それこそ、月宮葵の生きてきた十九年間で感じた未知のよう

に。

「なんて言いますか……現実的じゃないと思いました」

口にできた言葉がそれだった。一般人の括りに属する月宮葵としては至極当然の返答である。

「ふむ。確かに君の生い立ちからすればそれ以外に返答はできないか。参考になった。まあ、この仕掛けをバラすとすれば、この事務所は魔術で形成した建造物だな。魔術の類では『形成魔術』に属する」

飄々とした顔で言う鷹塔だが、葵はこれっぽっちも理解できていなかった。

「魔術、ですか？」

顔を顰めて思わず聞き返してしまったのも、彼にしてみれば仕方のないことだった。

「ああ。君のお父上　つきみや さいじ 月宮歳時さんからはこの言葉を聞いたことはないか？ あの人なら魔術に関しての知識を息子に伝えているものだと思っていたんだが」

「いえ、全く聞いたことがありません」

……というより、自分の父親が魔術なんてモノを知っている時点で初耳且つ驚愕ものだった。確かにオカルトっぽい品にはかなり興味がある性格をしてはいたが……。

鷹塔は足を組み直し、両手の五指を絡めながら葵を見据える。

「歳時さんから聞いた話、君には兄がいるそうだが、そちらも魔術に関しての知識はないのか？」

「はい。今は親父と一緒にイギリスにいますけど、兄はそういう事には無関心な方ですね」

ふむ、と鷹塔は顎に手を添えて黙考する。

「あの、鷹塔さん。俺から言うのも何ですが、今日ここに来たのはこういう話をするわけじゃなく」

「うん？ ああ、そうだった。すまんな、興味本位で少しカウンセリングを試してみたかっただけだ」

カウンセリングにもなっていない気がするが……という突っ込みたい衝動を御して、葵は話を切り出した。

「今回の相談の件ですが、鷹塔さんは昨夜に起こった事件の概要をご存知ですか？」

「ああ。テレビや新聞では『異常な事件』と無駄な装飾をされていくようだ。いや、無駄な装飾と認識してしまうのは俺が非日常側の人間であるからか。君のような一般人にしてみれば、『異常』という装飾は適切であるかもしれん。そして」

と、鷹塔は口元に薄い笑みを刻みながら目を細めた。

「その一般人の君から、『事件を解決したい』と相談を持ち込まれた時は、些か動揺してしまったがな」

「鷹塔さんは、表向きでは探偵という職業に就いているそうですが…… 本当は違うんですよね？」

葵は先ほどの魔術の話でそう確信づけた。ただの探偵ならば、事務所を見えないように隠したりできない。

早合点な気もするが、葵にはもう一つ、鷹塔を一般人ではないと確信付ける証拠を持っていた。

「こうして鷹塔さんを紹介してくれた仲介人　親父はこう言っていました。『非日常に関わる覚悟はあるか？』と」

もはや実の父親からそのような言葉を聞くことになるとは思ってもみなかった。

しかし、葵はそれを肯定した。

『彼女の真実』に近づけるのならば、どんな方法にでも手を伸ばしてみせる。一年前、葵はそう自身に誓ったのだから。

「それは、俺が魔術師という存在だと知って尚、か？」

鷹塔の問いに、葵は是として肯いた。

葵の覚悟に、鷹塔は一刻の間、無言で何かを思案し続け　唐突

にこのようなことを尋ねた。

「君をそこまで駆り立てる要因は何だ？」

「え？」

予想し得なかった質問に、葵はそんな言葉を漏らす。

鷹塔は続けた。

「今回の事件を解決したい理由。非日常に足を踏み入れる理由、といったところか。何が君をそこまで突き動かしている？　何が君を

行動へと移行させているんだ?」

畳み掛けに問う鷹塔に葵は少し首を下ろし 思いつめた顔で、

「……非日常から守りたい女の子がいるんです」

そう、自分の気持ちをはっきりと述べた。

「守りたい女の子がいる？」

葵の吐露した言葉に、鷹塔は少し眉を顰めた。

鷹塔は当初、事件を解決したいと申し出たことをあの人の息子であるからだと思いついていたのだ。しかし、いざこうして聞いてみると全く想定していなかった言葉が出てきた。

故に、鷹塔は多少の困惑を隠せずにいた。人差し指でデスクをトントンと小突きながら、彼の放った言葉の意味を考える。

「その女の子とやらは、今回の事件に関係しているのか？」

しかし、結果的に一人思考を走らせても結論は見出せなかった。

鷹塔は端的にそう尋ねる。

葵は少々視線を落としながら、「確証はありません」と返答した。

「そんなことはないだろう。ほんの1%でもありえると思ったからこそ、君はここに来たんだろう？ 今の君の様子を窺えば、その女の子が少なからず事件との関連性を持っていると理解できるぞ。話してみてくれ」

鷹塔の問い詰めに、葵は数秒間沈思し、顔を上げた。

「あの、こんな話をしてもらえてもらえるか分かりませんが、聞いてもらえますか？」

「それは話の内容によるな。まあ、できるだけ信じられるよう努めてみよう」

了承を得た葵は、それを話し始めた。

桐生穿理という少女が一年前に宿していた人格性と人間性。そして 高校卒業間際に起きていた連続殺人事件との関わりを。

桐生穿理は、普通の範疇に収まらない少女だった。

月宮葵が彼女と出会ったのは高校三年生に進級が決定し、同じクラスになってからである。それまでにも『桐生穿理』という少女の存在は学園内でも有名なものとなっていた。

葵もその噂を断片的に耳にしていたが、初めての会話となったのが三年生に昇級し、四日が経った頃だった。

葵はその人柄の良さ与人望の厚さで知れ渡った人物だった。絵に描いたお人好しとも呼ばれ、クラス内では学級委員長も務めていた。対照的に、桐生穿理はたったの四日でクラス内において浮いた存在となっていた。

なぜか。

彼女は、満足に会話ができなかったのだ。

三年生になり、新しい友人を作ろうと桐生穿理に話しかけた女子は、こう質問をしたそうだ。

「桐生さんって、凄く美人だし肌が綺麗だよね。お肌の手入れとかどうやってるの?」と。

同性の中での会話とすれば、それはごく普通の会話だった。おそらく、話しかけた女子もその問いに対する答えが返ってくると思っていたのだろう。

しかし、彼女は笑いながら、こう返答をしたのだ。

「私に肌のことを訊いて何を企んでるの? 殺すわよ」

それは、誰もが予想しなかった答えだった。

沈黙が訪れ、それほど心が強くなかったその女子は、その場で泣きそうになってしまった。

その様子を、葵はしかと見ていた。最初は桐生穿理が悪意を持って放った言葉だと思い、彼は注意を行うために駆け寄ろうとした。

しかし、それは違っていているようだった。

何とか泣き出しそうな衝動を抑え、その女子は愛想笑いを振りまいてその場から立ち去ったのだが、肝心の桐生穿理の様子がおかし

かったのだ。

その横顔だけで、葵は理解した。

本当に泣き出しそうだったのは、桐生穿理の方だったのだと。

顔は絶望に歪んでいた。目尻には大粒の涙が溜まっていた。唇は震え、とんでもない事を言ってしまったと後悔の感情を表していた。

そうして、彼女は消えそうな声でこう呟いた。

ごめんなさい、と。

その直後、月宮葵は桐生穿理に話しかけた。

桐生さん、泣きそうな顔になってるぞ、と。

その日から、葵は穿理に接し始めた。

夏になっても、桐生穿理のコミュニケーション能力に変化は生じなかった。

授業中、穿理に教科書の音読や回答を求める教師はいなくなり、彼女と接する生徒は学園でも少数の人間だけとなっていた。

葵と穿理の会話には、相変わらず齟齬が生じていた。

「この頃楽しいことはあったか？」と葵が尋ねると、

「その質問の裏では何を考えているの？ 刃物で体を切り刻まれないの？」などと穿理が物騒な言葉を放つ始末だった。

しかし夏の本番、七月の中旬に至るまでに、穿理の言葉遣いや会話の齟齬には慣れてしまっていた。耐性がついてしまったのだろう。

いや それ以上に、そんな成り立たない会話を自分達なりのコミュニケーションだと思いついていたのかもしれない。

葵が気楽に問いを投げると、

穿理が会話に沿っていない応じ方する。

しかし彼女自身、少なからず自分の対応に自己嫌悪している節があつたように葵は思えた。

彼女は葵との別れ際、いつもこう呟くのだ。

ごめんなさい、と。

そして、季節は冬に差し掛かり、その事件は勃発した。

連続猟奇事件。そのような装飾を施された事件の概要は、確かに事件性の理に適っているものだった。

被害者は全員、首から上を失くした状態で発見された。それは刃物による切断ではなく、まるで首根っこを掴まれて千切られたような犯行だった。

そして、その事件が起こり始め、変化が生じたのは街の様子だけではなかった。

桐生穿理が不登校になり始めたのだ。

彼女のことを気になった葵は、担任から住所を聞いて彼女の自宅に訪ねたのだが、穿理の父親は「五日前の夜から帰ってない」と事情を話した。

五日前。それは連続猟奇事件の最初の犠牲者が出た日である。

だからこそ、葵の焦心は本物だった。

そして、行方不明となっていた桐生穿理をようやく見つけたあの日。

葵はその出来事に巻き込まれ。

連続猟奇事件の犯人を知ってしまったのだ。

「その後、穿理は一週間眠ったままでした。去り際に残した犯人の言葉が本当なら、俺はその人のことを警察に通報するわけにはいかなかった」

一通り話し終わると、鷹塔は「……ふむ」と顎に手を添えて思案するように険しい顔になった。

「『桐生』という性にコミュニケーション能力の欠如……なるほど、【負極連動者】か。こいつは驚いたな」

「負極、連動者……？」

「葵くん。この話はまた後日にしよう。君の話を整合するのに少し

時間が掛かる。そうだな……二日後の午前十時は空いているか？」

「はい、その時間なら」

葵が首肯しながら答えると、「よし、なら今日は解散だ」と鷹塔はチエアから立ち上がった。

月宮葵を見送った後、鷹塔は事務所に戻り、窓際の位置に佇んで彼の去り姿を俯瞰する。

ゾクリ、と背筋に這い上がったのは悪寒か。それとも歓喜ゆえの快感か。

「さて、接触時間はいつにするか」

内ポケットから煙草を取り出し、口に啣えようとす。が、手が震えていたためか床に落としてしまう。

「」

鷹塔は煙草を拾おうとはせず、靴底でそれを踏み潰した。

「まさか、こんな近くに貴方達がいるとは思っていませんでしたよ」
呟きは誰に聞こえるまでもなく、小さな余韻を残し消え去った。

その日の夜、住み始めたアパートを後にして夜の街へと繰り出した。

最近になつて実家を離れ一人暮らしを始めたのだが、一人の時間を作れるというのは本当に気分が高まるものだった。

実家に住んでいた頃は、多くのしきたりやら琴の稽古やら就寝時間まで決められていて、さらには家の中で出歩ける場所さえも限られていた。

自分の家を自由に闊歩できないのがあんなにも苛立つものなのかと実感を得たのは八畳のワンルームに引越してから話である。

まあ、快適な一人暮らしを始めたのは良いのだが、邪魔な要素はある。葵のヤツが電話も無しに転がり込んでくるのだ。

それもその理由の殆どが両手に食料品を提げて「ちゃんと飯食べてないだろうからな」という言葉で始まるものだから後頭部にハイキックをしたくなる衝動が治まらない。本当に馬鹿にしてる。

私は朝食、昼食、夕食全て、新鮮な米を洗って炊いた白米に梅、明太子、山葵の茶漬けという豊富なレパトリーで食しているのだ。ちゃんと栄養ドリンクもプラスしている。

だから、食生活に口を挟まれる理由などない。

……と思っていたのだが、先ほど妹の理夜りやが家に上がりこんできて「ちゃんとご飯食べてる？ 実家にいた頃みたいにお茶漬けばかり食べてない？」と詰め寄ってきたものだから、食生活に少し不安を持ったのも事実だった。

その後、理夜は「葵さんと上手くいつてる？」とか「葵さんどこまで進んだ？」やら笑顔で拷問じみた詰問を連発してきた。そのせいで一人の時間を堪能できやしなかった。

徐々に苛立ちを募らせていった私は、理夜の「処女は卒業した？」という言葉で遂にキレてしまい、後頭部にハイキックを食らわせて

気絶させ、わざわざ嫌悪している実家に電話をして使用人に連れて帰らせたのだった。

そうして、ようやく家で一人になることができた。

のだが……先ほどまでの理夜がいた騒がしい時間を思い出すと、なぜか寂しさのような感情が押し寄せてきた。

悶々とした気分は時間が経過しても治まらず、再び苛立ちを沸騰させた私は気分を落ち着かせる為、こうして夜の街を歩いていた。

時刻は直に深夜零時に差し掛かるうとしている。葵の言っていた殺人事件が街に浸透しているからか、道行く先に人影は少ない。

道中、誰かとすれ違っても誰もが足早に先を急いでいる。おそらく、殺人事件に遭遇しないよう帰路に着こうとしているのだろう。

そんな街中、中心街にまで歩を進めると人の数は増える。ざっと見渡して五十人は超えているだろう。

近くに誰かが居れば事件には遭わない、そんな一般人らしい考えが透けて見えるようだ。

そこまで思っ、私は自分の思考したことに疑問を持った。

……私は何を考えているのだろう。自分だつて一般人に変わりないじゃないか。

確かに一年前、私はあんなことを仕出かしてしまったけど、葵のヤツももう怒っていない。だからあんなことをした私が一般人ではないと思ひ込むのはおかしい話だ。

「苛立つ……」

声に出しているところ、自分の感情が昂ぶっているのは明瞭だった。

その呟きの声量が少しばかり大きかったのか、通行人から視線を浴びた。

私はその視線を無視して、ただ歩を進めた。

まだ、夜は始まったばかりだ。

その後、西区の住宅街に立ち寄った。

私が住んでいるのは東区の住宅街で、この西区は真ん中の地区つまり中心街を通らなければ行くことはできない。

西区に来るのは久方ぶりだった。というのも、一年前に卒業した高校が西区にある為である。

中心街でビルに設置されていた時計を見た感じ、時刻はそろそろ深夜一時といったところだろう。そんな時間帯にもなると人気がなくなるのも自然だった。

頼りになる明かりも等間隔に設置された街灯だけだが、どれも古びていて点滅状態だ。

そういえば、とこの辺り治安が悪くて有名な地区だったと今更ながらに想起した。

それ故か。 いや、それ故であってはならない。

「
道を曲がった瞬間、男性が倒れているのを見つけた。

その男性は人としての死に方をしていなかった。

当然だ。腹部に大穴が空けられて絶命するなんて、断じて普通の人間の死に方ではない。

辺りに飛び散った血から散発する濃厚で鼻腔に絡みつくような臭いを、私はどこか匂いとして認識していた。

この瞬間。

私は、何か言い様のない感情に迫られた。

「あ
」

一年前のあの出来事が脳裏に蘇る。

明確化された過去が、まるで映像ヒジメのように頭の中を駆け巡る。

私は、なぜかこの魂の不在した存在に触りたくなつた。

どこか私を吸引するような感覚が、
どこか魅了するような死体の光景が、
そして。

この死体には、自分と『同じモノ』が残留しているような気がして

「待て」

突然の声に、私は我を取り戻した。

声は男性のもの。声質からして若い……しかし、どこか威厳を含んだ声音だった。

「桐生穿理。その死体に触れるのは現時点においてまだ早い」

カツン、カツンと甲高い足音を響かせながら、その男性は暗闇の中から私の方へと歩み寄った。

「その死体からは残滓が虚空に浮流している。見た限り、『負極』の耐性は付いていないと窺えるな。いや、発現していないだけまだマシといえるか」

そして、立ち止まった時には、チカチカと青白く点滅している街灯が、その男性を照らしていた。

黒いスーツを身に纏ったその男性は、口元に薄い笑みを浮かべながら、

「初めましてだな。負極連動者」

そんな、訳の解らない挨拶をしてきた。

黒いスーツを身に纏ったその男を、私はなぜか普通の人間ではないと直感してしまった。

街灯の点滅する灯に照らされているその男は、どこか不遜な……
それでいて不敵な笑みを浮かべながら再び歩を進めた。

男は私に歩み寄る。

正気を取り戻した私は、なぜかこの男に敵意を抱いていた。いつの間にかこの男を強く睨みつけてしまっている辺り、その敵意は本物と言えた。

「俺に敵意を定めるか。だが、その感情の方向性は誤りといえるぞ、桐生穿理」

「……なぜ、私の名前を知っているの？」

「ほう。会話に成功している辺り、存在としての支障は治療されたようだな。ますます興味が湧いてきた」

私の投げた問いに心じず、男は胸に風穴の空いた死体の前で足を止めた。

「この死体の負極侵蝕率は軽度なものだ。二〇%といったところか。しかし、ただそれだけの残滓でお前を魅了したということは……ふむ。第三者の治療も完全ではなかったということか」

横目で死体を見据えながら、平静とした顔で言う。

「……この男、何で人間の死体を目の前にして普通でいられるんだ。

「お前、何？」

気づけば、私はそう口にしていた。

この男は、あいつと同類な気がする。普通という類から外れ、常識という範疇すらも外れたあいつと。

男はくく、と愉快気に笑いを噛み殺す。

「誰ではなく何、ときたか。確かに、この状況での尋ね事としては実に適している」

何が面白いのか、男は口元に笑みを刻んだままだ。

「俺は鷹塔祭だ。お前の言う『何』という問いに応えるなら魔術師の類といったところだな」

「魔術、師……？」

問い返すように呟くと、男　鷹塔はああ、と首肯しながら内ポケットに手をつ込む。

「今回、お前との接触を図ったのは俺自身の目で確かめたかったからだ。日本の裏家系において第一位の座に君臨し続けていた【桐生家】。その若き姫君の現状をな」

シガーケースから煙草を取り出し、口に咥えながら鷹塔はそんな理解不能な事を言う。

事実、私は鷹塔の話の頭で理解できずにいた。

自分の家が裏家系と言われるのは初めての事だし、魔術師なんて名乗られてそれを信じるのは普通じゃない。

……いや、違う。

『桐生穿理は普通の人間だから、信じることなんてできない』。

その固定概念が今の私を象っているのだとしたら、私はなぜ、鷹塔を普通ではないと敵意を抱いたのだろうか？

「『普通』の人間は『普通』であるが故、『異常』という人種を見分けられない」

鷹塔はライターを取り出し、煙草に着火しながら静かな口調で言った。

「まあ、異常者にも二つの種類が在るんだがな。『自身から異常である』と外的に意識させる異常者』と、『異常である事を隠蔽し、外的意識を妨げることのできる異常者』だ。俺は後者に当て嵌まる」

「……何が言いたいのか？」

「簡単なことだ。お前が俺という存在を『何』という言葉で当て嵌めた。それは、俺が妨げていた『異常という外的意識を感じ取った』ということだ。お前は自分を普通だと思っ込んでいるようだが、実際、普通に成りきれていない。逃げてないで自覚したらどうだ？

お前は俺と同じ、異常であることを隠蔽し続けている異常者だとい
うことにな」

「……ッ！」

私は再びを鷹塔を睨みつけた。

なぜ、赤の他人にそんなことを言われなければならない。

私は異常なんかじゃない。

正常なんだ。

普通の人間なんだ。

こうして鷹塔と会話が成立している時点で、一年前の私とは違
うと証明されているのだ。

呪縛も束縛も、私を縛り付けていた鎖はとうに外れている。

私は普通に成れたんだ。だから、こんなわけの分からない男に忠
告なんてされる筋合いはない。

でも、それなら、何で憤慨する必要があるのだろうか？

自分が普通であると確固たる意思を持っているのなら、軽く聞き
流す程度の素振りでは終始する。

でも、私は鷹塔が発する一言一言に苛立って仕方がない。鷹塔の
言葉が私の脳髄を洗脳していくような、そんな感覚さえ覚えてしま
う。

なら、私、は

「邂逅初日から長話になってしまったな」

黙りこむ私に、鷹塔はつまらなそうに煙草を落とし、靴底で踏ん
で火を消した。

「人払いの結界を張り続けるのも面倒になってきた。今日はこの辺
りで失礼する。桐生穿理、自分が普通に在り続けたいのなら、夜に
街をうろつくのは控えておけ。今のお前では、敵うことすらできず
に死ぬぞ」

「…… どういう意味よ」

尋ねると、鷹塔は踵を翻しながらこう答えた。

「今回の事件を起こしている犯人は、お前を狙っている可能性があ

るといふことだ」

そう言い残して、鷹塔はこの場から去って行った。

私は……その場に立ち尽くしたままだった。

ああ。きっと鷹塔の言う通りだ。私は自分を普通だと思い込んでいただけで、普通に成りきれていないのだろう。

鷹塔が異常者だと見抜けてしまったことで、それが証明された。

いや、それ以前に。

眼前に在る死体を直視して、悲鳴を上げなかった時点でそれに気づくべきだったのかもしれない。

鷹塔さんの事務所に初めて立ち入ったあの日から、二日はあつと
いう間に過ぎていった。

その間、俺は地道に大学の出席日数を確保していたのだが、気にな
る事が一つ増えていた。

今日の大学の授業の一眼目を終えた後の帰宅途中、ちゃんと飯を
食ってるか確認しに穿理の住むアパートに立ち寄ったのだが、イン
ターホンから聞こえてくる小さな否定によって家に入ることを拒否
られた。理由を訊ねたところ、俺と会いたくない、顔も合わせたく
ないとの言い分だった。

……何かしたっけな？ と考えた末、二日前に鷹塔さんの事務所
に行くのを内緒にしたのがいけなかったのだらうと思いつた。し
かし、穿理自身の事で相談をしに行ったと言うのもどこか恥ずかし
かった。なので、彼女の機嫌が直るまでそっとしておこうと結論付
けた。

穿理のアパートから郊外まではおよそ二キロといったところか。
電車を利用した方が早いのが、約束の時間まで時間はそれなりに余っ
ていたので徒歩で向かうことにした。

郊外地区に辿り着くと、二日前と同様に大きく息を吸って新鮮な
空気で肺を満たした。ここ周辺は本当に良い空気をしていると思う。
中心街の空気と比較できるほどに淀みの無い大気なのだ。

「そつえば、桐生の実家近辺もこんな景色なんだよ……」

過去を思い出しつつ、俺は二日前と同じ場所を目指して歩を進め
た。すでに地図がなくても場所は把握できていたので、辺りを呆と
見回しながら単調な足取りで歩き続けた。

そして なぜか高校三年の頃の思い出していた。

あの頃、俺と穿理を取り巻く環境は確かに正常で普通だった。会

話が成り立たないのもいつしか当たり前の日常と化していて、そんな日常を楽しんでいた自分も在った。

さらに想起すれば……一年前の十二月。クリスマスにシルバーアクセをプレゼントしたあの時だけ、穿理は「ありがとう」と言ってくれたんだよな。

あの時は、一瞬だけ会話の齟齬が生じなくて物凄く動揺したけど、穿理は気にしていない様子だった。いや、それ以上にどこか嬉々としていた。それからすぐに会話の齟齬は再開となったけど、なんであの時だけ会話が成立したのか未だに疑問と思っている。

……まあ、あの時の穿理の嬉しそうな笑顔を思い出すと、そんな事はどうでもいいって認識に変わっちゃうんだけどな。

と、そういう過去を思い返していると、視界に鷹塔さんの姿が映った。彼は片手を上げながら俺を待っている。

「すみません。わざわざ待っていてくれたんですか？」

「まあな。俺としても早く話を始めたいところだったし、焦っていた部分もある」

……焦る？ 俺との用の後に何か急用でもあるのだろうか。

「まあ、とりあえず中に入ろう」

気にかかりながらも、俺は鷹塔さんの促しに頷き後を追った。

昨日と同じく、俺はソファアに座った。鷹塔さんは「少し待っていてくれ。良い代物が手に入った」と笑いながら給湯室へと向かった。

それから約五分後。給湯室の扉を開けて現れた鷹塔さんの両手にはコーヒークップがあり、その一方をソファア前に設置されてある木製の机に置いた。

「良い代物って、このコーヒーですか？」

「ああ。イギリスにいた頃に初めて口にしたんだが、これがあまりにも美味くてな。昨日の朝に中心街まで赴いて購入してきた。まあ飲んでくれ」

嬉しそうな笑みを浮かべながらそう促すので、俺はコーヒーカップを手に取り、口元まで運んだ……のだが、何か違和感に気づいた。試しに一口飲んでみた。……間違いない。これは

「あの、鷹塔さん……」

「ん？ どうだ、美味しいだろう？ いや、まさか粉に熱湯を注ぐだけで本場の美味しいコーヒーが飲めるとはな。わざわざロンドンにいる同僚に尋ねた甲斐があった。コンビニエンスストアで三百円足らずで買えるなんて良い時代になったもんだ」

やっぱり。これ、インスタントコーヒーだ……。

「あの、鷹塔さん。凄く言い難いんですけど……」

「なんだ？」

「……これ、インスタントコーヒーですよ？」

「……コーヒーじゃないのか、これは？」

「いや、コーヒーであることに変わりはないんですけど、粉末にお湯を注ぐだけで作るのは本場とは言わないと思います」

それから、俺は勘違いをしている鷹塔さんに説明を始めた。

まず、インスタントコーヒーは香りやコクが豆から挽いて淹れたモノとは段違いに不味いということ。コーヒー豆にも膨大な種類があり、本当に好きな人は自分好みの豆を選別して購入すること。さらにいえば豆をから挽いて淹れる用の器具が存在すること。

結論。俺は十四歳から親父の影響で豆から挽いたコーヒーを飲んでいたので、これは断じて本場のコーヒーではないと断じた。

で。説明を終えた後、鷹塔さんはデスク上に置いてある古びた電話機に手をかけ、キーボードをタイピングするように物凄い速さで番号を押していった。

そして、受話器を耳に当てて相手が出た瞬間、

「ハメたな？ お前、ハメたな？ 聞いたぞ、コーヒー好きは豆から挽いたモノを飲むらしいじゃないか。……おい、聞いてんのかコラ。なに笑い堪えてやがる。もしやお前、ロンドンで俺に出したコーヒーも粉末だったとか抜かさないよな？ おい聞いてんのか

！ 爆笑すんじゃないやねえ！ 次にハメたら殺すぞ！ 覚えておきやがれッ！」

ガチャンツ！ と乱暴に受話器を戻し、なぜか片手の掌で顔面を覆う鷹塔さん。

嫌な沈黙が続き、二分ほど経ってから鷹塔さんは大きいため息を吐いて、

「さて、では二日前の話を再開するか」

と、チェアに座って足を組み、背もたれに寄りかかる鷹塔さん。

……なんか仕切りなおしたいな雰囲気になっていた。

とはいえ、先程の事を追求すると嫌な目に遭いそうな気がしたので、俺は鷹塔さんに話の先を促した。

「最初に一つ尋ねたいんだが、葵くんはなぜ自分が生まれてきたと思う？」

「……はい？」

話が突飛すぎて、思わず首を傾けてしまった。しかし、鷹塔さんは至って真剣な面立ちをしていた。

「深く考えこまなくていいぞ。君が考える、君がなぜ生まれてきたのかを思考すれば良い」

「えっと、そりゃあ親が産んでくれたからじゃないですか？ 人間は誰でもそうやって生まれてくるものでしょう」

一番簡単に思いついた回答を述べたのだが、鷹塔さんは「二十点といったところか」と返答した。

「まあ、君のような普通の人間の見解ではそうなるだろうな。だが、君の回答はあくまで世間一般論であり、『「普通」の回答』に過ぎない。当然と言えば当然だな。君は普通の世界じょうぶなで生き、普通の人生を送ってきたからだ。だが、非日常に踏み込むとそうはいかない。『

「普通」の人間』が非日常の事柄を認識するというのは、同時にその人間が非日常側に立ち位置を変えらるということだ」

「つまり……鷹塔さんが言いたいのは、非日常の事柄を知りたいのなら、非日常側に立ち位置を変えらるってことですね？」

「ああ。これまで君が培ってきた普通の人生を、非日常の人生に変えてもらう。それを誓うなら、今回この町で起こっている事件の本質を教えよう」

どうする？ と鷹塔さんの真剣な眼光が尋ねていた。

……普通の人生を非日常の人生に変える。

迷いはあった。逡巡は当たり前だった。決断が怖いのも当然だった。

でも、俺は

「穿理を守れるのなら、答えは決まっています。俺は非日常側の人間になります」

そう、はつきりと言えた。

「ちゃんと考えたのか？ 随分と早い決断のようだが。死ぬかもしれない運命に足を踏み入れるのは馬鹿のすることだぞ」

「死にかけるのは慣れていきますので。生憎、俺は一年前に誓ったんですよ」

そう。もう二度と、穿理を悲しい目に遭わせないと。

その為なら何でもやる。非日常でも何でも、足を踏み入れてやる。

「なるほど。君は馬鹿だな」

「褒め言葉として受け取っておきます」

「よし、なら話の本題に入るか」

どこか楽しげな笑みを浮かべながら、鷹塔さんはデスクの上に置いてあった一枚の用紙を俺に投げ渡した。

中空でそれをキャッチして、その用紙を見やる。

「なんですか、これ？」

「今回、西区の住宅街で犠牲者となった人間の裏情報だ。この二日間で俺が直々に現場を回って調査した」

「調査つて、それは警察がもう」

と、そこまで口にして俺は気づいた。

鷹塔さんは、俺が非日常の人間になったからこそこの用紙の拝見を許可した。

警察は非日常側の人間じゃない。彼らに行える調査はあくまで『普通』の調査』だ。

普通の人間には普通の調査しか行えない。つまり、ここに記されている概要は

「読んでみる。未知を知る第一歩だ」

いつの間にか煙草を啜っていた鷹塔さんに向かって一つ頷き、俺は用紙に記入されてある文章を読み始めた。

「第一の犠牲者。負極侵蝕率一五％……。殺害前の存在衰弱、レッドライン。第二の犠牲者。負極侵蝕率二三％……。殺害前の存在衰弱、イエローライン。追加、死体から半径五メートル範囲に負極の残滓」

「これが非日常の人間が行った際の一般的な調査だ。何の事だか全く理解出来ないだろう？」

「ええ、さっぱり解りません」

素直に首肯する俺だが、一つ引っかかることもあった。

「鷹塔さん。この負極って……」

「ああ。君の推測通り、この事件は桐生穿理と関連性があったぞ。そう。二日前、鷹塔さんは穿理のことを【負極連動者】と言ったのだ。

「今日は長話になりそうだな。葵くん、コーヒー淹れてきてくれ。君の方が淹れるのは上手だろう」

空になったカップを投げ渡しながら、鷹塔さんは話を紡ぐ。

「今日は俺の外出時間まで話せるだけ話そう。まあ、ゆっくりとしていけ」

俺は大きく頷き、これからどんな話が聞かされるのか緊張を抑えながら給湯室に向かった

給湯室でコーヒーを淹れて（インスタントだが）事務室に戻ると、鷹塔さんはチェアに座ったまま部屋を副流煙で汚す行為に耽っていた。スチール製の灰皿には煙草の吸殻が三つ増えている。どうやら俺がコーヒーを淹れていた五分足らずの時間に三本も吸い終わっていたようだ。

「鷹塔さんって、ヘビースモーカーなんですか？」

首を傾げながら、思わずそんなことを尋ねてしまう。

「一日に何本以上吸ったらヘビースモーカーになるかなど定義付けられないが、まあそうなんだろうな。煙草は二十歳になった誕生日の午前零時五分くらいから吸い始めた。これほど気を落ち着かせてくれる抑制剤はない」

……抑制剤って、鷹塔さんは何か精神的疲労でも溜まっているのだろうか。俺からすれば落ち着いた大人って感じの印象を受けるのだが。

鷹塔さん専用のデスクにコーヒーカップを置いて、俺は自分の力ツプを持ったままソファーに座り直した。

「よし、では会話を始めるか」

と前置きして、鷹塔さんは早速コーヒーを一口喉に通す。

「葵くん。『裏家系』という単語を聞いたことはあるか？」

「……裏家系、ですか？ いえ、俺は初めて耳にします」

「じゃあ、『裏家系』という単語を君なりに解釈してくれ。当てずっぽうではなく、真剣に考えた結論だ」

そう言われた俺は少し顔を伏せ、思考を走らせた。

裏ってというのは表の対に位置する言葉だ。昔親父から、表は『光』、裏は『闇』と教えられたこともある。

光は「正しい」とされ、闇は「誤り」でもあるとも聞いたな。これは「正」と「負」にも結びつけることができるし、「善」と「悪」

とも解釈のできる言葉だ。

そう定義として成立されていて、尚且つこのタイミングで尋ねられたということは

「……非日常に属する家系ってことですか？」

俺は結論付けてそう言った。鷹塔さんは「正解だ」と笑みを浮かべながら両手を叩く。

「古より、日常世界を守護する役目を担った家系。日常から外れ、非日常の世界でこそ存在意義を見い出せる家系とも言っな。『裏家系』にも二種類があるんだ。妖魔、邪霊を滅する【退魔家系】。この家系の中では『工藤』、『蒼巴』、『連城』が退魔御三家として成立しているな。

対し、その家系が独自による概念の探求を行い、他の家系には真似のできない唯一無二の探求成果を子孫に残す【探求家系】がある。こちらは【退魔家系】のような戦闘に特化した家系ではなく、あくまで自分達が生み出した探求成果を残すことを優先する。【探求家系】は世界にもそれなりに数があり、日本での有名所では『千堂』、『静守』、『千歳』。そして、序列第一位として『桐生』がある。「桐生って、もしかして……」

「ああ。たまたま姓が同一なわけじゃなく、桐生穿理は『裏家系』である桐生家』で生まれた人間だ」

鷹塔さんははつきりと、そう口にした。

「桐生家はおよそ八百年前から、人間の持つ『負の感情』という概念を探求してきた家系でな。最初の探求成果として『負邪』という概念の解明に成功したんだが、彼らはそれを利用し、さらなる探求成果を獲得した。それが『負邪』の上位概念である『負極』だ」

『負極』。その概念が、穿理と深い関係性を持っていると鷹塔さんは言っ。

「負極というのはな、『負を極める為の「モノ」』なんだ。ここで言う『モノ』というのは、『人格』、『性格』、『嗜好』を強制的に『誤』った方向へと変化させてしまうという意味だ。君は一年前の

桐生穿理をコミュニケーション能力が欠落していると言ったが、それは違う。桐生家が欠落するように細工を仕掛けて産んだだけなんだ」

そこまで聞いて、俺は絶句した。

人間として生まれたのに、家族の手によって会話に齟齬が生じるように細工を施された。

そう考えると、穿理はいつ自殺してもおかしくない境遇に立たされてきているのと同じだ。

いや、そんなことより、穿理はこのことを知っているのだろうか？ ……いや、知っていたら普通でいられる筈がない。俺だったら自殺するかもしれない。

俺は瞬く間に桐生家の人達に怒りを感じるようになった。実の子供にそんな細工をしてまで探求成果を残したいなんて馬鹿げている。それは最早、人間のすることじゃない。

穿理の尊厳を蔑ろにして、穿理の心を苦しめて……だから、一年前にあんなことになったんじゃないか。

「……馬鹿野郎」

苛立ちが治まらず、俺は無意識の内にそう吐き出していた。

鷹塔さんの話によると、桐生家は負邪という思念 集合無意識とも言うらしい を一個体の躰かひたと同化させる実験を行なっていたらしい。その実験が始まったのが八百年前で、負極という概念を確立させたのがおよそ四百年前らしい。

「桐生家は負邪という概念を明確化させたにも拘らず、その上を目指した。まあ、考えてみれば当然の向上心と言えるな。探求家系は探求を行い続けることに存在意義がある。負邪を解明して、さらなる探求意欲が湧いたんだろう。そして、それから四百年。桐生家はあろうことか、負極という概念までこの世界に確立させてしまった。俺の所属している魔術団体でも一時期話題になったな。もしや【極界くかい】と連動を行える技術を作り出すとは誰も思っではいなかった」「……極界ってなんですか？」

負邪や負極という単語の意味をまだともに理解できていないのに、また新たな単語が出たことに多少の頭痛を覚える。

鷹塔さんは煙草を吹かしながら、至って真面目に返答をくれた。「ああ、極界というのはな、有り体に言えば【世界の根源】……いや、君にしてみれば有り体の例えでも理解は難しい、か」

苦笑しながら、鷹塔さんは「ふむ」と短くなつた煙草を灰皿でもみ消した。

「 そうだな。葵くん、この世界を創つたのは『何』だと思っ？いきなり話が飛躍した。が、鷹塔さんは真剣な口調で問いかけている。おそらく、この質問は極界という単語と関わりがあるのだろう。」

「……ありきたりな答えですけど、神様……ですか？」
「根拠もない論は好きじゃないが、良い線を行ってるぞ。では、ここではまず神が世界を創つたと過程して話を進めていこう。」

俺達魔術師は、神と呼ばれる絶対的存在を『創造者』と呼んでい

る。現代の魔術師の中には、魔術を生み出したのは創造者である、などと定義している莫迦もいてな。まあ、創造者が世界を創ったからこそ、魔術は生まれたという解釈なんだろう。

創造者は世界を創った。宇宙を創り、地球という惑星を創り大地を、河川を創った。動物を創り、人間を創った。これがこの世界で認められている説であり、君でも知っている説だ。魔術師の類ではこの人間を創る過程において種類を分けたという説を研究しているヤツもいる。ここで言う人間の種類、それが何か分かるか、葵くん？」

「はい。男性と女性、ですよね？」

「そうだ。人類最古の男性と女性であるアダムとイヴが説として成立している。ここで関わってくる男性と女性。陰陽においては男性が『陽』、女性が『陰』とされる。他にも男性は『光』、『正』とされ、女性は『闇』、『負』とされているな。

こう考えると、男性と女性はその本質が全てにおいて対極だろうか？ 何も人間に例えなくとも、動物、植物にも雄と雌がある。対極に当て嵌まらない生き物など世界には存在しない。対極から外れたモノはガランドウであり、ただの虚無的な不在だ」

そして、対極が在ってこそ世界は正しく成立すると鷹塔さんは一度言葉を止めた。

「世界は対極によって成立している。なら、対極が世界を象っている可能性もあるのではないか？ という暴論まで唱えだす魔術師が俺の身内にてな。魔術師達はその説を否定してきたんだが、その仮説を裏付ける証拠が近代で浮かび上がってきた。それが極界だ。

極界というのは、対極に当て嵌まる『正』と『負』のどちらかが基板となり根幹とされている世界だ。世界を導く方向性が最初から定まっている世界、とも言っな。前者が【正の極界】、後者は【負の極界】と呼称されている。この現実世界がどちらの世界に位置づけられているか……まあ、そんなことは神にしか分からないんだろ。だが、この【極界説】きよくかせつを唱えた魔術師は、この世界が【負の極

界】であると断言したんだ」

鷹塔さんは少しだけ顔を険しくさせ、そう言った。なぜか小さく舌を打っている辺り、何かに憤っているような感じさえ窺えた。

「この世界が【正の極界】か【負の極界】かは置いておき、極界との連動　つまり世界を導く方向性を識ることのできる人間を桐生家は作り出した。それが」

負極という概念を内包した少女　桐生穿理だと鷹塔さんは結論付けた。

御堂^{みどう}彼方^{かなた}は童心を忘れない少年だ。それは十七歳という、いわゆる反抗期の時期においても違^{たが}いなく、彼は通っている高校においても純心すぎる性格として有名であった。

趣味は多種多様なペットを飼うこと。小動物、爬虫類、魚類
その他もあるが、彼は子供の頃から動物という存在に心を奪われていた。動物に依存していた、とも言えるだろう。

動物と共に生きると小学校に通っていた頃、大真面目に言い放つて莫迦にされたあの時のことは、未だ鮮明に記憶している。彼方はあの同級生たちの蔑みの笑みを忘れたことはない。

彼は童心という概念に縛られたが故、動物と共に生きるといふその頃の存在理由を自覚していた。

一年前。学校の帰り道で捨てられた犬を見つけ、深夜になるまでその犬の相手をしたことがあった。道行く人々からすれば彼方を不気味に思ったことだろう。

彼は犬に延々と話しかけていた。

それが彼方の自己満足であり、童心に縛られたが故の行動であることを彼は知らない。

『動物と話がしたいかい？』

突然の声は、彼方の心の奥底を覗いたような問いだった。彼方は慌てて振り向いた。

そこにいたのは、自分より少し年上と窺える青年だった。

『動物と話がしたいかい？』

青年は二度、全く同じ抑揚で言葉を繰り返した。

……

今日もいつも通り、あの人の指示通りに行動を起こした。時刻は深夜二時。今日は月さえも見えない宵闇の刻であった。『彼女』が次元を渡って連れてきた生きている被害者を殺したのは、紛れもない御堂彼方であった。

なるほど、この方法ならば近所に悲鳴が聞こえることはない。納得しながら、彼方は腕に貼り着いた濃厚な赤を舌で味わった。

彼方の腕は、端的に言えば異常なカタチをしていた。

被害者の血液が付着している右手首から下が、人間の持つカタチとは言えなかったのだ。

「うーん……ここ最近は大鳥類の喙を連想して形状を変態させたんだけど、飽きてきたかなあ。もつと他の形状も試してみたいよ」

手首から下、それは例えると古代西洋の槍だ。これで穿たれた部位は、なるほどこの街で騒がれている『異常な事件』の被害者と同じ末路を辿ることだろう。

「君はどう思う？ ライオンみたいに喰った方が格好良いかなあ」

彼方は傍らに開いている半径一メートルほどの次元の穴　その内部にいる少女に話しかける。

次元の穴の内部はただ黒い。あの人の話によると、この少女はもう一つの世界に渡ることも可能だそうだ。

「……死体なんか見たくない。怖いもん」

次元の穴からそんな声が届く。震えた声だった。

「そっか。それにしても、君っていつもその穴の中にいるよね。なんで？」

「地面が怖いから」

「ふーん。よく分からないけど、暗い場所ばかりにいたら心まで暗くなっちゃうよ」

「それでも、地面に降りるよりはマシ」

どうやら、少女は頑なにこちらの世界に降りる気はないらしい。

「ま、君がそれでいいなら何も言わないけど、ね。君の協力がある
てこそ、僕も動物の心を識ることができるんだ。君には感謝して
るよ」

「……彼方くん。勘違いしてない？」

「なにが？」

「動物の心を識ることができたって言うけど、それ、呑まれてるだ
けだよ」

「……？」

少女の言っていることはよく解らなかった。自分は間違いなく動
物の心を知れた。それは正しい事実だ。

いや。

それを事実だと錯覚しているほどに、彼の自我は呑まれ始めてい
るというだけの話だった。

目を覚ますと、日は完全に落ちていた。

私はベッドからゆっくりと腰を上げ、壁に背を預けて布団の上に座り込んだ。

掛け時計に目をやると、時刻は午後十時半を回ったところだった。確か、今日は朝葵が家を訪ねてきて、それで一度起きたんだっけ……。

そこからの記憶は曖昧だ。おそらく葵を追い払った後にもう一度寝てしまい、この時間まで微睡みの世界に浸っていたのだろう。我ながら規則正しい生活などこれっぽっちも意識していない。眠り過ぎだ。

私はベッドから降りて私服に着替え始めた。のだが、玄関脇に置いてる電話機の留守番ボタンがチカチカと赤く点滅していることに気づき、片手で白地のシャツのボタンを嵌めながらもう一方の手で留守番ボタンを押そうとした。のだが

「五件……葵も暇してるわね」
ため息混じりにそう呟いた。

私の家の電話番号を知っているのは月宮葵だけだ。となるとこの五件の留守電は全て葵からの着信になる。迷惑極まりないが、五回も着信が鳴ったのに一度も起きなかつた私自身にも少し驚きを抱いた。

私は留守電を三件だけ再生した。やはり着信は葵からのもので、六月十日が云々と機械音が再生され「飯くらい食べるよ」「寝てばかりいないでちゃんと起きとけよ」「ニュースくらい見ろよ。外は物騒だからな」という用件が録音されていた。

私は、葵の要らない世話に苛立った。そんなに心配されやすいのだろうか、私は。

考えると苛立ってきた。留守電は二件残っているけど、もう聴い

てやるものか。

私は不愉快になって、着服を終えりとすぐに家を後にした。こういう時は、夜の街で一人散歩をすると頭が冷えると思いつたからだった。

……留守番電話サービスに接続します。ご用の方は、ピーツという発信音の後にメッセージをどうぞ。

『もしもし、葵だけど。穿理、まさか二日間も眠りっぱなしってわけじゃないよな？ ちょっと用があつて家の方には行けなかった。留守電ばかりで悪い。今日は絶対に外に出るなよ。何故かは明日会って話するから。じゃあ、また明日』

……六月十二日・午後十時四十三分、メッセージを録音しました。

「出ない……何やってるんだ、穿理のヤツ……」

はあ、とため息を漏らしながら、月宮葵は事務所内の受話器を戻した。

「出なかったのか？」

傍らにあるチェアに足を組んで座っている鷹塔は、葵に尋ねた。「たぶん、出かけてるか寝てるかのどちらかだと思います。この時間だと、街に出かけている可能性の方が高いと思います」

「しかし、こうしている間に新たに二つの死体か。犯人も相当餓えているんだろうな」

強引にでも携帯電話を持たせるべきでした、と葵は頭を掻きまわした。

「それより、事件の犯人が高校生って本当なんですか？」

葵の問いに、鷹塔は険しい顔付きで首肯した。

「俺の知り合いが観測したから絶対だ。だが、気になる点があるのも事実だな」

鷹塔は内ポケットから一枚の写真を取り出し、デスクに置いた。そこに写っているのは、取り立てて特徴というものが見当たらない黒髪の少年だった。

「御堂彼方、十七歳。裏家系とも、非日常とも無関係の少年だ。ただ一つの点を覗いてな」

「ただ一つの点？」

「ああ。この少年は過度の動物好きなんだ。知り合いの調査によれば、趣味は動物園、水族館巡り。ペットを何十匹も飼っているらしい。まあ、これだけで言えば過度の範囲外だ。だが――」

と、鷹塔はチェアに深く背を預けたまま、言葉を紡いだ。

「この少年は動物の心を知りたいという願いがあつたそうだ」

「……はい？」

鷹塔の言っていることの意味が解らず、葵は首を傾げた。

「過度、いや狂っていると書いてもいいほどの動物嗜好症。さらには己が存在理由　心界を無自覚ながらに認識している。その辺りが目を付けられたんだろうな」

この世界に生きる人間は、自己の内界に【心界】と呼称される存在理由を保持している。自身の生きている理由というのが一般的な使われ方だが、その本質は鷹塔のような非日常側の人間しか知りえない。

自身の進むべき【絶対的な方向性】。この心界を認識した者は、その方向性のみにしか道を進めなくなる。否定や拒否などは一切通用せず、完全な強制を心的に促されるのだ。

世界というモノを導く方向性である【極界】。

人間個体の生きるべき方向性である【心界】。

なるほど、と鷹塔は一人納得する。

確かに、最初の駒とするならば良い手を打ってきている。しかし

「心界覚醒者ごときが、極界と連動できる者を相手にしようとした時点で勝敗は決している」

鷹塔はチエアから腰を上げた。

こちらに得など全くないが、見えない相手に踊らされるのも癪だ。

「葵くん、君はここで待つてる。桐生穿理が街に出かけているかはまだ不確定だが、見つけ次第俺が保護する」

「お、俺も」

「駄目だ」

言い切らせる前に、鷹塔は強く言った。

「行ったところで君には何もできない。足手まといになるだけだ。だが」

と、鷹塔は葵の肩に手を置き、小さく笑いかけた。

「お姫様を最初に癒すのは君が適任だ。格好の良い言葉の一つでも考えておけよ」

葵は反論しなかった……いや、反論する前に自分が何をすべきか思考したからこそ、強く頷いた。

「では、行ってくる」

そう言い残した鷹塔は、片手を上げながら事務所を後にした。

街の中枢まで足を運んだが、心なしかいつもより人影が少なすぎる気がした。道行く人達も足早に帰路を辿っているように思えるし、彼らの表情には焦りが窺えた。

そんな中、とりわけ用もなく夜の街での散歩を満喫した私は、彼らと同じようにそろそろ帰路に就こうと思いついた。しかし、先刻から何かがおかしいことに気づいた。

「……………」

自分がおかしな顔をしているのも理解できる。

なんだこれは。東区の住宅街に帰ろうと道を辿っていたのに、私はまた中枢地区に戻ってきていた。

しかも、先程より人の数は減っていた。

何かがおかしい。何かが変わった。何かが違う。

どこか錯覚めいた感覚。

それは街という檻に囚われたかのような

それは何かに監視されているかのような

「初めまして、桐生穿理さん」

突然の若い男の声に、私は狼狽しそうになった。

ゆっくりと振り返る。そこにはこれと違って特徴が見当たらない学ラン姿の少年がいた。

顔立ちとさっきの声質からしてまだ高校生くらいだろう。柔和な笑みを浮かべながら、彼は桐生穿理という私を静かに見据えている。

その異形と呼べる腕を、人間の顔面に突き刺したまま。

「うーん、『隔絶結界』に入ってもらったんだけど、桐生さん全然動揺してないね。普通、街から人が消えれば驚くと思うんだけどなあ」

御堂彼方は本心から不思議そうに小首を傾げた。

彼の右腕はすでに人間の腕ではなかった。顔面から突き出ている部位に五指というものは存在せず、ただ一点に向けて槍のカタチに収束していた。

穿理の視線すら、槍以前に死体へと収束している。

「あ、これ？ 見ての通り『人間だったもの』だよ。桐生さんに見せる為にけっこう殺してきたんだけど、僕が残した『人間だったもの』を見たのは一度だけだったけ？ 残念だなあ。『人間だったもの』は全部桐生さんの為に用意したんだから、全部目を通してくれなきや」

御堂彼方は愉快気に笑った。

その笑みは邪気が全く感じられない、子供の浮かべるような笑顔だった。

対照的に、穿理は顔に感情を出さず、心の内側で激しく狼狽していた。

そして、胸中でこう呟いた。

なんだ この状況は、と。

何で自分が連続殺人事件の犯人と遭遇している？

何でこの少年は人を殺して笑ってられる？

そして、何で。

彼の腕で穿たれた死体を見て、自分は興奮している？

自我が迷走している。

それは正常な意識からの強制反転。

三日前に最初の死体を直視した時と同一の、魅了のような魅惑。

「わ、私……は」

呼吸が苦しい。

身体全体が熱を帯び始める。

何かが胸の奥で騒いでいる。

その原因が、桐生穿理には解らなかった。

そして。

御堂彼方の奇襲によって、あらゆる意味での覚醒が始まる。

「ッ！」

右脚の皮膚を抉られた。

何に？ と考える前に、さらなる追撃が襲いかかる。

穿理は上空からの気配を感じ取る。

夜の空を飛翔した御堂彼方は、穿理の脳天目掛けて腕の槍を振り下ろす。

穿理は考える前に行動を起こした。低い跳躍で三メートルほど後退する。

瞬間、御堂彼方の落下した地点のコンクリートが粉碎される。

「ひゃは！」

御堂彼方は、コンクリートに突き刺さった槍を強引に振りほどき、瓦礫という凶器を穿理に向けて飛ばした。

「あー！」

右脚の皮膚が思いの外に深手だったのか、上手く感覚が伝わらずに移動が行えない。

直系三十センチほどの、瓦礫という弾丸が牙を向く。

どれもこれも、一発当たれば重傷が容易に予想できた。

しかし、その前に。

その予想の斜め上に行く『結果』が桐生穿理の眼前に形成された。

瓦礫の弾丸が『障壁』に直撃し、突破できずに地面に転がり落ち

た。

「な」

御堂彼方の顔から笑みが消える。

第三者の参入を想定していた者は、この場にはいないであろう。

「無粋な真似だが、死なせるつもりは毛頭ないんでな」

桐生穿理の背後から、その声は聞こえた。

ありえない、と御堂彼方は思った。

この隔絶結界を張ったのは『彼』だ。これは周囲との調和の律をバランス乱さずに構築した、結界に対しての『意識を封絶』する効力のある上位結界なのだ。

その内部に侵入を果たした。それが意味するのは、この男が隔絶結界に意識を向けられるだけの存在であり、『彼』の創りだした世界を突破できるだけの實力を持っているということだ。

「……あなた、『何』だ？」

御堂彼方は、ここに來て初めて敵意という感情を抱いた。

黒いスーツを身に纏った侵入者は、一つ鼻を鳴らした。

「なんだ？　ここ最近のこの街は異常者が多すぎるな。皮肉なことだ。その問いは自分が異常者であることを証明しているぞ、御堂彼方」

昏く暗い、閉ざされた夜の世界。そこに、鷹塔祭という魔術師は現れた。

「ふむ。視たところ心界の種類は【忘我】^{ぼうが}だな。なるほど、今の君を形作っているのは二つの心。つまり『自我』と『童心』か。

【忘我】という心界はすでに覚醒を終え、そして『童心』に【負極の種】を植えつけられていると見える。『童心』は拡大した【負極の種】で塗り潰され、殺人という行為に背徳感を抱かない。それも『童心』がまだ消滅していないが故、か」

御堂彼方は鷹塔の言っていることが全く理解できなかった。

それもその筈である。今の御堂彼方を形作っているのは自我を負の感情で圧迫を続けている『童心』のみである。彼の内界にある『自我』は『忘我』という対極の心界によってすでに消滅していた。

つまり、童心という純粋な心が負の感情と同化してしまい、『正しい事』と『悪い』いことの区別がなくなっている状態だった。故に殺人という行為を誤った行為だと認識できず、結果、自我に頼って行動を起こすしかできなくなる。

しかしその自我さえ【忘我】の覚醒を施されたが故、消滅してしまっただけだ。

そして、残ったものは負極の種と同化した童心のみ。それだけが今の御堂彼方の在り様だ。

つまり、自我もなく、童心さえも負の感情によって支配された今、彼には正常な思考 ^{カテコリ} 世間一般的な考えは通じず、異常者の分類に分類されたということだ。

「そして、【負極の種】は内界的な存在としての記録の書き換えか。なるほど、君が願いは動物と話したいわけでも、動物の心が知りたいたいわけでもなく、動物になりたいということだったのか。異常者にありがちな正常思考の欠落だな」

鷹塔の指摘は正しく、しかし御堂彼方はその指摘さえ理解することができずにいた。

「……何、言ってるんだ、あんた？ あんたの言ってることがこれっぽっちも理解できない」

「当然だ。君はすでに正常な人格を喪失している。今、君が一個体の生命として存在を永らえていられるのは負極の種があるからだ。尋ねる。君の心界を完全に覚醒させ、負極の種を植えつけたのは誰だ？」

鷹塔は強い口調で問うた。

「鷹塔、これは一体どういうこと？」

しかし、その直後に穿理が会話に割って入る。

「何で街に誰もいないの？ この男は何で私を狙」

しかし、穿理は最後まで言葉にできず、びくん、と大きく身体を痙攣させた。

「あ あ、あ」

両眼を見開いた先に、夜空が見える。

(始まったか)

鷹塔は覚醒の前準備を、しかとこの目で見ていた。

御堂彼方の変態した腕が、桐生穿理の右脚の皮膚を穿った。その瞬間から負極の侵蝕は始まっていたのだ。

そして、御堂彼方も同時に。

「う……うう、ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ッ！」

負極の支配権を桐生穿理に略奪されたが故、残っていた『童心』という名の自我』が崩壊を開始する。

そう。

御堂彼方がどれだけ負極の種を拡大させ、同化率を上昇させていたとしても。

桐生穿理という負極を体現した存在に支配権を奪われるのは当然の結果と言えた。

「 穿理の身体の周囲に、黒色の『何か』が霧散している。」

それは、彼女の体内に内包されていた負極という粒子。彼女が覚醒した今、負極は体内のみでは抑制を不可能とされ、身体から散発を始めたのだ。

いつの間にか、穿理の両眼は禍々しい赤色に変質していた。

「 外界に出た気分はどうだ、負極運動者？」

薄い笑みを刻みながら鷹塔はそう問うた。

しかし、内心では感情が昂ぶっている。高揚感が治まらない。

そうだ。なぜなら今、自分は。

この世界を創った創造者の子供と会話をしているのだから。

「 貴方は、魔術師ね。桐生穿理の脳髄には鷹塔祭と記録されているわ」

静かな、それでいて柔らかな声音でそれは言う。

「……そうね。貴方の問いに応じるなら、本当は外界になんて出たくはなかった」

それは、完全に壊れてしまった異常者、御堂彼方に冷たい視線を向け、言ノ葉を紡ぐ。

「でも、あの醜い生命が私の子供である以上、冥土に葬送する役目は私にあるわ」

完全に壊れてしまった御堂彼方は、ただの動物となっていた。最後の記録が肉食動物だったのか、四肢を巧みに扱い、神速の疾走を以ってそれを喰わんとする。

「魔術師さん。何か武器はあるかしら？」

「桐生穿理は琴を習っていたらしいな。それもいつか来る実践の為の訓練だと俺は推測していた。これでも使え」

鷹塔は魔術を起動させた。形成魔術としては下位の術だが、この存在ならば容易く扱い切るだろう。

そして、その右手の五指に五つの金糸が具現化した。

「では、貴方を束縛していた理を穿ちましょう」

後は全てが容易かった。

御堂彼方だった者が攻撃範囲に入った瞬間、負極連動者は身体の反転を行う。

夜の世界で舞うように、鮮やかさと雅さを残留させながら、五つの金糸を振るった。

御堂彼方の身体は五つに解体され、絶命の道を辿った。

一秒以上、三秒未満の一刻。

それが、連続殺人事件の犯人の末路だった。

……あれから何時間が経っただろう。

鷹塔さんが街に出かけて、もう夜が明けようとしている。

それでも、俺は寝ずにただ鷹塔さんを待った。

鷹塔さんは格好良い言葉を考えておけて言っただけど、そんな考える必要はなかった。

俺はありのままに穿理と接する。それが高校時代に、自分に課せられた責任だから。

だから、穿理の前で偽った言葉なんて言わない。それに、穿理に偽ってもすぐにバレるだろう。彼女はそういう細かい所に機敏な性格なのだ。

だから、彼女に会ったら、まずはこう言う。

「葵くん、帰ったぞ」

「え？ 葵って」

いつも通りの鷹塔さんの声と、少し動揺した彼女の声が届いた。さて、二人を出迎える為のコーヒーマシンはもう出来上がっている。

「おかえりなさい鷹塔さん。穿理。留守電くらい確認しとけ、この莫迦。というか折り返して電話くらいしろ」

「なに言ってるのよ。私が機械に弱いもの知ってるクセに。というか何で葵が鷹塔と知り合いなのよ」

「なら、携帯電話を持たせる。鷹塔さんとの関係は後で説明するよ。今日は店に行って携帯購入するぞ」

そんな、何気ない普通の会話を続けた。

格好良い言葉で偽るのは性に合わない。

だって、俺は。

彼女に出会った日から、ありのままの自分で接してきたのだから。

今日は、黒堂学園の卒業式だ。

遠近湊は、内心高揚感を覚えながら、今直面している問題と向き合っていた。

自室で母親に購入してもらったスーツを着てみたのだが……似合わないと思えてならなかった。

元より、身長が低い所為か　それでも二、三センチは伸びた百五十センチにも満たない身長である自分がスーツなど着てもおかしく見えて仕方がない。一番小さいSサイズのスーツでも裾も袖も長いのだ。これでは、卒業式で笑い者になるのではないだろうか。高揚している反面、不安さえも感じながら湊は鏡をじっと見つめていた。

「やっぱり、おかしいよね……」

と、無意識にため息を漏らしてしまう。自分はもう十八歳になるなのに、何故こうも子供っぽい外見が変化しないのか。日課として牛乳瓶を一本飲んできた成果は全く現れていなかった。

「湊、そろそろ時間よー、……ってあらあら」

自室に入ってきた湊の母親　遠近美琴は、娘のスーツ姿を初見すると微笑を浮かべた。

「似合ってるじゃない。私服だと子供っぽいのが拭えなかったけど

うん、大人っぽく見えるわよ」

「……お母さん、あからさまなお世辞に聞こえるんだけど」

「そんなことないわよ？　スーツっていうのはね、例え身長が低くても大人っぽく魅せる効果があるの。私だって、湊くらいの歳では百四十五センチしかなかったもの」

「そうなの？」

初めて耳にする母親の暴露話に、湊は内心喜びを覚えた。

「ええ。それでね、学校でお父さんにその姿を見せると、『似合っ

てるじゃないか』って言ってくれたの。今思えば、あの言葉で私はお父さんに惚れたのよねえ」

昔を懐かしむように、美琴は遠い目をする。

(……そっか。お母さんは見せる相手がいたんだ)

反面、湊はその話を聞いて、多少ナイーブな気分になった。ちやんと感想を言ってくれる相手がいることが羨ましくてならなかったからだ。

そんな湊の思惑を察したのか、美琴は思案した後、こんな提案を出した。

「湊、化粧とかしてみない？」

「え？」

「子供っぽく見られるのが嫌なら、化粧で勝負するしかないわ。大丈夫、お母さん、自信あるから！」

「でも、見せる相手なんて」

と、そこで湊は、その『見せる相手』の顔が頭に思い浮かんだ。すぐに美琴と向き合い、「やる。お願い！」と肯定した。

黒堂学園の卒業式は、長く思えて短い時間だった。

卒業証書を手にも、湊は校門前で二人の学友達と話をしていた。

「でも、こう見ると湊も大人っぽくみえるよね。うん、普通に美人に見えるよ」

「とういか、元々素材が良いからね。これで身長さえあれば文句なしなんだけどなあー」

「そ、それは言わない約束でしょ！ 大丈夫だもん、これから伸びるから！」

この一年で親交を深めた友人達。その最後となる会話を、湊は大事に心に刻みつけていた。友人達からしたら他愛のない会話かもしれない。しかし、遠近湊にとってはかけがえのない、大事な親友達だった。

だからだろうか。その笑顔が段々と曇り、ついには涙を流し

てしまったのは。

「……って、湊！？ 何で泣いてるのよ！」

「だ、だって……これでお別れだと思うと、凄く悲しくて」

「何言ってるのよ。お別れなわけじゃないじゃない。そりゃあ、これから皆で会える機会は少なくなるけど、最後の別れって訳じゃ……って、湊が泣くから、私まで泣きたくなってきたじゃない！」

「あはは、おかしいな。私もちょっと……」

気づけば、三人共涙を流していた。しかし湊はそれが嬉しかった。

良い友達を持ったな、私。

自分の為に泣いてくれる人がいる。

自分を想って泣いてくれる人がいる。

だから、湊は人との関わりを持って良かったと心の底から思ったのだ。

友人達と別れて、湊は堂崎市の中枢からバスに乗車した。

行く場所はただひとつ。 K大付属総合病院だ。

湊が化粧をした本当の理由は、大人っぽく見られたいからではない。

ただ、彼に、彼だけに見せたかっただけなのだ。

彼は一年経った今でも、まだ目を覚ましていない。一面が真っ白な色彩で覆われた病室で、ひとり眠っている状態だった。

湊は週に三回、彼の病室を訪れていた。

部屋を訪れては、色々な話を彼に聞かせてきた。

友人が作れたこと。僅かに身長が伸びたこと。料理が上手くなったこと。

色々な話を、眠り続けている彼に聞かせてきた。

その話が、彼に伝わっていないと知っていたながらも。

……一年前、ある出来事をきっかけに昏睡状態に陥った『千堂鏡夜』。

自分は非日常に生きる人間だと吐露した、誰よりも孤独を抱えて

いた一人の少年。

一度、自分と決別し　そして、最後には分かり合えた一人の少年。

そして、彼が昏睡状態に陥った後、湊はある二人から伝言を授かった。

『一生を賭けて彼を癒してあげて』

『鏡夜くんの抛り所になってほしいッス』

その言葉を胸に刻みつけ、湊は今日まで生きてきた。

辛いことは沢山あった。

鏡夜が不在した学園生活。

鏡夜の存在しない毎日。

精神的に病みそうになったことも幾度となくあった。しかし、それでも、湊は下を向いてはいけなかった。

それは、鏡夜を狂わせた彼女の罪であり、責任であったが故。

鏡夜の存在理由を破壊してしまったのは、紛れもない自分自身なのだ。

だから、湊は前を向かなければならない。そうで在れなければならぬ。

(よし、今日は面会時間ギリギリまでお話ししよう)

バスの中で、湊はぐっと拳を握り締めた。

K大付属総合病院に到着し、湊は千堂鏡夜の病室を訪れた。

コンコン、と二回ノックをして、笑顔で室内に入る。

「こんにちは、鏡夜く」

しかし、その言葉は途中で途切れた。

その理由は二つあった。

それは、今まで誰も鏡夜の見舞いに訪れる人物がいなかったのに、鏡夜の寝ているベッドの隅に、一人の少女が座っていたからだ。

「 ああ、遠近湊か」

鏡夜を眺めていた少女は、首を回して、湊に視線を定めた。

湊はただ愕然とした。それは、この少女が千堂鏡夜だと思えてならなかったから。

それが錯覚だと理解してしながらも、この少女と鏡夜を重ねてしまった。

絹のように流麗な長い髪。墨で彩られたかのような漆黒の瞳。身長は女性にしては高く、百六十五センチほどはあるだろう。

そして、何より印象的なのは、その表情だった。

何も感じさせない、何の印象も抱かせない無表情は、千堂鏡夜と似通っている。

否、全くの同一だった。

故に、湊は少女という存在から目が離せない。それ以上に、鏡夜が目覚めたなどという混乱状態にも陥りそうになる。

「お前が来る前には帰るつもりだったんだが、そう上手く事は進まないな。私としても、お前とは会いたくもなかった」

独り言のように呟く少女。その、感情が籠っていない口調まで、鏡夜と瓜二つだった。

少女は鏡夜に視線を戻し、独り言を続けた。

「視た限り、鏡夜は心界を失っているな。一年前の殺し合いで『想像心界』を使用したのなら、そうなってもおかしくはない。……心界の消失によって昏睡状態、か。あれを実行するには相応の覚悟が必要とされる。それを実行させた根源とも言えるのが、お前というわけか」

ジロリ、と扉の前に立ち立ち尽くしている湊を睨み付ける少女。

「だが、お前を殺すわけにはいかない。鏡夜が信じ、拠り所として認めたのは紛れもない遠近湊　お前らしいからな」

少女はベッドから腰を上げ、静かな足取りで湊に歩み寄る。

「あなた、誰……?」

気づけば、湊はそう口にしていた。

少女は湊の前で立ち止まると、無関心げに返答した。

「封殺者、千堂裏魅」

千堂裏魅と名乗った少女を、湊は愕然とした表情で見上げた。

内に沸き起こる感情は、言葉では言い表せない程の混乱。

そんな湊の様子を、無愛想な顔で見下ろしている裏魅は、一つ、眉を顰めた。

「そんなに驚く事か？ お前は非日常の世界に関しての情報は鏡夜から聞いている筈だ。封殺者、鬼人、施設。そのどれも、お前は認知していると思っただけだ」

湊の心境を理解していないような それとも、理解していてワザとはぐらかしているのか は判らないが、裏魅は素朴な疑問を抱いたかのように言った。

対して、湊は未だに混乱状態の思考を安定させるように小さく頭を振った。

「あ、あの……あなた、今、千堂って言いましたけど」

消えそう声で問いかける湊。裏魅は「ああ、そういう事か」と湊の心意を悟ったかのように呟いた。

「私は、鏡夜の妹だ」

「妹」

しかし、湊は裏魅の発言に疑念を抱いた。

千堂鏡夜という封殺者は、物心が付いた頃には、すでに施設で暮らしていたはずだ。彼自身、妹がいると口にしたことはなかった。

鏡夜がそれを明かさなかったという可能性も考えられる。しかし彼は

「鏡夜くんは、女の子と話した事が全然無いつて言っていました」

そう。鏡夜と邂逅した翌朝の事だ。彼は、自分との会話の際、異性を話した事が殆ど無いと口にしていた。

この千堂裏魅という少女が妹という存在ならば、接する機会などいくらでも在った筈である。

ならば、鏡夜が嘘をついたのか。

ならば、この少女が偽っているのか。

しかし、湊の言葉に、裏魅は面倒臭げにため息を漏らした。

「それは当然だ。鏡夜は、私の事を忘れているから」

自然すぎる口調で、裏魅は言った。

「鏡夜が施設に入ったのは五歳の頃だな。それと同時に、鏡夜はそれまでに培ってきたエピソード記憶の全てを消去させられた。だから、私の事を覚えていないのは必然なんだ」

口調は変わらず自然だが、裏魅の顔には、どこか悔やむような感情が窺えた。

「鏡夜は千堂家の事、私の事　五歳までの全ての記憶を抹消された。禁忌魔術、第四位である『記憶操作術』によってだ」

理解が追いつかないが、湊はその話を黙って聞いていた。

「その後、施設に入った鏡夜は、レイ・ストライトによって思考原理に矛盾を植え込まれ、殺害という心界を認識し、鬼人を殺し続けてきた。だけど　」

と、裏魅は扉をバァンツと叩いた。

「お前の所為で、鏡夜の全てが狂った。お前が現れなければ、鏡夜は殺し続ける事ができた。お前が現れなければ　鏡夜は、こんな事にならずに済んだ」

それは、本心ゆえの憤慨。

鏡夜の存在理由を知っていた者だからこそ、内から発生する純粋な怒りだった。

「だけど　」

裏魅はため息と共に、昂り続ける怒りを抑えた。

「さつきも言った通り、鏡夜がお前を抛り所とした以上、殺すわけにはいかないんだ」

それは、どれ程辛い真実だっただろうか　。

湊は何も言えず、ただ立ち尽くしている。

湊は何も返せず、ただ過去を思い返していた。

(私は、鏡夜くんを、狂わせた)

そんな当たり前の事実を、裏魅の激昂の言葉によって再認識する。

(でも、私は)

そう、それでも。

「私は、鏡夜くんの傍にいろつて決めました」

それは、自身への誓い。

千堂鏡夜を狂わせてしまったが故に、責務として認識した真理。

「あの二人の伝言でもあるけど、私自身、鏡夜くんが目覚めるのを待つつて、一年前に決めました」

真つ直ぐな眼差しで。

嘘偽りのない口調で。

湊は、自分の本心を述べた。

「そうか」

裏魅は、その幼さの残る眼差しを受け入れた。

「……鏡夜の選択は間違つていなかったよ。お前がその逆の言葉を言ったら、殺してやるつもりだったが」

そうして、裏魅はその口に薄い笑みを刻んだ。

まるで、その言葉を待っていたと言わんばかりに。

「その答えを聞けただけでも、来た甲斐があつた」

そうして、裏魅は湊を押し退けて扉を開けた。

「近い内、また会うの事になりそうだ」

そう言い残して、千堂裏魅という封殺者は病室を後にした。

三月二十八日。午前十時三十分。

工藤千雨は、一年半前まで住んでいた工藤家の屋敷の側前で、^け気^{だる}怠げな表情をしながら大の字で寝転がっていた。

「うーん、この太陽の眩しさが何とも言えない快適さッスね。眠くなってきたッスよ」

顔を緩ませて、半眼状態のまま呟く。久々の休暇で屋敷に帰ってきた千雨は、存分に日向ぼっこを楽しんでいた。

「おい、千雨」

傍らで、そんな怒気の籠った声がした。

千雨が視線を上げると、そこには彼女の父である工藤王弦くわじゅうげんが立っていた。

「なんスか、宗主。人の日向ぼっこを邪魔して。久々の休暇なんスから、一人にしてくれないツスか？」

「お前はいつでも休暇状態であろうが。この一年で星社会の任務を担った事があつたか？」

「一年前に担つたじゃないツスか」

「一度だけだろうが！」

太い眉を吊り上げ、がなり上げる王弦。

そう。千雨が星社会に所属して、任務を承諾したのはたったの一度だけだった。一年前の、あの出来事以来、彼女は任務はおるか、鬼人の一体も殺してはいないという不始末だ。

「千雨。何の為に、私がお前を星社会に所属させたと思っておる？」

「世界の為に働け、じゃなかったツスか？ 何回も聞いて、既に耳ダコツスよ」

大の字に寝転がったまま、うーんと両手両脚を伸ばす千雨。

「大体、世界中にいる他の封殺者が鬼人を殺してくれてるんスから、私の出番なんてないツスよ。というか、面倒すぎてやってられないツス」

千雨は心の底からそう思っていた。自分が戦いに赴いても、わずか十秒で鬼人一体を殺せるだろう。ならば、未だ成熟していない『未完成』の封殺者に鍛錬として戦わせるのが一番だ。

「ほっ」

その言葉を聞いて、王弦は少し口元を吊り上げた。

「なら、星社会の任務ではなく、私からの任務を授ける」

「は……？」

思いもしなかった言葉に、千雨は思わず半眼を少しだけ開いた。王弦は一つ咳払いをして、

「道崎市へ行け」

戦う者の顔つきになり、そう命令した。

その瞬間、千雨から気怠げな表情が消えた。いつのも無表情ではない。

それは、その言葉の真理を見抜いたが故の無表情だった。

「鏡夜くん、何かあったんスか？」

尋ねる口調は、ただ冷淡だ。

「お前も知つての通り、千堂鏡夜は昏睡状態に陥り、K大付属総合病院に入院している。そして、昏睡状態である隙を狙って、彼の中」に有る物を奪取しようと目論んでいる存在がいる」

「『王』の一人ってわけッスか……」

千雨は腰を上げながら、頭をガシガシと掻き耨る。

「……鏡夜くんも難儀ッスね。まあ、彼が死ぬのはいただけないッスから、別に良いッスよ」

そうして、千雨は立ち上がり、王弦の隣を静かにかわした。

その表情は、既に魔術師の持つ面構えだ。

立ち去って行く千雨の様子を見据えていた王弦は、小さな笑みと共にため息を漏らした。

「……まったく。昔から、彼の事になると真剣だな、千雨よ」

三月二十九日。午後十時半。

遠近湊は、大学の入学式まで暇を持て余している時間が続いていた。

家に居ても退屈という理由があり、現在、湊は繁華街を一人で散歩していた。

この時期、同じく高校を卒業した若者や、春休みに突入している学生の姿も見受けられる。誰もが友人と共に行動している中、一人で散歩している自分がどこか恥ずかしく思えてくる。

そして、それ以上に、湊の心は憂鬱な状態だった。

(千堂、裏魅さん……)

二日前。鏡夜の病室で邂逅した、一人の封殺者。

千堂鏡夜が目覚めたと錯覚させた、一人の少女。

「妹……」

彼女は、鏡夜の妹だと言った。

鏡夜が施設に入る以前の記憶を失くしているとも 言った。

では何故、彼女は今になって姿を現したのだろう？

湊は、K大付属総合病院の看護師に、自分以外に千堂鏡夜の見舞いに訪れた人物がいるか尋ねた。しかし、自分の他に見舞いに訪れたのは千堂裏魅だけだと言っていた。

なら、彼女が鏡夜の元に姿を現した理由は何なのか。

一年間も実の兄を放っておいて、今になって現れた意味は何なのか。

(うーん、全然分からない……)

そもそも、彼女が話していた事が真実なのかどうかすら疑問に思えてくる。

でも、存在感が千堂鏡夜と瓜二つだし、病室で激昂した姿は、本当に鏡夜を心配したが故の表れだった。

そして、去り際に残したあの言葉。

『近い内、また会う事になりそうだ』

……あの言葉は、何を意味しているのだろうか。

「あー、もう、気になって仕方がないよ……！」

訳の解らない事を考えすぎたせいか、徐々に苛立ちが積っていくと、そんな湊の様子を不思議に思ったのか、周囲にいた人々から多くの視線を向けられた。

「あ……」

視線を向けられた事によやく気づき、湊は赤面させた。

そして、恥ずかしさのあまり、逃げるように繁華街を後にした。

「はあ、恥ずかしかった……」

人気の無い河川敷公園に着き、傾斜のある芝生に体育座りをする。そして、何の意味もなく夜空を仰いだ。

今夜は月の姿が無く、空は暗雲で覆われていた。どこか不快感を感じさせる夜空。湊はそれを呆、と見つめながら、一時の間何も考えずにいた。

しかし、だけど。

それが現れたのは、突然すぎた。

「え」

何か、得体の知れない感覚を胸の内に覚え、彼女は何の意味もなく左右を見渡した。

しかし、それには明確な意味が在った。

「なに……あれ？」

黒い。ドス黒い色彩をした人間が、赤色の眼でこちらを静かに見据えていた。

体格は成人男性と同一。しかし、あれは人間ではない。湊は直感的にそう感じた。

「あ、あ」

そして、右腕が死神の持つ鎌を象っていた。それは、一般人である湊を危機的心理に追い込むには十分な代物だった。

湊は立ち上がってその場から逃げようとしたが、足が竦んでその場に倒れた。

その一瞬後に、その漆黒色の存在は湊の前に居た。

そして、漆黒色の存在は右腕の鎌を振り上げた。

(あ)

死ぬ。死は直前まで迫っている。

一般人である湊でも、そんな当然の事が理解できた。

鎌が振り下ろされる。

湊は両目を強く瞑った。

しかし 痛覚は襲ってこなかった。

鎌によって体を貫かれた痛みは無かった。

「全く。自分から死に行くな。遠近湊」

傍らで、そんな細い声がした。

湊はゆっくりと両目を開いていった。

そこには、一人の女性がいた。

それは、二日前に出会った、一人の少女だった。

たった一本のナイフで鎌を防いでいる千堂裏魅が

そこにいた。

一振りのナイフは、巨大な大鎌を受け止めていた。 いや、い
なしたという表現の方が適切だろう。

大鎌が振り下ろされたとき、すでに千堂裏魅は湊の隣に佇んでい
た。そして、自身の握っているナイフも大鎌と全く同じ速度で振り
下ろした。

速度を緩めず、しかし徐々に大鎌にナイフを接近させていき、ナ
イフの刀身に大鎌の刃が触れた瞬間、数センチだけナイフを逆に振
り上げた。つまりは、『大きく振り下ろした大鎌』に蓄積されてい
た運動量、質量を、『ナイフの刀身を少しだけ振り上げる』という
一瞬による運動量によって無効化したのだ。

それは、武術の世界においても通ずるものがある。相手の大きな
力を、一瞬の動作によって利用するというのは、合気道の技ではか
なりの種類が存在する。

しかし、この技は合気道ではないし、武術でもない。

千堂家において開拓された、新しい剣術であった。

「遠近湊、少し離れてろ」

未だ茫然自失としている湊に、裏魅は後退の命を告げる。

「あ、あ」

しかし、湊の両足は完全に竦んでしまっていた。未知なる生物と
遭遇し、さらには殺されそうになっているのだ。一般人である湊に
してみれば、恐怖心が心を侵すのは当然と言っても良い。

「……仕方ないな」

そう、ため息混じりに呟いた裏魅は、ただ一言、こう口にした。

「レベルモーション動作超越・レベルLevel 1（ワン）」

瞬間、いなした状態で硬直していたナイフが、大鎌を一刀の元に
両断した。

瞬間的 いや、刹那的に振り上げられたナイフ。その動作速度

は人間に視認させることさえ許さない。もはや音速に近い動作だった。

「一つ」

裏魅が呟く。

その一瞬後。

「え？」

湊は、鬼人の身体が綺麗さっぱりと消失した事に気づいた。一瞬前までは確かに自分達の前にいたのに、今では存在そのものが消え去っていた。

しかし、やはりその一瞬後。

ぐちゃっ、という無気味で奇怪な音は、湊の背後から聴こえたものだ。

……ゆっくりと振り返る。

そこには、バラバラに成った鬼人の肉片が転がっていた。切断面からは黒い粒子のようなものが噴出しており、それは夜の空へと消えていく。

「終わり」

裏魅の冷たい声で、背筋に怖気が走る。

「……もしかして、鬼人を見るのは初めてなのか、遠近湊？」

小首を傾げ、素朴な疑問を問うように裏魅は尋ねた。

「こ、これが鬼人、なんですか？」

鏡夜の話である程度の知識は知っていたが、彼はずっと、こんな生物と戦ってきたのか？

こんな、断じて人間と言えない無気味な生物を、殺して、殺して、殺し続けてきたのか？

(なら、これが……)

湊は実感する。

そう、きつと、この状況こそが。

鏡夜の言っていた、『非日常』だ。

「お前が襲われたのは偶然だぞ、遠近湊」
鬼人の残骸を直視して言葉を失くしている湊に、裏魅はそう言った。

「この町に来るのは初めてだけど、どうもこの河川敷公園はおかしい。『質』が狂っているともいえるな」

刀身を仕舞ってナイフをポケットに突っ込んだ後、裏魅は「立てるか？」と湊に手を差し出した。

「あ、ありがとうございます」

どこか顔色が優れないが、湊は裏魅の手を握って立ち上がった。

「それにしても」

と、裏魅は訝しげな視線を湊に向ける。

「お前、本当に一般人か？ 初めて鬼人を見て、残骸まで直視してよく平静を保っていられるな」

「そ、そんな事ないですよ。凄く怖かったです」

「マトモに声を発していることが、平静を保てるって証拠だよ」
ふん、と小さく鼻を鳴らした裏魅は、湊に背を向けた。

「お前は早く帰れよ。一般人なら、一般人らしく平和に生きる」

「り、裏魅さんはどうするんですか？」

「私はここを見張る。というか、ここが私の家だし」

「……………はい？」

意味の解らない言葉に、湊はかなり間をおいて返した。

「だから、ここで野宿してるんだよ。金銭は電車でこの町に来る際に全部使っちゃったし、ホテルの宿泊代もないし、この公園で寝泊りしてるんだ。けっこう芝生の感触が柔らかくて、よく眠れるしな」
「……………え、えーと。つまり、さっき助けてくれたのは」

「ああ、寝てる最中に鬼人が顕現して、さっさと殺そうとした時にお前がいた。それだけ」

「何かもう、非日常に生きる人達の思考は、自分とは本当にかげ離

れているんだと思う。

こんな公園で野宿して何の不満も覚えないのは、一種の才能かもしれない。

しかし、たとえ他人であっても『知り合った』という点において、湊が彼女を放っておけるはずもなかった。

「裏魅さん」

「なんだ？」

すでに、裏魅は芝生の傾斜に横たわって眠りに着こうとしている。返ってきた声もどこか柔らかい口調だ。

「私の家に行きましょう」

それは、湊にとって、そして裏魅にとっても突拍子のない言葉である事に過ぎなかった。

裏魅は首だけを湊に向ける。完全に予想外な発言だったのか、かなり目を睨っていた。

湊は続ける。

「こんな所で寝たら風邪引いちゃいます。それに、さっきみたいに鬼人が現れたら」

「鬼人なんて『今の敵』に値しない。顕現したら即行で殺すし、問題視する事じゃないよ」

「で、でも」

言い淀む湊に、裏魅は腰を上げて芝生の草をブチブチと引き千切り始める。

「遠近湊。お前さあ、今まで何度後悔してきたんだ？」

「え？」

突然の質問は、心の奥底を覗かれた気がしてならなかった。

「義兄である遠近翔に背中を包丁で切られたこと。鏡夜に決別されたこと。それすら一時的に記憶として失ったこと。まだまだありそうだけど、お前は後悔するのが好きらしいな」

……なにが言いたいんだろう、と湊は率直に思った。

裏魅が言いたい事の本質が解らない。だからこそ、湊は返答さえできなかった。

「後悔して、後悔して、後悔して。もう充分なんじゃないのか？」

お前は後悔という概念に憑かれていてみたいだ。私がお前の家に行つて、そこで敵が現れたら、お前の父や母がどうなるか解つていてそんな発言したのか？」

「それは」

「結局、お前は後悔することになる。選択肢なんて限られたものだけど、その中で私という選択肢リフトを選ぶのはかなりの危険リスクを孕むぞ。

私なら大丈夫だから、大人しく家に帰れ」

最後の方だけ、自分を気遣つてくれているように聞こえた。

「解りました。あと裏魅さん、食事とかはどうしてるんですか？」

「人間は五日くらいなら食べなくても死なない。それまでには全て終わらせるつもりだ」

(終わらせる……?)

その言葉が何を意味しているのか、湊には全く解らなかった。

でも、自分にできる事くらいしても良いだろうと思った。

湊は裏魅に「明日、朝ごはんと昼ごはん持ってきますね」と言い残して、公園を後にした。

「ただいまー」

湊は自宅に帰ると、玄関口で妙なことに気づいた。

「……下駄？」

古めかしい下駄が玄関口にあった。そして、すぐそこにあるリビングからは談笑の声。

一つは母親の声だ。そしてもう一つは

(……あれ?)

どこかで聞いた事がある声だった。確か、この声は……
リビングの扉を開ける。

そう、一年前の、あの日。

「あ、お邪魔してるッスよ。湊さん」

半眼、無表情、黒い流麗なポニーテール。

そこには、確かに一年前に一度だけ出会った

工藤千雨がいた。

状況が全く理解できないというのは、この事を言うのだろう。

リビングに配置されてあるテーブルの椅子に座っている湊は、右隣に座っているポニーテール少女がなぜこの家にいるのか理解しきれていなかった。

ポニーテール少女の名前は工藤千雨というらしい。

湊の母親である美琴は、彼女が帰って来る前に工藤千雨と親交を深めていたらしく、穏やかに談笑していた。

そんな時でも、千雨は一年前の病室で出会った時と変わらず半眼無表情だ。気怠げに腰まで曲げている。それでも美琴は千雨の姿勢や無表情を気に掛けることなく話を続けている。

これまでの話を傍観していた湊が認識した事。それは三つあった。

一つ。千雨が湊の高校時代からの友人であること。

二つ。湊と同じ大学に進学するようになったこと。

三つ。千堂鏡夜とも親交が深く、三人はよく遊んでいたこと。

前二つは完全な偽りだが、最後の一つは嘘でもなく本当でもない、といったところか。一年前の会話を想起すると、工藤千雨が千堂鏡夜と少なからず接点を持っている事は理解していた。

(というか……)

なぜ、千雨は自分の家にいるのだろう。そんな根本的な理由がさっぱり解らなかった。

そして、なぜ再び自分の前に現れたのだろうか。

一年前のあの時で最後だと思っていた。この一年間、自分の前に一度も現れなかった彼女が、突拍子もなく自分の前に現れたその理由^け。

(……でも、鏡夜くんを知ってるんだよね)

一年前に出会った時、千雨は千堂鏡夜の事を認知している言動をしていた。あの時は伝言の事しか頭に無かったから他の事を考えら

れなかったが　おそらく、本当に憶測に過ぎないが、彼女は自分よりも鏡夜の事を知っていると思う。

「湊？」

「え　？」

「どうしたの？　せつかく工藤さんが来てくれてるんだから、少しは話くらいしなさいよ」

「え、あ、うん……」

「別に良いツスよ。湊さんが会話下手なのは知ってるツスから。いやー、高校時代から変わってないツスね。友達一号の私としては、もう少し社交性を持ってもらいたいんスけど」

その言葉は、少なからずとも湊を憤らせる要因となった。

「……千雨さん、ちょっと来てください」

「ん？　どこにツスか？」

「私の部屋です！」

と、湊は強引に千雨の腕を引っ張ってリビングを後にした。稀有に等しい湊の行動に呆然とする美琴だったが、すぐに微笑を浮かべ、「仲が良いのねー」と頬に手を当てて口にしていた。

湊は千雨と自室に連れ込むと、少し呼吸を荒くしてベッドに腰を掛けた。

「けっこう強引な所があるんスね、湊さん」

「誰のせいですか」

「私のせいって言いたいんスか？」

言いながら、千雨も湊の右隣に腰を下ろした。

「……先に言っておきますけど、私の最初の友達は鏡夜くんです」
ため息混じりにそう口にすると、千雨はきよとんと目を瞞った後、吹き出すかのように苦笑した。

「あー、その事で怒ってたんスか。それは訂正しないといけないツスね。ええ、湊さんの初めての友達は鏡夜くん。それは紛れもない事実ツスね」

貶しているような軽薄な口調だった。湊は千雨を静かに睨みつける。

「そんなに怒らないでほしいツスね。それでも褒めた言動をしたつもりツスから。あの遠近湊が、非日常に生きる種族と友達になる事に成功した。これは私達側からすれば結構な驚きだったんすよ。よもや千堂鏡夜という日常から一番遠い位置にいた封殺者が、湊さんと関わったんすから」

そこで、千雨は初めて笑った顔を見せた。半眼を維持しているからか、無気味な笑顔だった。

「鏡夜くんが張っていた心の壁に唯一踏み込んだ人物　それが湊さんツス。普通なら賞賛するところツスけど……まあ、今はそんな状況じゃないんすよね。」

湊さんには喋っても問題ないからまず先に名乗っていくツスけど、私は魔術師　非日常に生きる人間ツス」

それは湊も想定していた事だ。

鏡夜が昏睡状態に陥った理由。そのわけを知っていた彼女が、鏡夜側の人間だという事は一年前から薄々感じていた。

「それで今現在、鏡夜くんが危機に陥っているんすね」

「どういう事ですか？」

湊が怪訝に尋ねると千雨は頭を掻き耑りながら、顔を顰めた。

「まあ簡単に言えば、鏡夜くんが敵に狙われてるんすよ」

「え」

「それも、魔術師と互角に戦える敵。ひいては、封殺者なんかでは到底敵わない存在。湊さん、鬼人っていう存在は既に知っているツスよね？」

尋ねる千雨に、湊はこくりと首を縦に動かした。

「人間の持つ負の感情の集合体って鏡夜くんから聞きました。でも、あんな存在、本当にありえるんですか？」

逆に問いただす湊。

しかし、その言葉で千雨の表情は一変した。

無表情は変わらないが、どこか険とした厳しい顔付きだった。

「湊さん。鬼人と遭遇した事があるんスか？」

「えっと」

「鬼人を知識として知っていても、人間は実物に出遭わない限り『あんな』という表現は使わないツスよ。遭ったことのない存在なら普通は『そんな』という言葉を用いるはずツス」

これ以上とない的確な指摘に、湊は口ごもった。

「第一の質問ツス。鬼人と遭遇したのはいつツスか？」

「……さつき、家に帰って来る前です」

「ふむ。では第二の質問ツス。鬼人を始末したのは誰ツスか？」

畳み掛けに問う千雨。どこか取り調べを受けているような気がしないでもない。

「千堂、裏魅さんです」

「……ほえ？」

正直に言ったのだが、なぜか千雨は破顔しながら素っ頓狂な声を発した。

「鏡夜くんの妹さんです。この町に来て、河川敷公園で寝泊りをしているらしいです」

「……あー、えっと。裏魅さんがこの町にいるんスか？」

「？ 裏魅さんを知ってるんですか？」

逆に問い返す湊。

千雨は気まずそうな顔をして、少し視線を泳がせた。

「知ってるというか……」

「はあ、と重いたため息を吐く千雨。

「……ぶっちゃけると、私と鏡夜くん、裏魅さんは幼少期を共に過ごしてきた幼馴染なんスよ」

「ええ！？ そうなんですか！？」

「はいツス。五歳までは鏡夜くん、裏魅さんとよく遊んでいたツス」

「五歳」

そういえば以前、裏魅が言っていた言葉によると、鏡夜は五歳に

記憶を失ってしまったらしい。それが原因で自分の事を忘れたとも言っていた。

その言葉が、今になって信憑性を増してきた。

「あー、裏魅さんがこの町にいるんスか。これは厄介な事になってきたツスね」

「厄介な、事……？」

「私としては、一人で片付けるつもりだったんスけど……まあ、彼女の性格からすれば、鏡夜くんの危機に駆けつけてくるのは当然といえど当然ツスね。良いツスか、湊さん。私がこの町に来た理由は、『王鬼』を抹殺するためツス」

いきなり話の筋道が変わったような気もするが、湊は千雨の言葉に耳を傾けていた。

「『王鬼』は、先も言った通り封殺者では到底敵わない圧倒的な強者ツス。封殺者を束ねる組織 星礼会も、今回の事件を危惧してはいるんスけど、使える人員は限りなく少ない。だから今回工藤家の当主を通じて私とその任務を承ったんスよ。そして、『王鬼』の目的は、おそらく鏡夜くんの心なかに有る物ツス。あれを奪取されると鏡夜くんは昏睡状態から死亡してしまうツス」

「な」

絶句する湊。しかし、千雨は気にせず話を紡いでいく。

「裏魅さんがこの町に来たのも、おそらくそれが理由ツスね。私にここに来たのも湊さんに忠告を促すためツス。良いツスか、湊さん。明日から、何があっても鏡夜くんの病室に近づかないこと。私との約束ツス」

「……それは、本当の話なんですか？」

「本当だからこそ、湊さんに話してるんスよ。湊さん、私、一年前に言ったツスよね。鏡夜くんの拠り所になってほしいと。だから、湊さんが巻き込まれて死ぬのは絶対に頂けないんスよ。それは、きつと裏魅さんも同じツスから」

千雨は真剣な顔で話を締め括った。

そして、千雨の言い分は、言葉は違っただろうが裏魅と一緒に意見
だった。

自分は、いつも守られてばかりだ。

自分は、逆に誰かを守れないのだろうか。

後悔。それは湊が今になっても抱く正しい感情。

だけど、今はそうする事しかできなかった。

……自分には何もできない。それは、この一年間で立証された事
実だ。

だから、湊は唇を噛み締めながらも、頷くことしかできなかった。

湊の家を後にした千雨は、町の中枢からは離れ、河川敷公園にやってきました。

宵闇の最中。既に深夜十二時に差し掛かるうとしている時間帯。

その河川敷公園は、やはりこの町では『異質』というべき空気を漂わせていた。

「 やっぱり、大元はここツスカ」

千雨は変わらず抑揚のない声で呟いた。

一年前から解っていた事だった。あの日、遠近翔が作り出した二体の鬼人との殺し合いにおいても、彼女は感じていたのだ。

ここが、近々降臨する場所であると。

シンとした、物音一つ聴こえない静謐な夜。暗雲が立ち込める夜空には円形を象った満月が在った。

昔、父親である工藤王弦から聞いた話によると、月は『正のエネルギー』を地上に散発しているとの事だ。古においての月という存在もまた同論。正のエネルギーはこの穢れた地を癒し、人々に安息を与えている。

「……まったく、『見張り』まではまだ早いツスよ」

眼前にある、芝生の傾斜に横たわって眠りにについている一人の少女を半眼　さらに細めて　で見据える千雨。

「千雨か」

ゆっくりと開かれた黒瞳が、千雨の視線と交錯する。

「これはまた懐かしいヤツが現れたな。およそ十二年ぶりか？」

「正確には十二年と三日ツスね。鏡夜くんが施設に入ってから三日間を共に過ごしたツスから」

「そんなくだらない過去はどうでもいいよ」

静かに腰を上げて、裏魅は夜空を呆と眺める。

その黒瞳の中にはどのような感情が籠っているのだろうか。
千雨も同じく夜空を見上げる。

「この河川敷公園がおかしいというのは、既に認知済みか、千雨？」

「ええ、一年前から薄々と。データによれば、鏡夜くんがここに訪れたのはたったの二回。イナしか扱えなかった彼にしてみれば、気づかないのも当然ツスね。一応、結界を張っておくツスカ？」
尋ねる千雨に、裏魅は「好きにしろ」と小さく欠伸を掻きながら返答した。

「結界を張ろうがどうしようが、そんなモノ簡単に突破される。一般人を被害に遭わせないというお前の危惧はけっこうな事だが、私がこの町に来たのはそんな理由じゃないからな」

「鏡夜くんツスね。……まったく、口調は変わっても兄離れは全然できてないツスね、裏魅さん」

千雨は呆れ気味にため息を吐いた。
「それで、コードナンバー03の裏魅さんからして、王鬼を始末できる確率は？」

「確率論で言えば五割といったところか。Level 13まで向上させて何とか殺せると私は推測している。このナイフを付加要素とするなら、七割、かな」

そう言って、裏魅はポケット男物のジープンのポケットから一振りのナイフを取り出す。柄は黒色。刀身は六寸といったところか。
「私は正当継承者じゃないから上手く扱えていないけど、鏡夜だったら完璧かつ、完全な制御ができていただろうな」

自嘲気味に笑う裏魅。その笑みはどこか彼女の愚かさを感じさせた。

「鏡夜くんは仕方がないツスよ。千堂家の異端として生まれ、記憶を封じられてあんなに弱くなってしまったんスから」

千雨は一年前を思い出す。遠近翔の放った二体の鬼人相手に言語抑制術が施されていたとはいえ 一秒未満で殺せなくなつて

しまつほどの弱者へと成り下がってしまったのだから。

「結局、鏡夜くんはこの運命に敗北した。心界を失い、昏睡状態に陥り、封殺者ではなくなつた。それは、殺したくないという夢の通りの運命へと成立したツスけど、まだ、鏡夜くんには果たすべきことが存在するツス。そうさせるためには」

「心界の復活。ひいてはこのナイフの正統継承者になるしかないって事だろ？」

横目で問う裏魅に、千雨は同意するように頷く。

「そう成ってもらつたためにも、まずは王鬼の始末ツスね。私は今日から五日間の内に終わらせるつもりツスけど、裏魅さんは？」

「同じく、だな。私も五日以内で終わらせる」

「気が合うツスね。じゃあ、私はホテルに戻るツスけど、本当に野宿で良いんスか？ 何なら、私の部屋使つても良いツスけど」

それなりに気を使って言葉にしたのだが、裏魅は首を横に振つて拒否した。

「私は私で、この場所を気に入っている。けっこう気持ち良いからな、ここの芝生」

「そうツスか。じゃあ、私は帰るツスね」

そう言つて、ゆつくりと踵を返すが、

「千雨」

不意に、裏魅の真剣そのものの口調で発せられた言葉によって、千雨は歩を止めた。

「なんスか？」

「気に掛かっている事があるから、先に尋ねておく。お前、その口調はなんだ？」

……………沈黙。

「あー、えっと、それは神のみぞ知る……………」

「もういい。答えるつもりがないなら帰れ」

自分で尋ねておきながら、無慈悲に言い捨てる裏魅だった。

三月三十日。午前八時十分。

今日は久々の曇天だった。覆う暗雲は空の向こう側まで続いている。今にも雨天へと変わりそうな天気。朝の繁華街を歩いている人々も、よく見れば大多数が傘を持ち歩いていた。

遠近湊は、コンビニで朝食を何にしようかと腕を組んで思案していた。しかし、これは自分の朝食ではなく、裏魅への朝食である。

「……裏魅さん、どんなご飯が好きなんだろ」

思案顔のまま、湊はコンビニ弁当やサンドイッチを見比べている。元より彼女の事は何も知らないのだ。無論、どんな朝食を好むかなど、つい最近出会ったばかりの湊が知るはずもない。

「……うーん」

さらに難しい顔になって、様々な食品を観察する。

「和風弁当、かな」

脳内で裏魅の外見を思い出し、直感的にそう判断する湊。

静

かな雰囲気の人だから和風弁当が好きそうだ、という完璧な憶測による判断だった。

コンビニで和風弁当を購入した湊は、駆け足で河川敷公園へと足を運んだ。

この時間帯、公園で娯楽を楽しんでいる者は限りなく少ない。しかし、行き交う人々の中には散歩をしている老人や、ランニング中の青年などが見受けられた。

この河川敷公園は、一般道路が傾斜の上であり、川沿い付近の遊び場は傾斜下の敷地となっている。敷地、そして石畳の大きな階段の両サイドの傾斜は整えられた芝生で出来上がっている。

芝生で整えられた傾斜には、両腕を枕代わりにして、仰向けにな

って寝ている千堂裏魅がいた。

湊がすぐ近く　距離にして二メートルの範囲まで歩みを進めると、裏魅はゆっくりと双眸を開いた。

「遠近湊か」

と、小さく欠伸をしながら口にする裏魅。

「おはようございます、裏魅さん」

「こんなに早い時間から何の用だ？」

「昨日言った通り、朝ごはん持ってきました」

と、湊は右手のコンビニ二袋を差し出す。

「」

裏魅は訝しげにそれを見据え、はあ、と深いため息を漏らした。

「……お前、鏡夜からお節介って思われてるだろうな」

そう言いながらも、裏魅はコンビニ二袋を貰い、中身を取り出す。

そして、和風弁当が顕わになったわけだが

「……お前、意外と気が利いてるじゃないか」

和風弁当をじっと見つめ、口元に微かな笑みを浮かべる。

その様子を見て、湊はぱあつと顔をほころばせた。

「わ、和風弁当好きなんですか？」

「ああ。逆に洋風の食事は大嫌いだ」

(……サンドイッチ選ばなくてよかった)

内心、胸を撫で下ろしながら、湊は裏魅の隣に座り込んだ。

そして、昨晚から思っていた疑問を尋ねる。

「あの、裏魅さんって、何で私が来たって分かるんですか？」

「どういう意味だ？」

和風弁当の封を開け、割り箸を二つに折りながら裏魅は返す。

「だって、昨日も私が鬼人に襲われてた時、すぐに駆けつけてくれたあしたし、今も私が来た瞬間に目を覚ましたみたいに見えましたから」

「私達側の人間なら、そんな簡単な事だよ」

焼き鮭に割り箸をつつきながら、裏魅は淡々とした口調で言う。

「簡単に言うなら、人間に宿っている生命魔力粒子同士の反発機能だ。遠近湊、魔力って言葉は知っているか？」

「言葉では知ってます。ファンタジー小説とかでよく出てきますし」「まあ、それもあるけど、言語的には心理学に近いかな。生命魔力粒子ってというのは、どんな存在でも、必然的に体内に内包している『原初の源』だ。精神、肉体、脳を働かせる為に有る、『人間としての機能を動かす装置』とも言っかな。生命が機能する。それは即ち機能する為の装置が備わっているからこそ可能な事象だ。それが三種の魔力の一つ、生命魔力粒子だ。

生命魔力粒子を持っている魔術師はその能力を極め、自身に生命魔力粒子が宿っていると完全に自覚する。その後は容易な事で、他者の生命魔力粒子の質も見極めることができる。つまり、他人の生命魔力粒子がどんなモノであるか解るんだ。ここまで理解できるか？」

「えっと……とりあえずは」

「そうか。で、生命魔力粒子同士の反発機能っていうのは、一方の存在が生命魔力粒子を自覚していて、かつ一方の生命魔力粒子の質を自分の脳に記録として記録した時初めて事象とし成り立つ。インターホンを想像してみる。自分が自宅にいて、家の前に来訪者が来た。それだけで、お前は『来訪者という存在に気づく』事ができるか？ かなりの聴覚を持っていて、家の前まで誰かが来たということとを認識しない限り、それは不可能だ。

つまりだ。来訪者がインターホンを押すからこそ、自分は来訪者に気づくことができる。生命魔力粒子の反発機能っていうのは、それを応用化させた技みたいなものだ。自己の脳内で知っている生命魔力粒子の保持者のデータを記録し、反発機能をセッティングしておく。あとは、その者が接近した際に自動的に反発機能が働いて、データとして記録した存在を察知できる。まあ、簡単に言えばこんなところかな」

……全然簡単な気がしないが、インターホンの喩えで湊はそれな

りに理解した。

つまりは、自分の知っている存在が接近すると、体内に有るインターホンという装置が自動的に活動し、『その存在が来た』という事を自分に知らせてくれる、という事だろう。

眠りに堕ちていても、インターホンが鳴ることによって目覚めるという単純な論理だ。

「理解はできましたけど、魔力つて他に二種類もあるんですか？」

「ああ。大気魔力粒子と体内魔力粒子がある。前者はこの世界の大気に満ちている魔力で、これを扱えるのは魔術師だけ。後者は人為的に体内の魔力を認識した者。封殺者のみが扱う」

「……人為的つて、どういう意味ですか？」

「魔術師達が、生まれてきた乳児を魔術儀式場に連れていって、儀式によって強制的に認識させるんだ。生まれてきた乳児の意味も、未来も尊重せずにな」

五目ごはんを口に入れながら、裏魅は言う。

湊はその事実には愕然とした。それが本当ならば

「じゃあ、裏魅さんと鏡夜くんも」

「いや、私は儀式を受けてない。受けたのは鏡夜だけだ」

「え？ でも封殺者は体内魔力粒子だけを扱って」

「ああ、説明が足りなかったな。封殺者は儀式を受けた者が名乗れるんだが、例外もあるんだ。私みたいに、自分から志願した者も、星礼会の許可が下りれば封殺者という存在になれる。」

反面、鏡夜は根本的に封殺者に成った理由が異なる。あいつが封殺者になったのは、千堂家の現当主が決めたこと。私は女だから判断から除外されたけど、あいつは男に生まれたから、そういう運命に立たされた。あいつは、この世界で唯一『全てを認識しなければならぬ』存在だからな」

どこか険とした表情で口にする裏魅。

「まあ、千堂家の次期当主の座は鏡夜にあったんだけど、お前との邂逅で昏睡状態になったから、父上はかなり激怒してたぞ。その者

を連れて来い、殺害決定とか言ってたな」

「え」

青ざめていく湊の顔を見て裏魅は「冗談だよ」と小さく苦笑した。「確かに怒ってたけど、父上は一般人を殺しはしない。まあ、非日常側の人間なら、容赦なく殺すけどな」

「も、もう、脅かさないでください!」

頬を膨らませて怒鳴る湊。

裏魅はやはり苦笑しながら、

「本当に純心だな、遠近湊。鏡夜も稀に見る良いヤツに好かれた。鏡夜を起こした後は仲良くやれよ」

不意の言葉に、湊の思考が止まった。

「お、起こしたら……?」

「勘が良いな。そう、二日後に千堂鏡夜という存在を目覚めさせるつもりだ。私が敵の足止めをしている間に、千雨が覚醒させる。千雨とはもう会っただろ?」

「ほ、本当に、鏡夜くんが起きるんですか? 本当にですか!」

詰め寄って問い詰める湊。

これが冗談だったら、頬の一発でも叩いてやる。それ程の真剣さを内に秘めながら、湊は問うた。

「本当だよ」

裏魅は動揺の素振りも見せずに返答した。

「言葉を選ぶことくらい私にもできる。深夜、鏡夜の病室で覚醒の儀式を行うが、お前は病室に行くな。この事は、もう千雨から聞いたな?」

「で、でも」

「お前の気持ちは解る。誰よりも鏡夜の目覚めを願っていたはずだからな。だけど、儀式の終了と共に、鬼人の王　王鬼は、鏡夜を殺しに行く。その場にお前がいたら、お前は完璧に殺される。鏡夜は絶対にその結末を許容しない。だから、お前は家で大人しくして

る。大丈夫だ。王鬼を殺した次の日には会わせてやるから」

いつの間にか湊は頬に涙を伝わせていた。

この一年間。何があっても泣かないと決めていた彼女が、泣いていた。

「分かりました」

だけど、泣きながらも湊は笑った。

嗚咽を漏らす事もなく、ただ静かに泣いて、笑っていた。

「やっぱり、お前は純心だな」

そう言っつて、裏魅は湊な頭を撫でた。

「大丈夫だ。絶対に実現させてやる」

裏魅は言葉として、はっきりと言った。

そう、実現させる。

千堂鏡夜と、遠近湊の再会を

そして二日後　四月一日の午後十一時過ぎ。

千堂裏魅は河川敷公園の一角に佇んでいた。双眸を閉じ、右手には一振りのナイフを握り、静かにその気配を探っている。

宵闇の最中。先刻からこの公園に収束を開始している負邪は、普通の負邪とは断じて言えない。もっと高い密度を備えた……言うならば、根本的に『レベル』というモノが異なる負邪であった。

収束の場所は、裏魅が佇んでいる場所から前方に向けて二十メートルの位置。それは大気中の一点においての収束ではなく、天を突くかのように負邪が上空に舞い上がっていった。

（　千雨が張った空間断絶の結界の範囲は半径百メートル。それを突破されれば終わり、か）

結界を張っても、あの存在ならばそれを打ち破るなど容易である。しかし、思い返せば千雨の危惧は正解なのかもしれない。

結界によってただの一秒でも食い止められれば、儀式の成功率は上がる。千雨は今頃、病室で儀式の前準備をしている最中だろう。ならば、今は

「止めるしかないか」

ふう、とゆっくりと吐息を吐きながら、裏魅は前方を見据えた。

突然。夜空から地上に向かって一直線に光が射した。

この周辺は街灯一つない。故に、その光は河川敷公園を照らした。しかし、光というには好色とは断じていえないだろう。

薄暗い、見ているだけで嫌悪感を抱いてしまうような灰色の光。

裏魅は率直にそう思った。

一直線に射している灰色の光に交ざりあうように、その存在は天空から地上へと降りてきた。

……ゆつくりと。地上に降りる前に自己の存在を誇示するように両手を広げながら、その存在は降りてくる。

裏魅はそれを冷めた目で見据えた。

地上に足を着いた存在は、裏魅と同じく冷然とした視線を向けた。

「この地に降りるのは三百年ぶりか。そして、最初の遭遇者は千堂家の嫡子とは」

長い白髪に、黒色のスーツを羽織った長身の男性は言う。

感情すら籠っていない、ただ言葉を放つだけの行為。

外見からして四十代後半と推測されるが、彼はすでに五百年は生きている。その歳月が作り出した貫禄というべき威圧感が彼の周囲から放たれていた。

ピシツと。

裏魅も殺気を放ち始めた。

それは、純粹な殺気。この男と殺すという事だけを意志に、体から散发している正しい方向性を保った殺意。

「千堂鏡夜に会いに行くためにこの場所に降りたが、すでに違和感に気づいていたか」

黒色のスーツを羽織った男は表情を変えず、抑揚もない声で問うた。

「感づいたのはこの公園に初めて来た時だな。お前が自分から顕現するって言うていたようなものだ。」

先に訊くけど、お前が王鬼で間違いはないな？」

「いかにも。上位第六の王鬼、セラ・ロイデスだ。位この世界では『鬼人の王』と呼称されているらしいな。そのような呼び名もまた、懐かしい」

負邪が収束し、一個体の形となり顕現する存在が鬼人と称されている。

しかし、王鬼はただ負邪が収束した存在ではない。

「知っての通り、私達王鬼は、負邪をその体に取り入れ、同化を成した存在だ。負邪の力を制御し、かつ開放できる力を持った者とも

言うな」

負邪の起源は、人間が無意識的に散発している負の感情の粒子だ。その内に在る負の感情が生命魔力粒子に支障をきたし、生命魔力粒子が負の感情で塗り潰されて初めて負邪が出来る。

それを外界に散発させる。それは、呼吸による二酸化炭素の排出と同じ時だ。『負邪となった生命魔力粒子』が外界に洩れる。

その、人間である限り当然の行為が、負邪を生み出す要因となるのだ。

そして、それを吸収することが可能な王鬼とは 極論で言えば、元は人間だった。

「なんとという因果か。下界に降り、早くも魔術師との戦いを始める事になるとは」

「お前が言える台詞か。お前だって、元は魔術師だったんだろ」

裏魅は間髪いれずに返した。

そう。負邪を吸収し、その概念を操れるのは普通の人間では決してありえない。

王鬼の起源的な存在とは、非日常に属する魔術師だと定められているのだから。

「貴様の言った通り、私は魔術師としての道を外した者だ。だが、道を外した理由というものは存在している」

王鬼のランク 第六位に値するセラは、裏魅の言葉に同意を示しながらも、否定の言葉を付け加えた。

「魔術師であった頃の五百年前は、私自身、魔術の探求を行っていた。しかし、探求成果はどれもくだらないモノだった。私の探求していたのは負邪の解明であったが、探求すればするほど、さらなる未知で溢れ返っていった。ならば」

「自分が負邪を吸収して、負邪っていう概念そのものを理解しようとしたのか。ふん、魔術師を外れた外道にありがちな答えだな」

裏魅はナイフを構えた。

王鬼 セラは一步前に足を運んだ。

「しかし、探求成果というべき答えは開けた。負邪が生命魔力粒子オトの侵食による散発のみで発生するものではないという事も」

セラはゆっくりと、単調な足取りで裏魅との距離を縮める。

「私は王鬼となったが、負邪の解明は未だ継続している。私は魔術師であり王鬼だ。どちらの部類にも属するが、私という根本的な存在理由は負邪の解明にある。その為にも、千堂鏡夜に会わなければならぬ」

「『会つ』じゃなくて、『奪い取る』だろ」

間違いを正すように、裏魅は言う。

「だけど、簡単にやらせるわけにはいかない。鏡夜の目覚めを待っているヤツがいるからな。だから　ここで殺してやるよ。セラ・ロイデス」

そうして、魔術師と王鬼の殺し合いは開始された。

「始まったツスカ」

工藤千雨は、鏡夜の眠っている病室に入った直後、それを察知した。

強大な力が衝突を始めた。河川敷公園から十キロは離れているこの病院にいても、その力の衝突があまりにも強すぎたが故の察知だった。

それは言うまでもなく、王鬼と千堂裏魅による殺し合いの他になかった。

「さて。準備は終わったツスけど……」

と、千雨は鏡夜の眠っているベッドを病室の中心まで移動させ、周囲に描いた六芒星の陣を再度確認する。

（陣の乱れ、誤差はなし。後は儀式の詠唱を唱えるだけツス）
と、千雨は病室の脇にある置物に置いてある『手紙』を一瞥した。
「大丈夫ツスよ。絶対に成功させてみせるツス」

千雨は確信を持って呟いた。

力の衝突。それはセラ・ロイデスが放った負邪という負のエネルギーと、千堂裏魅が大気魔力粒子を掌に収束させ、物理的な攻撃と化したものの拮抗に他ならなかった。

光の渦と黒色の渦。両が放った対極のエネルギーは二人が佇んでいる位置の中間地点で拮抗し、闘ぎ合い、結果的に相殺へと至った（これくらいの大気魔力粒子じゃあ効果はなし、か）

裏魅は小さく舌を打って、ナイフを逆手に構える。

一般的に、負邪を浄化させる役割を担っているのが魔力である。術者の精神硬質ハードメンタルが高ければ高いほど、魔力を使用した際に現れる効力は増幅していく。

しかし、負邪が魔力によって浄化に至ることが一般論であるにも拘らず、セラは相殺に成功した。

それは、セラの操る負邪が、一般的な負邪とは異なる上位概念であることに他ならない。

鬼人の王　王鬼が行使する負邪は、自身の魔力と混合状態にある。

セラ・ロイデスは、元は魔術師であった存在だ。その存在が負邪を吸収した時点で、生命魔力粒子が変質を遂げるのは当然と言っても過言ではない。

普通ならば、負邪を体内に取り込んだ時点で生命魔力粒子が異常をきたすのは当然といっても過言ではない。対極なるエネルギー。それは制御以前に暴力的なまでの負のエネルギーによる侵食によって、体は破壊されてしまう。

しかし、セラは何百年にも渡って負邪を探求し続けてきた王鬼だ。その何百年という年月の過程において制御、そして自身の魔力と混合させての解放という技巧を身に付けていてもおかしくはない。

「魔力と負邪の融合、か。随分と墮ちたものだな、王鬼」

裏魅は、皮肉混じりな口調でセラを罵倒した。しかし、当の本人は眉一つ動かさない。

「これは私自身が望んだ結果である。そして、この技巧が一つの探求成果である以上、誇るべきことでもある」

「そうか。なら、その探求成果を無に還してやるよ」

裏魅は逆手に握ったナイフを前に構え、その言葉を唱える。

「レベルモーション動作超越・Lebel2！」

瞬間、裏魅が姿を消した。それは最早瞬間移動に等しい移動術だ。セラの背後に移動した瞬間、裏魅は背中に袈裟斬りを行う。

「ふむ」

しかし、裏魅の瞬間移動にセラは動揺もせず、冷静に状況を分析する。

裏魅の斬撃は、虚空を切り裂いたように手ごたえが皆無だった。

まるでセラが大气そのものに化し、空を切り裂いただけの感覚だけが手元に残った。

裏魅は、自分の攻撃が失敗に終わったと認識すると、即座にセラから距離を取った。

0・五秒にも満たない速さで十メートル後退。それは最早人間に行える行動速度から大幅に逸していた。

しかし、常識の範疇に収められない行動速度を目にしても、セラの顔に変化は窺えない。

「レベルモーション動作超越か。この時代でその技巧を扱える者が存在していたとは。しかし、その技は反動に耐え切れるものではない。身体面での過負荷は絶大なるものである」

実際、セラの言う通りだった。

動作超越は魔力を両脚に収束しての移動法ではない。

その実、レベルモーション動作超越とは呪術の類における『身体自己暗示』のことを指す。

自己暗示とは、端的に言えば自身に課す呪術だ。呪術は魔術の分類に属する中でも、その危険度の高さから疎遠されがちな術として

成立している。

魔術が起動手順を踏み、結果的に神秘を引き起こす技であることに對し。

起動手順なし神秘を引き起こすことの代償として、自己の身体部位に何かしらの損傷を受ける。

そして、その呪術における最上位の技巧が動作超越レベルモーションとされていた。

「一時的とはいえ、身体に呪術を課するのは禁忌とされている。呪術は生命魔力粒子を侵食し、機能停止へと至らせるが故。そうまでして千堂鏡夜を守りたいか」

セラの問いに、裏魅は若干呼吸を乱しながら、笑って答えた。

「当然だ。言っただろ。あいつの目覚めを待っているヤツがいるって。鏡夜が目覚めるなら、私なんてどうなっても構わないよ」

それが、千堂裏魅の究極的な心意。

二人が再会を果たせるなら、この体なんてどうなっても構わない。

「お前こそ小癩な手を使うじゃないか。身体を負邪に変換して思念に戻るなんてな」

裏魅は、先ほどのナイフを無効化した術を見抜いていた。

「物体としての機能を成立させていたにも拘らず、存在を負邪という思念に変換させた。負邪はカタチが無く、負の思念の残滓ではない。確かに、それなら物理攻撃を無力化させられるな」

「これはセラ・ロイデスという王鬼が確立させた技術である。小癩と罵られる筋合いはない」

言いながら、セラは裏魅の方に向き直り、握った右の拳をゆっくりと前に突き出した。

「貴様の相手をしている暇は毛頭ない」

開いた掌から、黒色の粒子　負邪が放出される。

しかし、それは攻撃ではなかった。放出された負邪はセラの周辺に蔓延して行き、徐々にカタチを保った一個体の生物へと変貌を遂げる。

(鬼人が……)

具現化された十体の鬼人。しかし、そのどれもが普通の鬼人とは思えなかった。

刹那。十体の鬼人が眼前に現れた。

「な」

裏魅は愕然とし、動作^{レベルモーション}超越を使用して咄嗟に二十メートル後退した。しかし、それと瓜二つの疾さで、鬼人は追いついてきた。

(ちッ！)

この時。千堂裏魅は本能からこの鬼人達に畏怖の感情を認識した。十体の鬼人は統率の取れた動きで、四方から攻撃を仕掛ける。すでに腕の形状は大鎌へと変態している。

……しかし、四方からの奇襲だからこそ、裏魅は多少の安堵を覚える。

これならば、このナイフに内包された力を解き放てる。

「解放！」

裏魅は逆手のナイフを持ち直し、円を描くように一回転を行った。三百六十度に一閃したナイフが虚空を斬り裂き、十体の鬼人、その全ての胴体が真っ二つに両断される。

ただそれだけで、十体の鬼人の上下身体は爆ぜた。それはまるで、上下の部位に仕掛けられた爆弾が起動し、爆発したかのような光景だった。

「くっ……！」

しかし、それだけで裏魅は地面に片膝を着き、荒い呼吸を繰り返す破目となった。……やはり選定者ではない以上、生命^{オド}魔力粒子の減少は免れなかった。

「そのナイフ」

セラは悠然とした歩調で裏魅に歩み寄りながら、そんな言葉を溢した。

「なるほど。見覚えがあるかと思っていたが、千堂家の家宝であつたか。しかし、貴様は扱いきれていないようだな。貴様の生命^{オド}」

魔力粒子の消費が目に見えるぞ」

その刻、彼の者は異常なまでの速度で河川敷公園に近づいていた。

裏魅はどうか立ち上がり、再びナイフの力を解放しようとした。しかし、いつの間にか眼前に佇んでいたセラの威圧的な眼光を目にして。

彼女は本能から、どんな手段を使ってもこの男を殺さなければならぬと思えた。

「レベルモーション 動作超越・Lebe13ッ！」

裏魅は畏れていたわけではない。この王鬼を殺すには、身体に『最大自己暗示』を課すしか手段はないと判断をするしかなかった。

裏魅は弾けた。それは音速に達した移動速度。ナイフの切っ先をセラの胴体に固定しての特攻。そして

刹那の速度で、裏魅はセラの胴体を穿った。

「く……があ！」

それは無謀ともいえる特攻だった。一瞬の隙が生じれば逆に殺されるというのに、自身の最大の呪術、Lebe13を使ってまでセラを殺そうとした。

裏魅は初めて使用したLebe13によって着地ができず、無様に地面を転がった。

全身の筋肉が麻痺した感覚だった。身体面における全ての機能が衰えていくような、そんな感覚。

「見事」

……背後から、そんな声が届いた。

咄嗟に振り向く。

そこには、裏魅の特攻によって胸部に大穴が空いたままのセラ・ロイデスがいた。

しかし、彼は消滅していなかった。

「胸部周辺を思念に変換していなければ、私の敗北であつただろう。しかし、動作超越レベルモーション 呪術を起動させる言霊を放つたことが失敗の要因である」

その刻とき、彼かの者は両者の姿を補足した。

「では、貴様を排除し、千堂鏡夜の元に向かうとしよう」

セラの掌が裏魅へと向けられる。

負邪と魔力の融合に成功し、負のエネルギーが物質と化した消滅への一撃。

しかし。

それが放たれる直前、誰かがセラの腕を掴んだ。

「止めろ」

一言。彼かの者はそう言った。

感情が籠かおっていない声音。しかしこれ以上とない憎悪の念をその貌かおに表し。

千堂鏡夜は、二人の前に現れた。

セラは腕を千堂鏡夜に腕を掴まれたまま、歡喜に興奮していた。

この時のためだけに、何百年という年月を過ごしてきた。

この時のためだけに、自分は王鬼になることを決意した。

「千堂、鏡夜……！」

セラの無表情が変化を遂げる。この者に出会えた喜悦、歡喜、喜び。その感情が爆発しそうになりながら、鏡夜を見据える。

「第六位、セラ・ロイデスカ」

鏡夜は無表情のまま言った。

「【天界】^{てんかい}から地上に降りたのは、俺の内界^{ないかい}に在る物を奪うためか？」

投げる視線すら、何の感情も抱かせない。

鏡夜の在り方は昏睡状態に陥る以前と変わっていないかった。

「この日をどれだけ待ちわびたことか。貴様が用いているモノを奪えば、私の探求成果は完全に確立する……！ その為にも、貴様を生かしたまま連れて行かねばならん！」

これまでのセラ・ロイデスとはあまりにも違う、感情の昂りだった。彼はそれほど、千堂鏡夜の内に在るモノを欲していたのだ。

セラは掴まれていた腕を振り払って、ハメートルほどの距離を取った。

「鏡夜」

地面に腰を着いたままの裏魅は、眼前に佇んでいる兄を見据えた。

十三年ぶりの再会。

十三年ぶりの兄の姿。

その姿はあまりにも変わりすぎていて、だけどこの男を鏡夜^{あに}だと正しく認識できたのが嬉しかった。

「心配を掛けたな、裏魅」

鏡夜は視線をセラに向けたまま、素っ気無く言った。

「言語制止術、記憶操作術は千雨が行った儀式で解除できた。新しい心界の内蔵にも成功した。だから、お前はもう戦うな。後は俺が引き受ける」

言つて、鏡夜は裏魅の傍らに転がっているナイフを手に取った。それを手馴れた動作で逆手に握り、鏡夜は尋ねる。

「千堂家の家宝、『千神』で間違いはないな？」

「ああ」

「なら問題はない」

そう返して、鏡夜は超然とした佇まいでセラと対峙を開始した。

セラ・ロイデスは鏡夜を殺すつもりではなかった。

彼が欲しているのは、鏡夜の内界ないかいに宿る一つ概念。しかし、それは鏡夜が生きているからこそ活動しているものであった。

故に、鏡夜を殺すという選択肢は彼の頭にはない。生かしたまま、あちら側に連れて行く。それを成すためには、一時的な気絶状態へと陥らせる必要がある。

その為には、まず千堂鏡夜を戦闘不能にさせなければならない。ハメートルの距離を保ち続けるセラと鏡夜。

しかしいつしか、その距離はほぼ零に縮まっていた。

「な　！？」

セラが驚愕に目を見開く。瞬刻、鏡夜が自分の右腕をナイフで切断していた。

その移動速度は、認識が追いつかないものだった。千堂裏魅の動作超越ルモーション、その最大自己暗示であるLebeesは辛うじて認識できたが、これはその比ではない。

事実、鏡夜の詠唱の前では、全ての思考、認識速度が無力化される。

『SPEED UP』。それは亡きレイ・ストライトが鏡夜に

伝授した詠唱の一つ。この詠唱は千堂裏魅の動作超越レベルモーションとは比較すべきではない。

千堂裏魅の動作超越レベルモーションが、人間個体の瞬間的な移動ならば、

千堂鏡夜の『SPEED UP』は次元に干渉する可能性を生む移動とされている。

その移動速度は、もはや音速を超越し、『光速』の領域まで達していた。

そして、その本質が解放されたのは、レイ・ストライトが施した言語制止術が解除された今であった。

一年前の、裁我との戦闘では解放されなかった本質が、今まさに体現されていた。

「くッ！」

セラは初めて危惧を覚え、眼前にいる鏡夜の脚目掛けて、左の掌から負邪を放った。

しかし、鏡夜はその場で低く跳躍、中空で前回転の勢いをつけ、セラの頭蓋骨に踵落としを食らわせた。

「がッ!？」

さらに、食らわせた右足を自分から弾き、鮮やかに中空を舞う。着地した瞬間には詠唱を口にし、さらなる追撃を仕掛ける。

「な 舐めるなァッ！」

セラは防御として鬼人を十体召喚させる。そのどれもが千堂裏魅を苦戦させた、上位個体として成立した鬼人だ。

大鎌、槍、刀。一瞬にして両腕を様々な凶器へと変態させた鬼人は、

解放、という鏡夜の言葉で一斉に爆散した。

そして続け様に詠唱を口にし、強く握った『千神』で、セラ・ロイデスの胸部を穿った。

「たわけが！ 胸部は思念に変換を行っている！ そのような攻撃

が
「

と、言葉を続ける前に、セラは一つの違和感に気づいた。

「なんだ、これは？」

それだけしか思うことができない。

何かセラ・ロイデスという存在を壊していく。

何かセラ・ロイデスという存在に侵食していく。

それは、五百年という歳月を生きてきた彼にとって初めての未知であり魔術師として体感する初めての恐怖。

「封殺^{ふうさつ}」

鏡夜はポツリと口にした。

「この世界に存在する全ての概念は因果関係によって生まれる。『存在の因』、『消滅の果』の二つを内包する生命の根源的な部位は様々だ。だが、俺の根源的な心界 『封殺』は、その二つの箇所を視ることができる。そこに『全ての理を穿つ』ことが可能な『千神』を接触させることで、存在の因と消滅の果を『封』じ『殺』すことができる」

セラ・ロイデスは憎々しげに鏡夜を睨みつけ、呼吸を乱しながら言った。

「…………『殺害』は仮初めの心界だったというわけか…………。なるほど、実感した…………貴様は確かに、この世界において不必要な人間に他ならない…………」

「…………いずれ、貴様は封殺という心界を認識したことを後悔するだろう。…………いや、貴様は生まれてきた時点で、この世界に支障を生じさせているのだからな」

「遺言はそれだけか」

鏡夜の声は冷たかった。

「最後に。禁忌を認識した貴様に忠告しておこう」

ひゅーひゅー、と息を切らせながら、セラ・ロイデスは死の直前に、こう言い残した。

貴様の矛盾は、世界を壊すであろう

それが王鬼 セラ・ロイデスの終末の言葉だった。

四月四日。午前十一時半。

鏡夜は自分が一年間眠っていた病室を後にしようとしていた。

早朝、この病室に入ってきた看護師は、鏡夜が目を覚ましたことに驚愕し、すぐさま担当の主治医の下に駆けつけ、涙目で報告を行ったそうだ。最初、主治医はその報告を夕子の悪い冗談だと考えていたのだが、看護師に病室へと連れて行かれ、ベッドに座ったまま窓の外を呆と眺めている鏡夜を見た瞬間、歓喜の表情を見せていた。それほど、鏡夜は目覚めるわけがないと思われていたらしい。

それは置いておき、いつまでも病室で寝泊りしているわけにはいかない。意識が回復したのだから、病室は他の患者に譲るべきだろう、そんな考えに至った鏡夜は、早々に退院することにした。

退院手続きはすでに済ませているので、後はこの病院を去るだけだった。

そして、外に出て正門の前まで歩くと、二人の少女が自分を待っていた。

「おはようツス。鏡夜くん」

「おはよう、鏡夜」

千雨と裏魅だ。

「おはよう。千雨、三日前は世話になった」

鏡夜は謝辞と共に頭を下げる。

「いいツスよ、そんなこと。それより、裏魅さんと話をしてあげべきじゃないツスか？ 久々の兄妹の再会なんすから」

「そうだな」

鏡夜は顔を上げて、裏魅と向き合う。

「改めて、久しぶりだな、裏魅。大きくなった」

「十二年も経ったんだから、当然だろ」

頬を赤くしながら、そっぽを向く裏魅。

「それで、全部思い出したんだよな？」

裏魅の問いは、施設に入る前　五歳以前の記憶のことを指しているのだろう。

「ああ」

「じゃあ、千堂家に戻るつもりは？」

「それはない」

鏡夜ははっきりと自分の意思を述べた。

「俺の住む場所はこの道崎市だ。この町で、俺の全てが始まったんだからな」

そう。ここで彼女と出会い、決別し、最後に解り合えた。

その日々を忘却したくはない。

彼女と過ごした日々を、無にするわけにはいかないから。

「　　そうか」

裏魅は微笑を浮かべた。

「なら、早く会いに行つてやれ。私と千雨はもう帰るけど、何かあったらこの番号に電話してくれ」

そう言つて、裏魅は携帯電話の番号が書かれた紙切れを鏡夜に手渡した。

「じゃあ、私も渡しておくッスね」

千雨も同様に、番号が記された紙を渡す。

「鏡夜くん。一つだけ言っておきたいことがあるんすけど」
「なんだ？」

鏡夜は首を傾げながら返した。

千雨は、どこか恥ずかしげに笑つて、

「私と裏魅さんと過ごした幼少期を、忘れないでください」
それは、心からの願いだつた。

五歳の頃を境に、異なる人生を歩み始めた幼馴染と妹。

その過程に、どのような日々を過ごしてきたのか鏡夜は知らない。でも、あの楽しかった日々を思い出せたから。

「当たり前だ。絶対に忘れない」

そう答えるのは当然だった。

「ところで、千雨」

「なんスか？」

「お前、その口調は何なんだ？」

「……」

「そういえば、私も前にはぐらかされたな。答える、千雨」

「え、えーと、それは神のみぞ知る」

結局、千雨は出来心で使い始めた口調だと言えなかった。

鏡夜は自宅に帰る前に、ある場所に立ち寄ることにした。そう。自分が変わるきっかけとなった場所。

自分が壊れ始める原因となった場所。

自分が矛盾思考に感染する原因となった場所。一年前なら憎悪を抱く場所であったのに、辿る足取りが軽く思える。程なくして、その場所に到着した。

黒堂学園。

入学式前であったことが幸いしたのか、校内には誰もいなかった。そして、あの教室に近づくに連れて、心臓が早鐘を打ち始めた。別れ際、千雨は言っていた。

「再会はその場所がいつて、本人からの希望なんスよ」

(……全く、決別した場所で再会するなんてな)

でも、それも自分達らしいだろう。

そして、鏡夜はその教室に辿り着く。

二年A組。

そこには、机の上に座って、窓の外を眺めている少女がいた。

「久しぶりだな」と鏡夜は声を掛けた。

少女は机から降りて「うん、久しぶりだね」と返答した。

「手紙、読ませてもらったぞ」

鏡夜はジューパンのポケットから一通の手紙を取り出し、少女に見せた。

……これは、千雨が儀式に訪れる前に病室に置かれてあったものだ。

『四月四日。黒堂学園の二年A組で待ってます』

それにしても相変わらず小さいな、と鏡夜は苦笑した。

これでも少しは伸びたんだよ！ と少女は頬を膨らませて怒った。再会は、両者とも自然に振舞えた。

鏡夜が目を覚ましたこととか、少女がどれだけ辛い思いをしてきたことは、両者の会話には無かった。

そんな些細なことはどうでもいい。二人は本心からそう思っていた。ただ、今は。

そう、今だけは。

こうして二人だけであることを、大切にしていたかった。

だから、二人の間に悲しみや哀しみはない。

二人だけの時間が、ただ幸せだったから

イギリスのロンドン。星礼会本部、地下五十階の闘技場にその少年はいた。

右手に握っている漆黒の柄から、十五メートルにも及ぶ長い銀の鎖が伸びている。その先端は凶器として造形された鋭利な刃。先ほどまで地面に密着してあったその鎖が、不規則な動きを現し始め、中空に浮く。

「少年は無表情のまま、体内魔力粒子を精神硬質によって増幅させていく。銀の鎖は、少年の体を包み込むように螺旋を描いていく。それはまるで大蛇のそれだ。少年を守護する壁と化し、その動きが止まった瞬間、

銃声が響き渡った。

マシンガンや機関銃による連続射撃。闘技場の外壁に設置されている自動式の銃が、八方から少年に向けて弾丸を発射した。

しかし、少年の表情に変化は無い。その貌はただ無機質で、迫り来る幾多の弾丸など気に掛けていなかった。

「動」

少年は一言呟いた。

それだけで、およそ百にも及ぶ弾丸が銀の鎖によって弾かれ、地面に穴を穿つ結果となった。

「次」

少年はそう指示を出す。今度は体を覆っていた鎖を解放し、天を突くように一直線に伸ばす。

それはまさしく剣そのものだった。体内魔力粒子によって高質化され、絶対的な強度を保った長剣。

再度銃声が鳴り響く。先刻と同様に八方からの一斉射撃だ。

少年は銀の長剣を軽い動作で斜め下に構える。剣術でいう居合いの構えだ。

そのまま、刹那にも満たない疾さで振り抜く。舞を舞うように一回転した頃には、全ての弾丸が真つ二つに切り落とされ、地面に落下した。

「ふう……」

少年は一つ吐息を漏らし「休憩〜！」と頭上に向けて言った。それだけで銃声は放たれることはなくなり、自動式の銃は外壁の内部オートタイプに戻っていった。

闘技場の隅に腰を下ろし、少年は乾いた喉を潤すためにスポーツドリンクを飲んだ。ごく、ごく、と大きく喉を鳴らしながら、栄養補給を行う。

「簡単だねえ、弾丸の軌道を読むっていうのも」

どことなく落胆したように眉を落とす、少年は呟く。先ほどの訓練での技は、決して常人に成せることはないのだが、少年にしてみれば楽すぎる訓練という認識だった。

こんな訓練をするより、実戦に赴いて殺しを行う方がはるかに実力は上がる。日本で購入した携帯ゲームでも、戦闘の方が経験値が高くなるって設定だった（現実とゲームをごちゃ混ぜにしているが）。

「とは言っても、鬼人なんか殺しても実力が上がるわけでもないしなあ……」

気分が乗らないとは、このことを言うのだろう。少年は今、確かに憂鬱だった。

この一年間で鬼人を二百五十三体も殺したというのに、少年は全く満足しきれていなかった。

もっと強くなりたい。もっと強者に。

もっと殺したい。殺して殺して、殺し尽くしたい。

それが少年の心からの願望だった。元々、少年は殺す為だけに生

まれてきた存在だ。故に、殺しを行うのは彼の存在意義であり、存在理由でもある。

(……まだ認識できないしなあ)

少年の最高到達地点。それは心界の認識だ。

自分にはどんな心界が眠っているのだろうか。早くそれを認識して、自己が存在している理由を証明したい。

心界を認識するというのは、魔術師の領域に踏み込むことと同一だ。精神、肉体、思考の三つが飛躍的な活性化を遂げ、常人では決して手に入らない最高の力が宿ることとなる。

(……でも、彼より先に認識するのみなあ……)

自分が目指していた存在。

自分が憎んでいた存在。

自分が殺しかつた存在。

封殺者の最上位の階級^{クラス}、コードナンバー01の座に君臨していた圧倒的な強者。その者は、今は昏睡状態という有様だ。

少年も、この一年間でコードナンバー06から04の階級^{クラス}にシフトチェンジしたとはいえ、目指していた存在が昏睡状態ならば、その昇格は何の意味も成さない。

少年は、彼と一緒に戦い、彼と一緒に上を目指し、彼と殺しあうことに人生の価値を見出していたのだ。

「もう、全部カケルのせいだあ！」

ブンブンと両腕を振り回す。先ほどのクールっぷりはどこへやら、スーパードお菓子をせがむ子供のような姿だった。

と、鬱憤を晴らすように両腕を振り回している少年の前に、一人の男性が現れた。

その男性は足音もなく、いつの間にか少年の前に立っていた。

「……いつも思うんだけど、心配くらい見せようよ」

少年はジトツとした目で男性を見上げた。

「そうは言ってもね。気づかない君に非があると思うよ」

身長百七十センチほどの細身の男性は爽やかな笑顔を浮かべる。

二十代前半ほどの顔立ちに、黒いスーツを身に纏っている。どこにでもいる会社勤めのサラリーマンを想像させるが、この男性は少年の観察者だ。

「訓練はどうだい？」

男性が尋ねると、少年は「楽すぎてつまんない」とふてくされたように唇を尖らせた。

「実戦で経験値積みたいよ。レベルアップしたい気分だね。ラスボスと戦って勝つ感じ」

「……君は、日本のゲームと現実をごちゃ混ぜにしている節があるね」

呆れたようにため息を漏らす男性。

「まあ、そんな風だと思っていたからこそ、任務を授けに来たわけなんだよ、僕は」

「え、ホント!？」

男性の言葉と同時に、少年はキラキラと顔を輝かせた。

「うん。でも、これは星礼会最高幹部『四殺解』からの任務だから、絶対に失敗は許されないよ」

そして一拍後、少年の笑みが無表情に戻った。

フォーสลリフト 四殺解。星礼会における最高幹部四人で構成された絶対者だ。一年前にその一人と偶然出会ったが、他の三人と面識はない。

しかし、あの殺人狂と言われている四人から、他でもない自分に任務が回ってきた。

これは好機だ。星礼会に自分という存在を認めさせるチャンス。

(ゼロクラス 零階級とはいえ、フォーสลリフト 四殺解が封殺者に任務を回してきた理由も気に掛けておかないといけないな)

そう思案し、考慮の内に入れた少年は「それで」と、男性を見上げた。

「任務の場所は？」

尋ねる少年に、男性は笑みを崩さずに、

「日本だよ」

そう言った。

「君にとつては苦痛を伴う場所かもしれない。でも、君が喜ぶ情報も入手しているから、あとで地上に上がっておいで」

そう言い残して、男性は悠然とした足取りで少年の前から立ち去った。

一人残された少年は、早鐘を打ち始める心臓の鼓動を抑制できず、ただ歡喜に口元を吊り上げた。

「日本、か」

そして、自分が喜ぶ情報　それは、彼に関係している話の他にありえない。それくらいの心理は、観察者の男性は見抜いている筈だから。

「よし、行こうか」

少年　カイン・エレイスは立ち上がる。

再び赴く場所。

それは、日本の関東地方　道崎市。

間もなく、その殺し合いは幕を上げることとなる。

それは、悲劇とも喜劇とも取れない物語。

千堂鏡夜とカイン・エレイスの物語である。

五月十四日。今日は大学の授業が休みだった。

まだ大学という環境には慣れていないが、遠近湊は確かにスクー
ルライフを楽しんでいた。新しい友人も何人かでき、高校二年から
卒業するまでの一年間の時のように、充実した毎日を送っていた。

昨日にはレポートの提出も完了し、今日は時間が空いたため一人
の友人と一緒に大通りに来ていた。

隣を歩く男性の名前は千堂鏡夜。つい一ヶ月ほど前に一年間の昏
睡状態から回復した少年だ。歳は湊と同じ十八歳。通っていた高校
も同じ黒堂学園だ。

彼は湊とは違い、今でも高校に通っている。出席日数と取得単位
が足りなくなり留年したからだ。

鏡夜は、五百人はいる全校生徒の中でも異質と呼べる存在だった。
彼は誰とも接することはせず、一年生の頃から自分の周囲に壁を
張り、他の生徒を否定していた。それが意図的なものであるのが性
質が悪く、誰かに話しかけられても無視を決め込むという行いをし
ていた。唯一口を開くのは授業で教師に指名され、教科書の音読を
する時くらいであった。

授業以外の時間では一人で小説を読み、窓から空を眺めるといっ
た行動しかしなかった。

それは、普通の高校生にしては確かに異質であり、稀に見る希少
種とも言える。

否。事実、彼は普通の高校生ではなかった。

その実、彼は人間の負の感情が生み出す思念体、鬼人を殺す為だ
けに生きる封殺者という存在だった。

その在り方は異常と言っても過言ではない。鬼人を殺すことが彼
の存在している理由であり、同時にそれが生きている価値だったの
だ。

そして、鏡夜の在り方を変えるきっかけとなったのは遠近湊という少女に起因していた。

その出会いのせいで、鏡夜は確立していた自己の在り方を狂わされ、一度の決別へと至ってしまった。

しかし、鏡夜が昏睡状態に陥る前の日に解り合うことができた。それは互いに望んだ結果であり、互いにとって本心からの望みでもあった。

そして、解り合えた結果、皮肉にも鏡夜は一年間の眠りに堕ちた。そのように、彼らには多くの出来事が齎され、現在ではこうして歩幅を合わせて共に歩くことに成功していた。

「鏡夜くん。最初はどこに行く？」

湊は鏡夜の顔を見上げて、そう尋ねる。元々鏡夜の方が頭一つ分身長が高いためか、首を彼に話しかけるときは決まって頭を上げることとなっていた。

鏡夜はただ前を向きながら、昔と全く変わっていない無表情で湊の問いに答えた。

「どこでもいいぞ。湊が行きたい所に行けばいい」

抑揚のない、淡々とした口調で彼は言う。その無愛想な性格も高校時代から改善されていない。しかし、湊はそんな彼の無表情を眺めるのが好きだった。

「でも、今日は鏡夜くんの好きな物を買うために来たんだから、鏡夜くんが行きたい所に行こう」

今日の目的は、鏡夜の趣味を模索することの他にない。一ヶ月前に目を覚ました後、湊は彼の部屋に訪れたことがあったのだが、彼女は愕然とし、驚愕した。

部屋は殺風景としか言い様がなかったからだ。

必要最低限の生活用品は揃っているのだが、趣味で集めている物が殆ど無く、冷蔵庫の中を拝見しても栄養ドリンクと食パンだけという始末。

曰く、彼は一日の食事は全て食パンだけで過ごしていたそうだ。

まあ、バターやマーガリンなどを塗って味を変えていたらしいが、大した差はない。

唯一、部屋の隅には少しの書物が詰まれているだけであり、よく思い出すと高校時代に学園で読んでいた本と同じ物だった。

ともあれ、趣味は置いておくとして、食生活を疎かにしているのは疑いようのない事実だった。そんな経緯があり、今では湊が週に三回、夕食を作り部屋に訪れている。

余談だが、鏡夜は一年前まで封殺者を育成する機関である施設から生活費や家賃を払ってもらっていたのだが、一ヶ月前にマンションに帰宅すると、大家が保護者 偽名を使った施設の役員だが から一千万円ほどの大金を預かっていたらしい。彼らの意図はまだ掴めないが、貰える物は貰っておくという考えに至り、鏡夜はその大金を受け取った。

そんなこんなで、その大金の少しを財布に入れて、こうして趣味を模索するために大通りに来ていた。

「鏡夜くん、高校の時、頻繁に小説読んでたよね？」

突然の質問に、鏡夜は過去を振り返ってみた。確かに、授業以外の時間は本ばかり読んでいた気がする。

「そうだな。それがどうかしたのか？」

「じゃあ、まずは本屋に行ってみよう。好みの小説が見つかるかもしれないし」

手を合わせてそんな提案を出す湊。

鏡夜も、反対する理由が無かったため、同意するようにゆっくりと頷いた。

二人は大通りを進み、つい最近開店したばかりの新しい本屋に立ち寄った。内部はジャンル別に漫画や小説、エッセイ、専門的な参考書、その他にもそれなりに多くの書物が棚に置かれていた。

「鏡夜くん、普段はどんなジャンルの小説を読むの？」

小説コーナーで足を止め、湊が尋ねると「特に決まったジャンル

はない」と鏡夜は返答した。

「本を買うのも稀だけど、冒頭で興味を惹く文章や世界観を表現していると感じた場合、購入することになっている。まあ、面白くなくても一応最後まで読むが、二度読むことはないな」

「そうなんだ。私も小説は読むけど、ジャンルは決まってる感じがな」

「どんなジャンルだ？」

棚から色々な文庫本を手に取り、パラパラと頁を捲りながら尋ねる。

「基本的には恋愛小説かな。ファンタジックな世界観に恋愛を織り交ぜたのが好きなの」

と、そう聞いた途端、頁を捲る手の動きが止まった。

「そうしたの、鏡夜くん？」

怪訝に思ったのが、湊は小首を傾げた。

「湊。それ、面白いのか？」

「うん。個人的には」

「……」

「もしかして、興味あるの？」

「……」

首を下ろして黙りこむ鏡夜。

その様子を見て、自分の言葉が当たっていたと確信した湊は、にっこりと笑って、

「よし。じゃあ、選んであげるね！」

向かいのティーンズ向け小説の棚にある恋愛小説を模索し始めた。

「五百九十円になります」

結局、鏡夜は湊に薦められた恋愛小説を購入することにした。

鏡夜から金銭を受け取った女性の店員　外見からして二十代前

半　は、レジから小銭を取り出し、レシートと一緒に鏡夜に渡すと、

「今日は兄妹でお買い物ですか？」

と、営業スマイルを浮かべながらそう尋ねた。

「兄妹じゃありませんよ」と湊は笑いながら手を横に振って、

「ああ」と鏡夜も同意するように無表情で頷く。

「では、恋人同士ですか？」

「え、ええ!？」

「いえ、違います」

今度は全く違う反応を起こした。

(はつきり言われると、ちよつとグサツとくるかも……)

湊がしゅん、と眉を落とした。

しかし、鏡夜の言葉には続きがあり、

「湊は高校時代からの大切な友人です」

と、はつきりとした口調で言った。

「鏡夜くん」

「行くぞ、湊」

釣銭を財布に仕舞った鏡夜は、我先にと歩き出し、

「う、うん!」

湊も弾み脚で、その後を追った。

大通りの中枢には大規模なスクランブル交差点がある。平日休日問わず、多くの人々が行き交う場所だ。この近辺はアウトレットモール街や繁華街もあり、幾多の若者達で繁盛している。交差点の前にある三十階を有に越えるビルの外壁には街頭ニュースを報道する大型モニターが設置されており、今この時間帯でも様々なニュース速報が流れていた。

そして、交差点の信号を渡ろうとして、鏡夜は不意に足を止めた。「どうしたの、鏡夜くん？」

一歩前にいる湊は振り返ると、鏡夜は街頭ニュースが流れている

大型モニターを見上げていた。

それに習って、湊もモニターに目を移した。

『昨日の深夜二時頃、西区の住宅街で殺人事件があつた模様です。被害者は腹部辺りを刃物と思われる物で刺され、病院に搬送されましたが、今日早朝七時に死亡して』

ニユースキャスターの女性は淡々とした口調で事件の概要を説明していく。

「殺人事件……」

これだけの概要ならば、鏡夜が険しい顔付きでニユースに集中する理由はない。ならば、なにが彼をニユース速報に釘付けにしているのか

(まさか)

湊は思い至り、鏡夜に尋ねた。

「もしかして、鬼人が現れたの？」

「いや、昨日は負邪を感知しなかった。あの時間帯は寝ていたが、負邪が気配を現し始めると体内魔力粒子の反発機能が働いて、瞬時に目を覚ますはずだ」

魔力の反発機能。それは一ヶ月前に鏡夜の妹、裏魅から教わったことだ。

二人は信号が赤に変わる前に足早に交差点を歩く。

「でも、裏魅さんは魔力同士の反発機能って言ってたよ？ 負邪って……えっと、鬼人を形作っている物質だよね？ 魔力じゃないのに反発機能は働くの？」

「封殺者は、魔力の反発機能以前に負邪の反発機能を働かせる訓練を積む。魔力同士の反発機能を学ぶのはこの次だ。鬼人を殺すことが存在理由なんだから当然だけだな」

「……鏡夜くん、その、今でも鬼人が現れると」

言い淀む湊に、鏡夜は思惑を察したのか「安心しろ」と先に返答した。

「鬼人が現れても、俺は殺しに向かっていない。確かに、この一ヶ

月の間に二、三度は負邪の気配があったが、他の誰かが殺しているみたいだ」

「そっか」

そう聞いて、湊は安堵するように胸を撫で下ろした。

「俺が殺すと思ってたのか？」

視線も向けずに、鏡夜は言う。

「俺はもう殺さない。一年前、お前とそう約束したからな」

「うん。そうだね」

その言葉が、凄く嬉しかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9843x/>

対極心識

2011年12月11日16時47分発行